都城市文化財調査報告書　第81集

かじやびーいせき

# 加治屋Ｂ遺跡（縄文時代・弥生時代編）

県営ほ場整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年3月22日

宮崎県都城市教育委員会

# 正誤表

| ページ | 誤 | 正 |
| --- | --- | --- |
| 7頁6行目 | 早馬遺跡（はやうま） | 早馬遺跡（はやま） |
| 121頁下段 | 474 ＋ 47（接合状態） | 474 ＋ 479（接合状態） |
| 159頁33行目 | 背文される。 | 施文される。 |
| 241頁右下 | | |

# 序　文

本書は、県営の農業基盤整備事業に伴い、受託事業として都城市教育委員会が平成13・14年度の2ヵ年にわたって発掘調査を実施した加治屋B遺跡に関する成果報告書の上巻（縄文時代・弥生時代編）です。

都城市の横市地区では、県営ほ場整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を平成8年度から継続的に実施しており、これまでにも数々の成果を報告しています。

加治屋B遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡が多数確認されたり、南九州で最大級の中世館跡が見つかったりするなど、多くの貴重な成果が得られました。その一端については市の広報誌や新聞・テレビを通じて機会あるごとにご紹介してきたところです。また、平成13年度に実施した遺跡の見学会におきましては多数の方々に現地にお越しいただき、古代のロマンに触れていただくことができました。

いまだけがすべてという風潮が高まっている昨今ですが、過去を知ることによって先人の知恵や後の世代のためにしてくれた配慮を理解することができますし、文化財を後世へ伝えることは、過去と未来のかけはしを作ることにもなります。都城盆地で生活していく都城市民は一体となって、先人が守り育てたこの地域の文化・財産を継承し、将来に引き継いでいく責務があり、そのことが今後予想される厳しい地域間競争を生き抜く原動力につながっていくことになると思われます。

本書の刊行によって、こうした地域の文化財に対する理解と認識がますます深くなることを願うとともに、今回の成果が学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査に従事していただいた市民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なご理解ご協力をいただきました。心から感謝の意を表します。

2007年3月

都城市教育委員会
教育長　**玉利　譲**

# 例　言

1．本書は、県営農業基盤整備事業（平成13年度は「県営担い手育成基盤整備事業横市地区」、平成14年度は「県営ほ場整備事業横市地区」）に伴い都城市教育委員会が平成13・14年度に実施した加治屋B遺跡の発掘調査報告書の上巻（縄文時代・弥生時代編）である。

2．本書に使用したレベル数値は海抜絶対高で、基準方位は真北である。

3．本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。

4．土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001年度前期版を参考にした。

5．現場における遺構の実測は、作業員の協力を得て矢部喜多夫・桒畑光博・栗山葉子・下田代清海・外山（旧姓原田）亜紀子・外山隆之・津曲千賀子が行ったが、弥生時代遺構の一部の実測と全体図作成を有限会社ジパング・サーベイに委託した。遺構実測図の製図は外山（亜）が中心となって行い、桒畑が補佐した。

6．本書に掲載した遺物の実測・製図は、栗山・山下大輔・加覧淳一・外山（亜）・津曲と大盛祐子・水光弘子・西　博子・新屋美佳・八谷邦枝、福岡八重子、槇尾恵美子、丸崎千鶴子、水元美紀子（以上、整理作業員）が行った。また、一部の実測・製図は、埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

7．遺構の写真撮影は桒畑・外山（亜）・外山（隆）が中心となり、一部、矢部の協力を得た。遺物の写真撮影は、寺師雄二が行った。また、遺構の空撮は九州航空株式会社に委託した。

8．テフラ分析・放射性炭素年代測定・樹種同定・植物珪酸体分析・珪藻分析・蛍光X線分析の各種自然科学分析については株式会社古環境研究所に、炭化米のDNA分析を株式会社ジェネテックに、鍛冶関連遺物の金属学的調査を九州テクノリサーチ・TACセンターに委託した。これらのうち、本書（上巻）にはテフラ分析・放射性炭素年代測定の結果を掲載し、それ以外の分析結果については、下巻（平成19年度刊行予定）に掲載する予定である。

9．本書の執筆については、桒畑・寺師・栗山・加覧・外山（亜）が行い、分担した各項目の文末に文責を付記した。

10．本書の中で使用した弥生土器の時期及び様式名は次の文献を参考にした。
石川悦雄 1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描－（Mk. Ⅱ）」『宮崎考古』第9号　宮崎考古学会
中園　聡 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号　人類史研究会

11．本書の編集は桒畑と寺師があたり、図面レイアウトに関して、栗山・山下・加覧・外山（亜）・津曲の協力を得た。また、遺構写真レイアウトは桒畑が、遺物写真レイアウトは寺師が行った。

12．現地における発掘調査および報告書作成にあたっては下記の方々よりご助言・ご協力をいただいた（カッコ内の所属は平成13～15年度のもの）。
伊藤　晃（岡山県古代吉備文化財センター）、大庭康時（福岡市教育委員会）、大盛祐子（都城市文化財課嘱託）、重永卓爾（都城市史編さん専門委員）、柴田博子（宮崎産業経営大学）、鋤柄俊夫（同志社大学）、高橋照彦（大阪大学）、丹治康明（神戸市教育委員会）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、永山修一（ラ・サール学園）、堀田孝博（宮崎県埋蔵文化財センター）、村上恭通（愛媛大学）

13．発掘調査で出土した遺物とすべての記録（写真・図面など）は都城市教育委員会で保管している。

# 本文目次

【上　巻】

第１章　序　説

第１節　調査に至る経緯…… 1

第２節　調査の組織…… 1

第３節　遺跡調査検討会の記録…… 3

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境…… 5

第２節　周辺の遺跡…… 6

第３章　発掘調査の成果

第１節　発掘調査の方法と概要…… 10

第２節　基本層序…… 12

第３節　縄文時代～弥生時代の成果…… 20

１．縄文時代早期の遺構と遺物…… 20

（１）縄文時代早期の遺構…… 20

集石遺構…… 20

土坑…… 28

（２）縄文時代早期の遺物…… 28

縄文時代早期の土器…… 28

縄文時代早期の石器と剥片…… 30

２．縄文時代前～中期の遺構…… 33

３．縄文時代後～晩期の遺構と遺物…… 33

（１）縄文時代後期の遺構…… 33

（２）縄文時代後～晩期の土器…… 35

４．弥生時代中期の遺構…… 38

（１）竪穴住居跡…… 38

竪穴住居跡…… 38

竪穴住居跡出土土器…… 66

竪穴住居跡出土石器……111

（２）掘立柱建物跡……120

（３）土坑・溝状遺構……120

土坑・溝状遺構……120

土坑・溝状遺構出土土器……130

（４）剥片集積遺構……130

剥片集積遺構の両輝石安山岩接合資料…130

剥片集積遺構出土土器……135

５．弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構……135

（１）竪穴住居跡……135

竪穴住居跡……135

竪穴住居跡出土土器……140

竪穴住居跡出土石器・その他……144

（２）土坑・溝状遺構……152

土坑・溝状遺構……152

土坑出土土器・土製品……159

土坑出土石器……159

６．包含層出土の弥生時代～古墳時代初頭の土器……159

（１）弥生時代前期の土器……159

（２）弥生時代中期の土器……161

（３）弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……164

７．包含層出土の縄文時代～古墳時代初頭の石器……168

（１）打製石斧（石製土掘り具）……168

（２）打製石鏃……176

（３）剥片石器……186

（４）磨製石包丁……186

（５）磨製石鏃……186

（６）砥石……191

（７）石皿……194

（８）磨石・敲石……194

（９）軽石加工品……194

(10)その他の石製品（管玉など）・土製品……197

第４節　縄文時代～弥生時代の成果のまとめ……198

１．縄文時代……198

２．弥生時代～古墳時代初頭……199

（１）土器について……199

弥生時代前期の土器……199

弥生時代中期の土器……199

弥生時代後期後期後半～古墳時代初頭の土器……200

（２）集落変遷について……200

付編　自然科学分析

第１章　土層とテフラ分析……263

第２章　放射性炭素年代測定……270

報告書抄録（上巻）……272

# 表目次


表１　縄文時代早期土器観察表…… 32
表２　縄文時代後・晩期土器観察表…… 38
表３　縄文時代後・晩期土器観察表…… 39
表４　縄文時代後・晩期土器観察表…… 40
表５　弥生時代中期遺構出土土器観察表…… 87
表６　弥生時代中期遺構出土土器観察表…… 94
表７　弥生時代中期遺構出土土器観察表…… 99
表８　弥生時代中期遺構出土土器観察表……101
表９　弥生時代中期遺構出土土器観察表……103
表10　弥生時代中期遺構出土土器観察表……104
表11　弥生時代中期遺構出土土器観察表……105
表12　弥生時代中期遺構出土土器観察表……106
表13　弥生時代中期遺構出土土器観察表……107
表14　弥生時代中期遺構出土土器観察表……108
表15　弥生時代中期遺構出土土器観察表……109
表16　弥生時代中期遺構出土土器観察表……110
表17　弥生時代中期遺構出土土器観察表……111
表18　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表……147
表19　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表……149
表20　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表……150
表21　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表……151
表22　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表……152
表23　土坑・溝状遺構出土土器・土製品観察表……162
表24　包含層出土土器観察表……177
表25　包含層出土土器観察表……178
表26　包含層出土土器観察表……179
表27　包含層出土土器観察表……180


# 挿図目次


図１　遺跡位置図…… 5
図２　遺跡分布図…… 6
図３　地形面区分図…… 8
図４　遺跡周辺地形図…… 9
図５　調査区域図…… 11
図６　中央部土層断面図…… 13～14
図７　北東区土層断面図（１）…… 15
図８　北東区土層断面図（２）…… 16
図９　北東区縄文時代早期調査地点土層断面図…… 17～18
図10　北トレンチ東壁断面図及び植物珪酸体分析結果…… 19
図11　縄文時代早期遺構・遺物分布図…… 21
図12　縄文時代早期集石遺構実測図…… 22
図13　縄文時代早期集石遺構実測図…… 23
図14　縄文時代早期集石遺構実測図…… 25
図15　縄文時代早期集石遺構実測図…… 26
図16　縄文時代早期集石遺構・土坑実測図…… 27
図17　縄文時代早期土器…… 29
図18　縄文時代早期土器…… 31
図19　縄文時代早期土器…… 34
図20　縄文時代早期石器…… 34
図21　落とし穴状遺構（JSC5）分布・実測図…… 35
図22　縄文時代後・晩期遺構分布・実測図…… 36
図23　縄文時代後・晩期土器…… 37
図24　縄文時代後・晩期土器…… 39
図25　弥生時代遺構分布図…… 41
図26　竪穴住居跡YSA1・3・4・5実測図 …… 43
図27　竪穴住居跡YSA6・7・8・9実測図 …… 45
図28　竪穴住居跡YSA10・13・14実測図 …… 47
図29　竪穴住居跡YSA11実測図 …… 49
図30　竪穴住居跡YSA12実測図 …… 50
図31　竪穴住居跡YSA15実測図 …… 51
図32　竪穴住居跡YSA16・18実測図 …… 53
図33　竪穴住居跡YSA17・21実測図 …… 54
図34　竪穴住居跡YSA19実測図 …… 55
図35　竪穴住居跡YSA20・22実測図 …… 57
図36　竪穴住居跡YSA23実測図 …… 59
図37　竪穴住居跡YSA26・27実測図 …… 61
図38　竪穴住居跡YSA28実測図 …… 63
図39　竪穴住居跡YSA29実測図 …… 65
図40　竪穴住居跡YSA30・39溝状遺構YSD2実測図 … 67
図41　竪穴住居跡YSA31・33・34実測図 …… 68
図42　竪穴住居跡YSA35・36・37・40実測図 …… 69

図43　竪穴住居跡YSA42・43・45実測図 …… 71
図44　竪穴住居跡出土土器…… 73
図45　竪穴住居跡出土土器…… 75
図46　竪穴住居跡出土土器…… 77
図47　竪穴住居跡出土土器…… 79
図48　竪穴住居跡出土土器…… 81
図49　竪穴住居跡出土土器…… 83
図50　竪穴住居跡出土土器…… 84
図51　竪穴住居跡出土土器…… 85
図52　竪穴住居跡出土土器…… 86
図53　竪穴住居跡出土土器…… 87
図54　竪穴住居跡出土土器…… 88
図55　竪穴住居跡出土土器…… 89
図56　竪穴住居跡出土土器…… 90
図57　竪穴住居跡出土土器…… 91
図58　竪穴住居跡出土土器…… 92
図59　竪穴住居跡出土土器…… 93
図60　竪穴住居跡出土土器…… 94
図61　竪穴住居跡出土土器…… 95
図62　竪穴住居跡出土土器…… 96
図63　竪穴住居跡出土土器…… 97
図64　竪穴住居跡出土土器…… 98
図65　竪穴住居跡出土土器…… 99
図66　竪穴住居跡出土土器……100
図67　竪穴住居跡出土土器……101
図68　竪穴住居跡出土土器……102
図69　竪穴住居跡出土石器……113
図70　竪穴住居跡出土石器……115
図71　竪穴住居跡出土石器……117
図72　剥片石器（462）の使用痕分析 ……118
図73　竪穴住居跡出土石器……121
図74　竪穴住居跡出土石器……122
図75　竪穴住居跡出土石器……123
図76　竪穴住居跡出土石器……124
図77　竪穴住居跡出土石器……125
図78　竪穴住居跡出土石器……126
図79　竪穴住居跡出土石器……127
図80　竪穴住居跡出土石器……128
図81　掘立柱建物跡YSB1実測図……128
図82　土坑YSC2・4・5・6実測図 ……131
図83　土坑YSC11・12　溝状遺構YSD1・2実測図……132
図84　土坑・溝状遺構出土土器……133
図85　剥片集積遺構（YSS1）実測図……134
図86　剥片集積遺構（YSS1）出土剥片……134
図87　剥片集積遺構（YSS1）付近出土土器……135
図88　竪穴住居跡YSA2・24実測図……137
図89　竪穴住居跡YSA25実測図 ……138
図90　竪穴住居跡YSA32・38実測図 ……141
図91　竪穴住居跡YSA41・44実測図 ……143
図92　竪穴住居跡出土土器……145
図93　竪穴住居跡出土土器……146
図94　竪穴住居跡出土土器……147
図95　竪穴住居跡出土土器他……148
図96　竪穴住居跡出土土器……149
図97　竪穴住居跡出土土器……150
図98　竪穴住居跡出土石器・軽石加工品……153
図99　竪穴住居跡出土石器・軽石加工品……154
図100　竪穴住居跡出土石器・軽石加工品・自然礫…155
図101　土坑YSC1・3・7・8実測図 ……157
図102　土坑YSC9・10・13・14・15・16・17実測図…158
図103　土坑YSC18・19・20・21・22・23・24・25
溝状遺構YSD3実測図……160
図104　土坑出土土器・土製品……161
図105　土坑出土石器……161
図106　弥生時代前期の土器……163
図107　弥生時代中期の土器……165
図108　弥生時代中期の土器……167
図109　弥生時代中期の土器……169
図110　弥生時代中期の土器……170
図111　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……171
図112　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……172
図113　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……173
図114　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……174
図115　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……175
図116　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……176
図117　包含層出土石器……181
図118　包含層出土石器……182
図119　包含層出土石器……183
図120　包含層出土石器……184
図121　包含層出土石器……185
図122　包含層出土石器……187
図123　包含層出土石器……188
図124　包含層出土石器……189
図125　包含層出土石器……190
図126　包含層出土石器……192
図127　包含層出土石器……193
図128　包含層出土石器……195
図129　包含層出土石器……196
図130　包含層出土軽石加工品・管玉・土製品……197
図131　弥生時代～古墳時代初頭の遺構変遷……201

# 写真目次


写真１　遺跡遠景……203
写真２　遺跡土層……204
写真３　縄文時代早期遺物出土状況……205
写真４　縄文時代早期遺物出土状況……206
写真５　縄文時代早期遺構……207
写真６　縄文時代早期遺構……208
写真７　縄文時代早期遺構……209
写真８　縄文時代早期遺構……210
写真９　縄文時代早期遺構……211
写真10　縄文時代前・中期遺構……212
写真11　縄文時代後・晩期遺構……213
写真12　弥生時代の調査……214
写真13　弥生時代の調査……215
写真14　弥生時代中期遺構……216
写真15　弥生時代中期遺構……217
写真16　弥生時代中期遺構……218
写真17　弥生時代中期遺構……219
写真18　弥生時代中期遺構……220
写真19　弥生時代中期遺構……221
写真20　弥生時代中期遺構……222
写真21　弥生時代中期遺構……223
写真22　弥生時代中期遺構……224
写真23　弥生時代中期遺構……225
写真24　弥生時代中期遺構……226
写真25　弥生時代中期遺構……227
写真26　弥生時代中期遺構……228
写真27　弥生時代中期遺構……229
写真28　弥生時代中期遺構……230
写真29　弥生時代中・後期遺構……231
写真30　弥生時代後期遺構……232
写真31　弥生時代後期遺構……233
写真32　弥生時代後期遺構……234
写真33　弥生時代後期遺構……235
写真34　弥生時代後期遺構……236
写真35　スナップ……237
写真36　縄文時代早期土器……238
写真37　縄文時代早期石器……239
写真38　縄文時代後・晩期土器……239
写真39　縄文時代後・晩期土器……240
写真40　弥生時代竪穴住居跡出土土器……240
写真41　弥生時代竪穴住居跡出土土器……241
写真42　弥生時代竪穴住居跡出土土器……242
写真43　弥生時代竪穴住居跡出土土器……243
写真44　弥生時代竪穴住居跡出土土器……244
写真45　弥生時代竪穴住居跡出土土器……245
写真46　弥生時代竪穴住居跡出土土器……246
写真47　弥生時代竪穴住居跡出土土器……247
写真48　弥生時代竪穴住居跡出土土器……248
写真49　弥生時代竪穴住居跡出土石器他……249
写真50　弥生時代竪穴住居跡出土石器他……250
写真51　弥生時代竪穴住居跡出土石器他……251
写真52　弥生時代土坑・溝状遺構出土土器……252
写真53　剥片集積遺構出土の剥片及び遺構付近出土土器……252
写真54　弥生時代竪穴住居跡出土土器……252
写真55　弥生時代竪穴住居跡出土土器他……253
写真56　弥生時代竪穴住居跡出土土器……254
写真57　弥生時代竪穴住居跡出土石器他……254
写真58　弥生時代の土坑出土土器・石器・土製品…255
写真59　弥生時代前期の土器……255
写真60　弥生時代中期の土器……255
写真61　弥生時代中期の土器……256
写真62　弥生時代中期の土器……257
写真63　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……257
写真64　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……258
写真65　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……259
写真66　包含層出土石器……260
写真67　包含層出土石器……261
写真68　包含層出土石器・軽石加工品・管玉・土製品……262

# 第１章　序説

## 第１節　調査に至る経緯

宮崎県都城市横市地区では、平成５年度に県営ほ場整備事業（平成９年度から平成13年度まで県営担い手育成基盤整備事業、平成14年度は県営ほ場整備事業、平成15年度から県営経営体育成基盤整備事業）の実施が採択された。平成６年度、宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が一帯の分布調査を実施したところ、事業対象区域170ヘクタール内において10遺跡、約44ヘクタールに及ぶ埋蔵文化財包蔵地の所在が推定された。その後、都城市教育委員会は宮崎県文化課が実施した試掘調査の結果を受けて、北諸県農林振興局と協議を行い、現状保存が困難な部分について、平成８年度から鶴喰遺跡の調査を皮切りとして、記録保存のための緊急発掘調査を継続的に実施している。

平成12年度以降にほ場整備が予定されていた加治屋地区（都城市南横市町1555番ほか）については、宮崎県文化課が平成11年の11月４日～12月７日に確認調査を行った結果、ほとんどのトレンチから弥生時代・中世の遺物が出土し、地表下0.7～１ｍで確認される霧島御池軽石上面において竪穴住居跡と思われる遺構やピットが確認された。その内容と工事計画とを照らし合わせたところ、切土によって遺跡対象地域のほぼ全域が影響を受けることとなり、平成12年度に入り数次にわたって協議がもたれたが、最終的に総面積約2.1ヘクタールを平成13・14年度の２ヵ年にわたって（平成13年度：11000㎡、平成14年度：10000㎡）発掘調査することになった。

今回の調査地点は、昭和61年度に実施した都城市遺跡詳細分布調査による市内遺跡番号6006の加治屋遺跡に含まれている。当地点の南約250mにある成層シラス台地上では、昭和62年度の市道改良工事に伴う発掘調査により、弥生時代後期の集落跡が見つかり、平成６年度の民間による分譲住宅地の造成に伴う調査でも弥生時代後期の竪穴住居跡が確認された。この２次のわたる発掘調査が行われた成層シラス台地上のエリアについては、便宜的に加治屋Ａ遺跡とし、それよりも低い地形面に位置する今回の低位段丘面のエリアを加治屋Ｂ遺跡と呼称することとした。

現場における調査期間は、第１次調査が平成13年４月10日～平成14年３月27日までであり、第２次調査が平成14年４月10日～平成15年１月25日である。出土遺物の整理作業のうち水洗・注記・台帳作成に関しては、現場の仮設事務所において実施し、復元や実測図作成は平成13年度以降の現場事務所や市教育委員会文化財課の各施設において行った。報告書上巻（縄文時代・弥生時代編）の編集作業は平成18年度に実施した。報告書下巻（平安時代～近世編）の編集作業は平成19年度に実施する予定である。

加治屋Ｂ遺跡の調査成果の公開に関しては、平成14年３月17日に一般市民を対象とした遺跡見学会を実施しており、市内外から約200名の参加があった。また、平成15年１月28・30・31日には、同時に調査していた星原遺跡とともに、近隣の小学校の児童を対象とした遺跡見学会を実施した。

（文責：桒畑光博）

## 第２節　調査の組織

### 平成13年度（第１次発掘調査実施年度）の組織

| | | |
|---|---|---|
| ・調査主体者 | 宮崎県都城市教育委員会 | |
| ・調査責任者 | 教育長 | 長友久男 |
| ・調査事務局 | 教育部長 | 轟木保紘 |
| | 文化課長 | 内村一夫 |
| | 文化課課長補佐 | 坂元昭夫 |
| | 文化課文化財係長 | 奥田正幸 |
| | 文化財課事務臨時職員 | 桜木　梢 |
| ・調査担当者 | 文化課文化財係主査 | 桒畑光博 |

文化課文化財係嘱託　　下田代　清　海
文化課文化財係嘱託　　原　田　亜紀子
文化課文化財係嘱託　　外　山　隆　之

・調査指導者　高　橋　　学（立命館大学）… 地形環境分析
宍　戸　　章（宍戸地質研究所）… 石器石材鑑定
山　本　信　夫（山本考古研究所）… 貿易陶磁器鑑定
中　摩　浩太郎（鹿児島県指宿市教育委員会）… 竪穴住居跡調査法

・発掘作業従事者　阿久根トシエ、猪ヶ倉重光、猪ヶ倉正子、井上　弦、今村まさ子、今村ミツ子、岩切数秋、岩本泉、上野利則、後田アヤ、榎木ツネ、榎木ハナ、大盛祐子、大山伊智子、大山ミツ子、奥スズ子、奥　利治、小山田利丸、小山田ハツ子、上宮田ミチ、蒲生サダ、加覧淳一、川野春信、木村七郎、木牟礼篤子、児玉時春、嶋木　止、庄屋幸子、城村ミサ、高橋露子、武石アキ、武石重利、竹下康子、竹中美代子、立野良子、立山君子、田中育子、谷口與子、谷山トミ子、津曲千賀子、中須純子、中村ゆう子、永田澄利、永田義晴、西留健也、野上トシ子、野口虎男、野田ツミ子、野村ハツミ、橋口みどり、平田美智子、広村ミキ、藤井大祐、福岡悦雄、福岡咲子、坊地トミ、堀　登、馬籠恵子、松原ヨシ子、森山タツ子、山口一夫、山下美佐子、山中輝雄、山中マリ、横山照良、横山ミチ子、吉村則子、来住サチ子、渡辺恭一

・整理作業従事者　伊鹿倉康子、池崎美智子、岩切真弓、大盛祐子、児玉信子、谷口和代、谷口奈穂子、徳楽有子、西　博子、前田町子、丸崎千鶴子、吉留優子、渡司ちさ子

## 平成14年度（第2次発掘調査実施年度）の組織

・調査主体者　宮崎県都城市教育委員会

・調査責任者　教育長　　長　友　久　男（平成14年6月30日まで）
北　村　秀　秋（平成14年7月1日より）

・調査事務局　教育部長　　轟　木　保　紘
文化課長　　内　村　一　夫
文化課課長補佐　　坂　元　昭　夫
文化課文化財係長　　松　下　述　之
文化財課事務嘱託職員　　桜　木　　梢

・調査担当者　文化課文化財係主査　　桒　畑　光　博
文化課文化財係嘱託　　下田代　清　海
文化課文化財係嘱託　　原　田　亜紀子
文化課文化財係嘱託　　津　曲　千賀子

・調査指導者　本　田　道　輝（鹿児島大学）… 縄文土器鑑定
田　崎　博　之（愛媛大学）… 土地利用変遷の復元方法
柳　沢　一　男（宮崎大学）… 弥生集落の動態
宇田津　徹　朗（宮崎大学）… 稲作技術の変遷
井　上　　弦（宮崎大学）… 土壌分析
宍　戸　　章（宍戸地質研究所）… 地形面区分と地質分析
山　本　信　夫（山本考古研究所）… 貿易陶磁器鑑定

・発掘作業従事者　阿久根トシエ、猪ヶ倉重光、猪ヶ倉正子、今村まさ子、今村ミツ子、今山キミ、岩切数秋、岩本　泉、上野利則、後田アヤ、大山伊智子、大山ミツ子、奥スズ子、奥　利治、小山田利丸、小山田ハツ子、上宮田ミチ、蒲生サダ、加覧淳一、川野春信、木村七郎、木村典子、児玉時春、庄屋幸子、城村ミサ、高橋露子、武石アキ、武石重利、竹下康子、竹中美代子、立石カズ子、立野良子、田中育子、谷口與子、

谷山トミ子、中須純子、中村ゆう子、永田澄利、永田義晴、西留健也、野上トシ子、野田ツミ子、野村ハツミ、橋口みどり、平田美智子、福岡悦雄、福岡咲子、堀　登、馬籠恵子、松原ヨシ子、三島淑子、森山タツ子、山下美佐子、山口一夫、山中輝雄、山中マリ、横山照良、横山ミチ子、吉村則子、来住サチ子、渡辺恭一

・整理作業従事者　伊鹿倉康子、市来美都代、岩切真弓、大盛祐子、奥　登根子、木村礼子、久保新子、新屋美佳、水光弘子、谷口和代、谷口奈穂子、徳楽有子、西　博子、八谷邦枝、前田町子

### 平成18年度（報告書上巻刊行年度）の組織

・調査主体者　宮崎県都城市教育委員会

・調査責任者　教育長　玉利　譲

・調査事務局　教育部長　今村　昇
文化財課長　高野隆志
文化財課課長補佐　新宮高弘
文化財課副主幹　矢部喜多夫
文化財課事務嘱託　押川涼子

・調査担当者　文化財課副主幹　寺師雄二（平成18年7月1日から）
山田学校教育課副主幹　桒畑光博（平成18年7月1日から、平成18年6月30日まで文化財課主査）
文化財課主事　栗山葉子
文化財課主事　山下大輔
文化財課主事　加覧淳一
文化財課嘱託　外山亜紀子（平成18年12月28日まで）

・整理作業従事者　大坪真知子、奥　登根子、新屋美佳、水光弘子、西　博子、八谷邦枝、福岡八重子、槇尾恵美子、丸崎千鶴子、水元美紀子

## 第3節　遺跡調査検討会の記録

第1節で述べたように平成8年度から継続して実施している横市地区遺跡群の発掘調査は、水田地帯の区画整理に伴っており、従来、市内では調査されることの少なかった沖積地（現水田地帯）を調査対象としているため、これまでは得られなかった貴重な資料が次々と発見されている。南九州において、これほどまでに一つの河川流域を網羅的に調査する事例はなく、シラス地帯における土地利用変遷をたどることのできる唯一の遺跡群と考えられる。そこで、平成13・14年度に調査した加治屋B遺跡を中心として、これまでに得られたデータも含めて、学際的な視野で検討を加え、時代ごとの景観復元を試みた上で、それらを総合し土地利用変遷を復元するという目的のもとに、各分野の専門家（第2節の調査指導者のうち、柳沢一男氏・田崎博之氏・宍戸章氏・宇田津徹朗氏・井上弦氏及び古環境研究所の杉山真二氏・早田勉氏）を招き、2回にわたって、遺跡調査検討会を実施した。第1回は平成14年10月17日に「横市川流域における地形面区分と環境変遷」というテーマで、第2回は平成15年1月20日に「横市川流域における土地利用変遷について」というテーマで開催した。以下に、この検討会で出された意見をもとにしてまとめられた成果の一部を抜粋する。

**【集落動向】**

宍戸章氏の地形区分による沖積段丘1面（$at_1$）は、縄文時代中期頃は河川の氾濫や洪水の影響を受ける湿地であったが、霧島御池軽石（約4200年前）が大量に降下・堆積することによってある程度陸化し、その後、横市川本流の下刻が進み段丘化したと考えられる。縄文時代後期後半から晩期中頃にかけての沖積段丘面への進出は生産基盤の変化の問題ともからめて注目される（肱穴遺跡・馬渡遺跡・今房遺跡・

坂元B遺跡など)。縄文時代晩期後半（弥生時代早期）～弥生時代前期の集落跡は、沖積段丘上の肱穴遺跡で確認され、水田跡が見つかった坂元A遺跡に隣接する坂元B遺跡もその時期の集落跡の可能性がある。弥生時代中期になると低位段丘上の加治屋B遺跡にみられるように、大規模な集落跡が営まれるようになり、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、集落数の増加傾向（今房遺跡・馬渡遺跡・加治屋A遺跡・坂元B遺跡）が認められる。その背景には沖積段丘面の本格的な土地利用の進展があると思われる。古墳時代後期の遺跡としては、シラス台地上に散在する竪穴住居跡がいくつかの遺跡で見つかっているのに対し、沖積段丘上の浅い谷に面した鶴喰遺跡では、かまどをもつ竪穴住居跡を含む住居跡群が高い密度で検出された。その後の集落動向は不明な点が多いが、平安時代（8世紀末～10世紀）になると、沖積段丘や低位段丘面の遺跡密度が異常に高くなる。これらには一般の集落跡だけではなく、公的な施設や居宅跡なども含まれていると考えられる。島津荘の展開期である平安時代末～中世前期になると、12世紀代の正坂原遺跡、13世紀～14世紀初頭の加治屋B遺跡・13世紀～14世紀後半の鶴喰遺跡、といった大規模な館跡に収斂していく様相が看取される。このような遺跡群の消長は、南北朝期（14世紀中頃）の文献に登場する新宮城跡の動向とからめて興味深い。さらに、18世紀代には坂元B遺跡や加治屋B遺跡などで近世の都城領における政策的な集落配置をみることができる。

**【土地利用と開発】**

縄文時代晩期終末（弥生時代早期）には、沖積段丘面の旧河道などのヨシ属が繁茂する湿地を利用して開田しており、弥生時代中期後半～後期にかけては、泥炭質土壌の堆積する谷部にも水田域が拡大し、その状況は平安時代頃まで継続する。中世後期には、沖積段丘面の中でもより高い面やより下位の沖積低地面の水田化が本格的に始まる。近世になると、それまで畠として利用されていた低位段丘面の一部にも水田が作られるようになり、近代以降は低位段丘以下の大半が水田化され、現在の景観が形成された。用水については、縄文時代晩期末（弥生時代早期）から平安時代にかけては、基本的にシラス台地崖下から出る湧水を利用したとみられ、沖積段丘上の浅谷に平安時代の溜井と思われる施設が検出されている。中世後期（文明年間前後）になると、水田域が沖積段丘面の中でもより高位面に広がる。具体的な遺構は未検出であるが、従来の灌漑技術に改良が加えられたことを示しているものと想定される。近世にはシラス台地のガリーを堰き止めて灌漑池が作られ、近世から近代にかけては、シラス台地縁に沿って大規模な灌漑用水路が構築された。

畠に関しては、現在までのところ、平安時代の畝状遺構が低位段丘の比較的上位面の星原遺跡のみで検出されている。その他、沖積段丘面から成層シラス台地面にかけて多くの遺跡で検出される中世後期の文明軽石降下後の小溝状遺構群も畠跡とみられ、後述する火山災害の問題ともからんで注意が必要である。

イネ栽培に関して、坂元A遺跡におけるイネのプラント・オパール形状解析の結果をみると、当初(縄文時代晩期末・弥生時代早期)、熱帯ジャポニカが中心に栽培されていたが、弥生時代前期から平安時代にかけては粗放な栽培でも安定した収穫が期待できる熱帯ジャポニカを中心としながら、多様なイネの栽培が推定され、平安時代から中世にかけては熱帯ジャポニカも栽培されたが、徐々に水田での管理栽培において能力を発揮する温帯ジャポニカがその割合を増し、近世のある段階には温帯ジャポニカが中心に栽培されるようになったと考えられる。

土地利用にかかわる植生変遷については、花粉分析の結果からみると、平安時代中頃を境に、木本質の花粉が激減すると同時に、照葉樹林起源の花粉が急減し、反対にマツ属の花粉が急増するが、これは水田開発に伴う現象ではなく、当該期におえる集落造営等による建築部材や燃料確保によるものと考えられる。

火山災害とその復旧については、中世後期の水田跡において、桜島文明軽石（15世紀後半）の降下後に軽石層を天地返したと考えられる踏み鋤痕が水田面一面にみられる事例が多いが、こうした痕跡は、災害後の復旧痕である可能性が高い。また、成層シラス台地面から沖積段丘面のいたるところで、桜島文明軽石の2次堆積する小溝状遺構群が、切りあいを持たず多数発見されているが、これらについては、耕起痕と考えられ、火山災害後の一次回避の措置（捨て作り）として陸稲などの畠作が行なわれた可能性も考慮しておく必要がある。　（文責：桒畑光博）

# 第２章　遺跡の位置と環境

## 第１節　地理的環境（図１）

都城市は九州東南部、宮崎県の南西部に位置する都城盆地のほぼ中央部を占める。この盆地は、南北約 25km、東西約 15kmの楕円状をなしており、北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈する。また、盆地中央部を大淀川が貫流しており、多くの支流を集めて、南から北へと流れる。その大淀川を挟んで、東側の山地は急峻で、起伏が大きく、その裾部には緩やかに盆地底へと傾斜する広大な扇状地が発達している。一方、北西に位置する山地は霧島火山の山麓にあたり、比較的緩やかなスロープとなる。その周縁から南にかけてはおおむね平坦で起伏の少ないシラス台地が広がっているが、西から東へと流れる大淀川の支流（北から丸谷川、庄内川、横市川）がその台地を分断しながら流れており、それぞれの流域には氾濫原と河岸段丘の形成が認められる。その一支流である横市川は鹿児島県曽於市（旧財部町）から蛇行しながら都城盆地中央部へ向けて流れ大淀川に合流する。その横市川の両岸に所在する遺跡群を横市地区遺跡群と総称している。

**図１　遺跡位置図**

横市川流域一帯の地形面区分については、宍戸章氏が米軍撮影の空中写真の判読と現況地形・地質露頭の観察にもとづいて実施している（図３にその一部を掲載）。宍戸氏は、成層シラス面より下位で、現河床の存在する沖積低地面を除く面を標高・テフラ等から区分し、桜島薩摩テフラ（P14）かそれより古いテフラに覆われるものを低位段丘、鬼界アカホヤ火山灰やそれ以降の霧島御池軽石等に覆われるものを沖積段丘とし、さらに標高の違いから低位段丘を３つの面に、沖積段丘を２つの面に分けている。

**成層シラス面（S′）**は、姶良カルデラから噴出した入戸火砕流（24000 ～ 25000 年前）が都城盆地一帯を埋積した直後に湖に堆積することによって形成された一続きの平坦面。

**低位段丘３面（$t_3$）**は、低位段丘の中の最高位面に位置づけられ、加治屋遺跡付近では沖積低地面との比高が＋ 18m で、横市地区では上流地域のみに分布する。一部の成層シラス面とは同時性あり。

**低位段丘２面（$t_2$）**は、和田・今房付近で沖積低地面との比高が＋ 11 ～ 12m である。一般に段丘堆積物は礫～砂礫（四万十層群由来の亜円礫および粗砂）で、桜島薩摩テフラ直下の褐色ローム層に覆われる。

**低位段丘１面（$t_1$）**は、加治屋や和田方面では、沖積低地面との比高が＋９～ 10m で、平坦面のほかｔ２面から垂れ下がるような緩傾斜面も含む。段丘堆積物は加治屋遺跡で主にシルト・粘土で、桜島薩摩テフラに直接覆われる。桜島薩摩テフラ（約 11000 年前）降下直前に離水。

**沖積段丘２面（$at_2$）**は、沖積低地面との比高が＋６～７ｍで、鬼界アカホヤ火山灰（約 6300 年前）および霧島御池軽石（約 4200 年前）に覆われる。

**沖積段丘１面（$at_1$）**は、沖積低地面との比高が＋３～４ｍで、霧島御池軽石以上のテフラに覆われる。なお、谷地形部に関しては、**沖積低地の流路跡、段丘開析谷**（２面以上の段丘を横断開析して流下する谷地形）、**段丘面上の浅い谷**（段丘面上にみられる谷地形・帯状凹地）の３種に細分している。

加治屋Ｂ遺跡は低位段丘２面（$at_2$）に立地するが、北へ向かって急傾斜する調査区域の北東端部は低位段丘１面（$at_1$）にかかっている。北側と西側は急崖となり、西側眼下には沖積段丘２面（$at_2$）を挟んで沖積段丘１面（$at_1$）の営まれた坂元Ｂ遺跡がある。なお、調査区の北側に設けた北トレン

チでは、霧島御池軽石下において、鬼界アカホヤ火山灰降下後に形成された段丘崖が確認された。

（文責：桒畑光博）

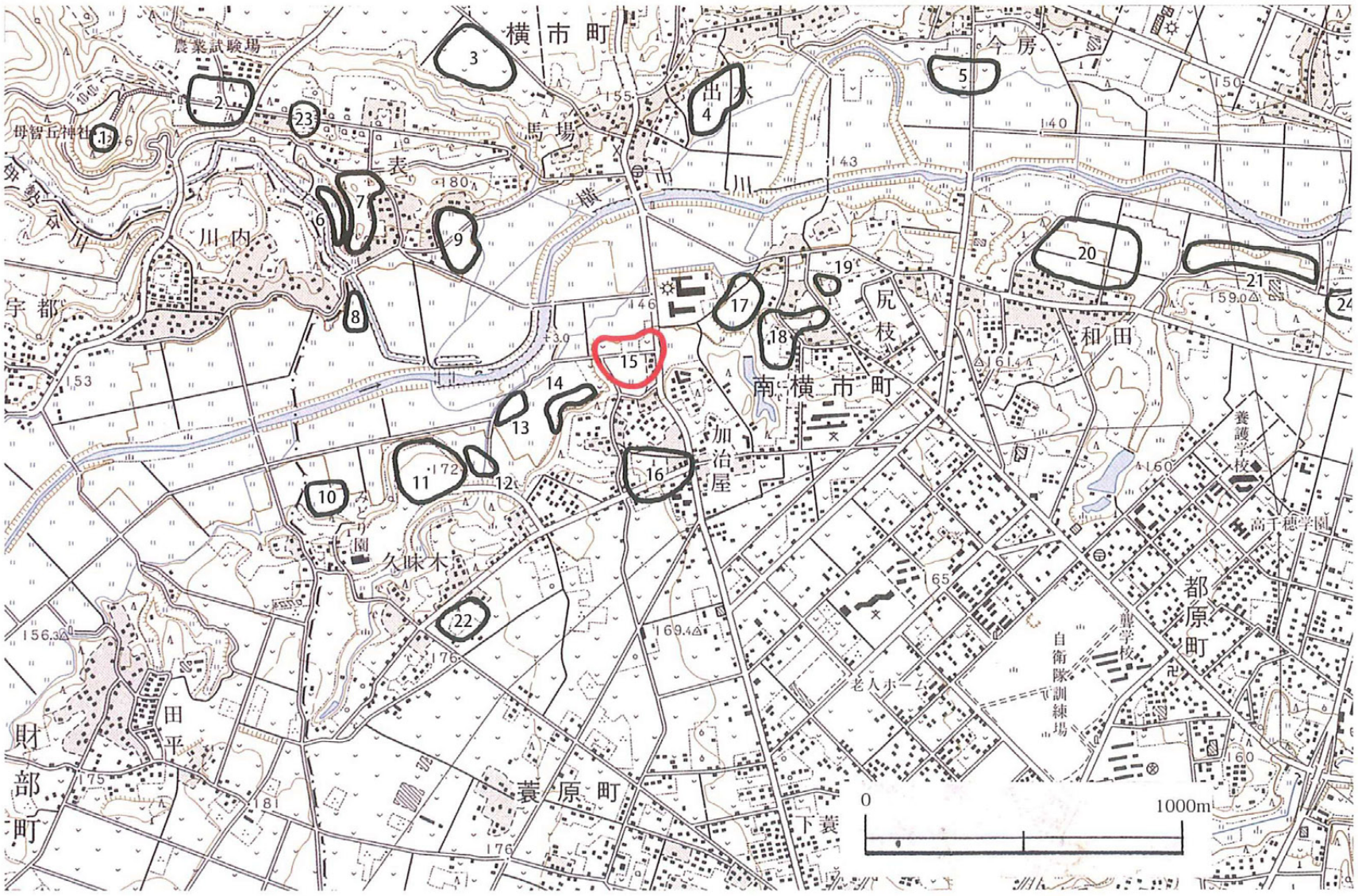
## 第２節　周辺の遺跡（図２）

横市川流域では、平成８年度に発掘調査が実施されて以来、二十数箇所の遺跡が把握されており、これらの遺跡群は、成層シラス台地より低位に階段状に形成された低位段丘及び沖積段丘上に位置している。

縄文時代時代の遺跡としては、早期の**胡麻段遺跡**、**田谷・尻枝遺跡**、**平田遺跡**、前期～中期の**星原遺跡**があげられる。いずれも霧島御池軽石（約 4200 年前）とアカホヤ火山灰に挟まれた黒色土中から遺物が出土しており、**星原遺跡**では早期の集石遺構が、**田谷・尻枝遺跡**では早期及び中期の落とし穴が検出されている。また、霧島御池軽石層上層の後期～晩期の遺跡としては、**牧ノ原第２遺跡**、**中尾山・馬渡遺跡**、**星原遺跡**、**正坂原遺跡**、**横市遺跡**、**肱穴遺跡**、**今房遺跡**などがあり、**牧ノ原第２遺跡**では後期の竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代では、**坂元Ａ遺跡**で早期（縄文時代晩期後半の突帯文土器期）及び中期後半から晩期末にかけての水田遺構が検出されている。また、**平田遺跡**において中期後半の竪穴住所跡群からなる集落跡が確認され、**馬渡遺跡**、**坂元Ｂ遺跡**、**加治屋遺跡**、**平田遺跡**、**今房遺跡**などでは後期～終末期の集落跡が見つかっている。

古墳時代の遺跡としては、**中尾遺跡**、**蓑原遺跡**、**星原遺跡**、**牧の原第２遺跡**、**横市中原遺跡**、**鶴喰遺跡**、**母智丘第２遺跡**があげられるが、特に**鶴喰遺跡**ではカマドを伴う竪穴住居跡を含め６８件の後期の住居跡が検出されているのが注目される。




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1：母智丘原第１ | 2：母智丘原第２ | 3：牧の原第２ | 4：肱穴 | 5：今房 | 6：畑田 |
| 7：新宮城跡 | 8：母智丘谷 | 9：鶴喰 | 10：馬渡 | 11：中尾山・馬渡 | 12：江内谷 |
| 13：坂元Ａ | 14：坂元Ｂ | **15：加治屋Ｂ** | 16：加治屋Ａ | 17：星原 | 18：田谷・尻枝 |
| 19：胡摩段 | 20：平田 | 21：早馬 | 22：池原 | 23：横市中原 | 24：正坂原 |

**図２　遺跡分布図**

さらに、横市川の流域の地域には古代から中世の注目される遺跡も多い。平安時代から鎌倉時代にかけての遺跡では、**肱穴遺跡**で８世紀後半の集落跡及び平安時代以降の複数時期の水田跡が確認されているほか、**鶴喰遺跡**では柱穴に礎石を伴う大型の掘立柱建物や回廊状遺構が検出され、中世前半の居館跡の可能性が指摘されている。また、**正坂原遺跡**では12世紀中半から15世紀後半まで継続的に営まれた集落跡が検出されている。そのほか**馬渡遺跡**、**中尾山**（なかおやま）**・馬渡遺跡**、**江内谷**（えないだに）**遺跡**、**坂元Ｂ遺跡**、**鶴喰遺跡**、**星原遺跡**、**今房遺跡**、**平田遺跡**、**蓑原遺跡**、**馬渡遺跡**、**早馬**（はやうま）**遺跡**などの遺跡がある。また、対岸の**新宮城**（しんぐうじょう）**跡**は南北朝期の文献資料に初見される山城で、空堀、土塁が現存する。

近世の遺跡としては、**肱穴遺跡**や**坂元Ｂ遺跡**で１７～１８世紀の集落跡が確認されている。

（文責：寺師雄二）

**【参考文献】**


都城市教育委員会　1987　『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』都城市文化財調査報告書第５集

都城市教育委員会　1989　『母智丘原第１遺跡・県指定志和池１号墳』都城市文化財調査報告書第９集

都城市教育委員会　1993　『久玉遺跡第５次発掘調査・油田遺跡正坂原遺跡』都城市文化財調査報告書第２５集

都城市教育委員会　1996　『加治屋原遺跡２』都城市文化財調査報告書第３５集

都城市教育委員会　1997　『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第３８集

都城市教育委員会　1998　『鶴喰遺跡』都城市文化財調査報告書第４４集

都城市教育委員会　1999　『肱穴遺跡』都城市文化財調査報告書第４７集

都城市教育委員会　2000　『横市地区遺跡群　肱穴遺跡(1)・今房遺跡・馬渡遺跡(第1次)』都城市文化財調査報告書第５０集

都城市教育委員会　2001　『横市地区遺跡群　馬渡遺跡（第２次調査）・坂元Ａ遺跡』都城市文化財調査報告書第５５集

都城市教育委員会　2002　『横市地区遺跡群　江内谷遺跡・坂元B遺跡・加治屋B遺跡(第１次調査)』都城市文化財調査報告書第５８集

都城市教育委員会　2003　『江内谷遺跡』都城市文化財調査報告書第５９集

都城市教育委員会　2003　『横市地区遺跡群　加治屋Ｂ遺跡（第２次調査）・星原遺跡』都城市文化財調査報告書第６０集

都城市教育委員会　2004　『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第６２集

都城市教育委員会　2004　『今房遺跡（第２次調査）』都城市文化財調査報告書第６４集

都城市教育委員会　2005　『横市地区遺跡群　平田遺跡Ａ地点・Ｂ地点・Ｃ地点』都城市文化財調査報告書第６８集

都城市教育委員会　2006　『坂元Ａ遺跡　坂元Ｂ遺跡』都城市文化財調査報告書第７１集

都城市教育委員会　2006　『横市地区遺跡群　星原遺跡』都城市文化財調査報告書第７２集

宮崎県教育委員会　2000　「都城市・横市地区遺跡」『平成１１年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書』

宮崎県埋蔵文化財センター　1999　『上牧第２遺跡・母智丘原第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第１８集

宮崎県埋蔵文化財センター　1999　『牧の原第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第１９集

宮崎県埋蔵文化財センター　2001　『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・蓑原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第４２集

宮崎県埋蔵文化財センター　2002　『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第６３集

宮崎県埋蔵文化財センター　2004　『宇都第３遺跡・横市中原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第８５集

都城市史編纂委員会　1997　『都城市史　通史編　自然・原始・古代』都城市

都城市史編纂委員会　2005　『都城市史　通史編　中世・近世』都城市

千田嘉博　1998　「新宮城跡」『都城市の中世城館』都城市文化財調査報告書第４５集

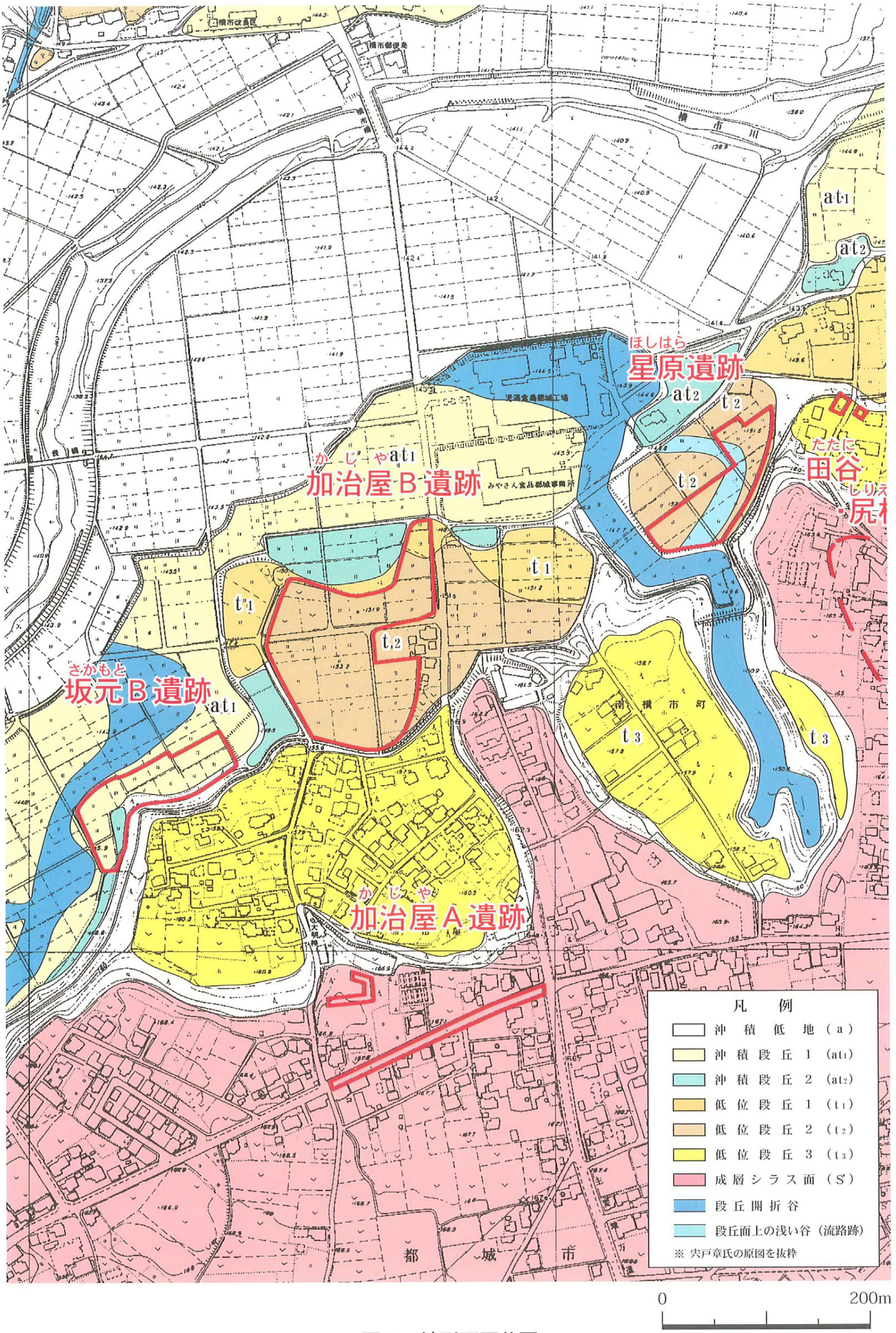

星原遺跡
ほしはら
加治屋B遺跡
かじや
坂元B遺跡
さかもと
加治屋A遺跡
かじや
田谷
たたに
横市川
南横市町
都城市
at1
at2
t1
t2
t3
凡例
沖積低地（a）
沖積段丘1（at1）
沖積段丘2（at2）
低位段丘1（t1）
低位段丘2（t2）
低位段丘3（t3）
成層シラス面（S）
段丘開折谷
段丘面上の浅い谷（流路跡）
※ 宍戸章氏の原図を抜粋
0
200m

図3　地形面区分図

図４　遺跡周辺地形図

# 第３章　発掘調査の成果

## 第１節　発掘調査の方法と概要（図５）

調査対象地の現況は水田であり、標高は南側の高いところで約 153.74m、北側の低いところで約 148.95m と北へ向かって段々に落ちている。南側の低位段丘３面との境界に沿って用水路が開削されており、この低位段丘２面を灌漑している。発掘調査に際しては、地形とは無関係に、公共座標系のＳＮ座標線に一致したメッシュを設定（10m × 10m を１単位とする調査区を設定）し、東西方向を算用数字で、南北方向をアルファベットで表記し、その組み合わせで区名を付けた。また、調査範囲が調査次数によって西側と東側（第１次調査が西側で、第２次調査が東側）に分けられた上、調査対象地のほぼ中央部を東西に横切る農道があるため、さらにそれぞれの調査区を便宜的に北ブロックと南ブロックに区分した。

現場における調査期間は、第１次調査が平成 13 年４月 10 日～平成 14 年３月 27 日までであり（約 11000㎡）、第２次調査が平成 14 年４月 10 日～平成 15 年１月 25 日である（約 10000㎡）。

平成 11 年度の宮崎県教育委員会による確認調査では、対象地西側のトレンチＴ 38 の地表下約 60cm レベルの霧島御池軽石（約 4200 年前）上面で竪穴住居跡と思われる遺構やピットが見つかり、他のトレンチでも霧島御池軽石上位の黒色土～黒褐色土から弥生時代～中世の土器が出土したため、弥生時代～中世が中心となることが予想された。さらに、平成 13 年度に開始した本調査の表土剥ぎ直前に実施した再確認調査の際に、対象地の北東部において、平安時代の土師器も出土した他、霧島御池軽石よりも下の鬼界アカホヤ火山灰（約 6300 年前）の下位から赤色化した礫が検出されたため、縄文時代早期の文化層の存在も予想された。工事計画をみると、同地点の鬼界アカホヤ火山灰下位にも影響があることが判明したため、縄文時代早期については、平成 14 年度の第２次調査で記録保存することになった。確認調査では霧島御池軽石上位に堆積する黒色土中位レベルで土器が検出されることから、現耕作土を重機によって剥ぎ取って調査区域外に仮置きした後、調査員の立ち会いの元で、さらに黒色土の中位まで掘り下げたが、第１次調査では、南ブロックの東側の一部において、桜島文明軽石（４層：15 世紀後半）を埋土とする小溝状遺構群が確認されたため、いったんその状況を写真に記録してから掘り下げた。第１次調査の北ブロックの北端と第２次調査の北ブロック西側は削平のため、表土直下に霧島御池軽石があらわれ、遺構の把握が簡便であった。表土剥ぎ後は、霧島御池軽石上位の黒色土が質感と黄色軽石粒の含み具合によって、大きく２つに分層（５層と６層）できることから、２段階に分けて人力で掘り下げを行った。基本的に６層上面で平安時代～中世の遺構を確認し、さらに７層上面で縄文時代～弥生時代の遺構を確認したが、縄文時代後期の遺物の一部は７層に食い込むような状況で検出された。第１次調査の南ブロックの北側一帯（Ｍ・Ｎ・Ｏ－５・６・７区）では、５層中から完形を含む土師器杯・小皿が多量に出土し、貿易陶磁器や国産陶器等もまとまって見つかった。また同区では、５層を掘り下げる過程で、その下にあるはずの６層との判別が困難となり、遺物を取り上げた後に、遺構を検出するために数回ジョレンで削っても、全体に黄色軽石粒をまんべんなく含む黒色土が広がるだけで、遺構を把握するのが容易ではなかった。結果的にこの地点では中世のピットが著しく重なり合った状態であることが判明した。遺構は平面的に把握することに努めたが、弥生時代以前の遺構については断ち割りを併用し、断面と照らしながら確認した。出土遺物は通し番号を付けて随時トータルステーションを用いて位置とレベルを押さえながら取り上げた。

第１次調査と第２次調査の結果、縄文時代早期、縄文時代後・晩期、弥生時代（～古墳時代初頭）、平安時代、中世前期、近世の各時代の遺構・遺物が確認された。弥生時代については中期の集落跡の広がりと変遷を把握することができた。平安時代については、掘立柱建物跡や竪穴状遺構などの遺構群と越州窯系青磁、緑釉陶器や石製銙具が確認された。中世前期については、大溝がめぐる館跡が確認された。大溝で囲まれた内側から掘立柱建物跡 95 棟が検出され、時期は 13 世紀～ 14 世紀前半を中心とするものと考えられ、青磁などの貿易陶磁器をはじめ、東海系の国産陶器も多量に出土している。

（文責：桒畑光博）

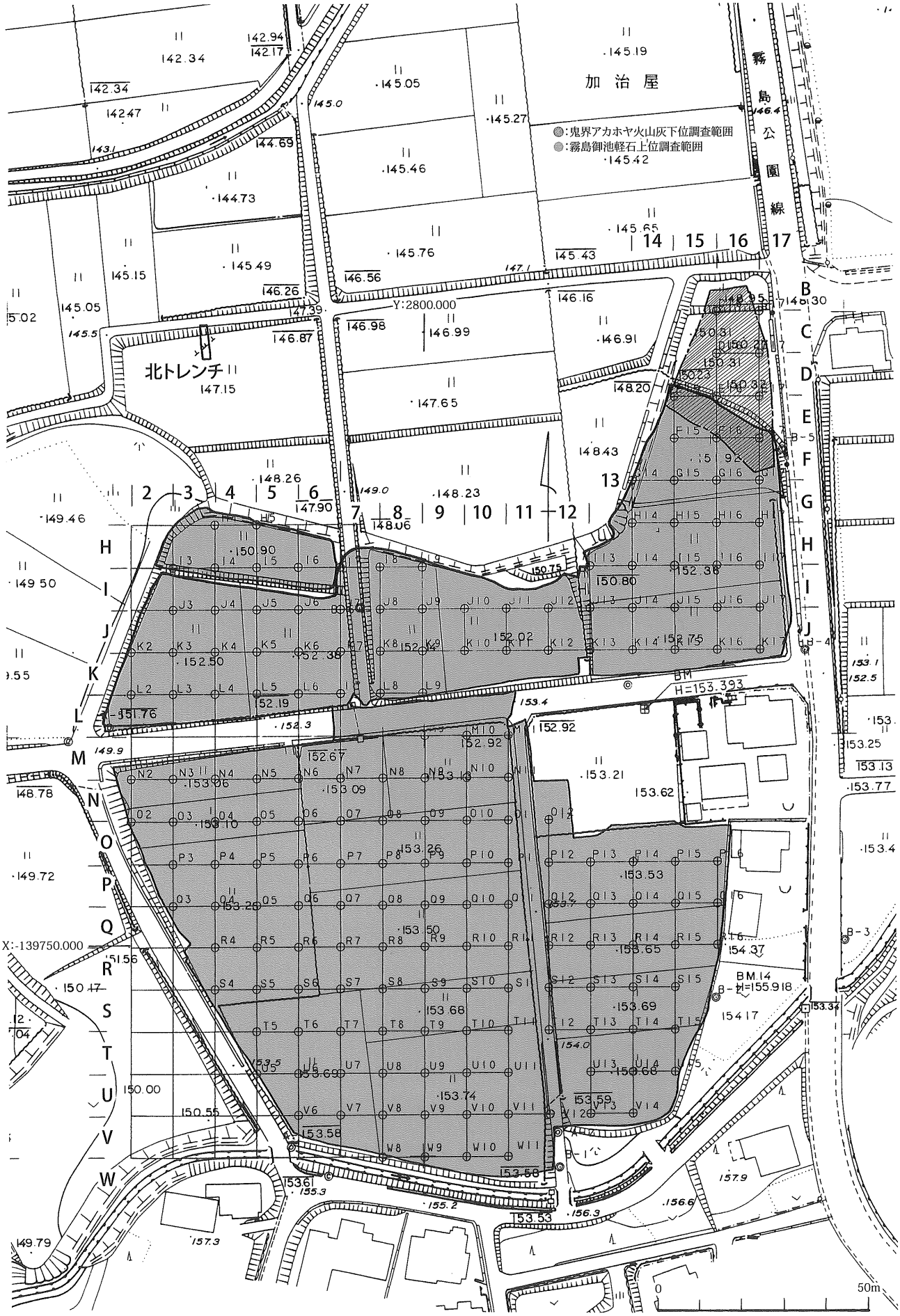

加治屋
霧島公園線
●:鬼界アカホヤ火山灰下位調査範囲
●:霧島御池軽石上位調査範囲
北トレンチ
Y:2800.000
X:-139750.000
BM
H=153.393
BM.14
H=155.918
0
50m

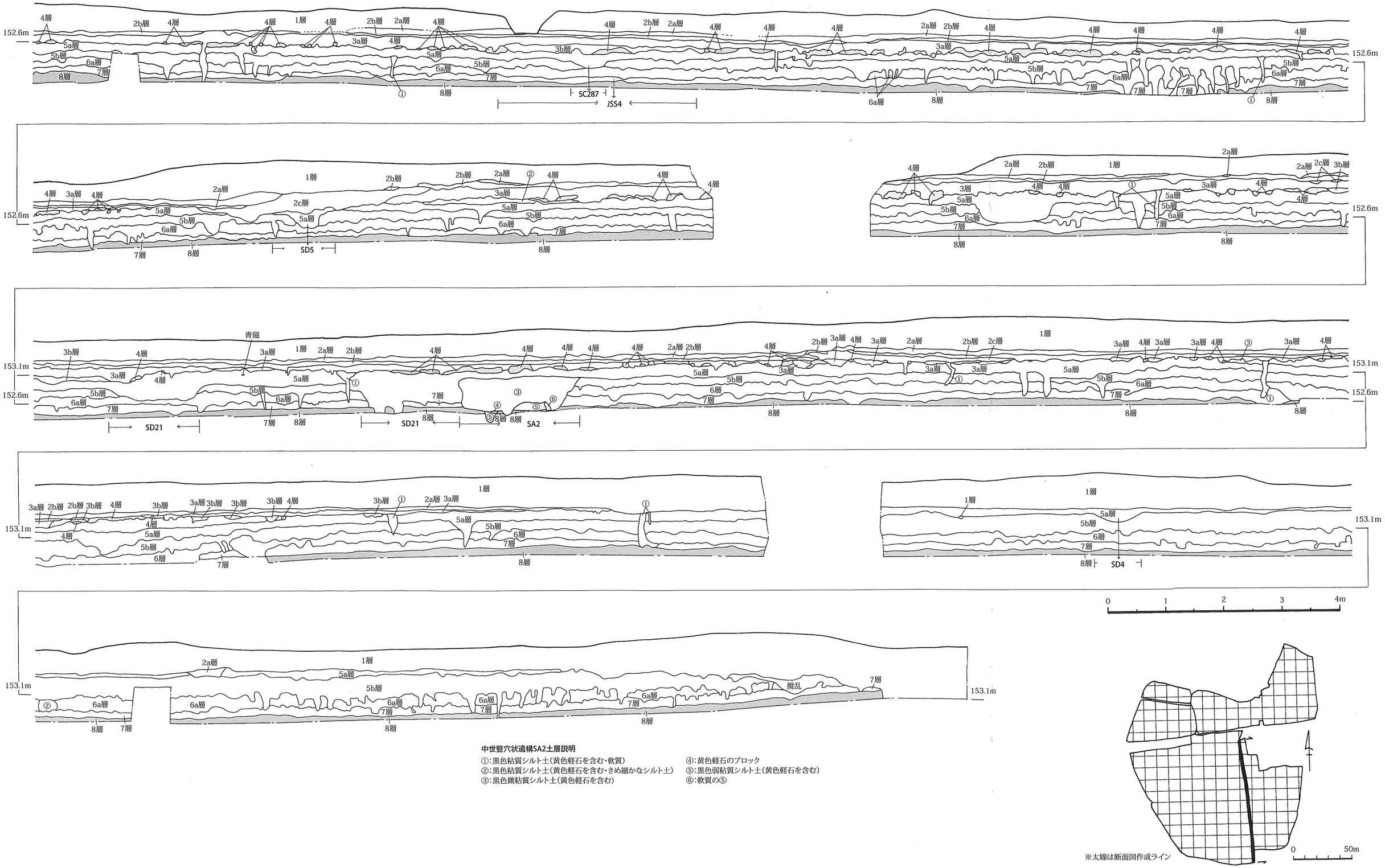
図5　調査区域図

## 第２節　基本層序（図６～10）

本遺跡は低位段丘上にあるため、より以下の沖積段丘面に比べると、桜島薩摩テフラ（約11000年前）降下以降は、比較的安定した堆積状況を示しているものの、調査対象区域が広範囲にわたるため、地点によって調査の重点を置いた土層（時代）が異なっていた。そこで、霧島御池軽石よりも上位（縄文時代後期以降）については、調査区域中心部にあたるＱ－11区及び調査区域北東部のＧ－15区における土層を標識とし、霧島御池軽石よりも下位（縄文時代中期以前）については調査区域北東端Ｅ－17区付近の土層を標識として調査区全体の基本層序を下記のように決定した。

**１層**　：黄灰色微砂質シルト土（灰白色軽石・黄色軽石・小礫含む）
**２a層**：オリーブ黒色砂質土（灰白色軽石と風化礫含む）
**２b層**：暗灰黄色砂質土（灰白色軽石と風化礫含む）酸化鉄の沈着あり
**２c層**：褐灰色砂質土（灰白色軽石と風化礫含む）近世遺物包含層
**３a層**：黒色砂質シルト土（灰白色軽石・黄色軽石含む）近世遺物包含層
**３b層**：黒色砂質シルト土（浅黄色軽石含む）
**４層**　：浅黄色軽石（６mm以下の軽石粒）＝桜島３テフラ・桜島文明軽石（15世紀後半、西暦1470年代か）
この層は部分的な堆積状況を示しており、主として中世の遺構埋土上層において認められるが、第１次調査南ブロックの東側では、比較的広い範囲で同軽石が黒色土（５層）上面において筋状に並行して確認された。これはいわゆる小溝状遺構群として把握されるもので、軽石の堆積は１次的なものではなく、撹拌を受けた状態である。
**５a層**：黒色粘質シルト土（明黄褐色軽石ごく少量含む）土質はきめ細か…中世遺物包含層
**５b層**：黒色粘質シルト土（明黄褐色軽石少量含む）土質はややきめ細か…平安時代・中世遺物包含層
**５c層**：黒色弱粘質シルト土（明黄褐色軽石含む）…調査区域北東区の谷地形のみで明瞭、平安時代の遺物包含層
**６a層**：黒色弱粘質シルト土（明黄褐色軽石まんべんなく含む）…弥生時代遺物包含層
**６b層**：黒色弱粘質シルト土（明黄褐色軽石多く含む）ややかたくしまる…縄文時代後・晩期遺物包含層
**７層**　：黒褐色微砂質シルト土（明黄褐色軽石かなり多く含む）かたくしまる…８層を母材として土壌化したもの。
**８層**　：明黄褐色軽石（２cm以下の明黄褐色軽石粒）＝霧島御池テフラ・霧島御池軽石（約4200年前）
**９層**　：黒色弱粘質シルト土（中位に径１mm以下のにぶい黄褐色軽石が点在する）
**10層**　：黒褐色弱粘質シルト土
**11a層**：にぶい黄褐色シルト土…いわゆる２次アカホヤ、11b層を母材として土壌化したもの。
**11b層**：黄橙色微砂質火山灰＝鬼界カルデラ起源の鬼界アカホヤ火山灰（約6300年前）
**11c層**：黄褐色微砂質火山灰の上部と下部に５mm以下の黄色軽石と明黄褐色豆石の層が挟み込んでいる。11ｃ層は11ｂ層に伴う一連の降下テフラである。
**12層**　：黒色（灰色味帯びる）シルト土　かたくしまる
**13層**　：黒褐色弱粘質シルト土（黄色軽石・暗赤褐色スコリア含む）＝13層と14層に濃集する黄色軽石は桜島起源の桜島11テフラ・桜島末吉軽石（約7500年前）で、赤褐色スコリアは霧島古高千穂火山起源の霧島蒲牟田スコリア（約7400年前）である。
**14層**　：暗オリーブ褐色弱粘質シルト土（黄色軽石・暗赤褐色スコリア含む）
**15層**　：黒褐色粘質シルト土（上部に黄色軽石ごく少量含む）調査区北東部の縄文時代早期調査面の上段（低位段丘２面）においてのみ認められた。縄文時代早期遺物包含層
**16層**　：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石少量含む）縄文時代早期遺物包含層
**17層**　：にぶい黄褐色弱粘質シルト（黄色軽石少量含む）
**18層**　：黄褐色微砂質シルト火山灰（明黄褐色軽石少量含む）かたくしまる＝桜島薩摩テフラ（約11000年前）で、調査区域北東部の低位段丘１面ではこのテフラの直下にシルト・粘質土が堆積する。
**19層**　：明黄褐色砂質シルト土（明黄褐色軽石ごく少量含み、下部には径３cm程度の円礫含む）
**20層**　：径５～６cmの砂岩礫と灰白色砂…低位段丘堆積物（いわゆる段丘礫層）

（文責：桒畑光博）




中世竪穴状遺構SA2土層説明

①:黒色粘質シルト土(黄色軽石を含む・軟質)
②:黒色粘質シルト土(黄色軽石を含む・きめ細かなシルト土)
③:黒色微粘質シルト土(黄色軽石を含む)
④:黄色軽石のブロック
⑤:黒色弱粘質シルト土(黄色軽石を含む)
⑥:軟質の⑤

※太線は断面図作成ライン

図6　中央部土層断面図

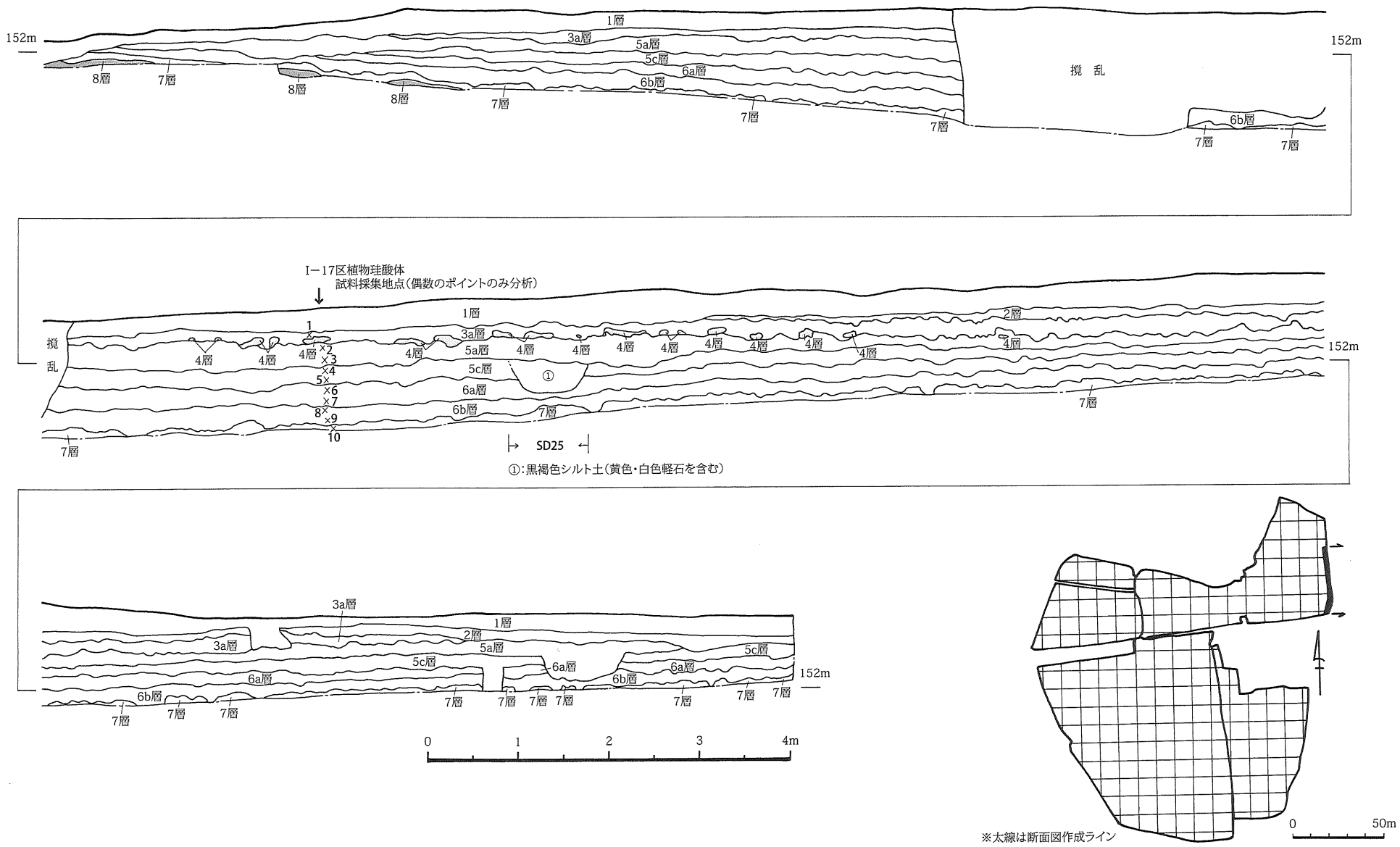



図7　北東区土層断面図（1）

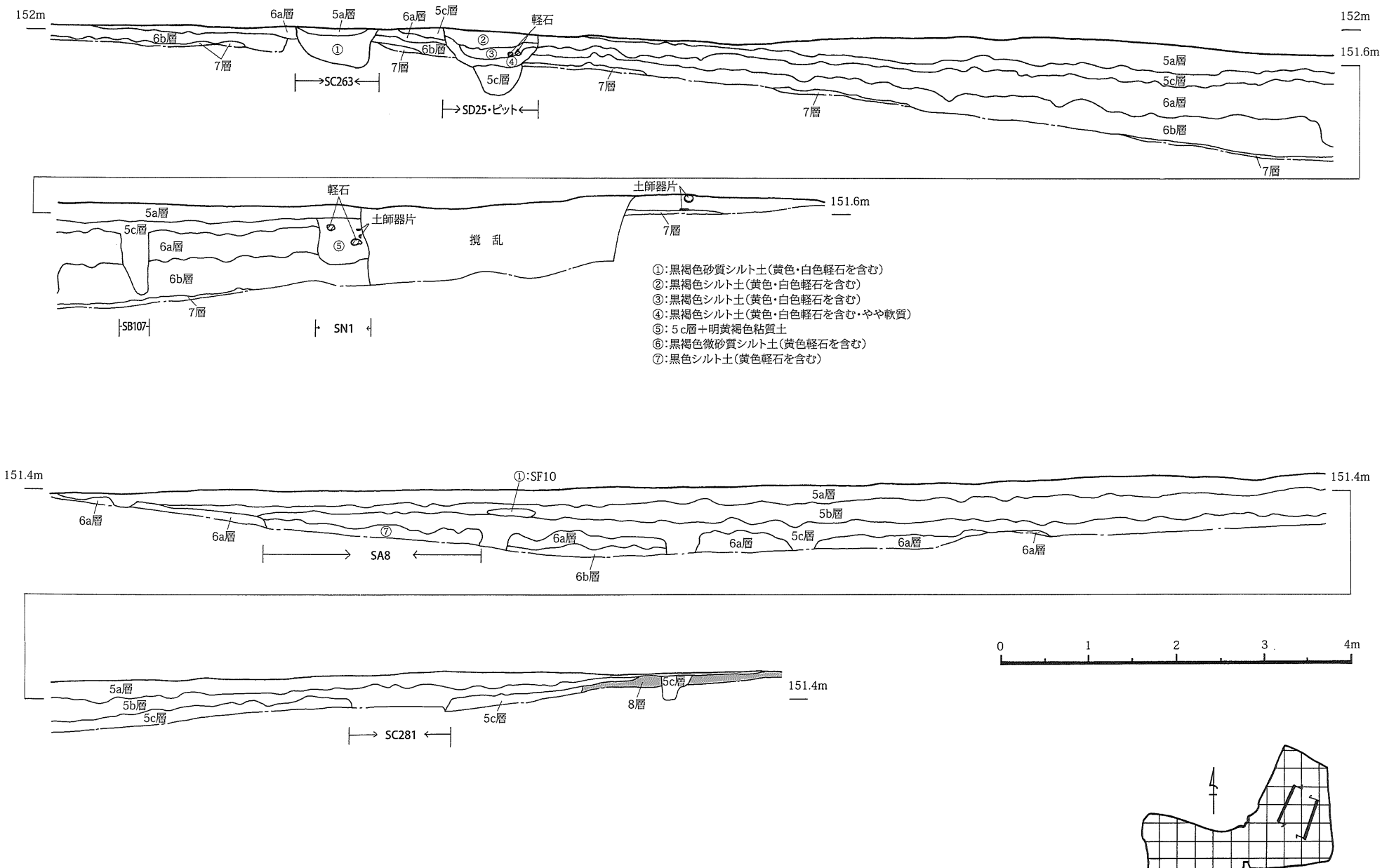
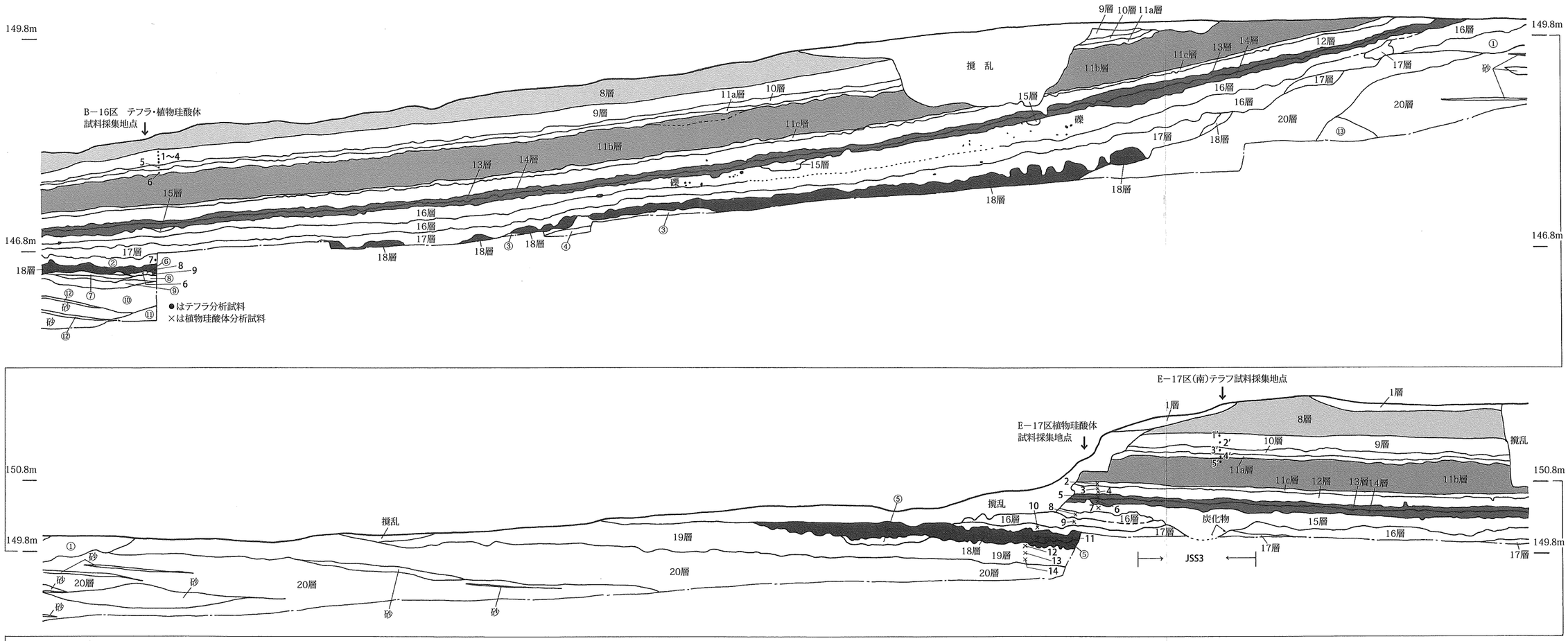
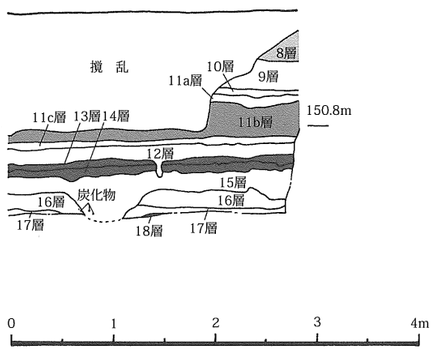
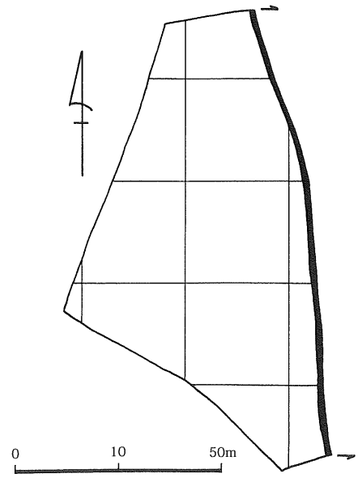



図８　北東区土層断面図（2）



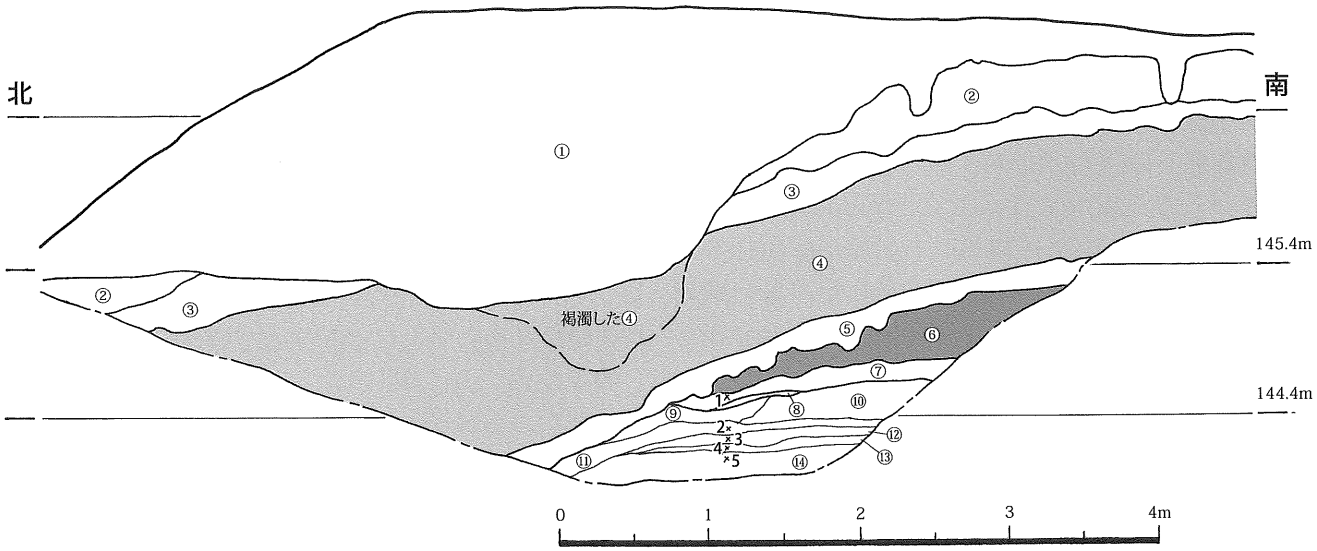



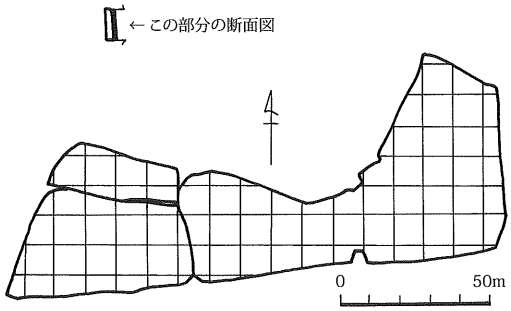

①:明黄褐色砂質シルト土(径　3cm以下の礫を含む)
②:黄橙色微砂質シルト土(黄色・灰色軽石を含む)
③:浅黄色弱粘質シルト土
④:浅黄色粘質土
⑤:黄褐色砂質シルト土(明黄褐色軽石をごく少量含む)＝桜島薩摩テフラ
⑥:黄灰色砂質シルト土(灰白色・黄色軽石を含む)
⑦:にぶい黄褐色粘質土
⑧:にぶい黄橙色粘質土シルト土
⑨:浅黄色粘質土
⑩:灰白色粘質シルト(ラミナ状に堆積)
⑪:灰白色微粘質シルト土
⑫:灰白色シルト土
⑬:黄色砂質土(5cm以下の軽石と礫を含む)




※太線は断面図作成ライン

**図９　北東区縄文時代早期調査地点土層断面図**




**北トレンチ東壁土層**

①:灰色シルト土
②:黒色粘質シルト土(黄色軽石含む)＝5層
③:黒色～黒褐色シルト土(黄色軽石含む)＝6層
④:径2cm以下の淡黄色軽石＝8層(霧島御池軽石)
⑤:暗青灰色粘質シルト土(⑥の小ブロック含む)
⑥:明黄褐色砂質シルト火山灰　最下部に火山豆石・軽石がパッチ状に入る＝11b層(鬼界アカホヤ火山灰)
⑦:灰色粘質シルト土
⑧:黒色粘質シルト土
⑨:暗灰色微砂質シルト土(⑩の小ブロック含む)
⑩:灰白色シルト土(上部と下部が酸化して黄色を呈する)
⑪:灰色粘質シルト土
⑫:灰色粘質シルト土(灰白色軽石含む)
⑬:灰色粘質土
⑭:灰色粘質土

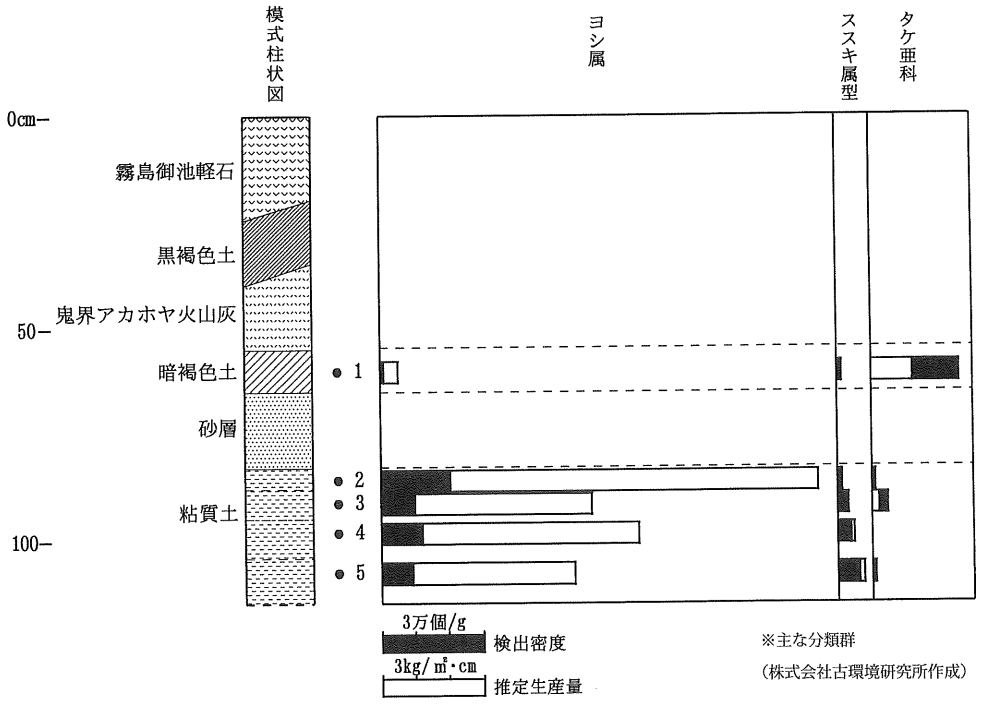



**図10　北トレンチ東壁断面図及び植物珪酸体分析結果**

## 第３節　縄文時代～弥生時代の成果

### １．縄文時代早期の遺構と遺物

#### （１）縄文時代早期の遺構（図 11）

縄文時代早期の遺構は、低位段丘２面（以下、「調査区域上段」とする）においてのみ確認され、低位段丘１面（以下、「調査区域下段」とする）からは検出されなかった。

調査区域の南側であるＥ・Ｆ－16・17 区において、13・14 層（桜島 11 テフラ＝桜島末吉軽石の濃集層）の下位に堆積する 15 層から 16 層上面を掘り下げ時に出てきた散礫を取り上げると、その下から礫の集中するポイントが 10 数箇所確認されたため、それぞれを集石遺構として、JSS という記号に番号を付して精査した。集石遺構の多くは掘り込みを伴うものである。

集石遺構の構成礫は砂岩が過半数を占め、両輝石安山岩ａがこれに続く。集石遺構によっては、これにチャートと両輝石安山岩ｂ（霧島新期熔岩類）が少量加わる。但し、JSS11 と JSS16 は両輝石安山岩ａが構成礫の 50 パーセントを超えており、他と印象が異なる。礫の形状は比較的円磨の進んだ亜円礫の状態のものがほとんどであるが、硬質のチャートだけは角礫状を呈している。砂岩に関しては、大半が被熱のために赤色化し、破砕しているものもある。中には微量の炭化物が付着しているものもあった。砂岩礫の中でも小粒のものについては、より下層の桜島薩摩テフラ（桜島 14 テフラ）の下位に堆積する段丘礫層の礫と区別がつきにくいものもあるが、基本的に砂岩は横市川の川原から採取されたものと思われる。若干見られるチャートも同様であると考えられる。両輝石安山岩ａは丸山・母智丘一帯に産出するので、その方面から持ち込まれたものと思われる。

その他、16 層上面において土坑２基も検出したので、JSC という記号に番号を付して精査した。

**集石遺構**

**JSS1（図 12）**

掘り込みはなく、礫が集中する箇所の径は約 0.65m である。礫の集中度は比較的高いものの、2 ～ 5cm 程度の角礫や円礫といった他の集石遺構に比べて比較的小粒の礫で構成されており、礫間には少量の炭化物が検出されている。15 層と 16 層上部の境界で検出されている。

**JSS2（図 12）**

礫の集中箇所は径 0.8m で、2 ～ 10cm の角礫・円礫で構成されているが集中度は散漫である。検出面から約 13cm の比較的深い掘り込みを有し、礫は掘り込み面レベルで検出された。掘り込みの平面形は直径 0.45 ～ 0.53m のほぼ円形を呈する。掘り込みの埋土は黒色粘質シルト土で黄色軽石粒を含み、炭化物が目立つ。16 層上部に相当する。

**JSS3（図 12）**

礫の集中箇所は長軸 0.9m、短軸 0.6m の楕円状を呈し、掘り込みはない。2 ～ 10cm の角礫・円礫が集まっているが、集中度は散漫である。礫の周辺で少量の炭化物が検出されている。15 層と 16 層上部の境界で検出された。

**JSS4a（図 12）**

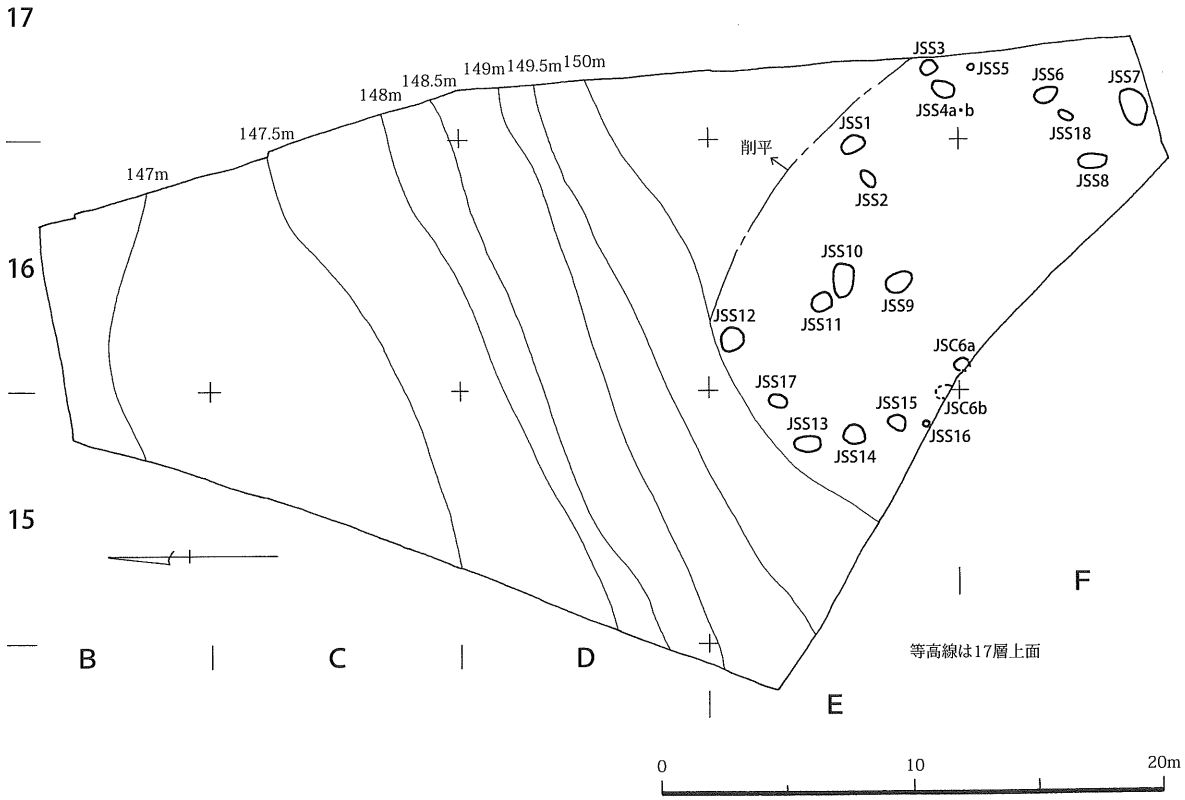
礫の集中箇所の直径は 0.7 ～ 0.8m で、2 ～ 10cm の角礫・円礫が比較的高い集中度で集まっている。掘り込みを有しており、掘り込みの平面形は長軸 0.85m、短軸 0.63m の楕円状を呈する。礫は掘り込み面レベルに集中しているが、一部底面近くで検出されている。掘り込みの埋土は黄色軽石粒を含む黒色粘質シルト土で、15 層に相当する。

**JSS4b（図 12）**

JSS04a の北側に隣接しており、比較的浅い掘り込みを有している。礫の集中箇所の直径は 0.3m で 2 ～ 10cm の角礫・円礫が集まっているが、集中度は散漫である。掘り込みの平面形は直径 0.58m、埋土は黄色軽石粒を含む黒色粘質シルト土で 15 層に相当する。

**JSS5（図 12）**

掘り込みはなく、15 層と 16 層の境界で検出されている。6 ～ 10cm の礫 5 個で構成されている。



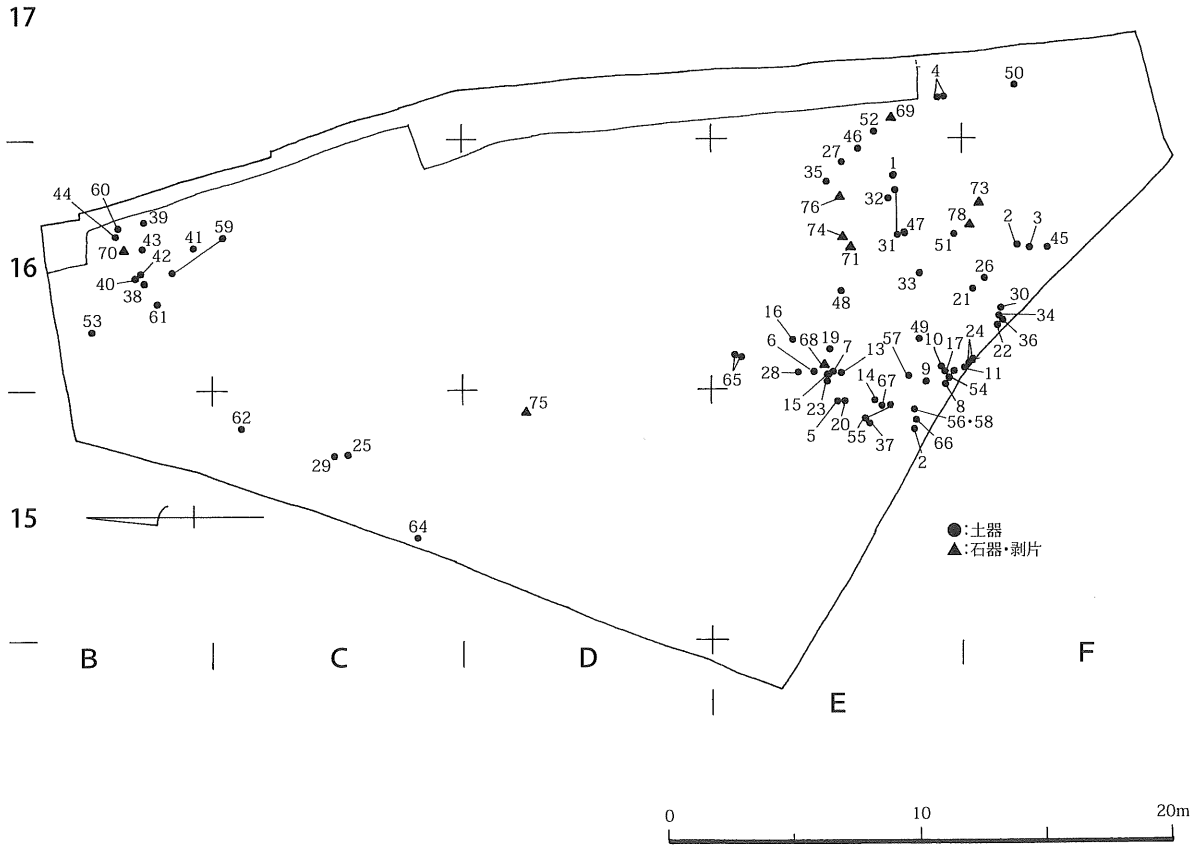




図11　縄文時代早期遺構・遺物分布図

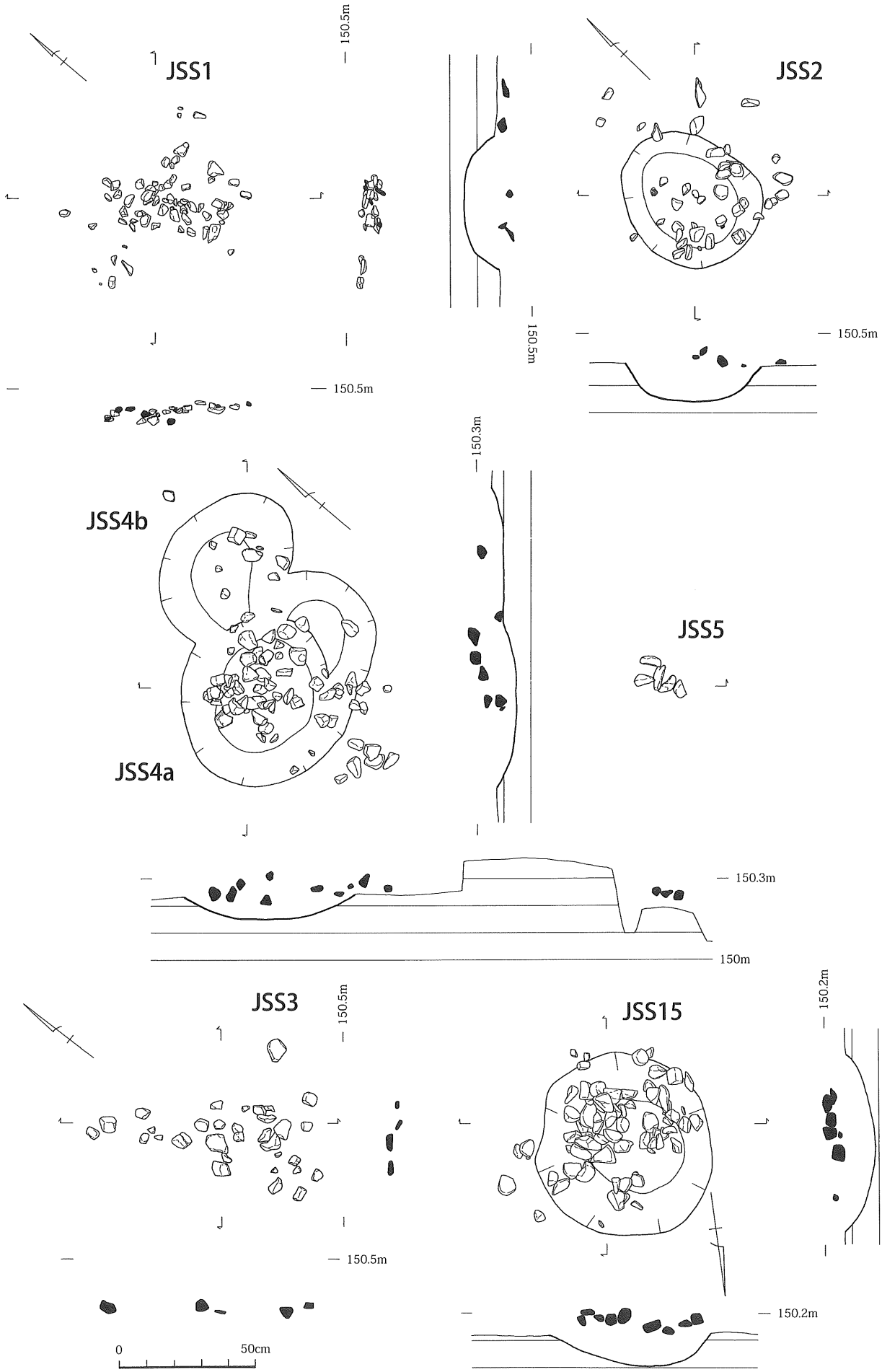



図12　縄文時代早期集石遺構実測図

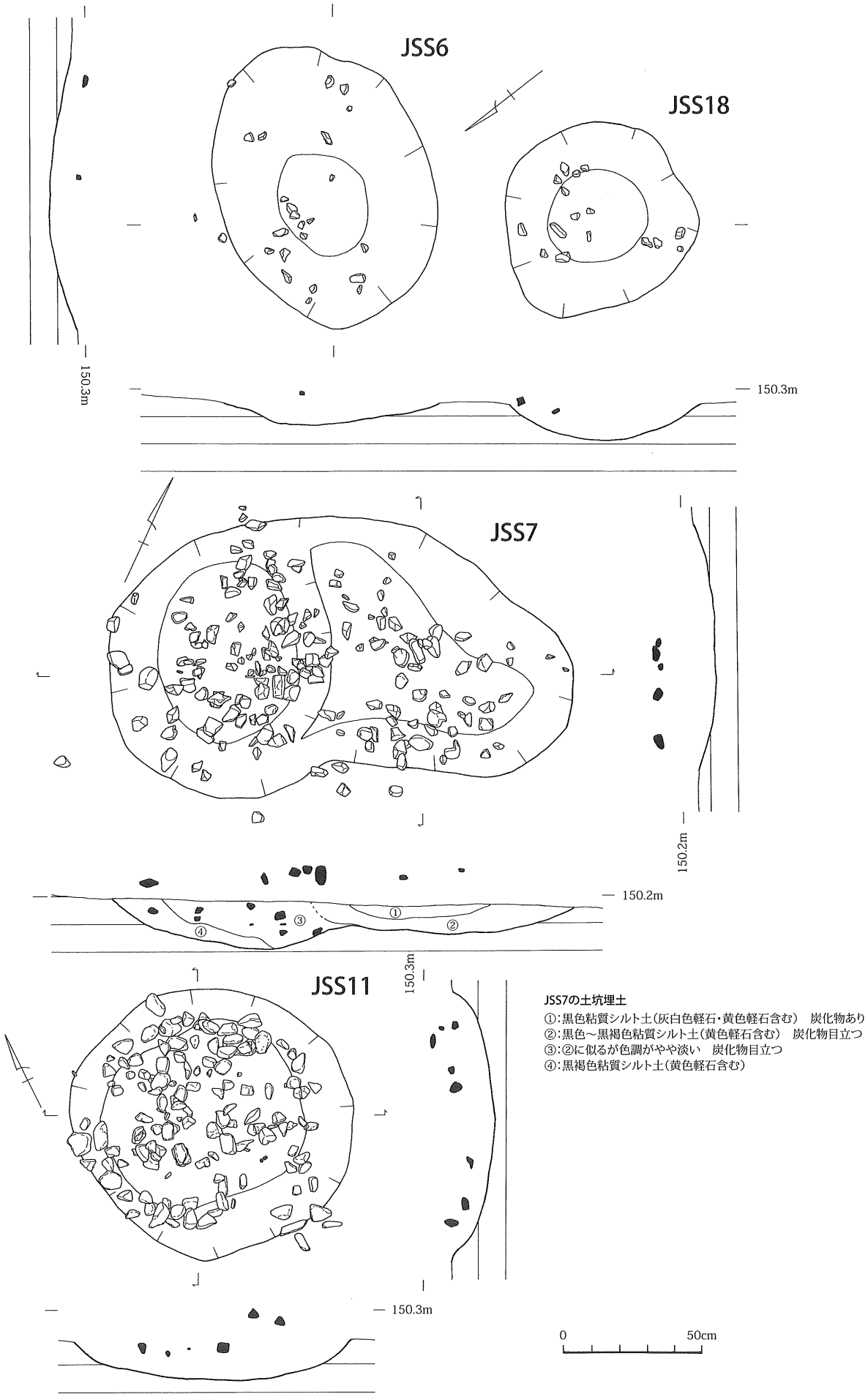



図13　縄文時代早期集石遺構実測図

**JSS6（図 13）**

15 層の掘り下げ時から見えていた散礫をはずした後に、その下から JSS18 と並んで検出された。比較的浅い掘り込みがあり、掘り込みの平面形は長軸約 1.05m、短軸約 0.77m である。礫の集中箇所は長軸約 0.85m、短軸約 0.6m で、2 ～ 10cm の角礫・円礫が集まっているが、集中度はかなり散漫で底面から浮いた状態である。掘り込みの埋土は黄色軽石粒を含む黒色粘質シルト土で、炭化物も散見された。15 層に相当する。

**JSS7（図 13）**

本来は 2 つの集石遺構の切りあいと考えられ、掘り込みを有する。2 ～ 10cm の角礫・円礫で構成され、西側の礫は比較的集中度が高く掘り込み面レベルに集中するが、一部底面近くで検出された。一方、東側の礫は散漫で掘り込み面レベルに集中する。掘り込みの平面形は、長軸約 1.8m 短軸約 0.93m の楕円状で、礫が集中する範囲は長軸約 1.7m、短軸約 1.15m の楕円状を呈している。掘りこみの埋土は、西側が黄色軽石粒を含む黒～黒褐色粘質シルト土、東側は比較的大きめの黄色軽石粒を含む黒色粘質シルト土でいずれも炭化物が目立つ。15 層に相当する。

**JSS8（図 14）**

礫の集中範囲は径約 1.2m で掘り込みを有する。礫は 2 ～ 10cm の円礫・角礫が掘り込み面レベルに集中し、掘り込みの中心部に向かってやや下がっているが、集中度は散漫である。掘り込みの平面形は長軸約 0.98m 短軸約 0.7m の楕円状を呈し、掘り込みの底面は南側へ向かって傾斜している。掘り込みの埋土は、中心部が炭化物の目立つ黄色軽石粒を含んだ黒色粘質シルト土で 15 層に相当し、周辺部は炭化物が散在する黄色軽石粒を含んだ黒褐色粘質シルト土で 16 層に相当する。

**JSS9（図 14）**

検出面より約 16cm の深さの比較的深い掘り込みを有する。礫が集中する箇所の直径は 1 ～ 1.2m で、2 ～ 10cm の角礫・円礫が集まっているが、集中度は散漫である。掘り込みの平面形は長軸 0.95m、短軸 0.82m の不整形で、礫は掘り込み面レベルに集中しているが、一部底面近くで検出されている。掘り込みの埋土は、中心部が黄色軽石粒を含む黒褐色粘質シルト土で、15 層下部に類似しており炭化物が目立つ。また、埋土周辺部は、黄色軽石粒を含むやや暗い黒褐色粘質シルト土で、16 層上部に相当する。

**JSS10（図 15）**

検出面より約 19cm の深さの比較的深い掘り込みを有し、2 ～ 10cm の角礫・円礫が、径 1.4m ～ 1.1m の範囲で掘り込み面レベルに集中している。掘り込みの平面形は長軸約 0.88m、短軸約 0.72m の楕円状を呈している。掘り込みの埋土は、灰白色軽石粒を含む黒褐色～暗褐色粘質シルト土で炭化物を少量含んでおり、16 層に相当すると判断される。

**JSS11（図 13）**

礫が集中する箇所の直径は 0.85m で、2 ～ 10cm の角礫・円礫が比較的集中して集まっている。検出面より約 15cm の深さの比較的深い掘り込みを有し、掘り込みの平面形は長軸 0.95m ～ 1.13m のほぼ円形で、礫は掘り込み面レベルに集中している。掘り込みの埋土は、中心部が比較的大きめの炭化物を含み黄色軽石粒を含む黒味の強い黒色粘質シルト土で、周辺部が黄色軽石粒を含む黒褐色粘質シルト土である。いずれも 15 層に相当する。

**JSS12（図 14）**

礫が集中する箇所の直径は 1.1m で、2 ～ 10cm の角礫・円礫が集まっているが集中度は散漫である。検出面より約 9 cm の深さの浅い掘り込みを有し、掘り込みの平面形は長軸 1.13m 短軸 0.85m の不整形で、埋土は黄色軽石粒を含む黒色粘質シルト土で少量の炭化物を含む。16 層に相当する。

**JSS13（図 15）**

直径約 0.95m の円形の掘り込みを有し、礫の集中範囲は掘り込みの西側に偏っているが、集中度は比較的散漫である。2 ～ 10cm の角礫・円礫のほとんどが掘り込み面に集中し、一部が底面で検出された。掘り込みの埋土は黒色粘質シルト土で黄色軽石粒と白色軽石粒を含んでおり、中心部に炭化物が目立つ。16 層に相当する。

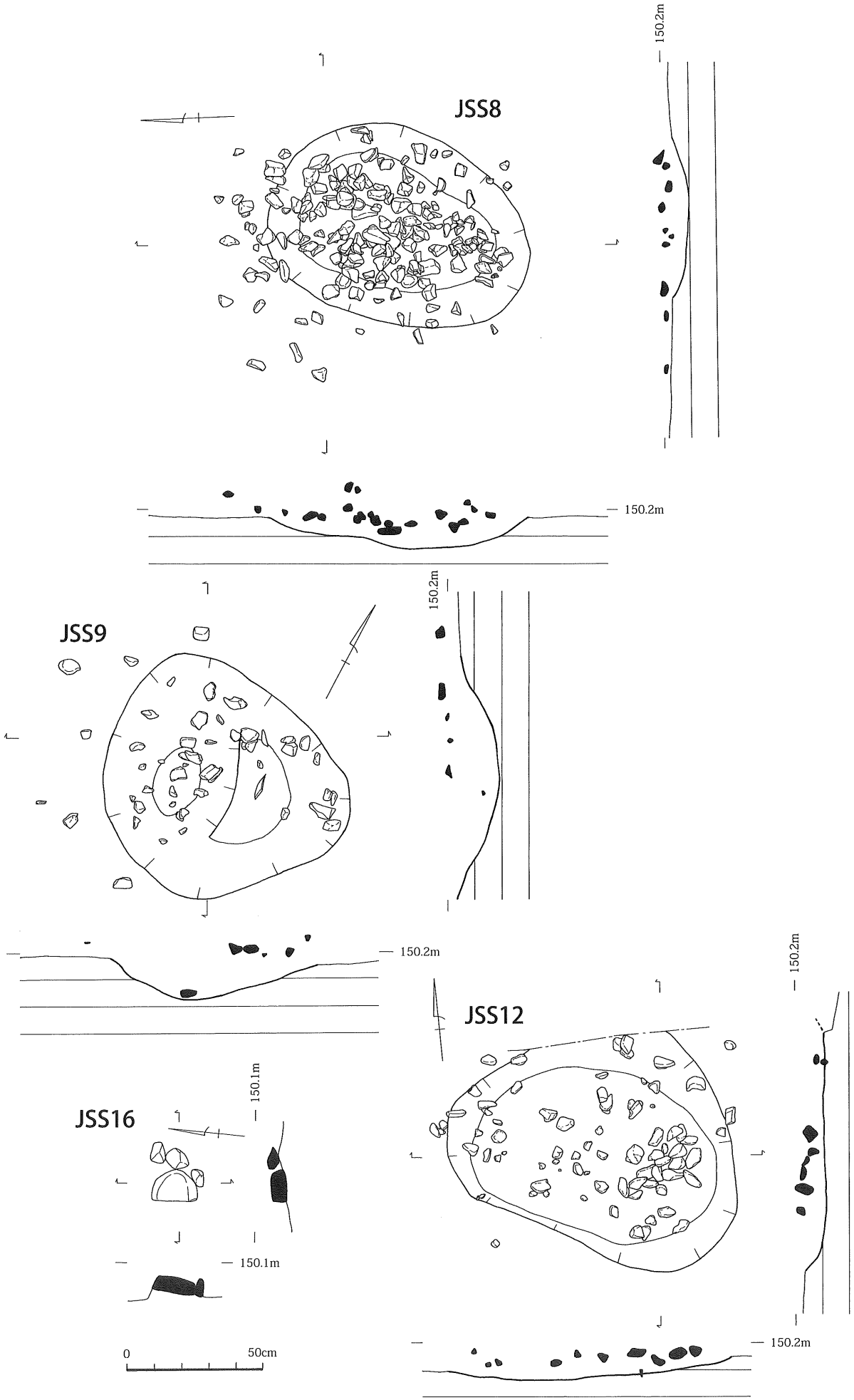



図14　縄文時代早期集石遺構実測図

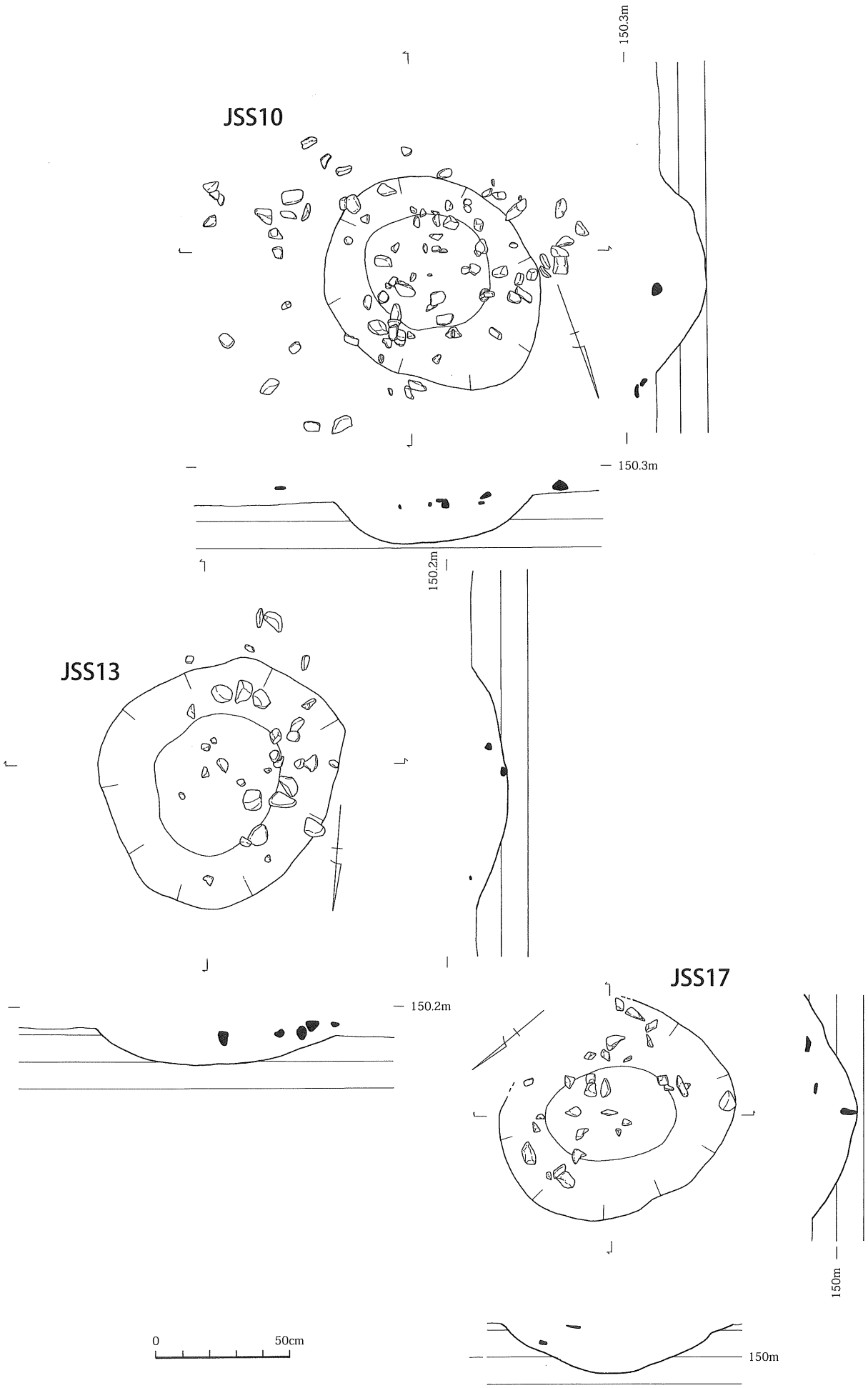



図15　縄文時代早期集石遺構実測図

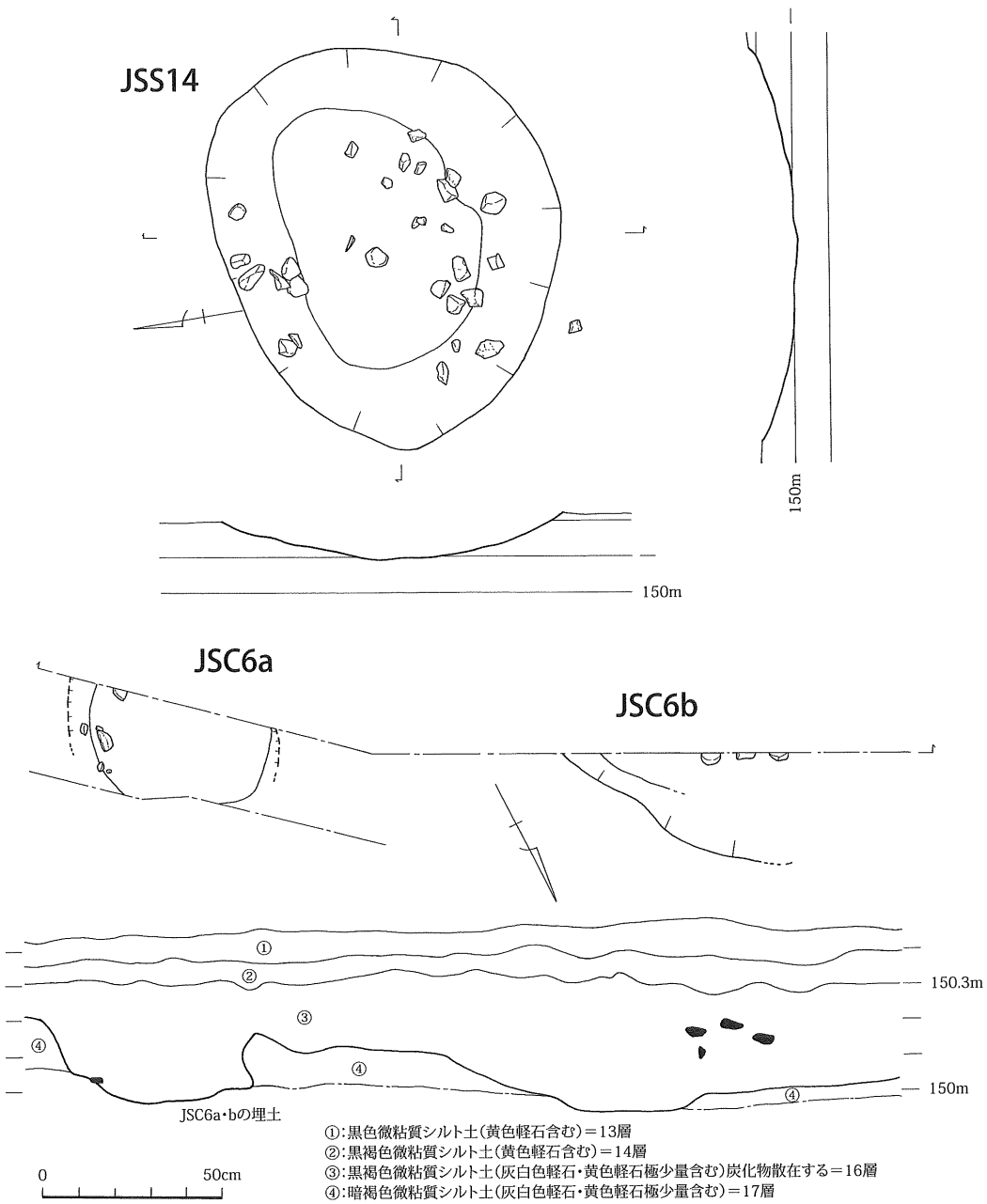



**図16　縄文時代早期集石遺構・土坑実測図**

**JSS14（図 16）**

長軸約 1.14m 短軸約 0.96m の楕円形状の掘り込みを有する。礫の集中範囲は直径約 0.8m で、2 ～ 10cm の角礫・円礫が掘り込み面に集中しているが集中度は散漫である。掘り込みの埋土は黄色軽石粒を含む黒褐色粘質シルト土で、炭化物が散在する。15 層～ 16 層上部に相当する。

**JSS15（図 12）**

直径約 0.65m の円形の掘り込みを有する。2 ～ 10cm の角礫・円礫が径約 0.8m の範囲で掘り込み面に集中しており、こぶし大の礫が多い印象で集中度は比較的高い。掘り込みの埋土は黄色軽石粒を含む黒褐色粘質シルト土で、中心部に炭化物が目立つ。15 層～ 16 層上部に相当する。

**JSS16（図 14）**

安定感のある台石状の礫の東側にこぶし大の礫 3 点が配置された状況で検出された。検出面は、桜島薩摩テフラ（18 層）の直上で検出されており、集石遺構の掘り込み底面の配石と考えられる。

**JSS17（図 15）**

検出面から約 18cm の比較的深い掘り込みを有し、掘り込みの平面形は長軸約 0.86m 短軸約 0.8m

の楕円形状を呈する。礫は2～10cmの角礫・円礫が径約0.75mの範囲で掘り込み面に集中し、一部底面でも検出されたが集中度は散漫である。掘り込みの埋土は黄色軽石粒を含む黒褐色粘質シルト土で、炭化物が目立つ。16層上部に相当する。

**JSS18（図13）**

15層掘り下げ時に見えていた散礫をはずした後、その下から検出されたもので、JSS6aの南東部に隣接する。深さ約14cmの比較的深い掘り込みを有し、掘り込みの平面形は直径約0.75mの円形である。2～10cmの角礫・円礫が径約0.6mの範囲で掘り込み面レベルに集中して検出されたが、集中度は散漫である。掘り込みの埋土は黄色軽石粒を含む黒色粘質シルト土で、炭化物が目立つ。15層に相当する。

**土坑**

**JSC6a（図16）**

調査区域の南端で検出された。調査区域外へ延びており、全体の詳細な形態と規模は不明である。17層を掘り込んでおり、埋土は16層である。土坑の東側の部分に底面近くでこぶし大の礫が5点散在して検出された。

**JSC6b（図16）**

JSC6aの西隣で17層を掘り込む状態で検出されたが、調査区外へ延びるので詳細な形態と規模は不明である。埋土は16層で、土坑西側の埋土の上部でこぶし大の礫4点が確認された。

（文責：寺師雄二）

## （2）縄文時代早期の遺物

**縄文時代早期の土器（図17･18）**

縄文時代早期の土器は、調査区域上段と下段の両方の平坦面において出土しており、両地形面の間の傾斜面からはあまり確認されなかった。基本的に桜島末吉軽石（桜島11テフラ）よりも下位の包含層である15層、16層、及び16層の下部から17層上面から出土しているが、一部、遺構内から検出されたものもある（集石遺構JSS4bから**4**が、集石遺構JSS12から**65**が出土）。全形をうかがうことのできる個体は皆無であるが、すべて深鉢形土器と思われる。文様によって10類に分類した。1・2類が早期前葉、3～9類が早期中葉、10類が早期後葉に位置付けられる。その中で最も多く出土したのは早期中葉の時期のものである。以下、各分類について説明する。

**1類（1）**：調査区域上段において1点のみ確認された。**1**は円筒形ないし角筒形土器の底部である。底部外端部に縦方向の連続する刻みが施されている。早期前半の貝殻文円筒形土器の底部と考えられる。

**2類（2～4）**：貝殻条痕文を基調とするものである。図化したものを含め数点を確認しただけである。調査区域上段のみから出土した。器外面に横ないし斜め方向の浅く丁寧な貝殻条痕が施されている。内面は丁寧なナデにより平滑に調整されている。胎土中に黒色のガラス質鉱物が含まれている。**4**は集石遺構JSS4bから出土した。

**3類（5～24）**：いわゆる辻タイプに該当する。調査区域上段のみから出土した。図示したものは同一個体の可能性がある。口縁部に2枚貝の腹縁による横位の刺突文があり、それより以下は、ヘラ状工具や2枚貝腹縁による羽状の短沈線文と横位の貝殻刺突文が交互に施される。羽状短沈線文の展開方向は縦と横の2とおりがある。底部近くは横位の貝殻刺突文が施されるようである。口縁部は内湾し、器壁は口縁先端に向かってしだいに厚みを増すような形態を呈している。口縁部**5～7**と底部**24**から判断すると、胴部がやや膨らみ口縁部と底部ですぼまる深鉢形に復元される。口唇部にはミガキが施され、内面もナデや比較的乱雑なミガキで調整されているが、大粒の砂粒が横方向に動いた状態が観察されることから、1次調整としてケズリが施された可能性がある。底部外端部と底面にもミガキが施されている。胎土には半透明及び白色の鉱物が目立つが、粒子の小さいキンウンモも含まれている。

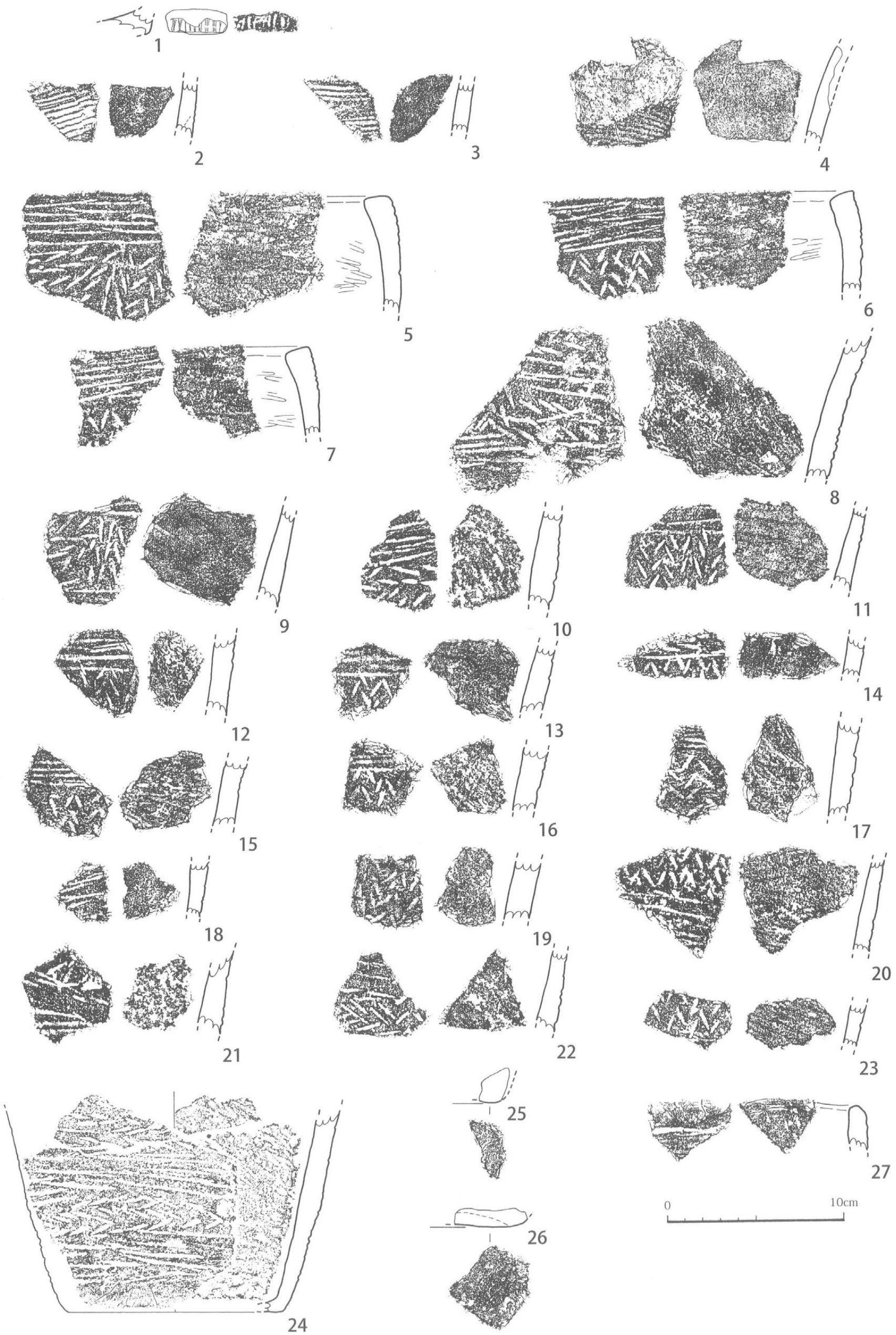



図17　縄文時代早期土器

**4類（25・28～37）**：いわゆる桑ノ丸式土器に類似するものである。出土分布は調査区域上段を中心とするが、2点のみが下段の西側から出土した。図示した口縁部破片と胴部破片は同一個体の可能性がある。口縁部に横方向の2枚貝腹縁ないし櫛歯状施文具による横位の粒の大きい刺突文が施され、胴部以下は、2枚貝の腹縁などを利用した櫛状施文具によって、山形条線文（鋸歯文）が施されている。口縁部は山形口縁になるものと思われ、**28**をみると、その山形頂部の外面には耳状の突起（貼り付け文）があり、その部分には縦位の2枚貝腹縁による刺突文が施されている。口縁部はわずかに内湾するか直立気味に立ち上がる形態を呈する。胴部器壁は口縁部よりも薄く、内面はナデ調整されている。胎土は3類と同じく、半透明及び白色の鉱物が目立ち、粒子の小さいキンウンモも含まれる。おおむね橙色系の色調を呈しているが、**30～33**などは外面が灰色系を呈している。剥落している**25**がこの類の底部と思われるが、文様部分がないため、3類の可能性も捨てきれない。

**5類（27）**：図示した1点のみの出土である。調査区域上段で確認された。口縁部外面に横方向の沈線が2～3条めぐる。口唇部は丸く、口縁部は直立ないし内湾気味に立ち上がる。胎土には白色鉱物が含まれているが、あまり目立たない。

**6類（38～45）**：楕円文の押型文土器を一括した。図示したもの以外に約20点の破片が出土しているが、いずれも小破片ばかりで全形をうかがうことができる資料はなく、時期決定の際の判断材料となる口縁部の破片も出土していない。楕円文の形状から、次に示す2つに細分することができる。

**38～44**は調査区下段東側から出土したものであり、同一個体と考えられる。楕円文は縦・斜め方向に施されている。楕円文は長軸約6mm・短軸約3mmで、その表面は平坦で、楕円文が数珠状に連なる部分も観察される。内面は粗い砂粒が斜め方向に動いた状態が観察されていることから、ケズリ調整が採用されていると思われる。胎土にはキンウンモが含まれ、あまり目立たないが、白色鉱物も認められる。

**45**は調査区上段で出土した平底の底部破片である。横方向に施文される楕円文は正円に近く径約3mmで、表面には膨らみがある。**38～44**と比べると端正である。胎土には白色および半透明鉱物が目立ち、粒子の細かなキンウンモも認められる。

**7類（46～53）**：縄文を施文する土器を一括した。調査区域上段から出土した**46～51**は同一個体の可能性がある。外面に縦方向のＬＲ縄文が施されている。いずれも小破片ばかりで全形をうかがうことができる資料はない。やはり調査区域上段から出土した**52**は外面に無文部が多く、内面に縦方向のケズリ状の調整痕が観察される。胎土には白色及び半透明の鉱物が含まれており、キンウンモも比較的目立っている。色調は赤褐色系を呈し、他の土器と比べると赤みが強い。**53**は調査区域下段から出土した。外面に無節縄文が施されており、胎土にはキンウンモが認められない。

**8類（54～58）**：いわゆる変形撚糸文を施す土器を一括した。調査区域上段から出土した。図示した以外に破片が十数点出土している。**54～58**は同一個体の可能性がある。いずれも小破片ばかりで全形をうかがうことができる資料はない。外面に横方向の変形撚糸文が施され、内面には縦方向の工具ナデが認められる。色調は7類と同じく赤みの強い赤褐色を呈している。

**9類（26・59～64）**：手向山式土器を一括した。**59～64**は調査区域下段から出土した。口縁部を欠いているが、胴部中位に刻目突帯文が2条めぐり、その上に組帯状の沈線文（三角形文）を施し、刻目突帯文以下は縦方向の山形押型文が施されている。内面はナデ調整である。**26**は調査区域上段から出土した底部である。胎土と色調からこの類に含めたが、底面が凸レンズ状に膨らんでいることから、3類や4類の底部となる可能性もある。

**10類（65～67）**：無文部が多くナデ調整の土器を一括した。いずれも調査区域上段から出土した。**65**は付加状縄文が施される。平栫式土器の可能性があるが判然としない。集石遺構JSS12から出土した。**66**は焼成後の円形穿孔が施されている。**67**は丁寧なナデ調整が施される底部であり、弱い上げ底状をなしている。

（文責：桒畑光博）

**縄文時代早期の石器と剥片（図19･20）**

石器も土器と同じく、基本的に15～17層上面で出土しているが、一部、桜島末吉軽石（桜島11テフラ）濃集層の下部である14層から出土したものもある。図化していないが、黒曜石やチャート

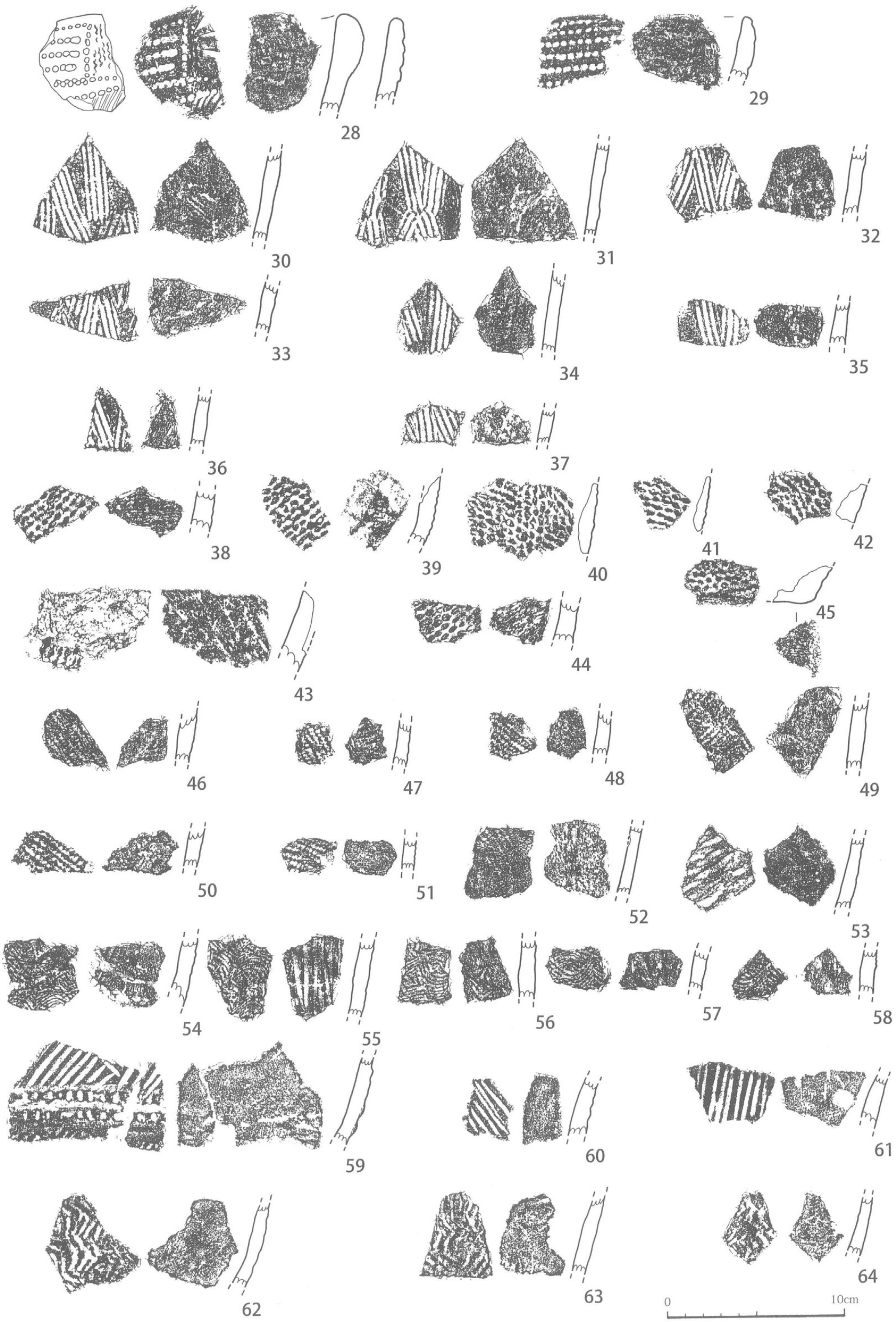



図18　縄文時代早期土器

## 表１　縄文時代早期土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 1 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明 | キザミ |
| 2 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ヨコ条痕 | 丁寧なナデ | 半透明・白色・黒色 | |
| 3 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい橙 | ヨコ条痕 | 丁寧なナデ | 半透明・白色・黒色 | |
| 4 | JSS4、E-17・15層 | 深鉢 | にぶい褐 | にぶい褐 | ヨコ条痕 | 丁寧なヨコナデ | 半透明・白色・黒色 | |
| 5 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ヨコミガキ | 透明・白色・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 6 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ヨコミガキ | 半透明・白色・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 7 | E-16・17上層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 8 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄褐 | ナデ | ケズリ→ナナメミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 9 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナナメミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 10 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナナメミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 11 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | 灰黄褐 | ナデ | ナナメ・ヨコミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 12 | E-15・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナナメ・ヨコミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 13 | E-16・14層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナナメミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 14 | E-15・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 15 | E-16・17上層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナナメ・ヨコミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 16 | E-16・15層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ケズリ→ミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 17 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | 褐灰 | ナデ | ナナメミガキ | 白色・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 18 | E-16・13～14層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 19 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 20 | E-15・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | 磨耗 | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 21 | F-16・14層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | 磨耗 | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 22 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄褐 | ナデ | ナナメミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 23 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナナメミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 短沈線 |
| 24 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ケズリ→ナナメミガキ | 白色・キンウンモ | 短沈線・刺突 |
| 25 | C-15・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | 剥落 | 白色・半透明・キンウンモ | |
| 26 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい褐 | ナデ | 剥落 | 透明・黒色 | |
| 27 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ミガキ状ナデ | 半透明・白色 | |
| 28 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 刺突・条痕 |
| 29 | C-15・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 刺突 |
| 30 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 条痕 |
| 31 | E-16・16層 | 深鉢 | 暗灰黄～黄灰 | にぶい黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 条痕 |
| 32 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄褐 | 褐灰 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 条痕 |
| 33 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 条痕 |
| 34 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 条痕 |
| 35 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 条痕 |
| 36 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | 灰黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 条痕 |
| 37 | E-15・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | 条痕 |
| 38 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | — | ケズリ状ナデ | 白色・赤色・キンウンモ | 楕円押型文 |
| 39 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | — | ケズリ状ナデ | 白色・キンウンモ | 楕円押型文 |
| 40 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | — | — | 剥落 | 白色・透明・キンウンモ | 楕円押型文 |
| 41 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | — | — | 剥落 | 白色・透明・キンウンモ | 楕円押型文 |
| 42 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | — | — | 剥落 | 白色・透明・赤色・キンウンモ | 楕円押型文 |
| 43 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | — | ケズリ状ナデ | 白色・透明・キンウンモ | 楕円押型文 |
| 44 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | — | ケズリ状ナデ | 白色・透明・赤色・キンウンモ | 楕円押型文 |
| 45 | F-16・16層 | 深鉢 | にぶい黄橙 | — | — | 剥落 | 白色・半透明・キンウンモ | 楕円押型文 |
| 46 | E-16・15層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい橙 | — | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | タテ縄文（LR） |
| 47 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい橙 | — | ヨコナデ | 白色・半透明・キンウンモ | タテ縄文（LR） |
| 48 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい橙 | — | 丁寧なナデ | 白色・半透明・キンウンモ | タテ縄文（LR） |
| 49 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい褐 | — | ヨコナデ | 白色・半透明 | ヨコ縄文（LR） |
| 50 | F-17・16層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | — | ナデ | 白色・半透明・キンウンモ | タテ縄文（LR） |
| 51 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | — | 丁寧なナデ | 白色・半透明・キンウンモ | タテ縄文（LR） |
| 52 | E-17・16層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | — | ケズリ状ナデ | 白色・透明・キンウンモ | タテ縄文（LR） |
| 53 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい褐 | 褐灰 | — | ナナメナデ | 透明 | 無節縄文 |
| 54 | E-16・16層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | — | タテ工具ナデ | 透明・半透明 | 変形撚糸文 |
| 55 | E-15・15層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | — | タテ工具ナデ | 透明・半透明 | 変形撚糸文 |
| 56 | E-15・15層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | — | タテ工具ナデ | 透明・半透明 | 変形撚糸文 |
| 57 | E-15・15層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | 黒褐 | — | タテミガキ | 透明・半透明 | 変形撚糸文 |
| 58 | E-16・15層 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | — | ナデ | 透明・半透明 | 変形撚糸文 |
| 59 | B-16、C-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | — | ナデ | 黒色ガラス質・赤色・白色・透明 | 沈線・突帯 |
| 60 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい褐 | — | タテナデ | 赤色・白色 | 斜行沈線 |
| 61 | B-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | 橙 | — | ナデ | 赤色 | 斜行沈線 |
| 62 | C-15・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | — | ナデ | 黒色ガラス質・透明 | 山形押型文 |
| 63 | B-15・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | — | ナデ | 黒色ガラス質・透明 | 山形押型文 |
| 64 | C-15・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | — | ナデ | 黒色ガラス質・透明 | 山形押型文 |
| 65 | JSS12、E-16・16層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | — | ナデ・ユビオサエ | 透明 | 付加条縄文 |
| 66 | E-15・14層 | 深鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | 丁寧なナデ | 白色・透明 | |
| 67 | E-15・16下層 | 深鉢 | 橙 | にぶい橙 | 丁寧なナデ | ナデ | 白色・透明 | |

のチップも出土している。

**68 ～ 70** は打製石鏃である。**68** は基部のえぐりが深く、比較的長い形状である。チャート製である。1.2g。**69** は基部に小さいえぐりが入る。灰色を呈するチャート製と思われる石材を利用している。0.8g。**70** は基部に浅いえぐりが入り、三角形状を呈する。チャート製である。0.8g。**71** は剥片石器の未製品と思われる。やや透明度があり、不純物も多い黒曜石製である。2.6g。**72 ～ 76** は加工痕のある剥片である。**72**（24.2g）・**73**（6.3g）・**74**（3.8g）も黒味が強く純度の高い黒曜石である。**75** は黒曜石の原石面を多く残している。やや透明度があり、不純物も多く、光に透かしてみると縞状の模様が見える。4.8g。**76** は乳白色に灰色がまだら状に混じりあう黒曜石である。いわゆる姫島産の黒曜石と思われる。5.0g。**77** は楔形石器と思われる。黒味の強いチャート製である。7.3g。**78** は実測図下縁に刃部を作り出しており、不定形のスクレイパーと考えられる。黒味強いチャート製である。11.4g。

（文責：桒畑光博）

## 2. 縄文時代前～中期の遺構（図 21）

縄文時代早期面の調査を実施するために、霧島御池軽石層と鬼界アカホヤ火山灰層を重機で掘り下げている際に、低位段丘 1 面（調査区域下段）の C － 16 区で、霧島御池軽石よりも下の鬼界アカホヤ火山灰上面において隅丸方形プランの落ち込みが認められた。その部分を鬼界アカホヤ火山灰上面で精査した結果、この落ち込みは縄文時代前～中期の間に掘り込まれたもので、規模等から考えて、いわゆる落とし穴状遺構（JSC5）に該当する可能性が高まった。そこで、通常の調査方法はとらず、遺構内堆積土を残したまま、長軸方向にスライスしていき、そのつど写真撮影と土層断面図を作成するというやり方をとることにした。その結果、底面の杭ピット 8 基を捉えることに成功し、規模は長軸（南北）1.19m、短軸（東西）0.91m、深さ 0.78m であることが判明した。土坑内の堆積状況は、黒色系土と褐色系土が交互に堆積しており、中間に鬼界アカホヤ火山灰 2 次堆積の塊が混じり、土坑底面近くの壁際にも同火山灰が多く混じっていた。土坑底面の杭ピットの配置は、中央に 1 基、東壁に沿って 3 基、西壁に沿って 2 基、北壁と南壁に沿って 1 基ずつである。ピットの直径は 3 ～ 5cm、深さ 27 ～ 40cm である。また、ピット内部の土壌は概して軟弱であり、杭（木質等）が腐食した後に入り込んだものと考えられる。

（文責：桒畑光博）

## 3. 縄文時代後～晩期の遺構と遺物

### （1）縄文時代後～晩期の遺構（図 22）

縄文時代後・晩期の遺構としては、竪穴状の土坑 2 基（JSC1・4）と円形プランの土坑 2 基（JSC2・3）を確認した。その他、明確な掘り込みプランは確認できなかったが、U － 14 区の 7 層上面において石製土掘り具 1 点（**857**）が横倒しの状態で出土したが、これは埋納遺構の可能性がある。

**JSC1** は、P － 10 区で検出された竪穴状遺構である。平面形は 1 辺が 2.3 ～ 2.5m の方形プランを基調とするが、南東部が張り出している。検出面からの深さは約 12cm である。7 層を掘り込んでおり、埋土は黄色軽石を含む黒色シルト土（6 層下部相当）である。竪穴内部の東側埋土中から縄文時代後期の深鉢形土器片（**91**）が出土した。また、竪穴東側周辺で同時期と思われる土器の破片（うち一部は同一個体）が出土した他、両輝石安山岩 a の打製石器片（**859**）が出土した。

**JSC2** は、JSC1 の北西側で検出された。平面形は径約 0.7m の円形プランである。南側を中世のピットに切られる。検出面からの深さは約 0.1m であり、埋土は黄色軽石を含む黒色シルト土（6 層下部相当）である。

**JSC3** は JSC1 の南側で検出された。平面形は径約 1m の円形プランである。検出面からの深さは約 0.1m であり、埋土は黄色軽石を含む黒色シルト土（6 層下部相当）である。

**JSC4** は M － 11 区で検出されたが、西側は後世（おそらく中世）の削平のため失われている。平面プランは推定で 1 辺が約 2.7m の隅丸方形を呈する。7 層を掘り込んでいるが、深さは検出面から約 5cm の非常に浅い竪穴状遺構であるが、中世の土坑（SC287）に切られる。埋土は黒色粘質シルト土で黄色軽石含み、6 層よりやや黒味が強く、6 層下部に相当するものと思われる。（文責：桒畑光博）

図19　縄文時代早期土器

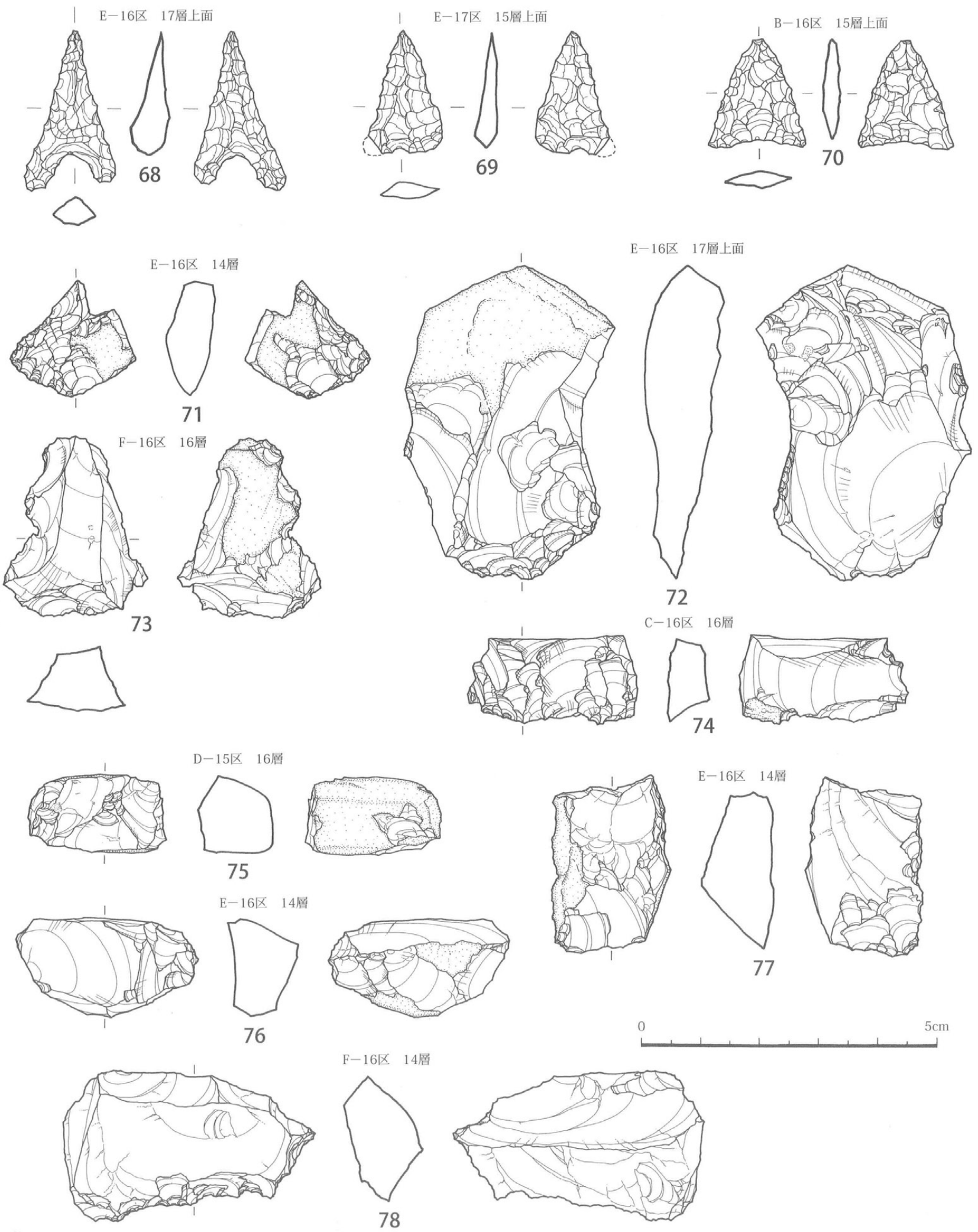
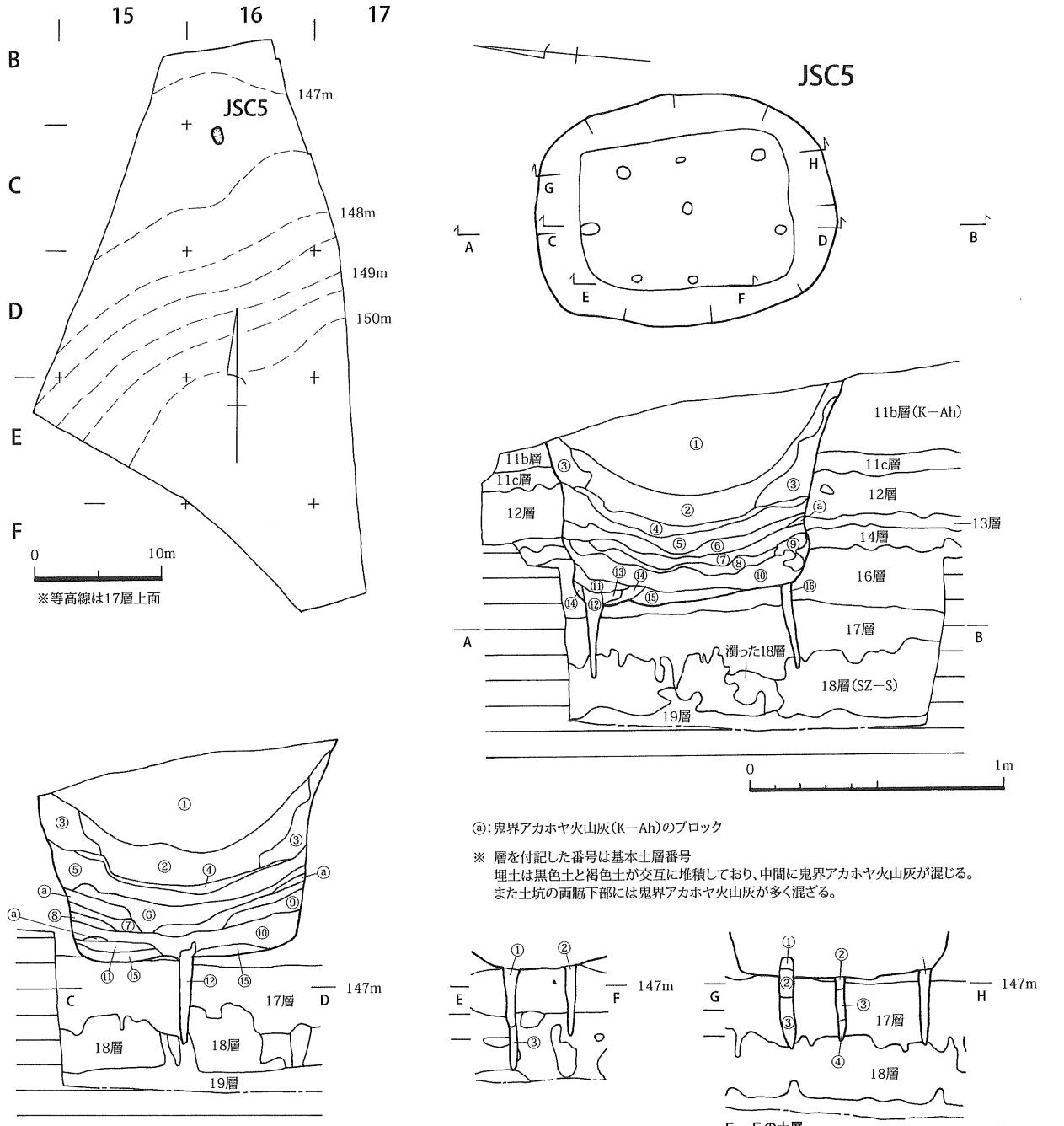



図20　縄文時代早期石器




A－B, C－Dの土層
①:黒色弱粘質土(褐色軽石含む)
②:黒褐色弱粘質シルト土＋鬼界アカホヤ火山灰
③:褐色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
④:黒色弱粘質土　軟弱
⑤:黒褐色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
⑥:黒色弱粘質土　軟質
⑦:黒褐色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
⑧:オリーブ褐色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
⑨:ⓐと同じ。鬼界アカホヤ火山灰ブロック
⑩:黒色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
⑪:オリーブ褐色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
⑫:黒色シルト土　軟弱
⑬:⑫に鬼界アカホヤ火山灰粒が混じる
⑭:黒色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
⑮:暗オリーブ褐色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
⑯:黒褐色シルト土(褐色軽石含む)

E－Fの土層
①:黄灰色シルト土　すき間があいてポロポロしている
②:黄灰色粘質シルト土　しまっている
③:軟質化した18層
G－Hの土層
①:黒褐色弱粘質シルト土(鬼界アカホヤ火山灰粒含む)
②:黒色シルト土　軟質でフワフワしている
③:黒色弱粘質シルト土(黄褐色軽石含む)　軟質でポロポロしている
④:軟質化した17層

**図21　落とし穴状遺構（JSC5）分布・実測図**

## （2）縄文時代後～晩期の土器（図 23･24）

縄文時代後～晩期の土器は、基本的に霧島御池軽石（8 層）の上位に堆積する 7 層（黒褐色土）の上部から 6 b 層（黒色土）にかけて出土したが、より上位に堆積する 6 a 層や 5 層や弥生時代の遺構埋土中からも出土している。以下、型式ごとに説明を加えていく。

**79・80** は西平式の深鉢形土器である。胴部には縄文が施文されたのちに横位の沈線文が施されており、頸部には刺突文がみられる。胎土には粒子の細かいキンウンモが含まれる。**79** は内面にきわめて丁寧なミガキが施されている。

**81～83** は凹線文を主文様とする三万田式土器と考えられる。深鉢形の可能性がある **81・83** は同一個体の可能性がある。全体に黒褐色を呈し、器面は内外面ともに丁寧なミガキが施されている。口縁部に

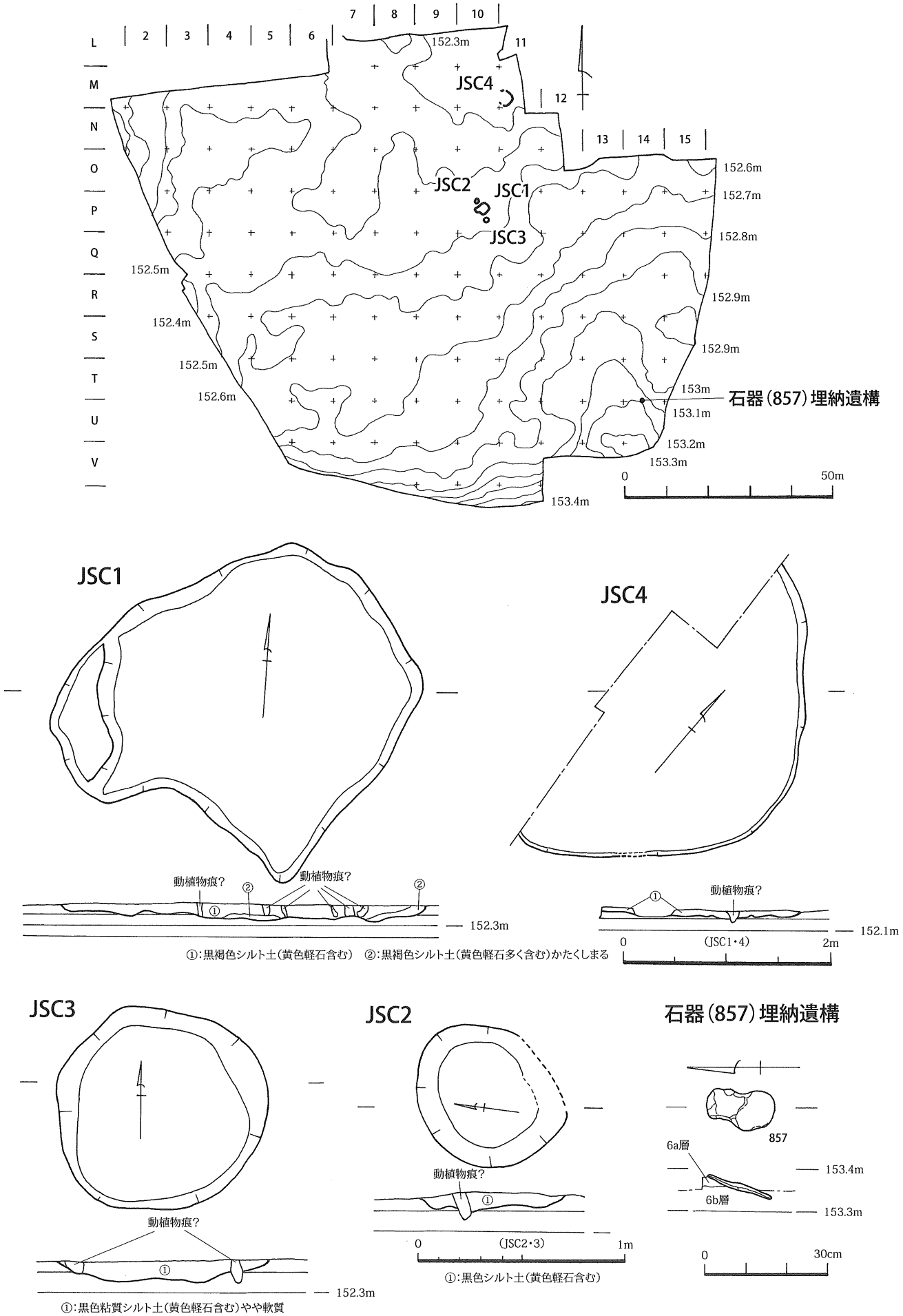



図22　縄文時代後・晩期遺構分布・実測図

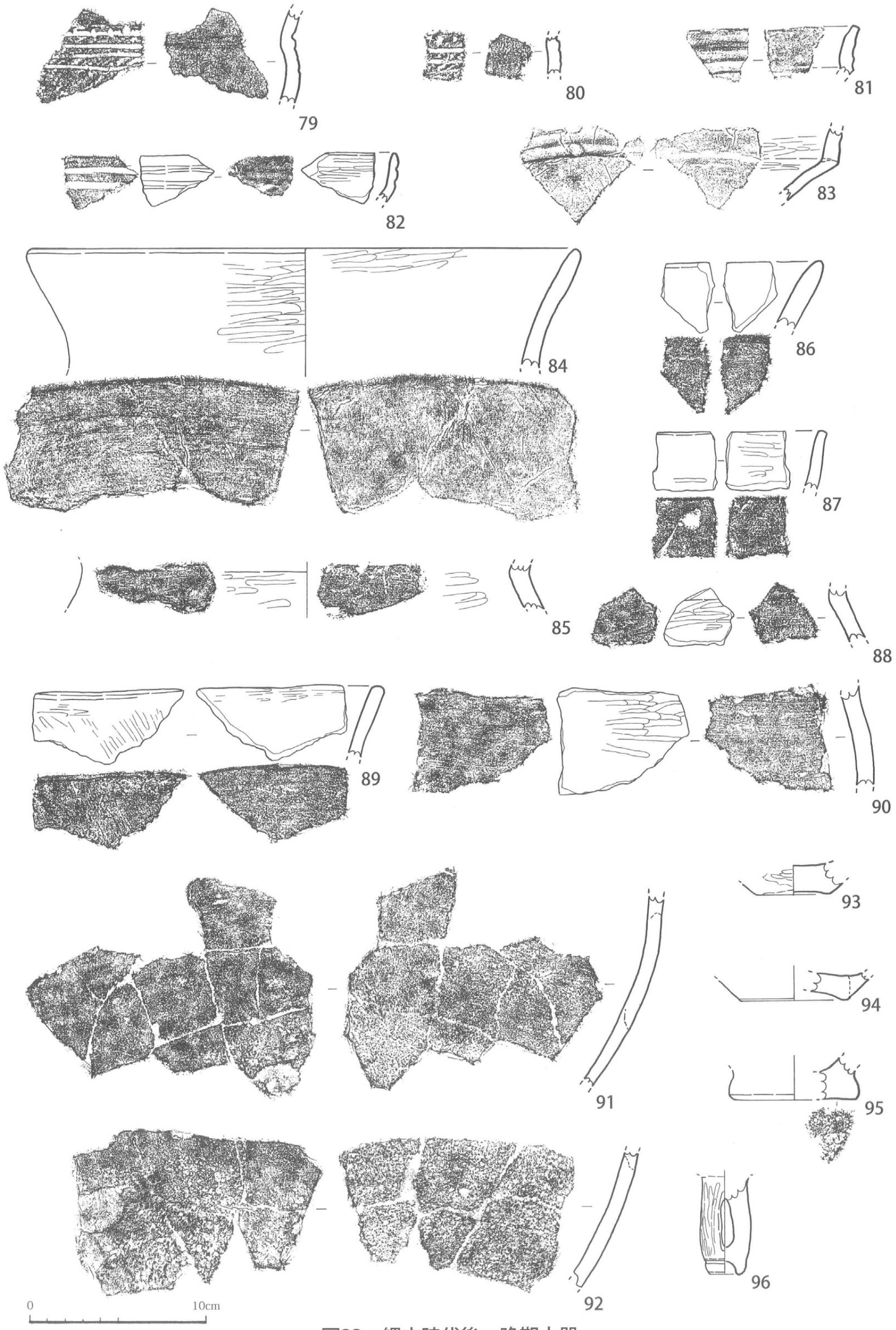



図23　縄文時代後・晩期土器

施されている凹線文は３条と思われるが、**83** には凹点文も付加されている。**82** は浅鉢形の可能性がある。口縁部外面に沈線文が２条めぐる。色調は明るめの赤褐色系を呈し、**81・83** とは異なっている。器面調整は丁寧なミガキである。**96** はこの時期の高坏形土器の脚部と考えられる。中位がエンタシス状に膨らみ、楕円形の透かしが入る。外面は縦方向のミガキが施され、黒褐色を呈する。底部の下端に沈線文がめぐる。

**84 ～ 92** は、器面に文様をもたないもので、口縁部が外反・外傾し、頸部でくびれて、胴部が膨らむ器形の深鉢形土器であると考えられる。後述する中岳Ⅱ式系の無文土器の可能性がある。色調は、黒褐色の **89** を除くと、おおむね橙色系である。器面調整はミガキがナデを基本とするが、ミガキの手法は、前述した西平式や三万田式と比べるとやや雑な印象を受ける。口唇部の形状に注目すると、口縁端部が舌状になるもの（**84・86**）と平坦に面取りするもの（**87・89**）の２者がある。Ｐ－10区から出土した **84 ～ 86・88・90 ～ 92** は同一個体の可能性があり、上げ底状の **94** はその底部の可能性がある。**91** の一部の破片は竪穴状遺構 JSC1 の埋土中から出土し、その周辺から出土した土器片と接合した。付近からは両輝石安山岩を加工した石製土掘り具とみられる剥片石器（**859**）も見つかっている。**92** の下端は粘土帯の接合部ではずれているが、その剥離面にススが付着している。また **94** も底部内面の剥離面にススが観察される。**89** の口縁部外面には縦方向のミガキが施されている。

**97 ～ 100** は中岳Ⅱ式の深鉢形土器である。肥厚した口縁部外面と屈曲する胴部外面に凹線文や沈線文をめぐらせるもので、凹点文を付加するもの（**99**）も見られる。外面の一部にミガキが観察される。赤みかかる橙色系を呈し、胎土には白色や半透明の比較的大きめの砂粒が認められる。**93** はこのタイプの土器の底部と考えられる。底部下端が張り出す **95** は胎土からこのタイプの底部と考えているが、黒川式以降の深鉢形土器の底部である可能性もある。

**101** は口縁部が段をなし、胴部で屈曲する器形の深鉢形土器である。文様は認められず、外面には比較的乱雑なミガキが施されている。全体に赤褐色を呈し、胎土には比較的大きめの砂粒を含んでいる点で、先述した中岳Ⅱ式に類似している。同時期かより後出するものであろうか。

**102** は口縁部先端と胴部下半を欠いているが、口縁部が外反し、胴部が屈折する形状から、黒川式土器の深鉢形土器と判断した。外面の調整痕は一見貝殻条痕風に見えるが、細かい擦過痕が観察されることから、繊維束状のもので調整されているものと考えられる。

**103 ～ 105** は黒川式の浅鉢形土器である。頸部から短く立ち上がる口縁部内面に沈線文が１条めぐり（**103・104**）、胴部は極端に膨らむ。器壁は入念なミガキによって均質に整えられている。

**106 ～ 109** は胴部から底部にかけての破片である。外面にアンギン圧痕が観察される。全形を復元することはできないが、鉢形と考えられる。全体に浅黄色系の明るめの色調を呈する。　（文責：桒畑光博）

## 4. 弥生時代中期の遺構

### （１）竪穴住居跡

#### 竪穴住居跡

竪穴住居跡は弥生時代中期に属すると考えられるものが 38 軒（**YSA1・3・4・5・6・7・8・9・**

**表２　縄文時代後・晩期土器観察表**

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 79 | R-15・6層 | 深鉢 | 黒褐 | 黒褐 | ナデ | 丁寧なミガキ | 白色・半透明・キンウンモ | 縄文→沈線 |
| 80 | R-14・5b層 | 深鉢 | 灰黄 | 暗灰黄 | ナデ | ミガキ | 白色・キンウンモ | 縄文→沈線 |
| 81 | W-9・7層 | 深鉢 | 黒褐 | 黒褐 | ミガキ | 丁寧なミガキ | 白色・半透明 | |
| 82 | G-15・6b層 | 深鉢 | 明赤褐 | にぶい赤褐 | ナデ | 丁寧なミガキ | 黒色・白色 | |
| 83 | W-9・7層 | 深鉢 | 黒（煤付着） | 黄灰 | ミガキ・ナデ | ミガキ | 白色・半透明 | |
| 84 | P-10・7層 | 深鉢 | 明赤褐（煤付着） | にぶい褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・黒色・透明 | 口径 32cm |
| 85 | P-10・6b層 | 深鉢 | にぶい褐 | にぶい黄褐 | ミガキ | ミガキ | 黒色・赤色・透明 | |

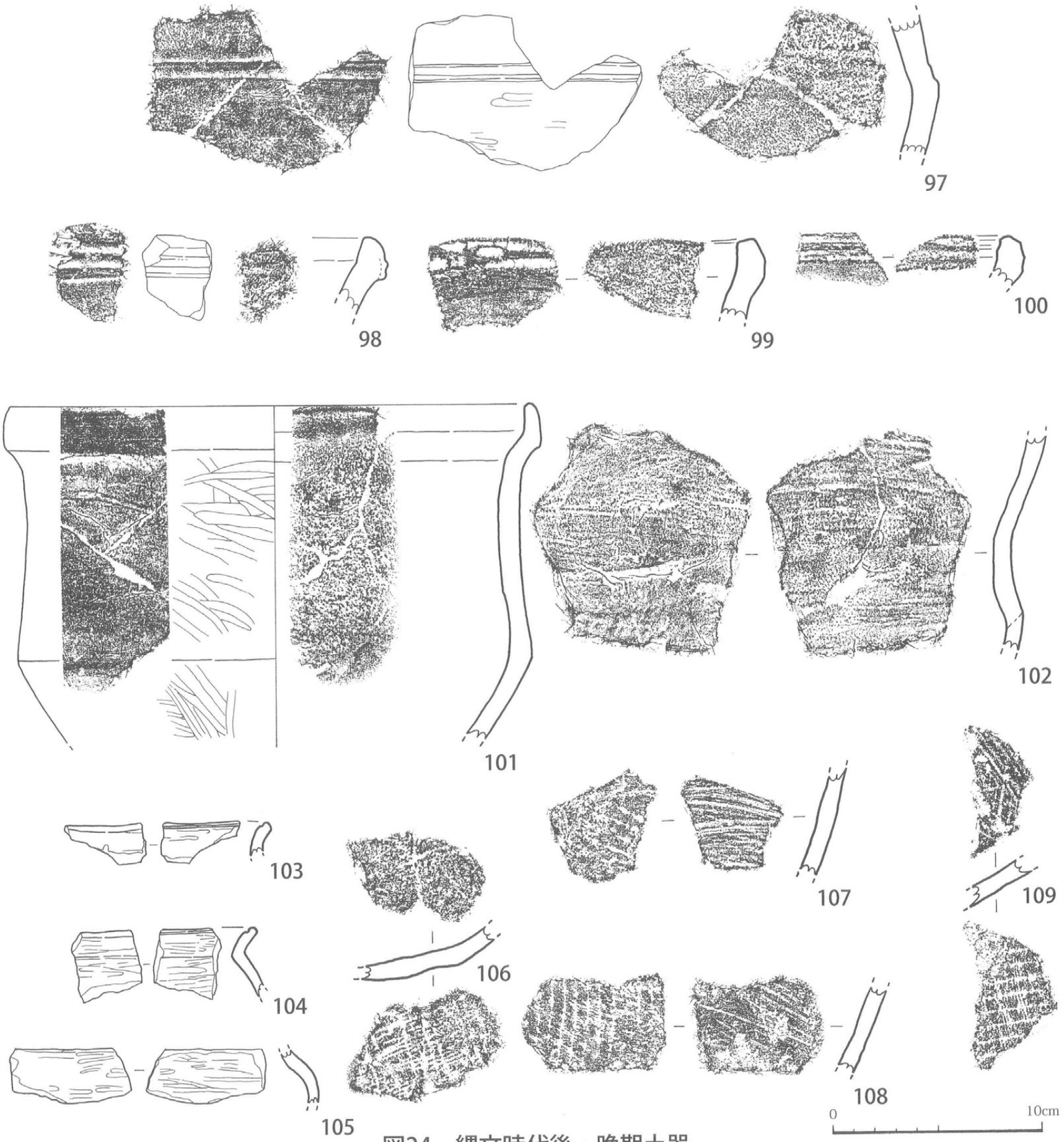



図24　縄文時代後・晩期土器

## 表３　縄文時代後・晩期土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 86 | H-15・5c層 | 深鉢 | 橙 | 橙～黄灰 | ナデ | ナデ | 黒色・透明 | |
| 87 | P-10・6層 | 深鉢 | にぶい褐 | にぶい橙 | ミガキ | ミガキ | 黒色・赤色・透明 | |
| 88 | P-10・6層 | 深鉢 | にぶい褐（煤付着） | にぶい黄褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・黒色・透明 | |
| 89 | N-10・6層 | 深鉢 | 黒褐（煤付着） | 黒～褐 | ミガキ | ミガキ・ナデ | 白色・黒色・透明 | |
| 90 | P-10・6層 | 深鉢 | にぶい褐 | にぶい褐 | ミガキ | 丁寧なナデ | 白色・黒色・赤色・透明 | |
| 91 | P-10・6b層、P-10・7層、P-10・6b層 JSC1 | 深鉢 | 明赤褐 | にぶい黄褐（煤付着） | 丁寧なナデ・ミガキ | ナデ | 白色・黒色・赤色・透明 | |
| 92 | P-10・6b層、P-10・6b層 | 深鉢 | 明赤褐 | にぶい黄褐（煤付着） | ミガキ | ナデ | 白色・黒色・透明 | |
| 93 | Y-11・6層 | 深鉢 | 橙 | にぶい褐 | ミガキ・ナデ | ナデ | 赤色・半透明 | 底径 4cm |

## 表４　縄文時代後・晩期土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 94 | P-10・7層 | 深鉢 | 橙 | 灰黄褐 | ミガキ | 丁寧なナデ | 黒色・透明 | 底径 6.4cm |
| 95 | H-17・5b層 | 深鉢 | 明赤褐 | 明赤褐 | ナデ | ナデ | 白色・黒色・赤色・半透明 | 底径 7.5cm |
| 96 | G-13・6a層 | 注口 | 褐灰 | 灰黄褐 | ミガキ | ケズリ | 白色 | |
| 97 | R-4・YSA33 | 深鉢 | 明赤褐～褐灰 | 明赤褐 | ミガキ | 磨耗 | 白色 | |
| 98 | R-4・YSA33 | 深鉢 | にぶい赤褐 | にぶい褐 | ヨコナデ | 磨耗 | 白色 | |
| 99 | Q-11・3層 | 深鉢 | 明赤褐 | 明赤褐 | ミガキ状ナデ | ナデ | 黒色・透明 | |
| 100 | G-16・5層 | 深鉢 | 明赤褐 | 明赤褐 | ナデ | ナデ | 白色・黒色・透明 | |
| 101 | U-10・7層、V-10・7層 | 深鉢 | 赤褐（煤付着） | 赤褐 | ヨコナデ・ミガキ | ヨコナデ・ミガキ | 白色・赤色・半透明 | 口径 25.4cm |
| 102 | V-10・７層 | 深鉢 | にぶい褐 | にぶい橙 | ナデ・ユビオサエ | ナデ・ユビオサエ | 黒色・赤色・透明・半透明 | |
| 103 | R-12・5b層 | 浅鉢 | 黒褐 | 黒褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・透明 | 内面沈線あり |
| 104 | S-11・5層 | 浅鉢 | にぶい黄褐 | にぶい褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・透明 | 内面沈線あり |
| 105 | I-16・5c層 | 浅鉢 | にぶい黄橙 | 褐灰 | ミガキ | ミガキ | 黒色 | |
| 106 | J-4・5層 | 鉢 | 淡黄 | にぶい黄褐 | 組織痕 | 磨耗 | 赤色・透明 | |
| 107 | V-11・6層 | 鉢 | 橙（煤付着） | 浅黄 | 組織痕 | 条痕 | 白色 | |
| 108 | V-11・7層 | 鉢 | 橙（煤付着） | 灰黄 | 組織痕 | 条痕 | 赤色・透明・半透明 | |
| 109 | V-11・7層 | 鉢 | にぶい黄橙 | 浅黄 | 組織痕 | 磨耗 | 赤色 | |

**10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・26・27・28・29・30・31・33・34・35・36・37・39・40・42・43・45**）確認された。

この時期の住居はある程度限られた範囲で検出されており、おもに調査区の北西側に集中する。これらの住居跡が営まれる微地形をみると、南側からのびる宍戸章氏による低位段丘２面の縁辺部であり、おおむね平坦な地形になっている。なおＭ－１区からＭ－６区にかけては調査区を分断する現代の道路によって削平されていたため、住居跡は確認できなかった。

### YSA1（図 26）

**YSA1** は長軸 3.0m、短軸 2.5m の隅丸方形プランで、南側の一部が近世の撹乱を受けている。検出面からの深さは約 26cm である。

住居内施設としては中央に楕円形の浅い土坑（長軸 1.05m、短軸 0.68m、深さ約 10cm）がある。その中央土坑内に棟軸となる棟木を支える主柱穴を２基確認できた。主柱穴の深さはいずれも土坑床面から 16 ～ 20cm である。住居全体からその他に６基のピットを確認できた。

図 26 の下に示したように、住居内堆積土は、後代の植物や小動物による撹乱である①層、黒色シルト土の上層（②層）、貼床層と考えられる下層（③・④層）に分けられる。②層は黄色軽石の混ざりも少なくルーズである。また、撹乱の①層によって下の③層が②層内に持ち上がっている。貼床である③・④層は黄色軽石の含み具合から２層に分けられ、厚さは約２～ 8cm である。貼床層の硬度を硬度計で計測したところ、平均で表面では 24.8mm（15kg/cm²）、断面では 22.8mm（10kg/cm²）となった。また③層は中央土坑の床面にも入り込んでいたが、住居全体にではなく部分的な広がりで、他の住居跡に比べ上層との境が不明瞭であった。

住居内では遺物はほとんど見られず、②層から土器と石器がそれぞれ１点ずつ出土している。

### YSA3（図 26）

**YSA3** の平面プランは隅丸方形プランを基調としているが、北西部にのみ張り出し状の浅い土坑（深

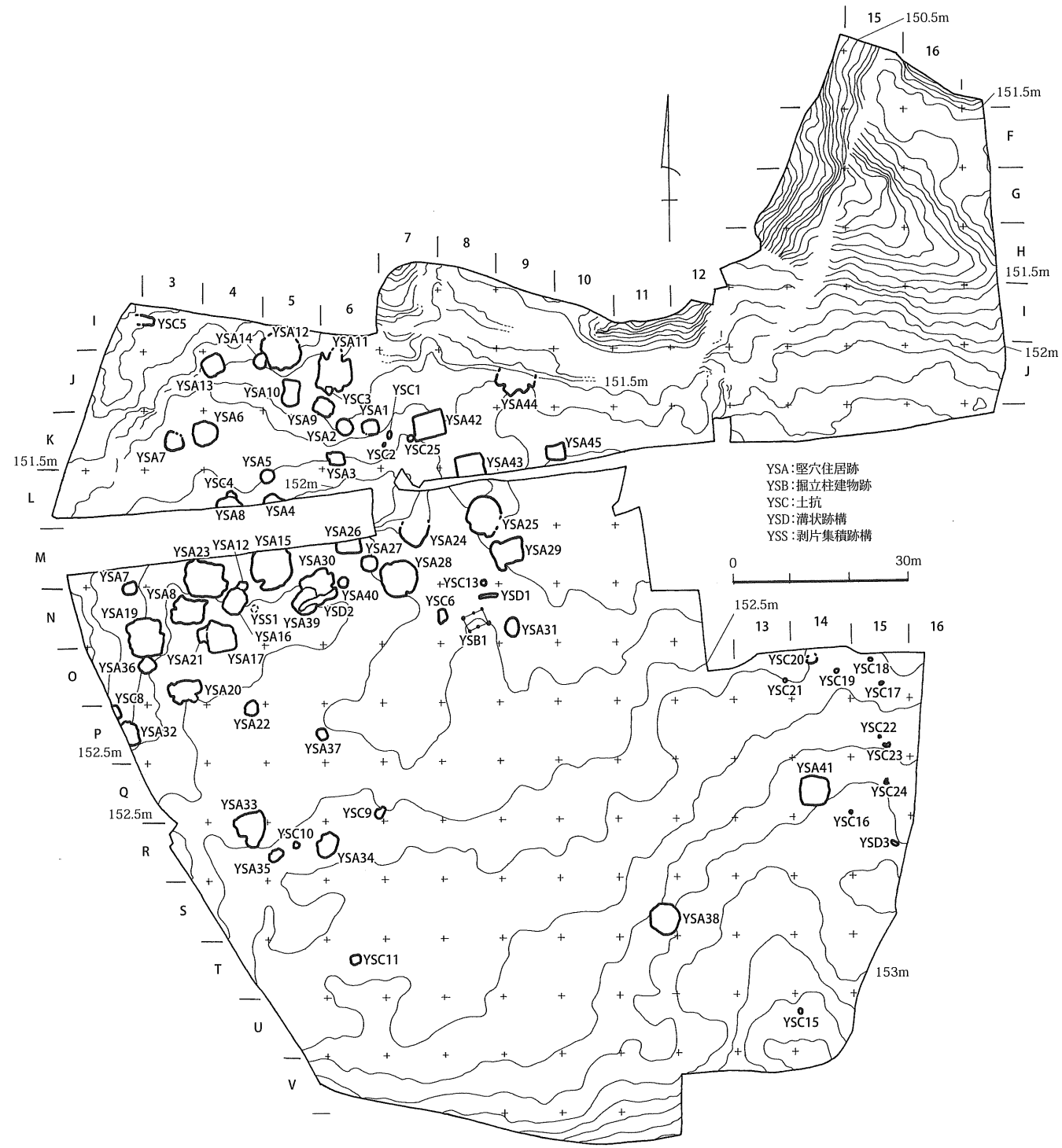



**図25　弥生時代遺構分布図**

さ約 5cm）を持つ住居である。長軸約 2.8m、短軸約 2.2m、検出面からの深さは約 8cm とかなり浅いため、北側の床面はほとんど検出面と同じである。

住居内施設としては、住居内に 4 基、張り出し部に 1 基のピットが確認された。主柱穴は南側の 2 基のピット（両者とも直径 30 ～ 35cm、床面からの深さは約 60cm）と思われるが、住居の中心より南に寄っているためやや疑問が残る。西側の主柱穴からは甕の脚部（**112**）が出土した。張り出し部にあるピットの深さは 25cm である。

住居内堆積土は黒色シルト土の①・②層と、硬くしまる貼床層の③層である。①層と②層は、質感や霧島御池軽石とみられる軽石粒の含み具合などによって細分された。貼床層の厚さは約 3cm で、硬度は表面が 24.3mm（15kg/cm²）、断面が 19mm（5kg/cm²）である。

遺物はピット内から出土した甕（**110**）のほかに②層より出土した壷（**111**）である。

**YSA4（図 26）**

**YSA4** は出土遺物がないため時期の判断が難しいが、一応中期とした。南側を現代の道路に削られているため住居北側のほんの一部分しか確認できず、平面プラン・規模ともに不明である。検出面からの深さは約 25cm である。住居の北側の一部には床面より 5cm ほど高いテラス状の段差があり、そこには深さ 70cm ほどのピットが掘られ、軟質の黒褐色シルト層（②層）が堆積していた。

住居内堆積土は上層の黒色シルト土の①層と、ピットのみに堆積する②層、硬くしまる下層の貼床層の③層に分けられる。貼床である③層の硬度は表面が 22mm（8kg/cm²）、断面が 24mm（10kg/cm²）、厚さは約 3cm である。

**YSA5（図 26）**

**YSA5** は長軸約 2.6m、短軸約 2.2m の円形プランで、検出面からの深さは約 45cm である。

住居内施設としては 4 基のピットのみで、そのうちの中央と東側のピットが主柱穴と思われる。両者とも直径約 30cm、床面からの深さが約 40cm で、やや軟質の黒色土が入っていた。この住居も **YSA3** と同様に主柱穴が住居の中心よりずれて東側に寄っている。

住居内堆積土は基本土層の 2 層による撹乱である①層と、黒色シルト土の②層、硬くしまる貼床の③・④層に分けられる。貼床層は質感と霧島御池軽石の大きさや含み具合から 2 層に細分したが、③層のほうが④層よりも硬くしまっている。③層の硬度は表面が 23.6mm（10kg/cm²）、断面が 25.6mm（15kg/cm²）、厚さが 5cm である。

土器および磨石・敲石は②層からの出土で、床面より 10cm 浮いたレベルで出土した。

**YSA6（図 27）**

**YSA6** は長軸約 4.5m、短軸約 3.9m の円形プランで、検出面からの深さは約 18cm である。住居の床面はやや凹凸があり、西側の床面は検出面とほぼ同じレベルなため、立ち上がりがやや不明瞭である。

住居内施設としては 15 基のピットが確認された。このうち、中央のピットは土坑状に大きく掘られているが（長軸 95cm）、土層を観察したところ、貼床となる層がピットのほぼ 3 分の 2 を覆っていたため、実際の柱の直径は 35cm 程だったと思われる。このピットと、その東側にあるピットの 2 基がこの住居の主柱穴と思われる。また、これら 2 基のそれぞれ北側に棟軸と同じ方向に並ぶピットが確認されていることから、この住居の主柱穴は建て替え等により掘り直された可能性がある。

住居内堆積土は基本土層の 5 層による掘り込み（中世のピットか？）の①層と、上層の黒色シルト土の②層、硬くしまる貼床層の④・⑤層、ピットに堆積する③・⑥層である。このうち⑤層は④層に比べ霧島御池軽石の含有量が多く、部分的には軽石のみの層となり硬くしまっている。硬度は表面が 24mm（10kg/cm²）、断面が 21.3mm（7kg/cm²）、厚さが約 8cm である。

出土遺物は中溝式土器の甕（**116**）、壷（**117**）とも床面からの出土である。

**YSA7（図 27）**

**YSA7** は住居の北東部の床面が検出面とほぼ変わらないレベルのため削平を受けた可能性があり、やや不整形な形で検出されたが、平面プランは隅丸方形プランであったと思われる。現状での長軸は約 3.3m、短軸は約 3.2m、検出面からの深さは約 18cm である。

住居内施設としては 7 基のピットが確認された。このうち東西の端に位置する 2 基のピット（深さ約 70 ～ 80cm）が主柱穴と思われるが、この 2 基を結んだ棟軸は住居の中心線よりやや南にずれている。この 2 基のピットのうち、西側のピットの掘り方は上半部が大きく広がっていることから、住居廃絶後に柱を抜き取った跡ではないかと考えられる。

住居内堆積土は、黒色シルト土の①層、ピット内に堆積する②・③・④層、貼床と考えられる⑤・⑥層、貼床の下に堆積する⑦層とに分けられる。このうち③層は住居の壁際からピット内へ埋まっていったと思われ、霧島御池軽石のブロックを含んで堆積していた。貼床層の⑤層の硬度は表面が 24.4mm（10kg/cm²）、断面が 21.9mm（8kg/cm²）、厚さが 4cm で御池軽石を主体とし、その下層の⑥層より硬くしまっている。⑥層の硬度は 22mm（8kg/cm²）、厚さは 8cm である。

出土遺物はほとんどが上層である①層から出土している。甕（**121**）は中央にあるピットからの出土である。また、住居を掘り下げる段階で埋土中から多量の頁岩製磨製石鏃やチップが出土した。そ

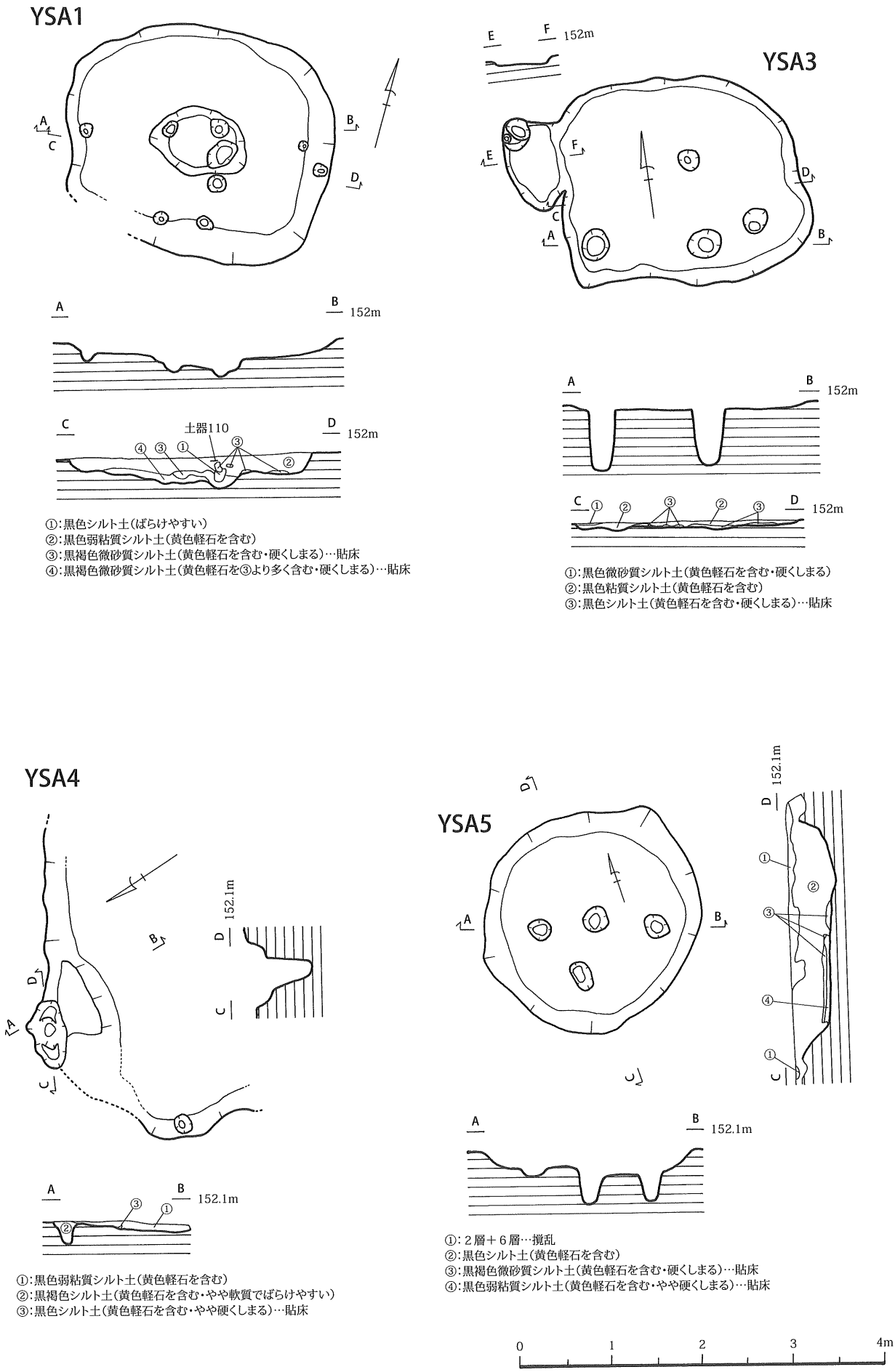



図26　竪穴住居跡 YSA1・3・4・5 実測図

のうち **444・446** は床面からの出土である。

**YSA8（図 27）**

**YSA8** は住居の南側を現代の道路によって削られているため、平面プラン・規模ともに不明であるが、現状での長軸は東西方向に約 4.4m、検出面からの深さは約 18cm である。また住居の北側では弥生時代の土坑（**YSC4**）と切り合い関係にあり、土層断面の観察の結果、**YSA8** が（**YSC4**）を切っている。住居内にピットが 9 基確認されたが、すべて深さが 10 ～ 30cm の浅いピットである。

住居内堆積土は黒色シルト土の①層と、硬くしまる貼床層の②・③層である。②層の硬度は表面 24mm（10kg/cm²）、断面 24.6mm（10kg/cm²）、厚さは約 5cm である。

出土遺物は山ノ口Ⅰ式土器の甕（**129**）と磨製石鏃（**447**）があり、この 2 点は床面からの出土である。

**YSA9（図 27）**

**YSA9** は長軸約 3.5m、短軸約 2.6m の隅丸方形プランで、検出面からの深さは約 34cm である。

住居では 7 基のピットが確認された。このうち東西端に位置する 2 基のピットが主柱穴と思われる。この主柱穴の掘り形は、住居の中心に対して住居の外方へ掘られていることから、柱をやや内側に傾斜させて建っていたと思われる。

住居内堆積土は後代の植物などによる基本土層 5 層の撹乱である①層と、黒色シルト土の②層、硬くしまる貼床層の③・④層、その下に部分的に堆積する黒色シルト土の⑤層に分かれる。③層と④層は霧島御池軽石の含み具合から細分でき、③層の硬度は表面 27.6mm（20kg/cm²）、断面 22.6mm（8kg/cm²）、厚さ約 4cm、④層の硬度は断面 27mm（20kg/cm²）、厚さ約 10cm で、この層によって床面を平坦に仕上げている。この貼床層は、御池軽石の含有量が多く、硬くしまっていたため土層断面上で上層との境が明瞭であった。

出土遺物は甕や波状文を持つ壷などが出土しており、そのうち土器（**132 ～ 134・136**）は床面からの出土である。

**YSA10（図 28）**

**YSA10** は長軸約 4.6m、短軸約 2.6m の長方形プランで、検出面からの深さは約 15cm である。東辺と西辺の壁のラインがやや住居の内側に入り込み、東西方向がくびれた形になっている。

住居中央に深さ約 25cm の主柱穴があり、このピット東側上半部には底面から約 10cm の高さに段を持つ。それ以外にいくつかのピットを確認した。南側のピットの底には土器（**151**）が入っていた。

住居内堆積土は植物などによる 5 層の撹乱である①層と、上層の黒色シルト土の②層、硬くしまる貼床層の③層に分けられる。③層の硬度は表面 23.5mm（10kg/cm²）、断面 24.5mm（10kg/cm²）で、厚さは約 4cm と、調査段階から他の住居に比べて貼床は硬くしまってはいなかった。

遺物は住居検出の段階から出土しており、床面直上からも出土した。主柱穴の上面から山ノ口式や中溝式などの土器がまとまって出土しており、その土器の東半分を囲むように炭化材が放射状に出土した。また、②層からの出土で剥片石器、磨石・敲石、軽石加工品が出土している。

**YSA11（図 29）**

**YSA11** は北部と南東部を中世の遺構（**SD2・SC2**）に、南西部を弥生時代の土坑（**YSC3**）に切られる。花弁状住居であるが、平面プランは西側が方形状を呈し、その他の部分は円形を基調としているようにも見えるため、不整形といわざるを得ない形態である。現状では長軸約 6.9m 以上、短軸約 5.7m で、検出面からの深さは約 42cm である。いわゆる間仕切りの土壁が 3 ヶ所に確認され、北東部の突出壁付近には壁に沿ってわずかな段差がみられた。また住居の外周に沿って、中央より 10 ～ 15cm ほど高くなってベッド状遺構を形成する。

住居内施設としては中央に楕円形の浅い土坑（長軸 1.32m、短軸 0.8m、深さ約 35cm）があり、土坑内の北側はさらに落ち込んで、中心部は東西に細長くなっている。その他に北西の壁側にピットを持つ浅い土坑（**SD2**）に切られるため全容不明、深さ約 10cm）や、南側のベッド状遺構に沿って掘られた溝状の浅い土坑（深さ約 10cm）が 1 基ずつ確認された。ピットは 27 基確認され、そのうちベッド状遺構の立ち上がり付近にある、中央土坑よりやや北に位置する 2 基のピットが主柱穴と思われる。両ピット下部の直径は 20 ～ 25cm、床面からの深さは 55 ～ 65cm である。両ピットの掘り形の上半

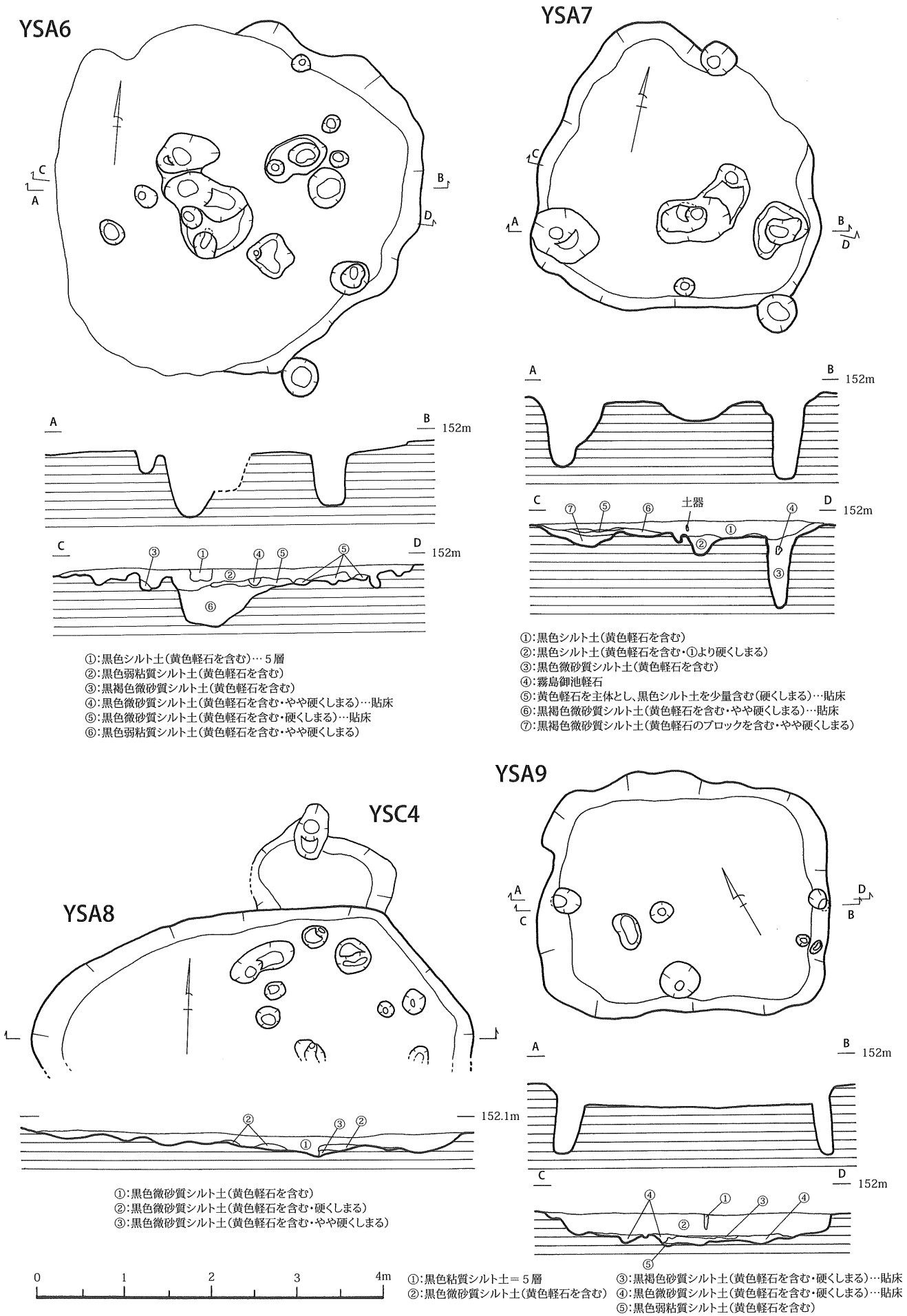



図27　竪穴住居跡 YSA6・7・8・9 実測図

部は広がっており、段が認められることから、住居廃絶後に柱を抜き取ったのではないかと考えられる。

住居内堆積土は後代の植物などによる撹乱である①層と、黒色シルト土の②・③層、硬くしまる貼床層の④層、その下部に堆積する⑤・⑥層に分けられる。このうち②層は住居全体を覆うように堆積しており、東側の主柱穴内にも同じく堆積していた。貼床である④層の硬度は表面 29.5mm（40kg/cm²）、断面 27.6mm（30kg/cm²）と、比較的硬くしまっており、5mm 程度の粒子のそろった霧島御池軽石（精選された軽石層）が堆積している。厚さは 8 ～ 13cm で、住居の中央部で厚く堆積している。それに対して⑤・⑥層は黒色シルト土で、住居の掘削後、貼床の④層を貼る前段階にのせた土と思われる。このことから、住居掘削後、精選してない土（⑤・⑥層）を入れ、その上に精選された軽石層（④層）をのせて床として使用したと思われる。また、この④層の質感は砂質であることから、硬度を上げるため、意図的に軽石と砂を混ぜた可能性もある。

土器は主に②層から出土し、床面からも甕の底部が出土している（**161・162**）。東側のベッド状遺構では土器片がある程度まとまって出土した。石器は磨製石鏃が 2 点、剥片石器が 1 点出土している。そのうち磨製石鏃（**453**）は中央土坑内から、剥片石器（**455**）は中央土坑近くの床面から出土している。

**YSA12（図 30）**

**YSA12** は北側を中世の溝（**SD2**）に切られているため全容は不明である。東側から南側にかけては円形プランを呈するが、西側の 2 ヶ所が若干張り出しているため、不整形なプランである。現状での長軸は約 7.0m で、検出面からの深さは約 25cm である。住居の外周に沿って中央より 5 ～ 10cm ほど高くなり、ベッド状遺構を形成する。そのベッド状遺構の中の南西側、中央土坑寄りでもう一段階低い段差を形成している。

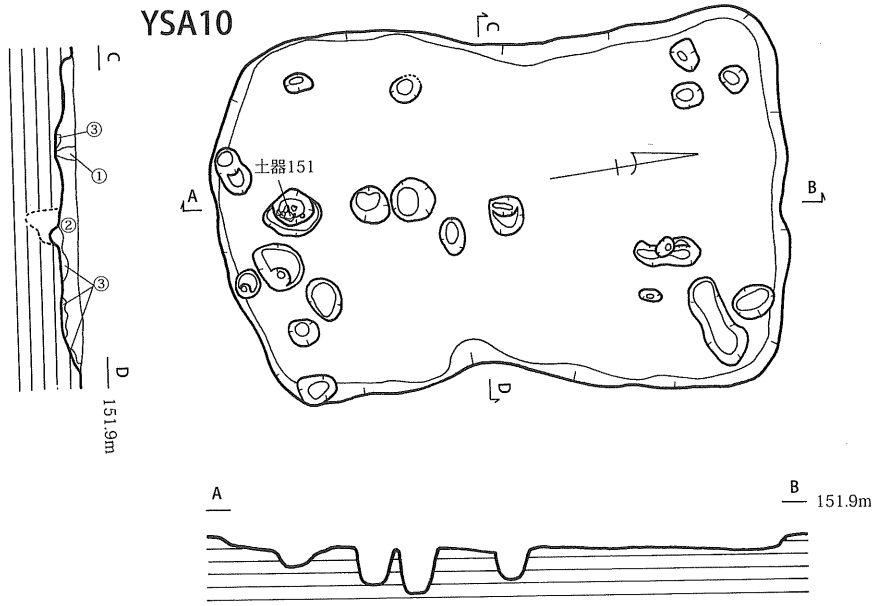
住居内施設としては中央に不整形な浅い土坑（長軸 1.8m、短軸 1.4m、深さ約 10cm）があり、この土坑の南側は南東方向に細長く溝状に延びている。その他に中央土坑の北東に浅いピットを持つ楕円形の土坑（長軸 0.75m、短軸 0.55m、深さ約 30cm）が 1 基ある。ピットは 30 基近くが確認され、そのうち中央土坑の南側にある 2 基のピットが主柱穴と思われる。この主柱穴の上部にはそれぞれ甕と壷が埋納されていた。西側の主柱穴は下部の直径が 25cm、床面からの深さは約 60cm である。ピットの上半部、東側は大きく広がって段差が生じており、そこより甕の口縁部から胴部下半までの約 3 分の 1 の破片（中溝式 **164** 他）が内面を上に向けて埋納されていた。また東側の主柱穴も下部の直径が 30cm、床面からの深さが 80cm で、ピットの上半部、北西側が大きく広がり、そこから壷の胴部下半から底部を打ち欠いた上半分（瀬戸内系 **163** 他）が埋納されていた。このことから両者とも住居廃絶後に柱を抜き取った後、半分に打ち欠いた甕と壷をそれぞれ埋納したものと考えられる。また住居の床には貼床が形成されているが、住居の北側はしっかり締められているのに対して、南側は北側より硬く締まってはなかった。

住居内堆積土は黒色シルト土の①層、硬くしまる貼床層の④・⑫層、中央土坑に堆積する②・③・⑤・⑥・⑦層、ピット内に堆積する⑧・⑨・⑩・⑪層に分けられる。貼床である④層の硬度は表面 25mm（15kg/cm²）、断面 25mm（15kg/cm²）、厚さは約 6cm、⑫層の硬度は表面が 25.3mm（15kg/cm²）で厚さは約 8cm である。どちらも硬くしまっているが、④層は霧島御池軽石が主体の層で、⑫層は黒色シルトが主体の層である。また④層は⑫層に比べて、一度掘削した中央土坑を覆うように堆積している。このことから、⑫層の段階では、中央土坑を大きい状態で使用して、④層の段階では中央土坑を⑤・⑥層で埋め戻して土坑を小さくして使用した可能性がある。埋め戻された⑤・⑥層は黒色シルト土の層で、⑥層はやや硬くしまっていた。

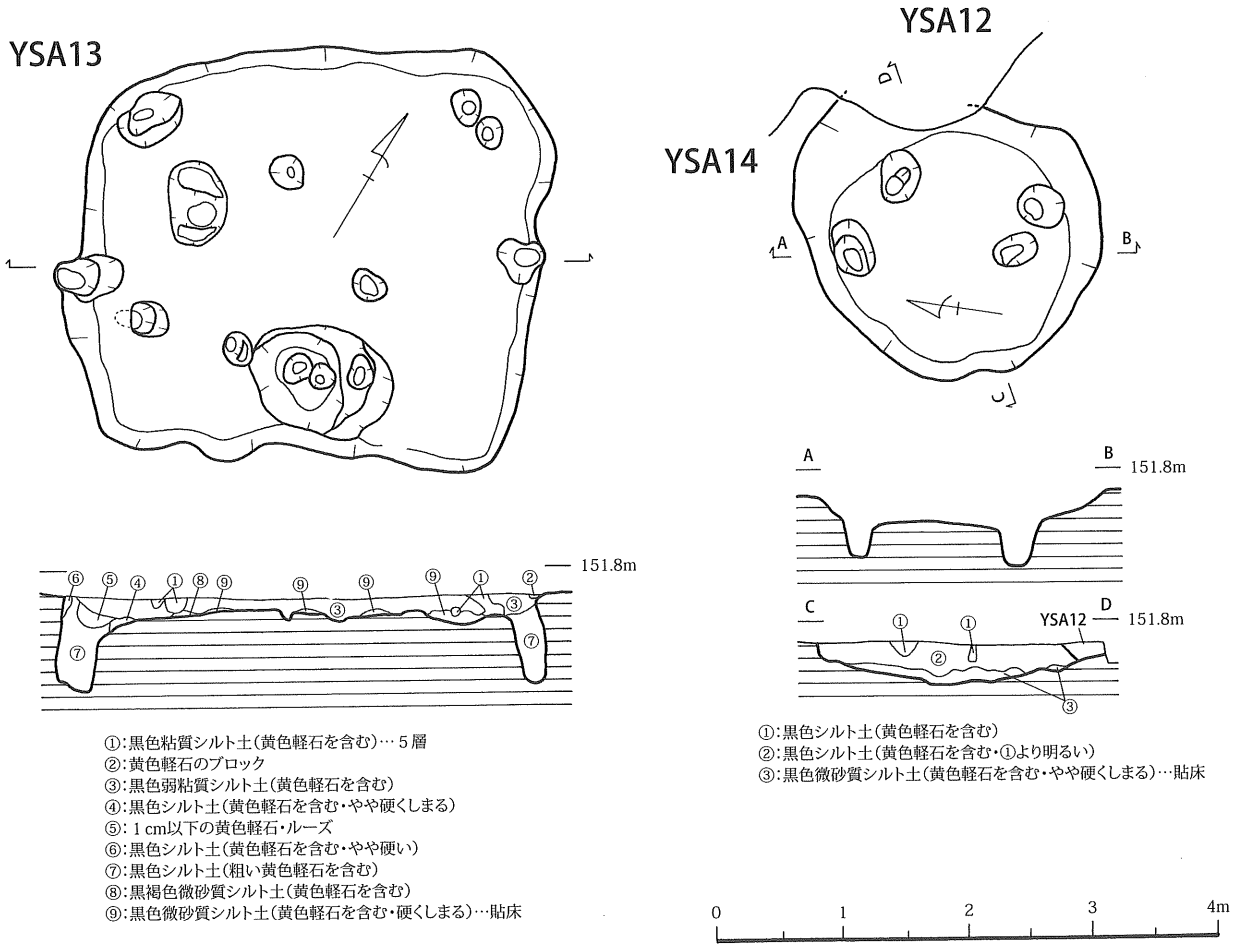
遺物はおもに中央土坑付近で床面（④層）から数 cm 浮いたレベルで①層から出土した。主柱穴から出土した中溝式土器甕・瀬戸内系の壷の残りの破片は住居内に散乱しており、接合したところ、甕は底部まで復元できたが、壷の胴部下半は見つからなかった。石器は磨製石鏃片（**457**）が 1 点、壷が埋納されていた東の主柱穴際の床面から出土した。また砥石（**459**）は上層からの出土である。

**YSA13（図 28）**

**YSA13** は長軸 3.9m、短軸 3.2m の隅丸方形プランの住居で、検出面からの深さは約 15cm である。住居の南壁際に浅い土坑（長軸約 1.15m、短軸約 0.85m、深さ約 20cm）が 1 基確認され、その土




①:黒色弱粘質シルト土(黄色軽石を含む)
②:黒色弱粘質シルト土(黄色軽石を①より含む)
③:黒色微砂質シルト土(黄色軽石を含む・やや硬くしまる)…貼床




①:黒色粘質シルト土(黄色軽石を含む)…5層
②:黄色軽石のブロック
③:黒色弱粘質シルト土(黄色軽石を含む)
④:黒色シルト土(黄色軽石を含む・やや硬くしまる)
⑤:1cm以下の黄色軽石・ルーズ
⑥:黒色シルト土(黄色軽石を含む・やや硬い)
⑦:黒色シルト土(粗い黄色軽石を含む)
⑧:黒褐色微砂質シルト土(黄色軽石を含む)
⑨:黒色微砂質シルト土(黄色軽石を含む・硬くしまる)…貼床

①:黒色シルト土(黄色軽石を含む)
②:黒色シルト土(黄色軽石を含む・①より明るい)
③:黒色微砂質シルト土(黄色軽石を含む・やや硬くしまる)…貼床

図28　竪穴住居跡 YSA10・13・14 実測図

坑内には深さ約 10cm 程度の浅いピットが 2 基、東側の立ち上がりにも 1 基伴っていた。その他に住居全体で 10 基のピットを確認した。そのうち、住居の長軸方向にある壁際の 2 基のピットが主柱穴と思われる。両者ともピット下部の径は 25 ～ 30cm、床面からの深さは約 60cm で、**YSA9** と同様に主柱穴の掘り方が垂直方向ではなく住居の中心に対して外方にむけて掘られている。西側のピットは東上半部が大きく広がっており、住居廃絶後に柱を抜き取った跡ではないかと考えられる。またこのピットのすぐ東には、同じように外方に向けて掘られたピットがもう 1 基あることから、主柱穴を掘りなおした可能性がある。

住居内堆積土は、基本土層 5 層による植物等の撹乱層である①層と、霧島御池軽石のブロックである②層、黒色系シルトの③・⑧層、ピット内にのみ堆積する④・⑤・⑥・⑦層、貼床層である⑨層に分けられる。ピット内に堆積する⑥層は黒色シルト土で、粒子の粗い軽石を含んでいた。また⑤層は霧島御池軽石の二次堆積で、ルーズである。貼床の⑨層の硬度は表面 23.6mm（10kg/cm²）、断面 26.6mm（20kg/cm²）で、厚さは約 5cm である。

遺物は住居のおもに南側から出土し、③層や床面から出土した。土器は入来Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式に該当する。剥片石器 1 点は上層からの出土である。

**YSA14（図 28）**

**YSA14** は時期決定の材料に欠けるが、一応中期とした。東側を **YSA12** に切られているが、直径約 2.5m の円形プランのきわめて小規模な住居であったと考えられる。検出面からの深さは約 30cm で、住居内では 4 基のピットが確認された。このうち南北方向に位置する 2 基のピットが主柱穴と思われる。南側のピットは径約 30cm、床面からの深さが約 30cm、北側のピットは径約 20cm、深さ約 30cm で、ピットの東側が若干広がっている。

住居内堆積土は植物などの撹乱層である①層、黒色シルトの②層、貼床層である③層に分けられる。東側にある **YSA12** の埋土とは、黒色シルトの明るさや霧島御池軽石の含み具合から分けることができた。貼床である④層の硬度は表面 26.3mm（20kg/cm²）、断面 24mm（10kg/cm²）、厚さが約 8cm である。

**YSA15（図 31）**

**YSA15** は北側を現代の道路によって削平されているが、直径約 7.0m の円形プランの住居で、検出面からの深さは約 45cm である。いわゆる間仕切りの土壁が南西部に 1 ヶ所だけ確認された。住居の外周に沿って帯状に幅 0.8 ～ 2.4m で中央の床面より約 7 ～ 15cm 高くなり、ベッド状遺構を形成する。

住居内施設としては、ベッド状遺構で囲まれた内側のやや南寄りに楕円形の中央土坑（長軸 1.15m、短軸 0.95m、深さ約 20cm）と、北西部の壁際に不整形な土坑（長軸 0.85m、短軸 0.6m、深さ約 10cm）が 1 基確認された。中央の土坑内には 2 基のピット（径 15 ～ 25cm、深さ 30 ～ 40cm）が掘られており、そのうち西ピットの掘り形は中央土坑の中心方向に向けて傾いて掘られている。また中央土坑より北側に位置する 2 基のピットがこの住居の主柱穴と思われる。東主柱穴は直径 26cm、深さ 60cm である。西主柱穴の下部の直径は 40cm、床面からの深さは 86cm で、ピット上部は広がっている（直径約 50cm）。両者とも埋土は黒色土で炭化材が含まれていた。また東主柱穴のすぐ北には深さ 30cm の、同じく炭化材を埋土に含むピットがあった。そのほかに黒色シルト土の堆積した 15 基のピットを確認した。また、突出壁から住居中央への延長部分では、ベッド状遺構の立ち上がりがほかの部分に比べてやや緩やかなスロープ状となっており、ここをベッド状遺構への上がり口として使用していた可能性がある。

住居内堆積土は中世の遺構や植物などによる撹乱である①・③層、黒色シルト土の②・④層、貼床である⑤層、この貼床の下に堆積する⑥・⑦・⑧・⑨層に分けられる。堆積状況から、住居廃絶後まず④層が住居全体に堆積し、中央の窪地に②層が自然堆積したと思われる。貼床の下に堆積する層のうち、⑦層は黒色シルト土で、⑥・⑧・⑨層は褐色の軽石層である。これはもともと黄色の霧島御池軽石が、黒色の土と混ざるなどの二次的要因により濁って褐色になったと思われる。中央に堆積する⑧層は硬くしまっていた。貼床である⑤層の硬度は表面が 28mm（20kg/cm²）、厚さは約 6cm である。

遺物は②・④層の住居全体から多く出土した。土器は山ノ口Ⅱ式や中溝式に該当する。そのうち甕（**216**）や甕（**193**）は床面からの出土である。石器は上層から粗製剥片石器 1 点、剥片 1 点、軽石加工品が 1 点出土している。

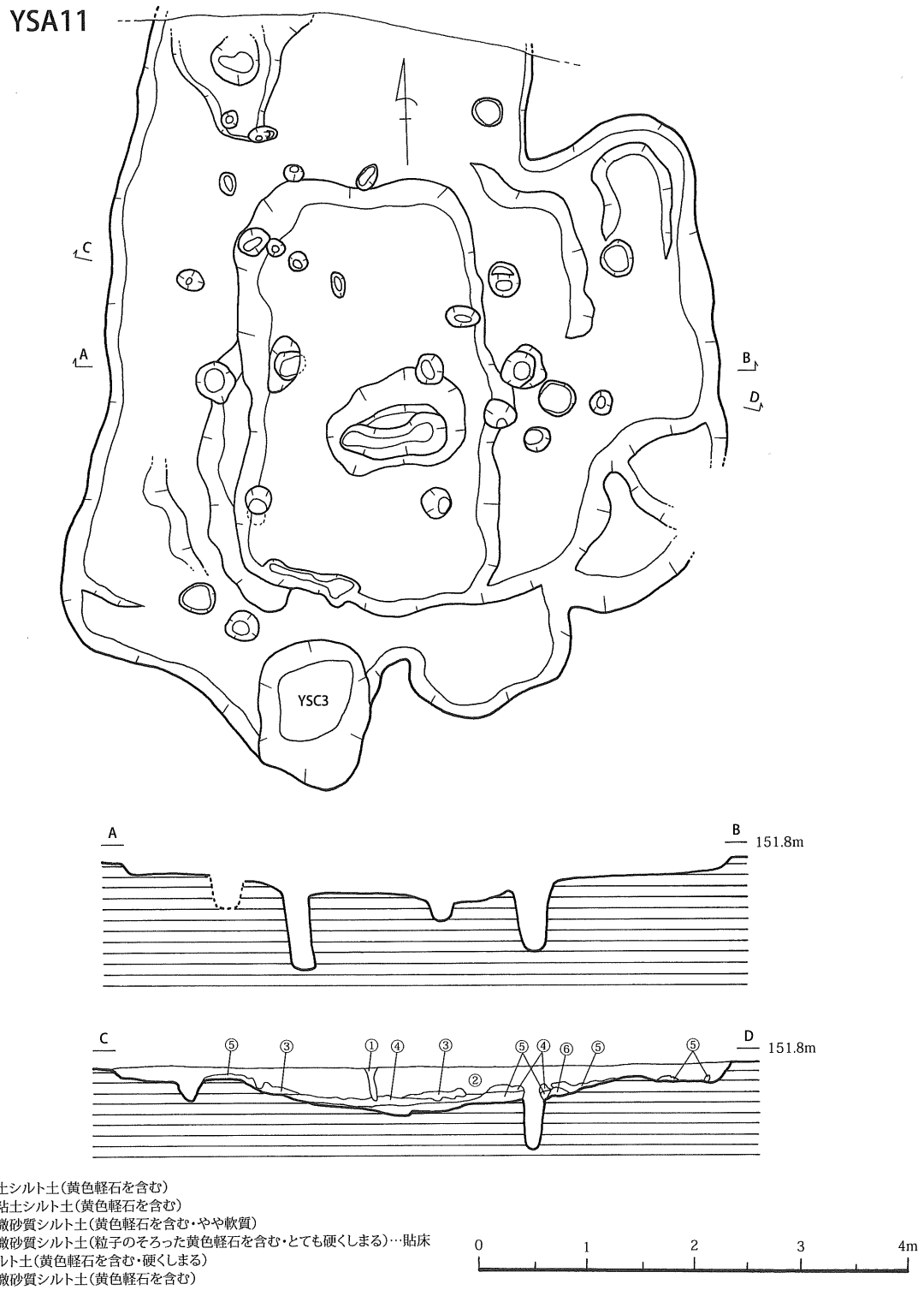



**図29　竪穴住居跡 YSA11 実測図**

## YSA16（図 32）

**YSA16** は長軸 4.5m、短軸 3.5m、検出面からの深さは約 44cm の、楕円形の住居である。住居の北東部の一部は弥生時代の土坑（**YSC12**）によって切られている。住居内では 15 基のピットが確認された。このうち住居の長軸方向に並ぶ 3 基のピットがこの住居の主柱穴と思われる。北側の主柱穴は（**YSC12**）と接して検出され、ピット下部の直径が 28cm、床面からの深さは 85cm で、掘り形の上部ではわずかな段が確認できる。住居中央の主柱穴は直径が 30cm、深さが 65cm である。南側の主柱穴は直径 35cm、深さは 70cm で、ピットの掘り形が住居中心に対して外方に向けて掘られている。

住居内堆積土は近世の撹乱である①層、植物などの撹乱と思われる②層、黒色シルトの③・④・⑤・

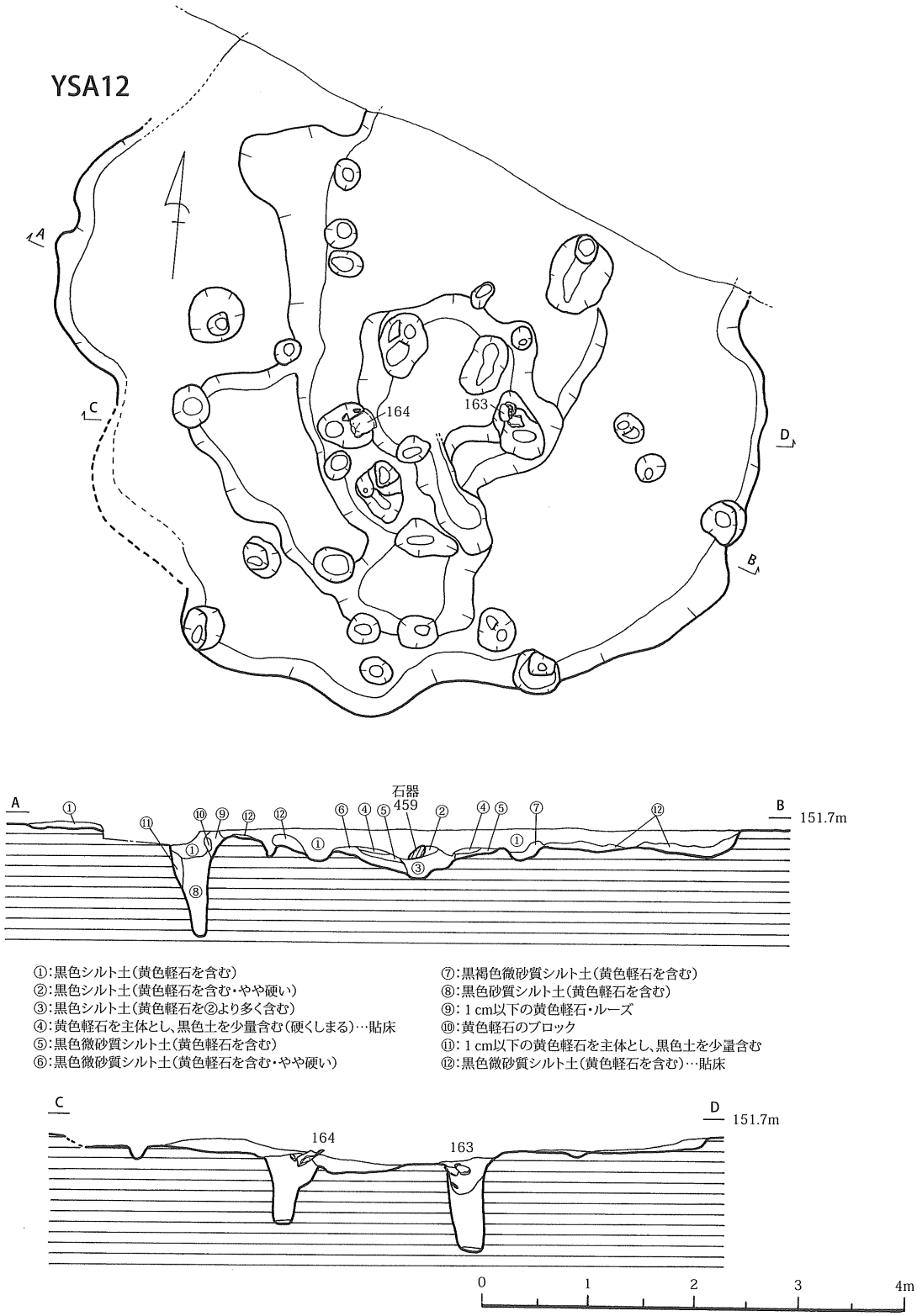



**図30　竪穴住居跡 YSA12 実測図**

⑥・⑦層に分けられる。このうち⑥・⑦層は住居床面のごく一部分に堆積しているのみである。堆積状況から、住居廃絶後に⑤・⑥・⑦層が堆積し、その後住居中央の窪みに③・④層が自然堆積したと思われる。またこの住居は⑤層の直下が硬くしまっていることや、貼床層が断面上に現れていないことから、掘削面である8層をそのまま床面として使用した可能性がある。⑤層の直下、床面の硬度は表面が27mm（20kg/cm²）である。

出土遺物は検出の段階から散見され、ほとんどが上層からの出土である。おもに住居中央に分布し、絡縄突帯を持つ甕（**257**）はある程度まとまって出土した。石器は磨製石鏃が4点、剥片石器が5点、磨石・敲石が2点、砥石1点、打製石斧1点の13点が出土した。そのうちの流紋岩製剥片1点が

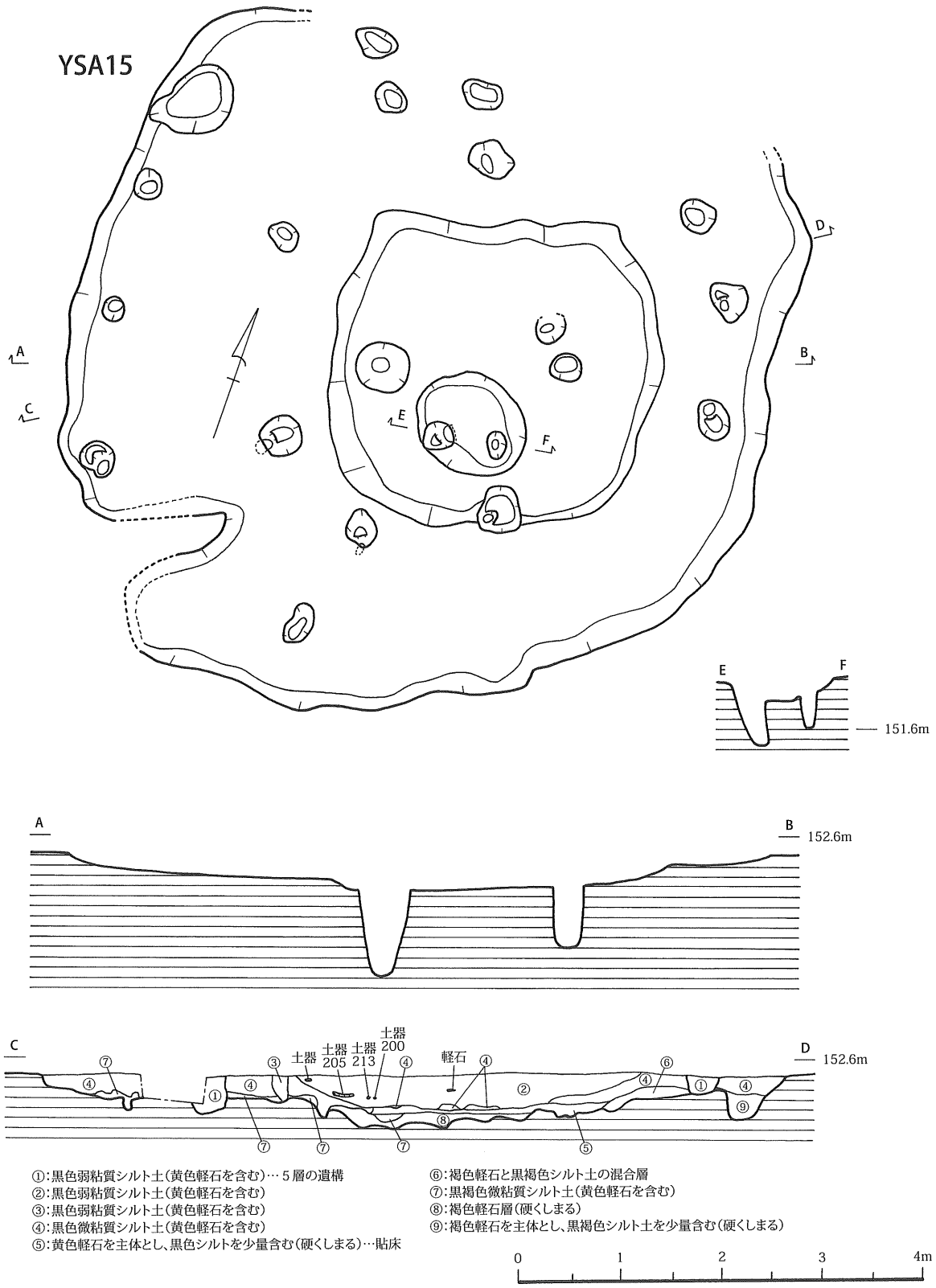



**図31　竪穴住居跡 YSA15 実測図**

**YSA18** 床面出土の打製石鏃（未製品か）と接合している。すべて上層からの出土である。

**YSA17・YSA21（図 33）**

**YSA17** と **YSA21** は切り合い関係にある。調査段階では方形の住居が 2 軒重なっているように見えたが、調査を進めると、**YSA17** が方形プランの住居で、**YSA21** は張り出しを持つ不整形プランの住居であると思われ、**YSA17** が **YSA21** を切っている。2 軒の住居の重なり部分には事前調査のためのトレンチが入っている。

**YSA17** は長軸 5.1m、短軸 4.3m の方形プランで、検出面からの深さは約 15cm である。住居の外周に沿って幅約 1.2m のベッド状遺構が全周に形成されていたと思われるが、トレンチのため北側では確認できなかった。南壁際には約 1.7m × 1.7m、深さ約 10cm の方形の土坑があり、この土坑内には直径約 30cm、深さ約 50cm のピットが 2 基掘られている。主柱穴は住居の中心にある 2 基のピットで、この住居の棟軸は東西方向と思われる。東の主柱穴はピットの下部の直径が 25cm、深さが 75cm であり、ピットの東上半部が大きく広がって段差を生じている。西側の主柱穴はピット下部の直径は 23cm、深さは約 80cm である。ピットの形状から複数のピットの切り合いであり、後述するが、そのうちの 1 基は **YSA21** の主柱穴に該当すると思われる。

**YSA21** は **YSA17** に切られるため全容は不明であるが、北側と西側に張り出しを持つ不整形プランの住居で、検出面からの深さは約 18cm と浅めである。確認できた主柱穴は 2 基で、**YSA21** の棟軸は北西～南東方向である。そのうちの南東にある 1 基は **YSA17** の主柱穴によって切られている。両ピットとも床面からの深さは約 40cm である。

住居内堆積土は植物などの撹乱と思われる①・②・③層、中世の遺構の④層、**YSA17** の埋土である⑤・⑥層、**YSA21** の埋土の⑦・⑧層に分けられる。**YSA17** の貼床層は⑥層で、硬度は表面が 23.3mm（10kg/cm²）、厚さは約 6cm である。**YSA21** の貼床層は⑧層と思われるが、硬度は表面が 20mm（6kg/cm²）と数値は高くなった。

出土遺物は少ないが、**YSA17** からは中溝式土器の甕（**269**）が床面から出土しており、**YSA21** からは山ノ口Ⅱ式土器の甕（**339**）が床面より数 cm 浮いたレベルで出土した。

**YSA18（図 32）**

**YSA18** は長軸 5.5m、短軸 4.1m の隅丸方形状プランの花弁状住居であるが、北東部のコーナーに、検出面からの深さ約 15cm の張り出し状の浅い土坑を持つため不整形なプランとなっている。検出面からの深さは約 44cm である。西側と南東部に突出壁を持ち、南西部にもわずかではあるが突出部分が確認され、合計 3 基の突出壁を持つ。この南東部の突出壁の周りでは、比較的形のしっかりした炭化材が床面より約 10cm 浮いた状態で、住居中央にむかって放射状に出土している。この炭化材を樹種同定した結果、ムクロジであると判明している。また放射性炭素年代測定の結果、2240 ± 60 年 BP（1 σ：BC390 ～ 200 年）という数値が得られている。南西部の張り出しの南コーナーにはテラス状の段差がみられ、そのテラスの下には 2 基のピットが確認された。北西から南西にかけての張り出した空間は住居中央より 5 ～ 10cm ほど高くなってベッド状遺構を形成する。

住居内施設としては 3 基の土坑が確認された。住居中央の方形の土坑（長軸約 2 m、短軸 1.6m、深さ約 10cm）と、中央土坑の西側、張り出しの基部に溝状の土坑（深さ約 15cm）と、住居北東壁際の楕円形の土坑（短軸 0.65m、深さ約 10cm）である。中央土坑の北西隅では床面より数 cm 浮いたレベルで炭化材が出土した。現状では、溝状土坑や壁際土坑の性格は不明である。この住居の主柱穴は中央土坑の東西端にある 2 基のピットと思われる。東のピットは下部の直径が 28cm、深さは 55cm、西のピットは下部の直径が 35cm、深さが 60cm であり、両者ともピットの上半部で段が認められた。両主柱穴の土層断面は、ピットの掘り形の両脇に硬くしまる軽石混じりの黒色土が認められた。これは柱を埋め立てた際につきしめられた柱周囲の埋め土であると考えられ、その内側には軟質でルーズな黒色土が観察された。これはおそらく柱が腐った痕跡だと考えられ、その柱部分を取りまく様に貼床がしきつめられていた。このことから、東側の主柱穴に関しては住居廃絶後に柱を抜き取らなかった可能性が高い。その他にピットが 12 基確認された。

住居内堆積土は植物などの撹乱と思われる①層、黒色シルト土の②・③・④・⑤・⑥・⑦層、貼床層である⑧層、土坑内に堆積する⑨層に分けられる。住居廃絶後④・⑤・⑥・⑦層が全体に堆積し、住居が完全に埋没しないうちに③層が掘られ（5 層期の遺構の可能性がある）、その後に②層が堆積したと思われる。このうち⑤層はブロック状に堆積する土で、⑥層は④層とほぼ同じ性質の層である。④層中には炭化材が含まれており、先に述べた突出壁付近の炭化材と同じレベルからの出土である。住居廃絶後、⑦層が全体に堆積し、その上に炭化材や土器を含む④層が堆積している。貼床の⑧層の表面の硬度は 23mm（10kg/cm²）で、厚さは約 4cm である。また⑨層は壁際土坑内にのみ堆積して

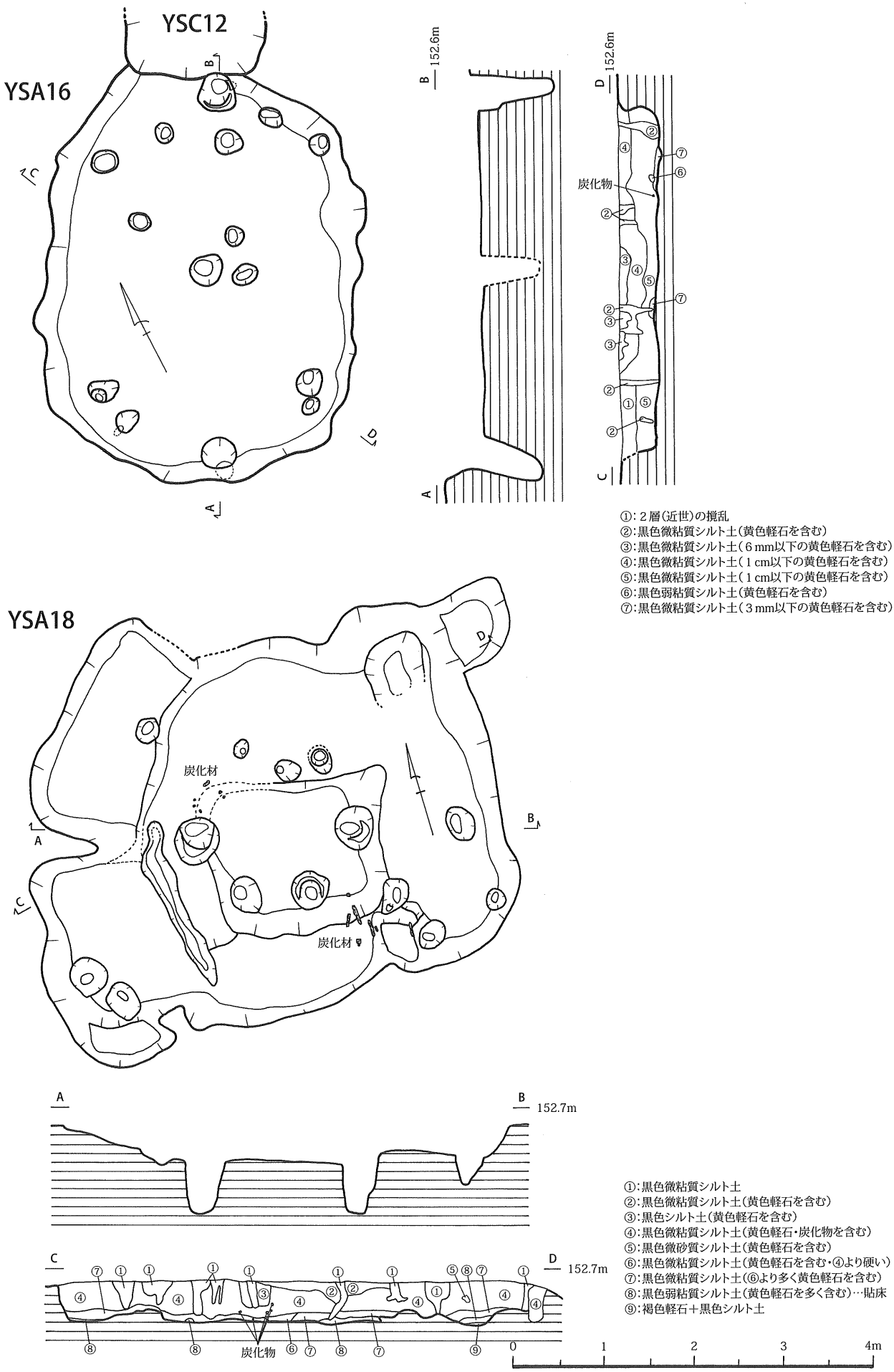



図32　竪穴住居跡 YSA16・18 実測図

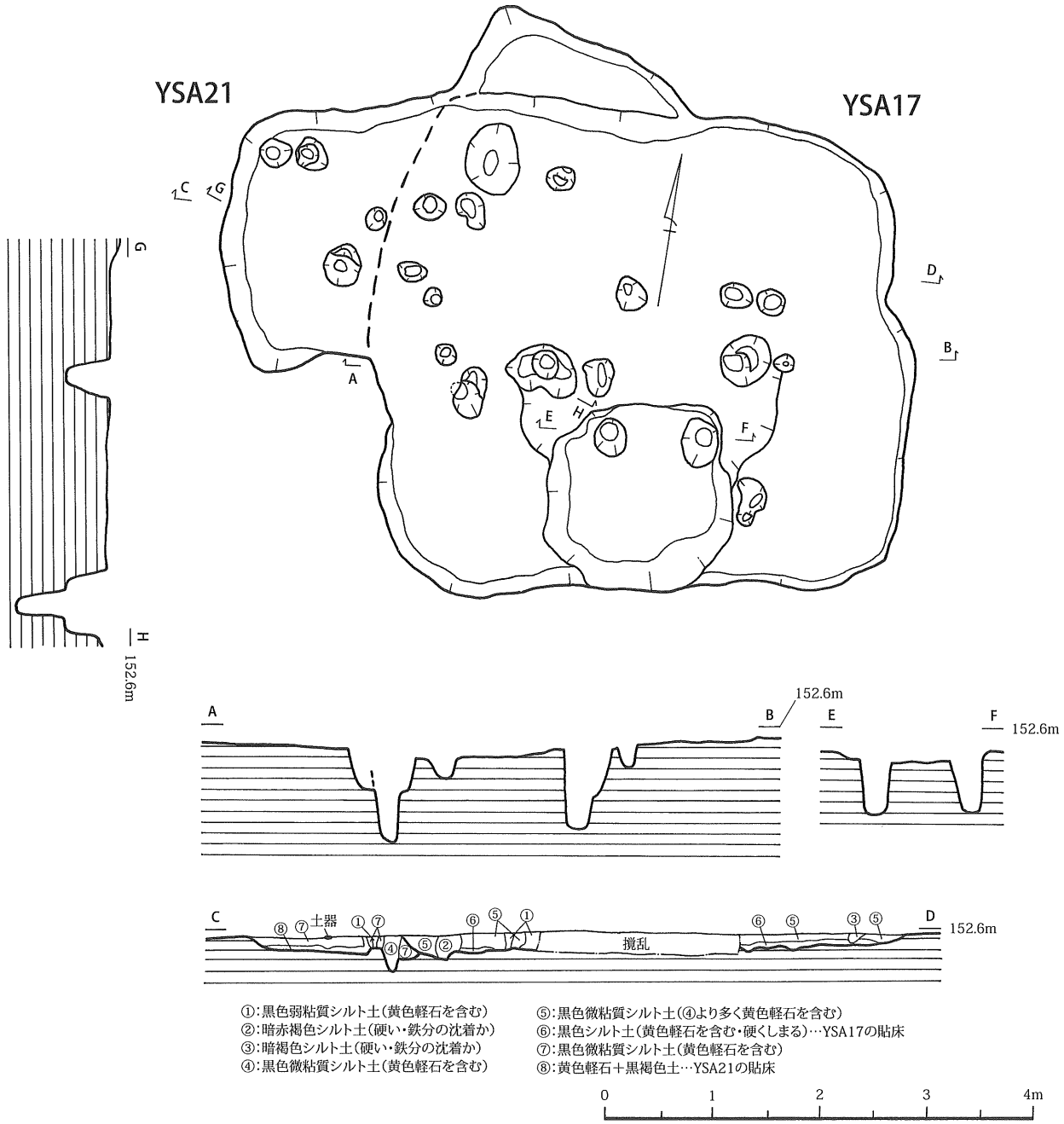



**図33　竪穴住居跡 YSA17・21 実測図**

いる霧島御池軽石を主体とする層で、貼床層の下に堆積していることから、土坑を掘削した後、⑨層で埋め戻して貼床を敷いてから浅い土坑として使用したと思われる。

遺物は住居中央の上層から出土しており、おもに④層からの出土である。甕の出土がほとんどであるが、突帯を持つ壷の頸部（**273**）や鉢（**277・289**）も出土している。このうち床面からの出土遺物は（**285**）のみである。石器は鋸歯状の刃部を有する打製石鏃（**480**）が 1 点、石包丁の破片を転用した磨製石鏃が 1 点、流紋岩製打製石鏃（未製品か）が 1 点、軽石加工品が 1 点出土している。このうち（**480**）は住居北西部の張り出しの床面から、打製石鏃（未製品か）も床面からの出土で、他の 2 点は上層からの出土である。また打製石鏃（未製品か）は **YSA16** 上層出土の剥片と接合している。

**YSA19（図 34）**

**YSA19** は長軸 6.5m、短軸 5.2m の隅丸方形状のプランで、検出面からの深さは約 70cm である。住居北西部の一部を除いて、幅 50 ～ 90cm のベッド状遺構が中央より約 20 ～ 30cm ほど高くなって形成されている。またベッド状遺構に囲まれた内側の南東コーナーではテラス状の段差になっており、ベッド状遺構からテラスにかけて床面が硬化していた。これは出入り口遺構と考えられる。住居の中央に長

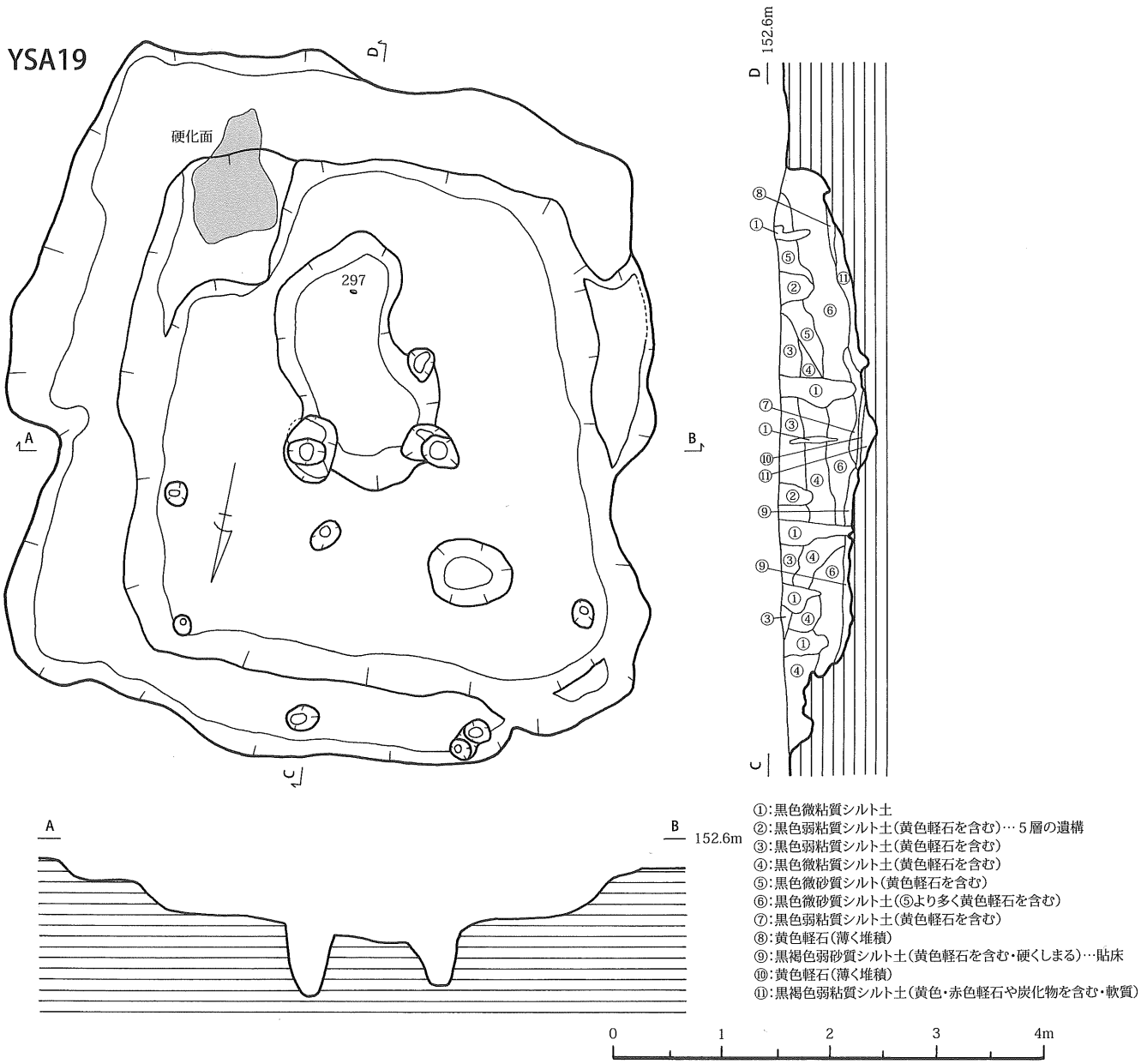



**図34　竪穴住居跡 YSA19 実測図**

方形状の中央土坑（長軸 2.4m、短軸 1.05m、深さ約 15cm）が 1 基、その北西に楕円形の土坑（長軸 0.8m、短軸 0.6m、深さ約 10cm）が 1 基確認された。中央土坑の北側、東西方向に 2 基並ぶピットがこの住居の主柱穴と思われる。東の主柱穴はピット下部の直径が 35cm、深さが 60cm である。ピットの南側と北側には底から 20cm のところに段を持つことから、ピットを掘りなおした可能性もある。また土層断面を観察したところ、直径約 20cm の柱痕跡が確認された。西の主柱穴はピット下部の直径が 35cm、深さが約 45cm で、底から 15cm のところに段が確認された。その他に 8 基のピットが確認された。

住居内堆積土は、植物による撹乱や中世の遺構と思われる①・②層、黒色シルト土の③・④・⑤・⑥・⑦層、黄色軽石の⑧層・⑩層、貼床の⑨層、中央土坑内に堆積する⑪層に分けられる。③・④・⑤・⑥・⑦層は黒色シルトの明るさや質感、軽石の含み具合よって細分した。⑤層は住居南側に、⑦層は中央土坑の上に堆積した層である。中央土坑のみに堆積する⑪層は、黒色系のシルト土ではあるが、赤橙色化した軽石や赤色化粒子、および炭化物を多く含んでいるなどの火熱を受けた痕跡が見られ、質感は柔らかかった。その上に霧島御池軽石の二次堆積である⑧・⑩層が薄く堆積している。貼床の⑨層の硬度は表面が 24mm（10kg/cm²）で、厚さは約 8cm である。この⑨層の黒色系シルト土の質感が砂質であることから、硬度を上げるために軽石と砂を混ぜ合わせた可能性がある。

出土遺物はおもに上層である④・⑥層から出土した。出土土器は山ノ口式や中溝式に該当する。石器

は磨製石鏃が4点、石鏃未製品が14点、砥石が3点、磨石・敲石が2点、石皿片が1点出土している。そのうち石鏃未製品である（**498**）は床面から、（**486**）は中央土坑内から出土している。また出入り口遺構と考えられるテラスの床面からは石鏃未製品である（**488・489・492・495・496・500・501**）の7点が重なって出土した。大形砥石（**504**）、砥石（**505**）は中央土坑の西側で、床面より約10cm浮いたレベルで出土している。

**YSA20（図35）**

**YSA20**は円形プランの住居と花弁状住居の切り合いである。調査当初は花弁状住居のみと思われたが、この花弁状住居の床面をはずしたところ、さらにその下層からそれ以前段階の円形の落ち込みが確認され、床面と主柱穴を伴うことから住居と認識された。土層断面の観察の結果、上層の花弁状住居が下層の円形住居を切る事が判明した。

**YSA20**の新段階の住居は長軸5.7m、短軸3.44mの花弁状住居で、検出面からの深さは約20cmである。突出壁を3つ持ち、北側以外に4つの空間を作り出している。南東部の張り出しは検出面と変わらないレベルのため、突出壁の部分が途切れてしまっているが、かろうじて南壁の一部が検出された。またこの張り出し部および北側は中央より10cmほど高くなってベッド状遺構を形成する。この住居の主柱穴は中央部で2基確認された。東の主柱穴は直径が30cm、深さが65cmで、土層断面をみると、下層の円形住居の床面を突き抜けて掘られている。ピット内には軟らかい黒色シルト土が認められたが、これは柱の腐った跡だと考えられる。またピット掘り形の上部では、貼床の層が柱痕の周りを取り巻くように堆積していた。西の主柱穴は直径が40cm、深さが約80cmで、土層断面には表れなかったが、東の主柱穴と同様に貼床層が柱痕の周りを取り巻いて堆積していた。

住居内堆積土は植物などの撹乱と思われる①・⑤層、黒色シルト土の②・③層、ピット内に堆積する④層、貼床の⑥層、貼床の下に堆積する⑦・⑧層に分けられる。②・③層は明るさと質感、霧島御池軽石とみられる軽石粒の含み具合によって分けられた。④層はピットのみに堆積する層で、②・③層と同様の黒色シルト土を基調とする層である。貼床である⑥層の硬度は、表面が27mm（20kg/cm²）で、厚さが約7cmである。

出土遺物は住居中央の②・③層から床面より数cm浮いたレベルで出土した。土器は山ノ口Ⅰ式や中溝式に該当する。石器は床面から石皿が1点、上層から砥石が1点、軽石加工品が2点出土している。

**YSA20**の古い段階の住居は長軸3.05m、短軸2.3mの円形プランの住居で、検出面からの深さは約50cmである。住居内では9基のピットが確認され、そのうち、長軸方向（北東～南西）に位置する3基がこの住居の主柱穴と思われる。北東の主柱穴はピット下部の直径が15cm、床面からの深さが約18cmで、ピット上半部がややいびつに広がっている。南西の主柱穴はピット下部の直径が20cm、床面からの深さが約30cmである。中央のピットは床面からの深さが約8cmと浅めであることから、棟木を軽く支える程度の柱であったと思われる。

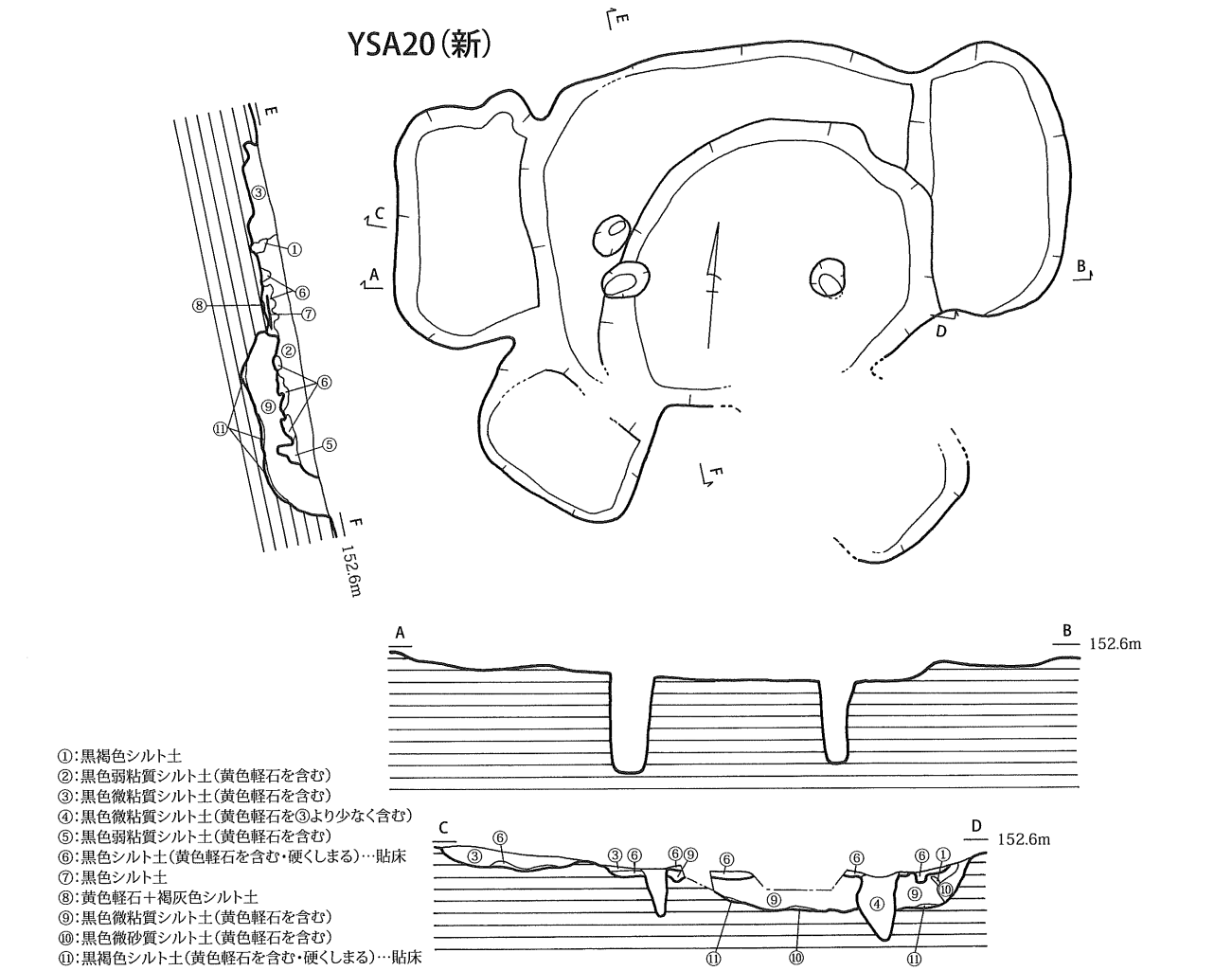
住居内堆積土は黒色シルトの⑨・⑩層、貼床の⑪層である。⑨・⑩層は明るさと質感、霧島御池軽石の含み具合によって分けられ、⑩層は住居の東壁際にのみ堆積する層である。貼床である⑪層の硬度は表面が23.5mm（10kg/cm²）で、厚さが約3cmである。堆積状況を見ると、**YSA20**の古い段階である円形住居が廃絶後完全に埋まってから、あらたに花弁状住居を掘っているようである。その際、円形住居と、花弁状住居の中央部の落ち込みは若干のズレがある。

出土遺物は少なく、入来Ⅱ式土器甕（**324**）が⑨層から出土した。

**YSA22（図35）**

**YSA22**は長軸2.65m、短軸2.3mの円形プラン（北側から東側は隅丸方形状でもある）の住居で、検出面からの深さは約25cmである。住居の北側や主柱穴の一部は中世の遺構によって壊されている。北側の壁より約50cm内側で、床面より約10cm高くなって段差を形成している。検出されたピットは中央に1基のみで、これが住居の主柱穴と思われる。このピットの床面からの深さは約45cmである。

住居内堆積土は植物などの撹乱と思われる①・②層と、黒色シルトの③・④・⑤層に分けられる。このうち貼床は④層で、⑤層は住居掘削後、貼床を敷く前にのせた層と思われる。土層断面では⑤層に比べて④層には霧島御池軽石が多量に含まれていた。貼床である④層の硬度は表面が24.8mm



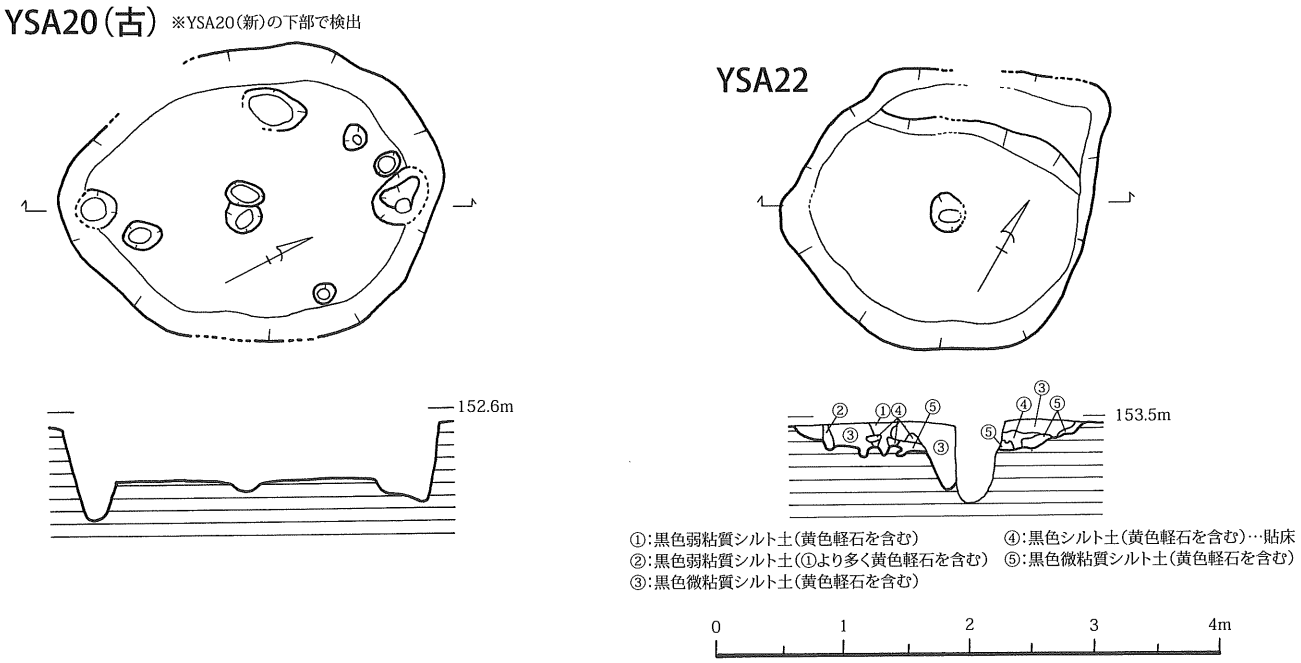




図35　竪穴住居跡 YSA20・22 実測図

(10kg/cm²)、厚さが約 6cm である。

出土遺物は少なく、絡縄突帯を持つ甕（**340**）が③層からの出土である。また土製品 1 点が上層から出土している。

**YSA23（図 36）**

**YSA23** は長軸約 7 m、短軸 5.5m の方形を基調とするプランだが、東辺の一部に幅 1.6m、奥行き 0.9m の張り出しを持っているため、やや不整形なプランとなっている。検出面からの深さは約 50cm で、西辺の一ヶ所にのみ突出壁が確認された。

住居の外周に沿って、帯状に幅 1 m～ 1.5m が約 5cm 高くなり、ベッド状遺構を形成する。また北壁から西壁の突出壁まではこのベッド状遺構より外側で、幅 0.2 ～ 0.8m、高さ約 15cm のもう一つのベッド状遺構を形成している。住居南東コーナーには壁に沿って溝状の土坑（長軸 1.7m、短軸 0.5m、深さ約 10cm）が伴っている。ベッド状遺構で囲まれた方形の内側では、北西壁から西壁に沿って溝状の土坑（幅約 25cm、深さ約 7cm）と、中央よりやや南寄りにピット 2 基を伴う楕円形の中央土坑（長軸 1.3m、短軸 0.9m、深さ約 10 ～ 20cm）と、南東で楕円形の土坑（長軸 0.85m、短軸 0.65m、深さ約 5cm）がそれぞれ 1 基ずつ確認された。中央土坑内の 2 基のピットは土坑底面から深さ約 30cm で、西のピットは南上半部で段差を生じている。またこの土坑の中央部はさらに 10cm ほど深くなってすり鉢状に落ち込んでいる。ベッド状遺構で囲まれた内側の東西端に位置する 2 基の円形ピットがこの住居の主柱穴と思われ、東側のピットが直径 40cm、深さ 75cm、西側のピットが直径約 50cm、深さ 73cm で、粒子の粗い霧島御池軽石を含む黒色シルト土が埋土であった。

住居内堆積土は、植物などの撹乱や、中世の遺構と思われる①・②・③層、黒色シルト土の④・⑤層、貼床の⑥層、貼床の下に堆積する⑦層に分層できる。④・⑤層が住居の埋土のほとんどを占め、質感や霧島御池軽石の含み具合から分けることができた。住居貼床の直上に堆積する⑤層からは多量の土器が出土しており、接合し完形に復元できるものも少なくない。貼床である⑥層は、黄色軽石を主体とする層で表面の硬度が 32mm（50kg/cm²）で、厚さが約 7cm である。土層断面上では堆積がやや不明瞭であった。⑦層は黒色系シルト土で中央の貼床の下にわずかに堆積している。またこの住居の床材推定のため、埋土（⑤層）および貼床（⑥層）・床面直下（⑦層）で植物珪酸体分析を行なったところ、⑥層のみイネが検出された。このことから、床面にはイネ藁が敷物など何らかの形で使用された可能性がある。

出土遺物は先にも述べたが、④層および⑤層から多量に出土しており、床面直上からも出土している。遺物の分布としては、東側の主柱穴上部からその南側の楕円系の土坑上までが特に出土が多くみられた。土器は入来Ⅱ式・山ノ口Ⅱ式・中溝式に該当する。また上層からの出土で、矢羽根状の線刻の入った甕の口縁（**378**）も出土している。石器は磨製石鏃や石鏃未製品、砥石、軽石加工品などが出土し、そのうち磨製石鏃未製品の（**516**）は床面からの出土である。

**YSA26（図 37）**

**YSA26** は北側を現代の道路と近世の撹乱により削平されているため全容は不明であるが、東西方向は 4.3m で、方形もしくは長方形のプランを呈する。検出面からの深さは約 20 ～ 30cm で、住居西側は床面が東側より約 10cm 高くなり、ベッド状遺構になっている。検出されたピットは 9 基で、そのうち東西端にある 2 基がこの住居の主柱穴と思われる。東のピットは下部の直径が 15cm、床面からの深さが 40cm で、ピットの南側は中世のピットに切られている。西のピットは下部の直径が 18cm、深さが 45cm である。

住居内堆積土は近世の撹乱である①・②層と、植物などによる撹乱の③層、黒色シルト土の④・⑤・⑥層に分けられる。④・⑤・⑥層は黒色シルト土の質感や霧島御池軽石の含み具合から分けられた。この住居の貼床層は土層断面上に明確にはあらわれず、⑥層の直下が硬くしまっていた。このことから掘削面である 8 層をそのまま床面として使用した可能性がある。⑥層直下の硬度は 30mm（40kg/cm²）である。

実測可能な出土遺物は入来Ⅱ式土器の甕の口縁部（**390**）で、上層からの出土である。

**YSA27（図 37）**

**YSA27** は長軸 2.9m、短軸 2.1m の方形のプランで、検出面からの深さは約 20cm である。検出されたピットは 7 基で、そのうち東西端にある 2 基がこの住居の主柱穴と思われる。東のピットは直

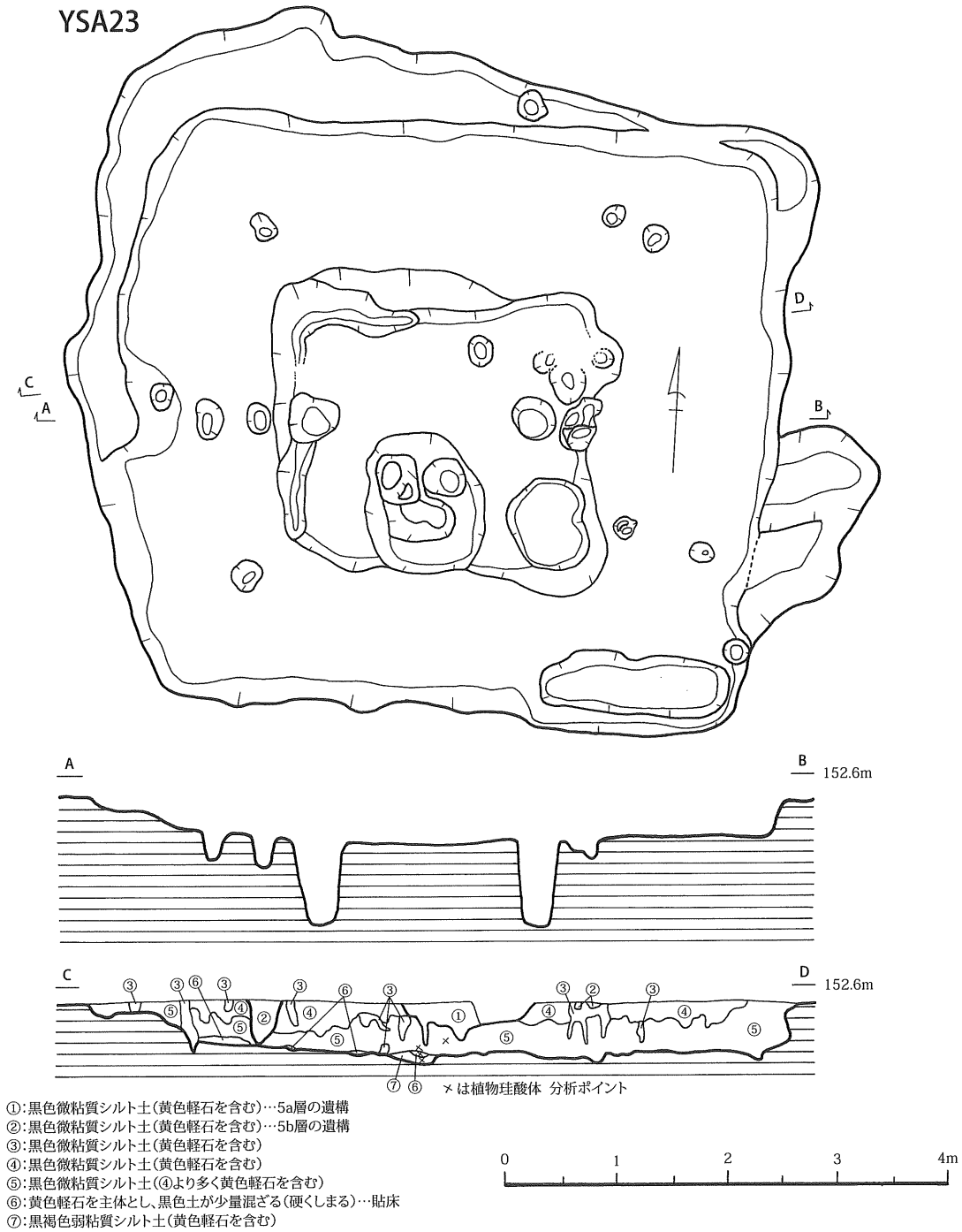



**図36　竪穴住居跡 YSA23 実測図**

径が 30cm、床面からの深さが 45cm である。西ピットの主柱穴は直径 25cm、深さが 35cm である。

住居内堆積土はブロック状に堆積する①層、植物などの撹乱と思われる②層、黒色シルト土の③・④層、貼床である⑤・⑥層に分けられる。このうち③層は住居全体に堆積しており、④層はピットのみに堆積した埋土で、硬くしまっていた。貼床の⑤・⑥層の堆積の上下関係は不明であるが、黒色系シルト土の明るさや質感、含有物の違いから細分できた。⑤層の硬度は表面が 22mm（8kg/cm²）、厚さが 7cm、⑥層の硬度は表面が 20mm（6kg/cm²）、厚さが 5cm である。

出土遺物は住居南部の床面から須玖式土器の広口壷の口縁（**391**）と砥石（**525**）が接するように出土している。

**YSA28（図 38）**

**YSA28** は長軸 6.4m、短軸 5.2m の円形プランを基調とした花弁状住居で、検出面からの深さは約 24cm である。いわゆる間仕切りの土壁が 3 ヶ所に確認され、これらの突出壁によって 3 つの空間が

作り出されている。また、東部の壁面において突出壁が存在した可能性もあるが、中世の遺構によって住居の壁が破壊されているため不明である。住居中央は周囲よりも一段低く、周囲は約3～7cmほど高い不明瞭なベッド状遺構となるが、北西部ではその段差がとらえられない。

住居内施設としては南部の突出壁の延長に楕円形の土坑（長軸1.55m、短軸0.95m、深さ約20cm）が1基確認され、土坑内からは礫が出土した。ピットは住居全体で19基確認され、そのうちの中央部に位置する2基がこの住居の主柱穴と思われる。東のピットはピット下部の直径が30cmで、床面からの深さは65cmである。ピットの南東上半部には床面から20cmの深さで段が認められる。またピットの上部には床面直上から甕の底部（**403**）が出土した。西のピットは直径が35cm、床面からの深さが75cmである。また両ピットの土層を観察したところ、ピットの掘り形の片方、あるいは両脇に硬くしまる黒色系シルト土や、御池軽石のブロックが認められた。これは柱を埋め立てた際につきしめられた柱周囲の埋め土であると考えられ、その上部には貼床が堆積していた。また、その内側では黒色シルト土の軟質な層が堆積していたが、これはおそらく柱が腐った痕跡であると思われる。

住居内堆積土は、植物などの撹乱や後代の掘り込みと見られる①・②層、黒色シルト土の③・④・⑤層、貼床である⑥・⑦層、霧島御池軽石の二次堆積である⑧層に分けられる。このうち⑤層は土坑内に堆積する層で、④層もこの土坑の北側にのみ堆積する層であることから、住居全体に堆積するのは③層である。また土坑の埋土である⑤層は炭化材を含んでいた。貼床である⑥層は住居中央から土坑内にまで堆積しており、硬度は表面が29.5mm（40kg/cm²）で、厚さが約6cmである。⑦層はこの⑥層内にブロック状に堆積する黒色土で、⑧層も一部にのみブロック状に堆積する軽石を主体とする層である。

出土遺物は床面直上の遺物は先に述べた甕の底部（**403**）のみで、他の遺物は床面より数cm浮いたレベルで③層から出土した。突帯をもつ壷の胴部（**396**）は住居北側の5層内に持ち上がっており、住居内出土の底部とは接合はしなかった。また土坑内からは砥石（**526・527**）が出土した。

**YSA29（図39）**

**YSA29**は長軸5.9m、短軸3.8m、検出面からの深さは約50cmである。方形を基調としているが、北西部と南西部はそれぞれ張り出しており、不整形なプランとなっている。南西部の張り出しの壁の立ち上がりにはわずかではあるが段差が認められた。住居の外周に沿って、帯状に幅約1mで、高さ約10～15cmのベッド状遺構を形成しているが、南側では認められなかった。またベッド状遺構で囲まれた方形の内側では北東部が4cmほど高くなっているが、南側ではその段差が捉えられなかった。

住居内施設としては、住居のやや南寄りにピットを1基持つ長方形の土坑（長軸0.85m、短軸0.6m、深さ約30cm）と、東側に楕円形の土坑（長軸0.65m、短軸0.45m、深さ約10cm）が1基ずつ確認された。この東に位置する土坑の北側にはわずかな落ち込みがみられ、1基のピットと住居中央部に続く段差を持っている。またこの落ち込み付近の住居の壁は、ゆるやかでスロープ状に立ち上がっている。ピットは住居内で15基確認され、そのうち中央の東西端に位置するピットがこの住居の主柱穴と思われる。東のピットの下部の直径は30cmで、床面からの深さは70cmである。ピットの北東上半部には床面から10cmの深さに段が認められる。西のピットの直径は30cm、深さは65cmである。両ピットの土層を観察してみると、ピット掘り形の片方に硬くしまる黒色系のシルト土が認められ、この土は住居の貼床と同じ土層であった。またその内側では軟質な黒色シルトが堆積しており、おそらく**YSA28**と同様、柱をつき固めた層と、柱が腐った痕跡であると思われる。

住居内堆積土は、植物などによる撹乱や後代の掘り込みと思われる①・②層、黒色シルト土の③・④層、貼床の⑤・⑦・⑧層、貼床の下に堆積する⑥・⑨・⑩・⑪・⑫・⑬層に分けられる。このうち③層と④層はほぼ同質の層であるが、④層はやや硬化しており、ブロック状に堆積しているため、住居全体に堆積するのは③層である。貼床の⑤・⑦・⑧層は黒色土の質感や霧島御池軽石の含み具合から細分した。⑧層の表面の硬度は25.5mm（15kg/cm²）で、厚さは約12cmである。貼床の下に堆積する層を観察したところ、貼床の下に黒色土層（⑥・⑩・⑫層）と霧島御池軽石を主体とする層（⑪・⑬層）を交互に入れ、版築状に硬化させていた。

出土遺物はほとんどが床面より数cm浮いた状態で出土したが、刻目突帯を持つ甕の口縁部（**407**）は中央土坑内から出土した。また上層から出土した甕（**405**）は**YSA16**出土の**254**と接合している。

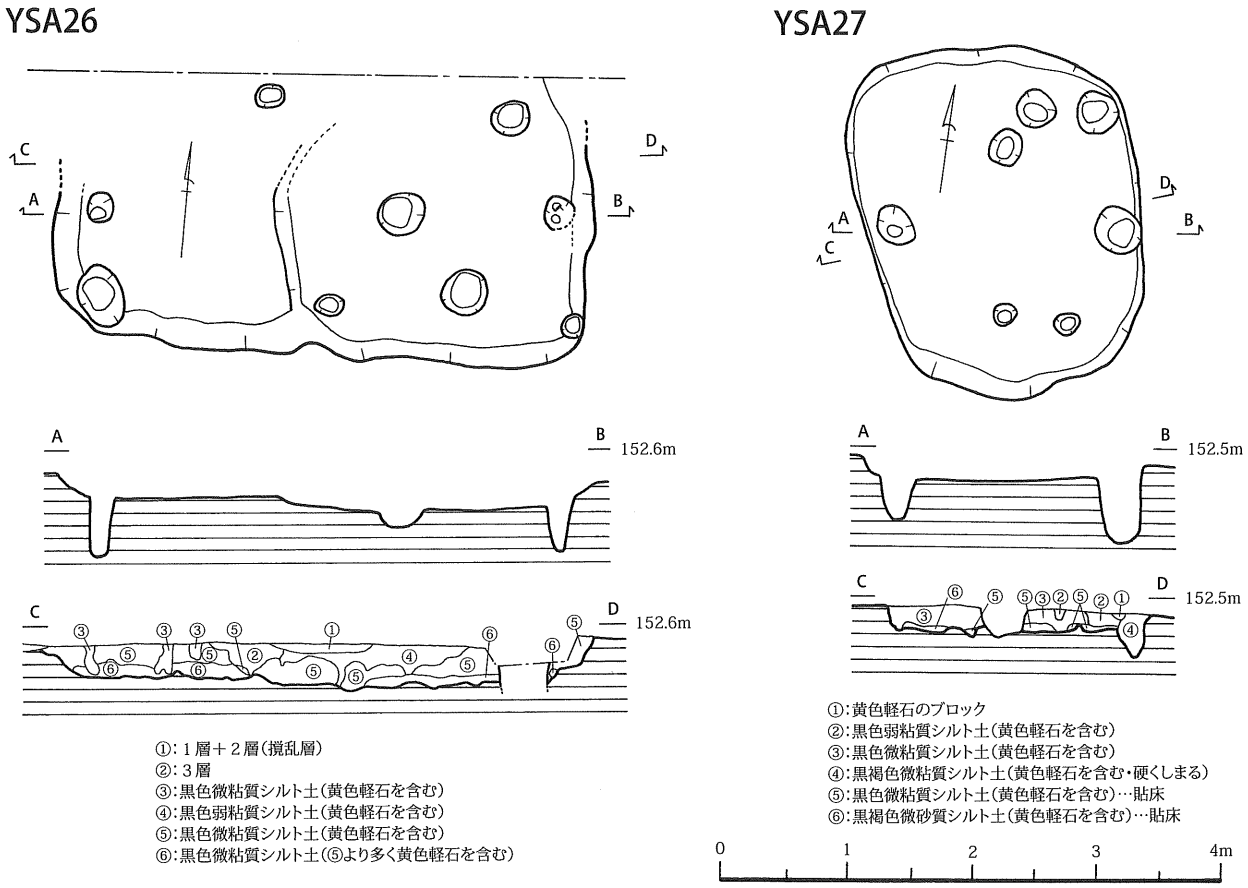



**図37　竪穴住居跡 YSA26・27 実測図**

石器は床面直上から磨製石鏃の素材と思われる剥片 1 点が出土した。

**YSA30・YSA39（図 40）**

**YSA30** と **YSA39** は切り合い関係にある。調査当初は 2 軒の住居だけの切り合いかと思われたが、調査を進めると 2 軒の住居の南側を弥生時代の溝（**YSD2**）がさらに切っていることが判明した。土層観察の結果、古い順に **YSA39**、**YSA30**、**YSD2** となった。両住居とも検出面から浅く、床面もほぼ同じレベルのため平面上での区別は困難であった。**YSA30** の土層断面にわずかに残る高まりが、**YSA39** の立ち上がりと思われる。

**YSA30** は方形を基調とした花弁状住居で、東部に 2 ヶ所の突出壁を持つ。長軸 5.8m、短軸 4.8m で、検出面からの深さは約 16cm である。住居の中央にピットを持つ不整形な浅い土坑（長軸 0.9m、短軸 0.7m、深さ約 10cm）が 1 基確認された。住居内にピットは 20 基以上確認され、そのうち中央土坑の北側と、**YSD2** の北側に位置する 2 基を主柱穴とした。土坑の北側のピットは直径が 25cm、深さが約 60cm である。**YSD2** 近くのピットは直径が 30cm、深さが約 80cm で、ピット東側の上半部はわずかではあるが広がっている。また住居中央の床面は **YSA39** より若干硬くしまっていた。

**YSA39** は、南西部は隅丸方形であるが、北東部は円形であるため不整形なプランである。長軸は 4.6m、短軸は 3.5m、検出面からの深さは約 20cm である。住居内からは数基のピットが確認され、そのうち北西と南東に位置する 2 基のピットを主柱穴とした。南東のピットは直径 25cm、床面からの深さは約 30cm で、北西のピットは直径約 35cm、深さ約 40cm である。住居床面にしっかりした硬化はみられなかった。

住居内堆積土は植物などの撹乱や中世の遺構と思われる①・②層、**YAD2** の堆積土である③・④層、**YSA30** の堆積土である⑤・⑥・⑦・⑧層、**YSA39** の堆積土である⑨・⑩層に分層できる。**YSA30** の埋土である⑤層は黒色シルト土である。**YSA30** の貼床である⑥層は霧島御池軽石を主体とする層で、質感が砂質であることから、硬度を上げるために意図的に軽石と砂を混ぜた可能性がある。⑥層の硬度は 30mm（40kg/cm²）で、厚さは 5cm である。貼床の下に堆積する⑦・⑧層は黒色系シルト土で、

中央土坑や住居北端の一部に堆積する層である。**YSA39** の埋土⑨層は **YSA30** の⑤層と同じ黒色シルト土で、質感や霧島御池軽石の含み具合から分けられた。貼床の⑩層は褐色化した霧島御池軽石を主体とする層で、硬度は 22.5mm（10kg/cm²）、厚さは約 3cm である。

**YSA30・YSA39** の遺物のほとんどが上層からの出土であるが、埋土自体が薄いため、ほぼ床面に近いレベルからの出土である。

**YSA30** からは口縁部部に「V」字状の沈線を持つ壷（**412**）が住居東端の床面から出土している。石器は磨石・敲石が 3 点出土した。

**YSA39** の遺物は出土遺物が少なく、実測可能な土器は甕と壷が 1 点ずつである。

**YSA31（図 41）**

**YSA31** は長軸 3.4m、短軸 2.2m、検出面からの深さは約 8cm の楕円形の住居である。住居内では 5 基のピットが確認され、そのうち住居の長軸（南北）方向に並ぶ 3 基のピットが主柱穴と思われる。南北の住居端に位置するピットは両者とも直径約 30cm、床面からの深さが約 20cm である。中央に位置するピットは、ピット下部の直径が 15cm、深さが 24cm で、ピット掘り形が北上半部で段を生じている。

住居内堆積土は黒色系シルト土の①・②層、と、主柱穴に堆積する③層に分かれる。この住居は 7 層に掘り込まれているが、土層断面に貼床の層が確認できないことや、掘り込み面である 7 層が硬くしまっていることから、住居を掘削し、床を貼らずにそのまま 7 層を床面として使用した可能性がある。床面の硬度は表面が 23.5mm（10kg/cm²）であった。主柱穴に堆積する③層は霧島御池軽石を多く含み、硬くしまっていた。

**YSA33（図 41）**

**YSA33** は東部を近世の遺構によって切られている。現状での長軸は約 6 m、短軸は 5.1m、検出面からの深さは約 45cm で、花弁状住居である。南西部に突出壁を 1 ヶ所形成し、南側に張り出しを作り出している。北東部から西部にかけては中央より 10 ～ 20cm 高くなって、幅 0.8 ～ 1.3m でベッド状遺構を形成している。

住居中央には長軸 1.9m、短軸 1.2m、床面からの深さが約 15cm の土坑が 1 基確認された。この土坑は北部がさらに落ち込んで中に 2 基のピットが東西方向に隣接して並んでいる。東のピットは直径が 25cm で、西のピットはピットの立ち上がりが斜めに大きく広がっており、深さは両者とも約 55cm である。土坑近くの北側の床面からは焼土が確認された。ピットは 23 基確認され、そのうち焼土を挟んで東西方向に位置する 2 基がこの住居の主柱穴と考えられる。東のピットは直径が約 30cm、深さが 50cm である。西のピットは直径が約 30cm、深さが 55cm で、ピット掘り形がやや北に向かって斜め方向に傾いている。

住居内堆積土は植物などの撹乱や、中世の遺構と思われる①・②層、黒色シルト土の③・⑤・⑥層、霧島御池軽石のブロックである④層、明褐色土の⑦層、貼床である⑧層、焼土の⑨層、貼床の下に堆積する⑩・⑪・⑫層、土坑内のピットに堆積する⑬層に分けられる。このうち住居の埋土は③・⑤・⑥・⑦層であるが、⑤・⑥層は中央土坑内に堆積した層で、⑦層は⑥層に鉄分が沈着したような層で、やはり中央部にのみ堆積していることから、住居全体に堆積するのは③層である。貼床の⑧層は表面の硬度が 26mm（20kg/cm²）、厚さが約 7cm で、ベッド状遺構や中央土坑の床面にも堆積が認められた。貼床の下に堆積する⑩・⑪・⑫層は黒色シルト土で、⑪層の質感は軟らかい。ピット内に堆積する⑬層は霧島御池軽石を主体とする層で、硬くしまっていた。

出土遺物は少なく、住居北東部である程度まとまって出土した。中溝式土器の甕（**417**）が東の主柱穴の近くの床面直上から、またその他の甕の口縁部も北東部のベッド状遺構から出土した。

**YSA34（図 41）**

**YSA34** は長軸 4.1m、短軸 3.1 mで、楕円形ではあるが、西辺が 2 ヶ所外側に膨らんでおり不整形なプランを呈する。検出面からの深さは約 15cm である。

住居内施設としては南壁に接して楕円形の土坑（長軸 1.2m、短軸 0.6m、深さ約 10cm）が 1 基確認された。土坑内は中央がさらに 10cm ほど落ち込んでいる。ピットは全体で 7 基確認されてお

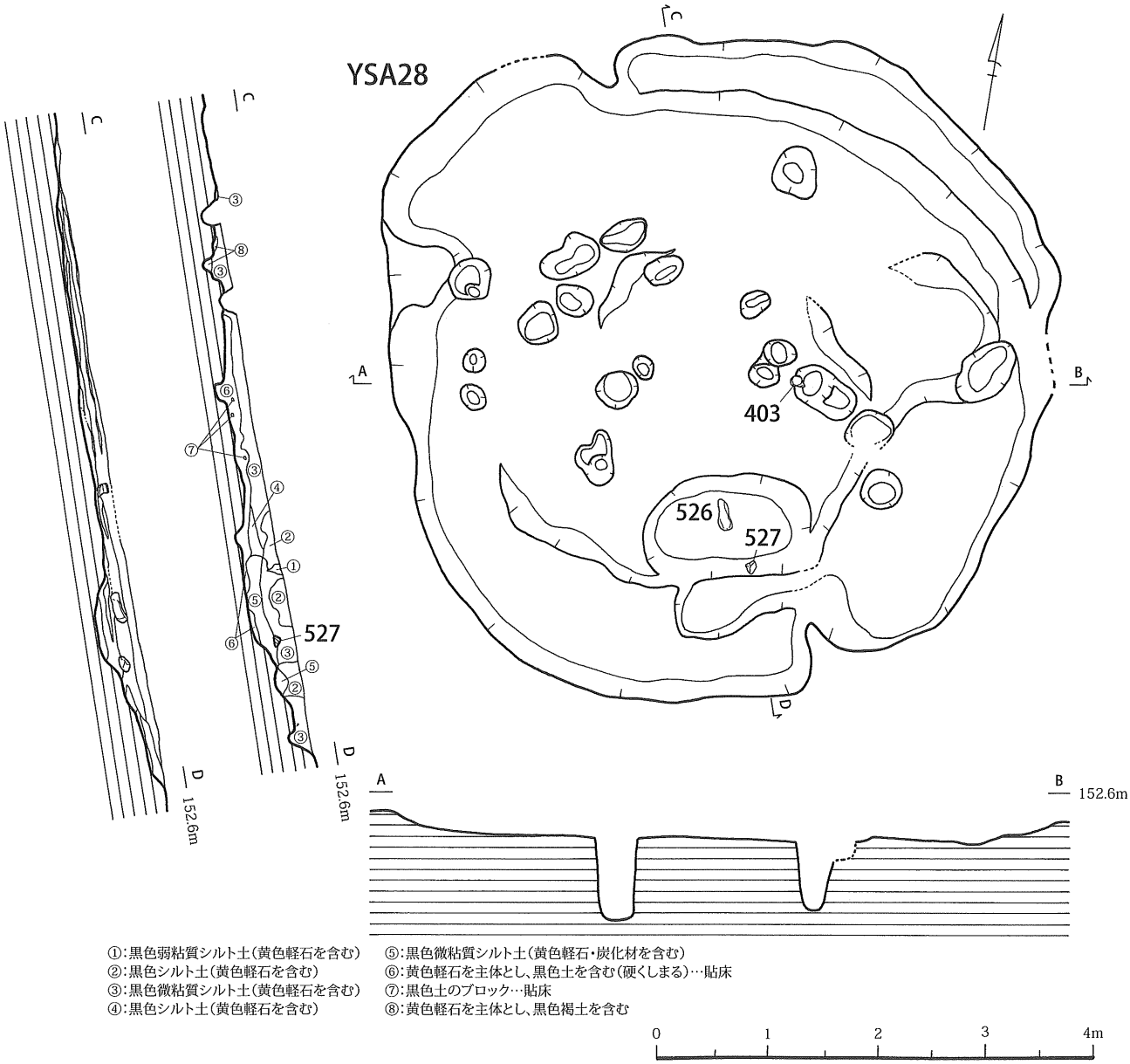



**図38　竪穴住居跡 YSA28 実測図**

り、このうち住居の長軸方向に位置する３基のピットが主柱穴と思われる。東と西の主柱穴は直径約 30cm、深さが約 45cm とほぼ同じ大きさである。中央の主柱穴は直径が 25cm、深さが 30cm とやや東西のピットに比べて小規模である。また住居中央より東部は床面がしっかり硬化しており、あまり硬化していない西部の床面とは顕著な違いがみられた。

住居内堆積土は植物などによる撹乱である①・②層、黒色シルト土の③・④層、貼床の⑤層、⑤層内にブロック状に堆積する⑥層に分けられる。住居廃絶後、④層が住居の西部およびピット内にのみ堆積し、その後③層が住居全体に堆積したと考えられる。先に述べたように住居東部では床の硬化がしっかりしているため⑤層の堆積が均一で、土層断面でも③層とは明瞭に分層できた。⑤層の硬度は東部では 30mm（40kg/cm²）、厚さが約 8cm で、西部では硬度が 23mm（10kg/cm²）で、厚さが約 5cm である。

出土遺物はおもに住居の南部で出土し、軽石製品や磨製石鏃片（**532**）が床面より 10cm 浮いた状態で出土した。

**YSA35（図 42）**

**YSA35** は長軸 2.5m、短軸 1.6m の長方形プランの住居で、検出面からの深さは約 30cm である。住居の壁の立ち上がりが不明瞭で、中央から緩やかに立ち上がる感じである。住居内でピットが７基確認され、そのうちの２基を主柱穴とした。東のピットは直径が約 25cm、深さが 40cm で、ピッ

ト掘り形の上半部がやや広がっている。西のピットは直径 25cm、深さ 30cm である。

住居内堆積土は植物などの撹乱である①・②層、黒色シルト土の③・④・⑤層、貼床の⑥・⑦層に分けられる。このうち④層は住居内全体に堆積しており、主柱穴内にも堆積していた。⑤・⑥層は一部においてブロック状に堆積する土層である。貼床の⑦層は表面の硬度が 27.5mm（30kg/cm²）、厚さが約 15cm である。

出土遺物は少なく、小型甕の口縁部（**421**）が上層より出土している。

**YSA36（図 42）**

**YSA36** は長軸 2.7m、短軸 2.3m の隅丸方形プランの住居で、検出面からの深さは約 18cm である。南東部には土坑状の落ち込みが見られ、中央には浅いピットが確認された。住居内にピットは 5 基確認され、そのうち中央に位置するピットが主柱穴と思われる。直径は約 20cm で、深さが約 30cm である。

住居内堆積土は植物の撹乱や後代の遺構である①層と、住居全体に堆積する黒色シルト土の②層、貼床の③層に分けられる。③層の硬度は表面が 26.3mm（20kg/cm²）で、厚さが 4cm である。

出土遺物は少なく、床面より数 cm 浮いたレベルで出土している。

**YSA37（図 42）**

**YSA37** は長軸 1.9m、短軸 1.7m の隅丸方形プランの住居で、検出面からの深さは約 26cm である。住居内に主柱穴や土坑は確認されなかったが、住居の東辺と西辺に溝状の浅い落ち込みが見られ、中には深さ 5cm ほどの小ピットが確認された。

住居内堆積土は植物などの撹乱と思われる①・②層と黒色シルト土の③・④層、貼床の⑤層に分けられる。⑤層の硬度は表面が 23.5mm（10kg/cm²）で、厚さが約 7cm である。

**YSA40（図 42）**

YSA40 は一部を中世の遺構に切られるが、直径約 1.9m の円形プランの住居で、検出面からの深さは約 18cm である。調査当初は土坑かと思われたが、掘り下げると床面と主柱穴が確認されたため住居とした。ピットは 3 基確認され、そのうちの 2 基を主柱穴と認識した。両ピットとも直径 15cm、深さが 10 ～ 18cm である。

住居内堆積土は植物などによる撹乱の①層、黒色シルト土の②・③・④層、貼床の⑤層に分けられる。⑤層の硬度は表面が 24.5mm（10kg/cm²）で、厚さが約 5cm である。

出土遺物は突帯を持つ甕（**427**）が住居中央の床面から出土した。

**YSA42（図 43）**

**YSA42** は長軸 5.4m、短軸 4.4m の長方形のプランで、検出面からの深さは約 20cm である。住居内施設としては住居南部に直径 1 m、深さ約 35cm の円形の土坑が 1 基確認され、土坑内には東西に 2 基のピットが伴っていた。この土坑内の東ピット下部の直径は約 25cm、深さは約 20cm で、ピット南側の上半部に段がみられた。西ピットの掘り形は南北に長くなっており、深さは約 8cm である。主柱穴は東西端と住居中央に位置する 3 基と思われ、この 3 基は住居長軸（東西）方向に並んでいる。3 基とも直径は 25 ～ 35cm で、深さは東のピットが 55cm、中央・西ピットは約 80cm と、東ピットはやや浅めである。また西のピットは掘り形が住居中心に対して住居外方に傾いて掘られている。その他にピットが 14 基確認されたが、すべて住居壁際で検出された。

住居内堆積土は植物などの撹乱と思われる①層、黒色シルト土の②層、貼床である③層に分けられる。②層は主柱穴内と住居全体に堆積する層である。③層は住居床面に一定して堆積し、床面を平坦に仕上げている。微細粒の霧島御池軽石を多量に含むため、調査当時は層全体が白っぽく見えることから上層の②層とはっきりと区別がついた。硬度は 28mm（30kg/cm²）、厚さは約 10cm である。

出土土器はおもに②層からの出土であるが、（**430・431**）は中央土坑から、（**433**）は床面から、（**429**）は西主柱穴内から出土した。また②層より出土した土器（**434**）に付着した炭化物を年代測定したところ、2140 ± 40 年 BP（1 σ：BC200 ～ 115 年）という数値が得られた。石器は磨製石鏃 1 点、剥片 3 点、磨石・敲石 1 点、砥石 1 点、軽石加工品 1 点が出土している。そのうち砥石（**539**）は床面からの出土である。

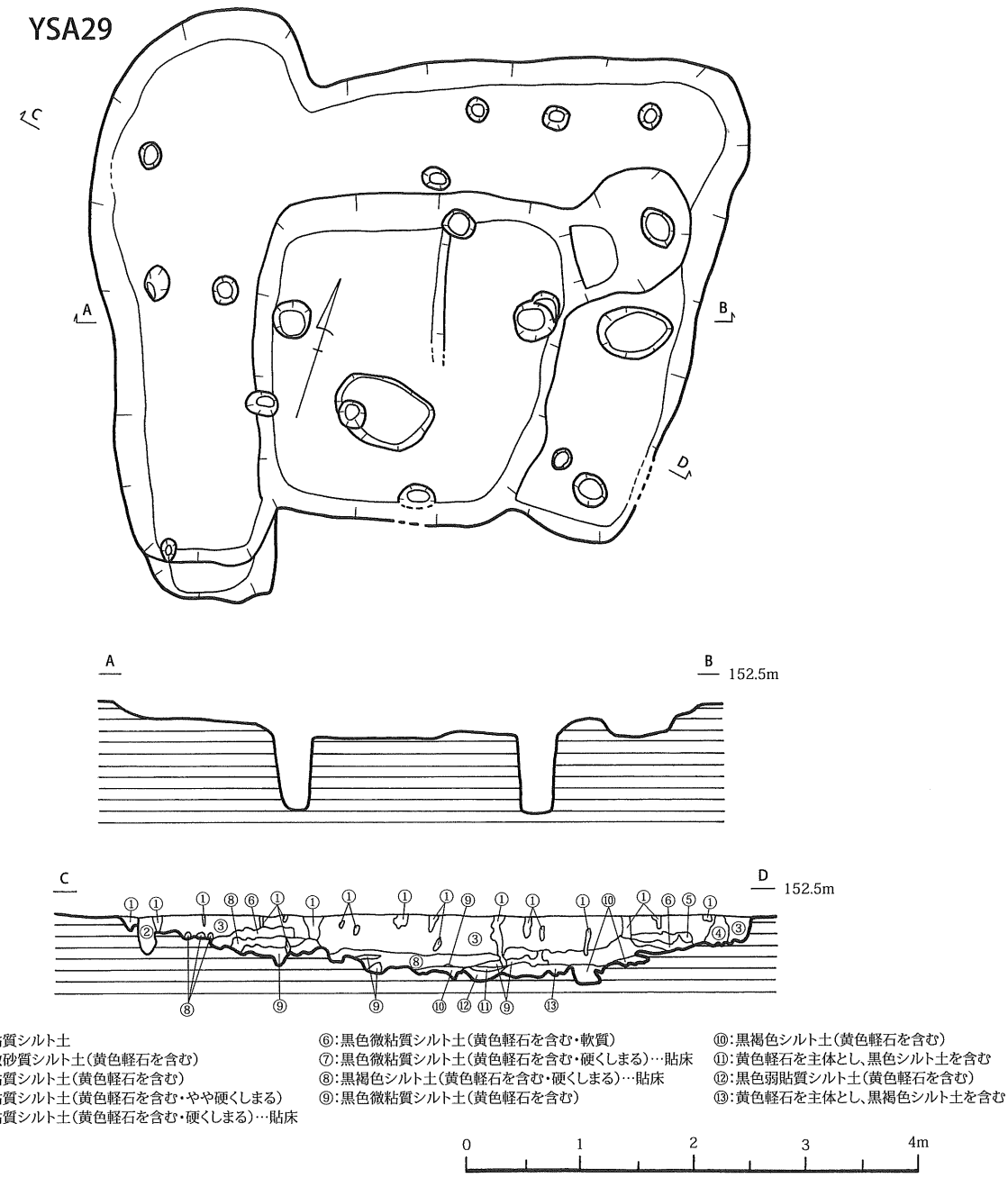



**図39　竪穴住居跡 YSA29 実測図**

**YSA43（図 43）**

**YSA43** は南側を現代の道路によって削平されているため全容は不明であるが、規模は東西辺 4.7m を測り、平面プランは残存部から隅丸方形プランと推定される。検出面からの深さは約 25cm で、床面は平坦である。住居の基本的な構造は **YSA42** と極めて似通っている。

住居内施設としては、住居南部に長軸 1.1m、短軸 0.6m、深さ約 20cm の楕円形の土坑が 1 基確認された。この土坑内には 2 基のピットが伴っており、2 基のピットのうち、東のピットは直径 25cm、西のピットは直径 10cm、深さは両者とも約 6cm と浅めである。住居全体では 16 基のピットが確認され、そのうち東西端と中央に位置する 3 基のピットが主柱穴と思われる。東の主柱穴は直径 25cm、深さが約 65cm、西の主柱穴は直径 35cm、深さ約 85cm である。中央のピットは 2 基に比べるとやや小規模（直径 25cm、深さ 50cm）である。また東西端のピットの掘り形を観察すると、住居中心に対して住居外方に傾いて掘られており、住居中心側には段が認められる。西ピットの上部には入来Ⅱ式甕（**436**）が底部を打ち欠いた状態で埋納されていた。また住居北西コーナーでは規模の同じピット（直径約 30cm、深さ約 15cm）6 基が片寄って検出された。

住居内堆積土は現代の撹乱である①層、中世の遺構である②層、黒色系シルト土の③層、貼床であ

る④・⑤層に分けられる。このうち④層は霧島御池軽石を主体とする層で、⑤層の上に薄く被る様に堆積していた。⑤層より黄色が目立つため、上層である黒色系の③層とははっきり区別がついた。両者とも硬くしまっており、硬度は31mm（50kg/cm²）、厚さは④・⑤層合わせて約8cmである。

遺物は③層から出土し、軽石製品（**543**）は床面から、軽石製品（**544**）や入来Ⅱ式土器の甕（**437**）は東主柱穴の近くの床面直上から出土している。また、先に述べたように甕（**436**）は西主柱穴上部に埋納されていた。

**YSA45（図43）**

**YSA45**は長軸3.5 m、短軸2.2 mの長方形プランの住居であるが、西辺（2.2m）に比べて、東辺（2.9m）のほうが広がった平面形になっている。検出面からの深さは12cmである。住居の基本構造が**YSA42・43**と共通しており、両住居の縮小版ともいえるタイプである。先述した**YSA13**もこの類に当てはまる。

住居内施設としては南壁に沿って不整形な土坑（長軸1.25m、短軸0.9m、深さ約20cm）が1基確認された。この土坑の東部には小さいピット（直径15cm、深さ20cm）が1基伴っている。住居内にピットは4基確認され、そのうち東西端に位置する2基が主柱穴と思われる。両者とも直径は約30cmであるが、東ピットの深さ85cm、西ピットの深さは60cmである。ピットの掘り形をみると、両者ともやや西に傾いて掘られている。また西ピットは底から10cmの高さにわずかな段を持っている。この西ピットの土層を観察すると、ピット下部には黒色土にまみれた霧島御池軽石が、上部には住居内堆積土と同じ土である②層が入っており、この上層と下層の間には霧島御池軽石が薄くベルト状に堆積していた。

住居内堆積土は植物などの撹乱と思われる①層、黒色シルト土の②層、貼床である③層に分けられる。③層は霧島御池軽石を多量に含み硬くしまるため、**YSA42**と同様、層全体が白っぽく見え、上層の②層とははっきり区別がついた。表面の硬度は30mm（40kg/cm²）で、厚さは約10cmである。土坑内からは、土坑の西側から中心に向かって小型甕（**440**）と磨製石鏃1点が流れ込むように出土した。

（文責：外山亜紀子）

**竪穴住居跡出土土器**

**YSA1 出土土器（図44）**

**110**は甕である。復元口径が約32cmある。胴部に1条の三角突帯を巡らす。貼付された口縁部の口唇は強いヨコナデによりくぼむ。入来Ⅱ式に該当しよう。

**YSA3 出土土器（図44）**

**111**は壷の胴部である。頸部から胴部にかけてゆるやかに膨らむ。外面の器面調整はナデで、ススの付着が認められる。胎土中にキンウンモが目立つ。入来～山ノ口式期の所産であろう。**112**は甕の底部である。

**YSA5 出土土器（図44）**

**113**は中溝式甕の胴部で1条の刻目突帯を巡らす。口縁は外反するものが付くと思われる。器面調整は内・外面ともにハケである。**114**は同じく中溝式甕底部、**115**は壷の底部と思われる。

**YSA6 出土土器（図44）**

**116**は中溝式甕の胴部で1条の刻目突帯を巡らす。刻目内には織物状の圧痕が残っている。内面には横位のハケが残る。**117**は壷底部である。器面の磨耗が著しいが、外面にミガキが観察できる。

**YSA7 出土土器（図44・45）**

**118**は中溝式甕の口縁～胴部で口縁部は短く外反する。胴部に1条の刻目突帯を巡らす。復元口径は約28cmある。色調はにぶい黄橙色を呈す。**119**は無文甕で外反する口縁をもつ。口縁端は膨らんでおり、口唇は強いヨコナデにより面取りされる。復元口径は約26cmある。器面調整は内・外面ともにハケである。**120**は口縁が短く外反し、口唇は丸くおさめられる。胴部はストレートぎみに窄まる。外面のハケは強く施されており、ハケメが明瞭に残っている。**121**は無文甕である。口縁端がやや跳ね上げぎみに仕上げられており、口唇は面取りによりややくぼむ。復元口径は約28cmある。胎土はにぶい黄橙色を呈し、焼成は堅致である。

**122**は甕の口縁部で貼付のものである。胴部がかなり膨らむものと思われる。**124～126**は甕の

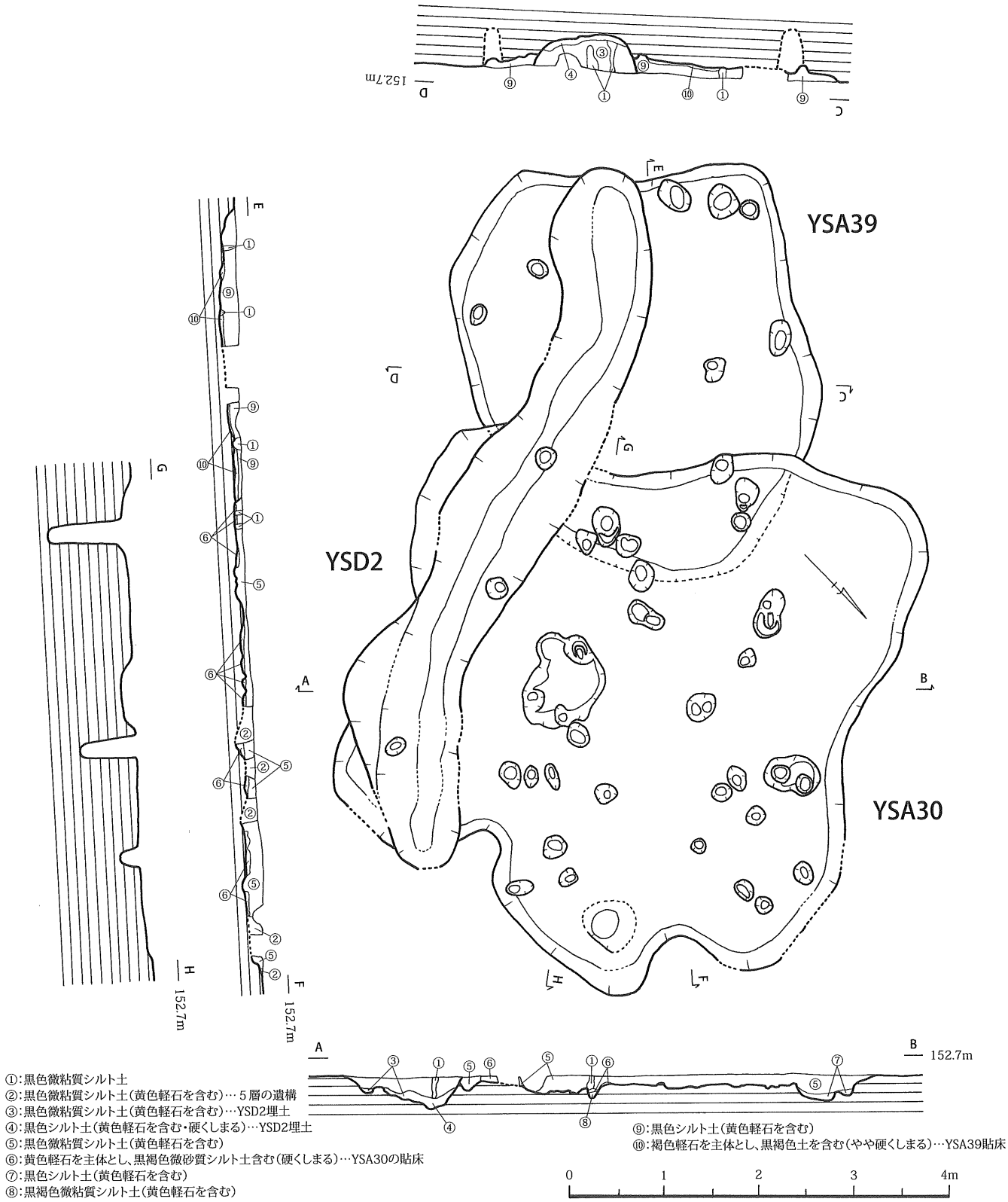


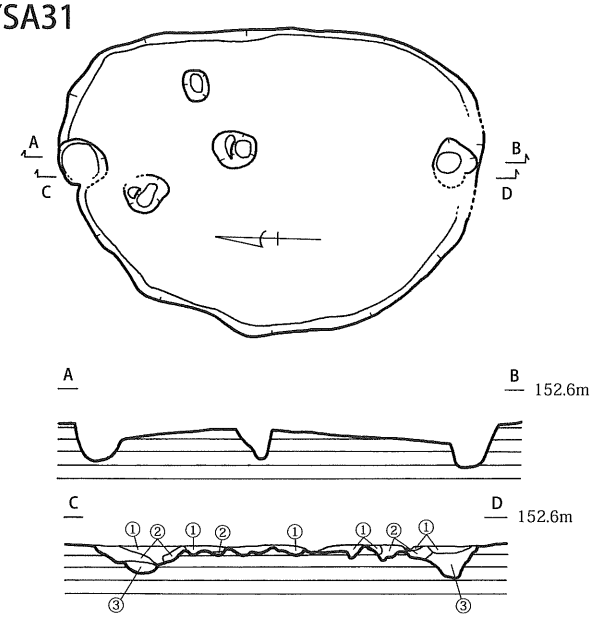

**図40　竪穴住居跡 YSA30・39 溝状遺構 YSD2 実測図**

底部で、**124** は平底、**125** は上げ底、**126** は脚台状の上げ底となっている。**127** は大甕の口縁～胴部で、口縁部は貼付である。復元口径は約 54cm ある。胴部には 1 条の突帯を巡らしている。胎土は橙系色に発色し、他の土器よりも明るい色調を呈している。**128** は大甕の底部であるが、胎土の特徴も似ており 127 と同一個体である可能性が極めて高い。

**YSA8 出土土器（図 45）**

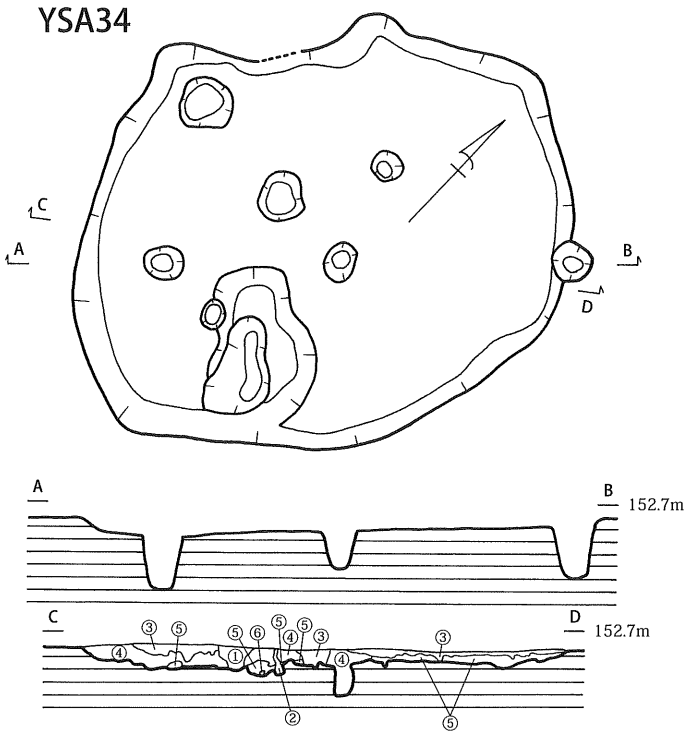
**129** は甕の口縁部で、貼付された口縁部は斜めに立ち上がる。口唇はヨコナデによりくぼむ。内面

## YSA31



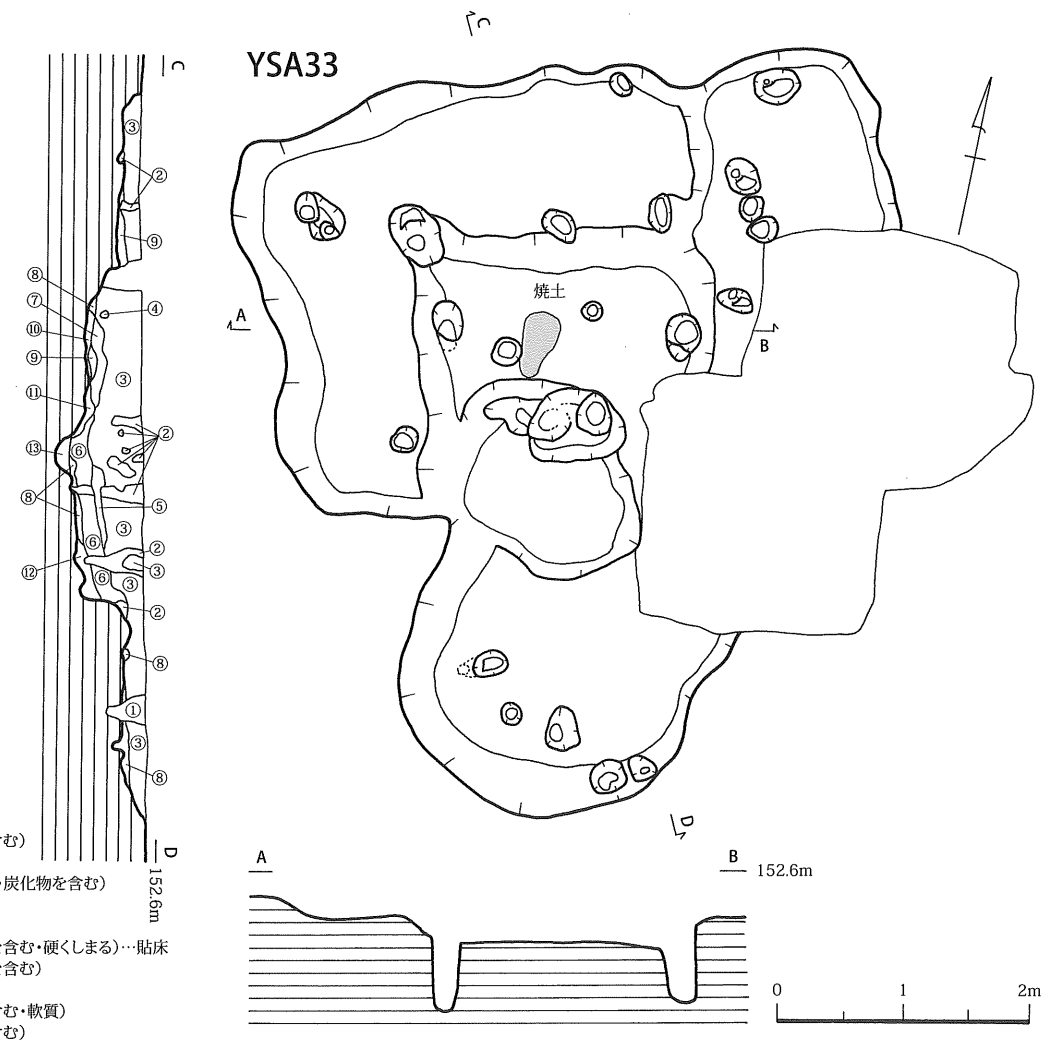

①:黒色弱粘質シルト土(黄色軽石を含む)
②:黒色微粘質シルト土(黄色軽石を含む)
③:黄色軽石を主体とし、黒色シルト土が混ざる

## YSA34




①:黒色微粘質シルト土(黄色軽石を含む)
②:黒色シルト土(黄色軽石を含む)
③:黒色微粘質シルト土(黄色軽石を含む)
④:黒色微粘質シルト土(③より多く黄色軽石を含む)
⑤:黄色軽石を主体とし、黒色軽石を含む(硬くしまる)…貼床
⑥:黒色弱粘質シルトのブロック

## YSA33




①:黒色弱粘質シルト土…5層の遺構
②:黒色弱粘質シルト土
③:黒色微粘質シルト土(黄色軽石を含む)
④:黄色軽石のブロック
⑤:黒色微粘質シルト土(黄色軽石・砂・炭化物を含む)
⑥:黒色シルト土(黄色軽石を含む)
⑦:明褐色シルト土(黄色軽石を含む)
⑧:黒褐色微砂質シルト土(黄色軽石を含む・硬くしまる)…貼床
⑨:明褐色微粘質シルト土(黄色軽石を含む)
⑩:黄色軽石+黒褐色シルト土
⑪:黒色微粘質シルト土(黄色軽石を含む・軟質)
⑫:黒色微粘質シルト土(黄色軽石を含む)
⑬:黄色軽石を主体とし、褐灰色シルト土を含む(硬くしまる)

**図41　竪穴住居跡 YSA31・33・34 実測図**

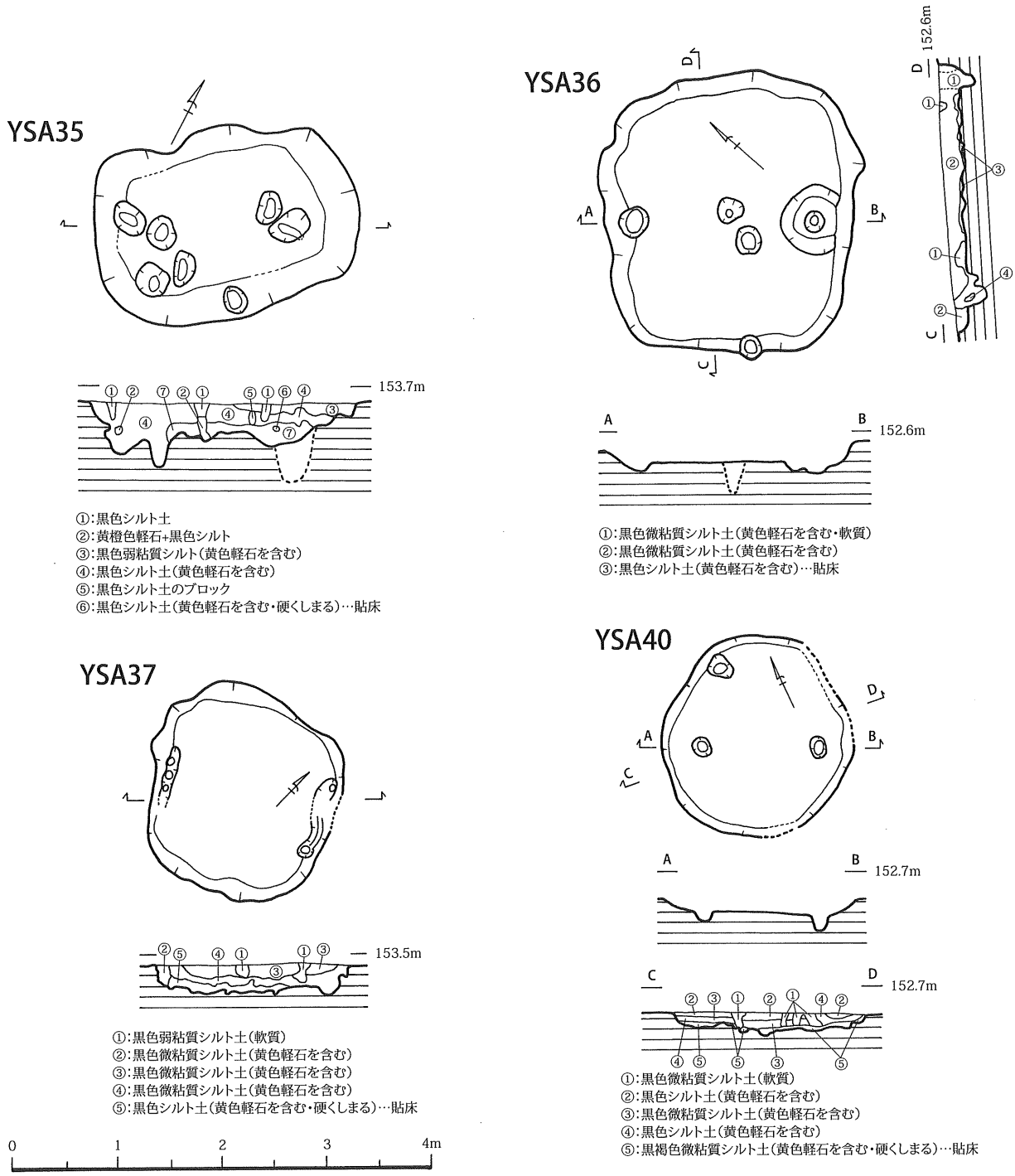



**図42　竪穴住居跡 YSA35・36・37・40 実測図**

にはハケメが残る。胎土は褐色系に発色しており、キンウンモの混入が目立つ。口縁部が立ち上がることから山ノ口Ⅰ式に該当しよう。

**YSA9 出土土器（図 45）**

**130** は壷の胴部である。外面に櫛描直線文及び波状文が施される。両文様とも同一の原体によるものと思われるが、かなり浅く施文されており、ハケ工具のようなもので施文したようである。**131** は甕の口縁部で、丸く厚めのものが貼付されている。**132** も同様であるが、ススの付着が著しい。**133** は入来Ⅰ式に該当する可能性がある。**134** は甕の底部。いわゆる「中実脚台」である。**135、136** はともに壷の底部と思われ、136 の外面にはミガキが残っている。

**YSA10 出土土器（図 46・47）**

**137 ～ 140** は中溝式甕である、**137** は甕の口縁～胴部である。短く外反する口縁部をもち、口唇

はわずかにくぼむ。胴部には1条の刻目突帯が付されており、刻目内には織物状の圧痕が観察できる。器面調整は内・外面ともにハケ調整である。**138** は甕で 137 と同様、胴部に1条の刻目突帯をもつ。器面調整は内・外面ともにハケである。**139** は口縁部が外反している。1条の刻目突帯が付される。**140** は水平方向に口縁部が外反する。**142** は黒髪式系甕の口縁部で内面に稜が形成され、斜めに立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。胎土中にカクセン石の混入が認められる。**143** は甕（鉢？）であるが、口縁側縁に半円形状の把手が付いている。復元口径は約 19.6cm。器面調整は内・外面ともにやや粗めのハケが施されている。**144** は無文甕である。口縁端が面取りされ、口唇はくぼんでいる。

**145** は大甕の胴部で、胴径が約 32.5cm ある。1条のタガ状突帯が付されている。胴部外面にはススの付着が認められる。器面調整は外面が粗めのハケ、内面はヘラ状工具によりナデられる。**147** は甕の胴部である。1条の突帯が貼付されている。突帯の周囲はヨコナデにより整形される。内面にはミガキが認められる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中にはキンウンモの混入が顕著である。**148** は壷の口縁。**151** は山ノ口Ⅱ式甕に該当しようか。**152 ～ 154** は甕の底部で、**152、153** は脚台状の上げ底、**154** は中実脚台で、脚裾はヨコナデによりくぼませている。

**YSA11 出土土器（図 47）**

**155** は無文甕の口縁～胴部である。復元口径は約 30cm ある。口縁部は斜めに外反し、端部に向けやや肥厚しながら丸くおさめられる。胴部はあまり張らず、下半はストレートに窄まっていく。頸部以下にススの付着が認められる。器面調整は内・外面ともにハケである。**156** は甕の口縁部。**157** は 155 と同様の個体である。**158** は甕の口縁～胴部で復元口径は約 27cm ある。口縁部は逆「L」字状に貼付される。胴部には1条の突帯が付され、貼付時と思われるヨコナデの痕が明瞭に残る。色調は浅黄橙色を呈す。入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式の範疇で収まるものであろう。

**159** は甕の胴～底部である。胴部は底部からあまり広がらずに上方へ立ち上がる。上半はススの付着が著しい。器面調整は底部裾から一貫してハケが施される。内面は指頭もしくは工具によりナデられる。**160** は壷底部である。器面は剥離が著しく、細かな調整等は確認できない。**161・162** は甕底部である。

**YSA12 出土土器（図 48 ～ 50）**

**163** は瀬戸内系と考えられる壷の口縁～胴部である。復元口径は約 14.8cm、胴部最大径は約 28cm を測る。外形は外反した口縁が頸部でくびれた後、胴部に向け膨らみながら湾曲する。口縁端は肥厚させており、口唇はヨコナデにより擬凹線状に整形され、工具による刻目状の沈線が付される。頸部には爪もしくは細工具による列点文がやや不規則に全周の半分程度巡らされている。器面調整は外面がハケの後、胴部下半に縦位ミガキ、上半には横位ミガキが施される。内面は指頭もしくは工具によりナデられている。外面は橙色に発色し、明るめの色調を呈す。

**164 ～ 168、172** は中溝式甕である。**164** は口縁～底部まで揃う。復元口径が約 30cm、底径は約 7cm、器高は約 31cm を測る。外形は底部から緩やかに湾曲しながら上方へ立ち上がり、胴部中位付近からストレートぎみに真っ直ぐ立ち上がる。底部は平底である。口縁部は端部を少しだけ肥厚させ、口唇はナデにより面取りされる。頸部下には1条の刻目突帯が貼付される。刻目内には織物状の圧痕が観察できる。器面調整は外面がハケ後ナデ、内面は胴部上半にハケメが残り、胴部中位には指爪のような痕が多く付いている。

**165 ～ 168** には刻目突帯が貼付されており、刻目はいずれもヘラ状工具によりつけられる。**171** は口縁部が貼付され、斜めに立ち上がる。**172** は口縁～胴部で、復元口径は約 28cm を測る。胴部に1条の刻目突帯が付されている。**173** は小型甕の頸～胴部である。**174** は甕の底部で平底である。**175 ～ 178** は中溝式甕の口縁～胴部でいずれも1条の刻目突帯を巡らす。**176** の刻目内には織物状の圧痕が観察できる。他のものはヘラ状工具で刻みを入れている。口縁部は短めに外反し、口唇はヨコナデにより平坦面を作出している。器面調整は内・外面ともにハケである。**179** は甕で肥厚ぎみの口縁を持ち、胴部には1条の突帯が貼付される。復元口径は約 32cm ある。器面調整は外面がハケ後ナデ。内面もナデられているが頸部付近では指頭によるオサエの痕が明瞭に残されている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、白色鉱物粒の混入が目立つ。**181** も甕で口縁～底部まで揃う。復元口径は約

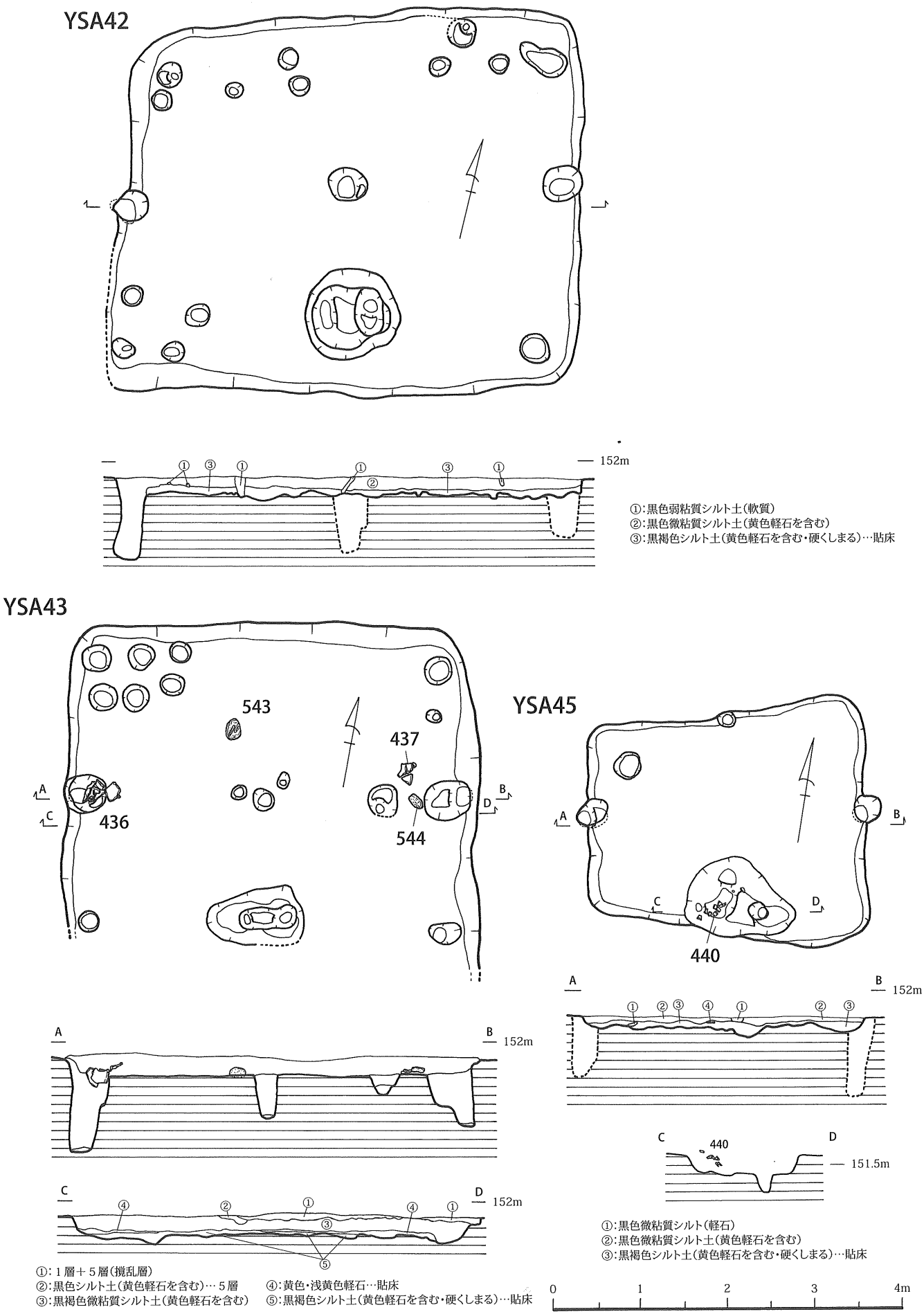



図43　竪穴住居跡 YSA42・43・45 実測図

27cm、底径は約 7cm、器高は約 23cm である。口縁部は厚く、短いものが貼付される。口唇はヨコナデによりわずかにくぼむ。器面調整は外面がハケで細かいハケメが明瞭に残る。内面はハケの後ナデで、部分的にハケメが残る。**182** は甕の底部である。

**YSA13 出土土器（図 50）**

**183** は広口壷の口縁部である。復元口径は約 32cm を測る。口唇は面取りされた後、ヨコナデによりくぼませている。外面は縦位ミガキを施し、暗文状に仕上げている。内面は横位ミガキ。色調は明赤褐色を呈しており、他の土器より明るい色調となっている。胎土中には白色鉱物粒が目立つ。須玖式と考えられ、搬入品と思われる。**184** は甕の口縁～胴部で、口縁は貼付、胴部には 3 条の突帯を付す。突帯部分は丁寧にヨコナデされ、シャープに仕上がっている。胎土中にキンウンモが多く混入している。入来Ⅱ～山ノ口Ⅰ式と考えられる。

**185** は甕で口縁部が逆「L」字状となっている。**186** は甕の口縁部で短く厚いものが貼付されている。**187** は甕の胴部であるが、3 条のミミズバレ状突帯の下部に指爪による列点文が施文されている。胎土は粗製で、鉱物の混入が多い。後述の YSA16 資料（257、258）等と同様の個体と思われる。

**YSA15 出土土器（図 51 ～ 53）**

**188** は壷の頸～胴部である。胴部最大径は約 28cm で、胴部には 1 条（＋α）の突帯が付される。頸部には沈線(摩滅ぎみ)が 3 本程あり、ススの付着も認められる。器面調整は外面が頸部に縦位ハケ、胴部に横位ハケが施される。内面は指頭もしくは工具によりナデられる。**189** は壷の口縁～頸部である。頸部には 3 条（＋α）の突帯が付される。色調は外面が浅黄橙色を呈し、胎土中に鉱物粒の混入が目立つ。**190** は壷の頸部で 8 条（＋α）の突帯が付される。外面はかなり細かい横位ミガキにより仕上げられる。その為か外面は光沢をもった暗褐色の色調を呈す。

**193** は山ノ口Ⅱ式甕の口縁～胴部である。復元口径は約 30cm。貼付された口縁部は斜め上方へ立ち上がる。胴部には 3 条の突帯が付される。胎土中にはキンウンモの混入が目立つ。**195** は胴部に張りを持つものと思われる。**196** は口縁部であるが端部がやや跳ね上げぎみになっている。**198** は無文甕の口縁～胴部である。貼付された口縁は先細りぎみに伸び、端部は丸く仕上げられる。**199** も甕の口縁～胴部で、口縁内面には稜を形成している。胴部には 1 条（＋α）の突帯が付く。**200** はいわゆる「下城式」系甕の口縁部である。平坦口縁の直下にやや厚めの刻目突帯を貼付している。刻目はヘラ状工具によるものと思われる。

**203 ～ 206** は無文甕の口縁～胴部である。**203** は口縁部を短く折り曲げる。**204** は貼付のもの。**205** は口縁端がやや跳ね上げぎみに肥厚する。ススの付着が著しい。器面調整は内・外面ともにハケである。**211** は中溝式甕の胴部と考えられ、刻目突帯が貼付される。**212** は無文甕で復元口径が約 21cm、やや小ぶりである。**213** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 25cm を測る。口縁部はかなり上方に立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。頸部下に 1 条の突帯が巡らされている。外面にはススの付着が著しい。**214・215** は鉢である。**215** は口縁部を指頭によるツマミによって仕上げる。口縁外面および内面には指頭によるオサエの痕が目立つ。胎土中には白色・黒色の砂粒が多く混入している。**216** は甕の頸～胴部である。頸部下には 1 条の突帯が付される。器面調整は外面がハケ後ナデ、内面にはハケメが残る。**218** は壷の底部である。内・外面ともにミガキが残る。**219 ～ 222** は甕の底部である。**220** はハケメが顕著に残る。**221** は脚台状をなす。

**YSA16 出土土器（図 54 ～ 56）**

**223** は壷の口縁～頸部である。復元口径は約 18cm ある。口唇をわずかにくぼませている。全体的に磨耗しており、器面調整等は確認できない。色調は橙色を呈し、明るめに発色している。**224** は壷の口縁部である。内・外面ともにミガキが顕著である。**225** は壷の頸～胴部である。3 条の突帯が付されている。**226** は壷の口縁部である。破片のため確認はできないが、断面形が鋤先状をなす可能性もある。**227** は壷の胴部である。全体的に器面が荒れているが、外面には部分的にミガキが残る。内面には工具ナデが施される。色調は橙色で、胎土中に赤褐色の砂粒が多く混入しており目立つ。**228** は壷の胴部である。2 条（＋α）の断面「M」字状突帯が貼付されている。胎土中にはキンウンモの混入が目立つ。**229** も壷の胴部である。3 条の突帯が付される。外面には工具の痕が残っている。胎

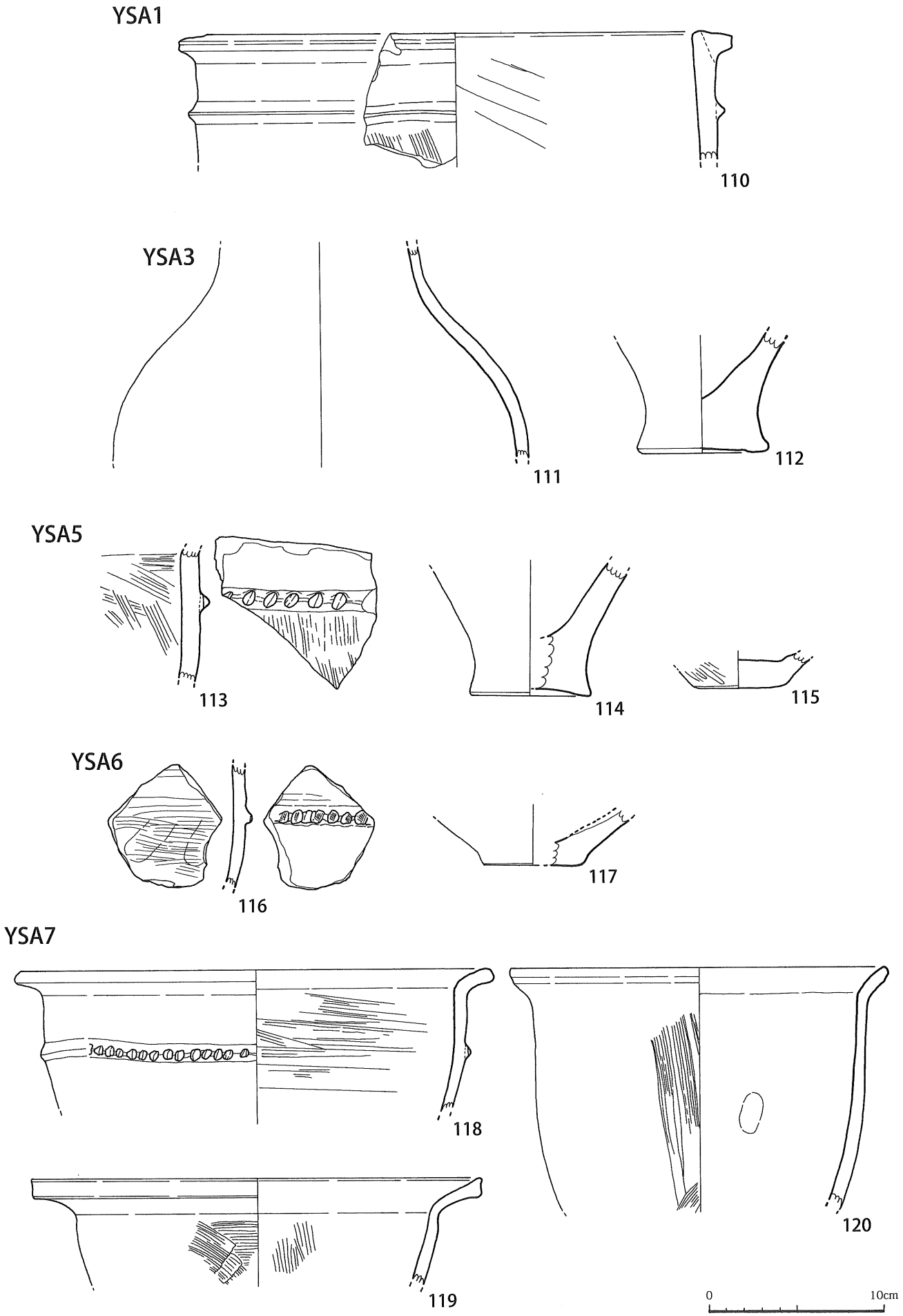



図44　竪穴住居跡出土土器

土には白色粒、キンウンモの混入が目立つ。入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ・Ⅱ式期の資料であろう。**230** は壷の底部である。丹塗が施されており、明るい橙色を呈す。器壁が厚くはなく、小型品の可能性もある。外面には斜位ミガキが部分的に観察できる。胎土中の混入物も少ない。

**231** 以降は甕である。**231 ～ 239**、**241 ～ 243** は入来Ⅱ式に該当する。基本的には口縁部が貼付で、口唇は丸くおさめたり、ヨコナデによりくぼませたりする。**231** は小型甕の口縁～胴部で、口縁部は貼付である。頸部下に極めて細い突帯を２条付している。その下には穿孔が施される。穿孔部には紐を通していたようで、内面には紐ずれの痕が残る。胎土中にキンウンモを多く含んでいる。**235** は胴部に沈線が２本描かれている。**239** には１条（＋α）の突帯が付く。**241** は甕の口縁～胴部で復元口径は約 32cm を測る。口縁部は貼付で逆「Ｌ」字状に貼付される。胴部には３条の突帯が付く。器面調整は外面が細かいハケ、内面はハケ後ナデである。色調はにぶい橙色を呈す。**242** も 241 と同様、口縁部が貼付であるが、胴部には３本の沈線が描かれる。胎土中にはキンウンモが目立つ。**244** は山ノ口Ⅱ式に該当しよう。**245** は中溝式甕で口縁部は外反し、胴部に刻目突帯が付される。**246・247** も外反する口縁をもつものであるが、**247** は外面の器面調整に縦位ミガキが確認できる。色調は灰黄褐色で暗めである。

**249** は「下城式」系甕の口縁部である。口縁部直下にやや間延びした刻目突帯が付される。刻目はヘラ状工具により細かくつけられる。**250** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 28cm。口縁部は丸く厚めのものが貼付されている。器面調整は外面にミガキが認められる。内面はナデであるが、接合線が完全に消されておらず、不十分である。胎土中にキンウンモを多く含む。**253** は甕の胴部で櫛描波状文を施文する。

**254** は甕の口縁～胴部で復元口径は約 32cm ある。口縁部は外反し、胴部はゆるやかに膨らむ。口唇は面取りされる。全体的に磨耗しているが、外面には横位ミガキが部分的に残る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。形態的にみると後期に該当しうる資料である。**256** は甕の底部で、中実脚台である。

**257 ～ 267** はいずれも同じ一群として扱える資料である。**257** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 27cm、胴部最大径は中位にあり約 28cm を測る。口縁部は厚く肥厚させたものを貼付している。胴部には４条の絡縄（ミミズバレ状）突帯を巡らす。器面調整は口縁～頸部外面に横位ミガキ、胴部外面には縦位ミガキを施す。内面はナデである。色調は外面が明赤褐色で明るめに発色している。胎土中にはカクセン石の混入が認められる。**258** は甕の口縁～胴部である。胴部には４条の絡縄（ミミズバレ状）突帯を貼付している。器面調整は内・外面ともにミガキが確認できる。**259 ～ 262** は甕底部である。**259** は外面にミガキが確認できる。胎土中にキンウンモが混入している。**262** は二次披熱によるとみられる剥離が著しいが、部分的にミガキが残っている。胎土の質感が 257、258 と類似しており、これらの底部である可能性が高い。**263 ～ 265** は甕の口縁部で内・外面ともに細かなミガキが残っている。**266** は甕の胴部である。４条の突帯の下に半円状の粘土紐を貼付している。内面は横位ミガキが施される。**268** は甕の胴～底部である。底径が約 8cm ある。器面調整は内・外面ともにハケである。胎土中にキンウンモが多く混入している。

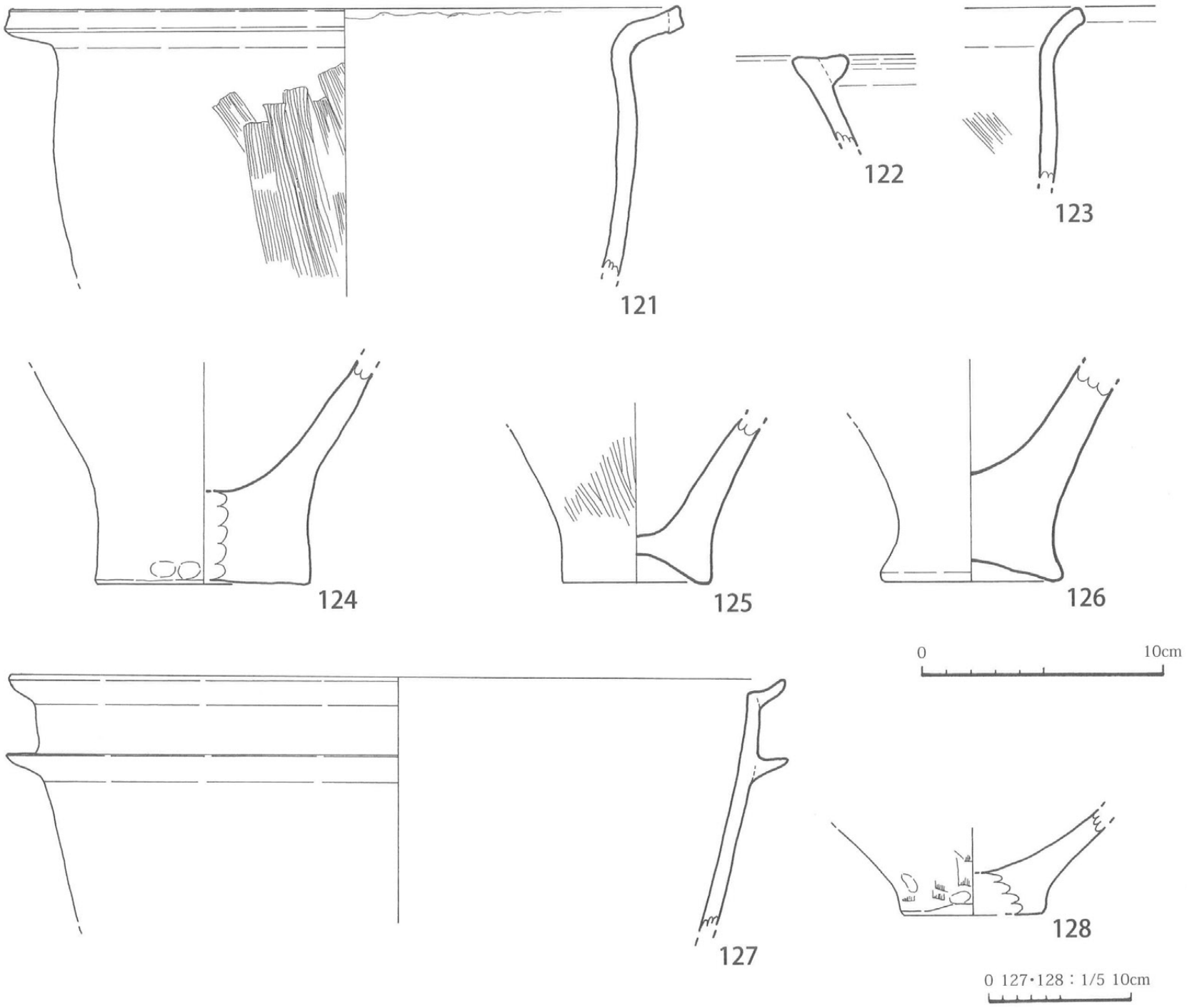
**YSA17 出土土器（図 57）**

**269** は甕の口縁～胴部である。胴部に１条の刻目突帯を付す。刻目内には織物状の圧痕が残る。中溝式甕とも見てとれるが、口縁部は貼付によるものである。**270・271** はともに甕の口縁部で、**270** は貼付、**271** は外反させるものである。

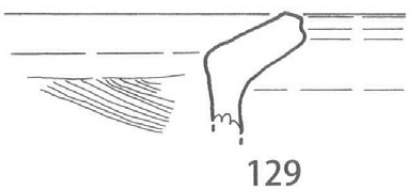
**YSA18 出土土器（図 57）**

**272** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 20cm。口縁部は貼付のものが斜めに立ち上がる。色調は橙色で、胎土中に赤褐色の砂粒が多く混入している。**273** は壷の頸部である。３条の突帯が付される。**274・275** は入来Ⅱ式甕の口縁～胴部で、口縁部は貼付のものである。**276** は小型甕で復元口径は約 16cm ある。口縁端を短く折り曲げている。外面にはススの付着が認められる。**277** は鉢である。**278** は甕の口縁～胴部で、頸部内面にはオサエの痕が残る。**279** は甕の口縁部である。復元口径は約 26cm。口縁部は逆「Ｌ」字状に貼付したものに、頸部外面に粘土を充填している。口縁内面に

YSA7




YSA8




YSA9

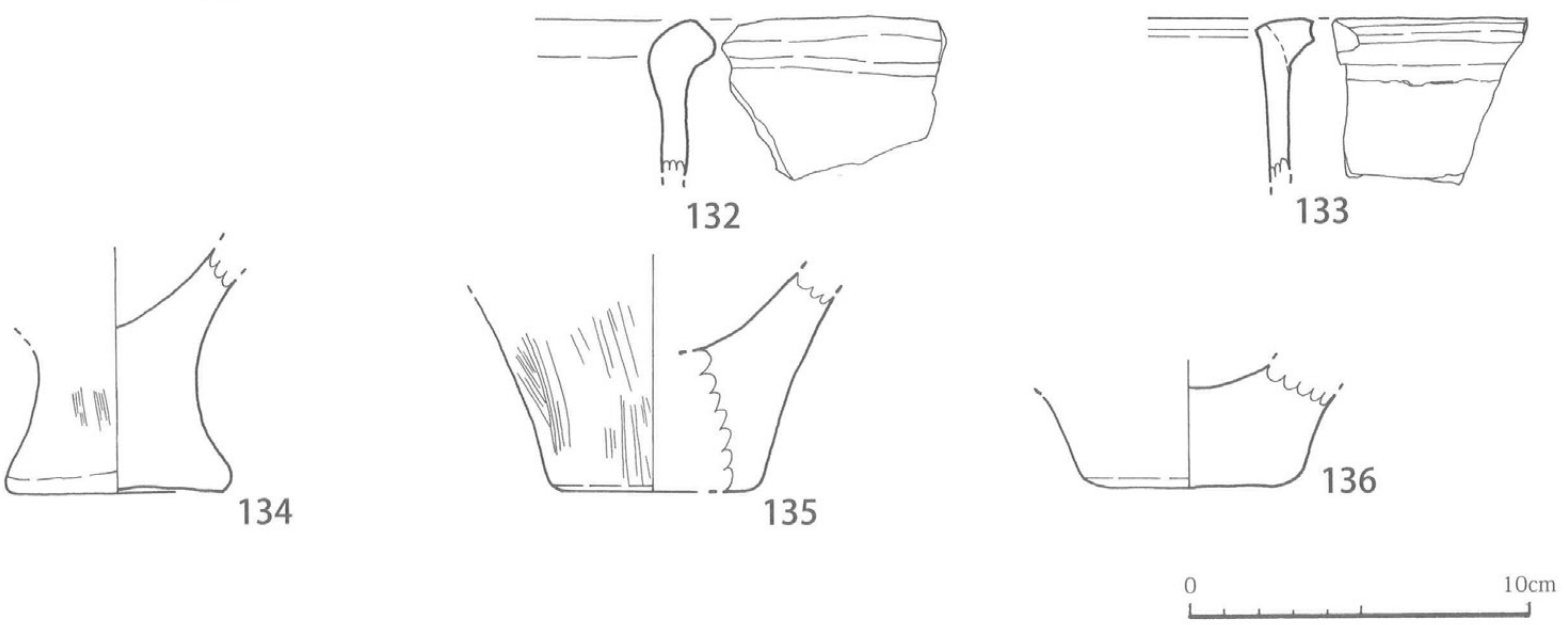



図45　竪穴住居跡出土土器

は稜を形成している。

**281** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 30cm ある。口縁部は外反し、口唇は面取りされる。無文で器面調整は内・外面ともにハケである。**282 ～ 286** は甕の口縁部である。**282** は山ノ口Ⅱ式甕に該当し、胎土中にキンウンモの混入が目立つ。**285・286** は口縁部を外反させるものである。**288・290・291** は甕の底部である。**289** は鉢としたが壷胴部の可能性もある。外面は磨耗が著しく、調整は不明である。内面には細かいハケが施される。焼成がやや甘く、軟質である。

**YSA19 出土土器（図 58･59）**

**292** は壷の口縁～頸部である。復元口径は約 16cm である。口縁部は単純に外反し、口唇は面取りされ平坦である。頸部には 1 条突帯を巡らす。外面にはハケが部分的に残る。**294** は壷の口縁部である。断面形は鋤先状になる。口縁上面は平坦につくり、内面は突起状に稜を形成する。口唇部はヨコナデによりくぼませている。頸部外面には縦位ミガキ、内面には横位ミガキを施す。**295・296** は丹塗広口壷の口縁部である。外面は縦位ミガキにより、暗文状となる。内面には横位ミガキを施す。いずれもミガキは精緻なものである。

**297** は山ノ口Ⅰ式甕の口縁～胴部である。口縁部は貼付で、口唇部をヨコナデによりくぼます。胴部には 1 条（＋α）の突帯を巡らす。器面調整は内･外面ともにナデである。**298** も貼付口縁甕である。入来Ⅱ式に該当するものと考えられる。**299・300** は山ノ口Ⅱ式甕と考えられる。**299** は貼付された口縁が斜めに立ち上がる。復元口径は約 26cm を測る。胴部には 3 条の突帯が付く。器面調整は内・外面ともにナデである。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土中には赤褐色粒が混入する。**300** は甕の口縁～胴部である。貼付された口縁部は口唇が僅かにくぼむ。胴部には 1 条の突帯を付している。器面調整は内・外面ともにハケである。胎土中には砂粒が多く混入している。

**302** からは甕の口縁～胴部である。**305 ～ 310** は口縁部を外反させる。**311** は中溝式甕である。口縁部を外反させ、端部はやや膨らむ。胴部には 1 条の刻目突帯が付される。内面には横位ハケが残る。**312** も甕の口縁～胴部である。頸部下には刻目突帯が付される。刻目は鋭利な工具によって付けられており、器面には線刻が残る。中溝式甕の範疇に含まれるものであろう。**313** は中溝式甕の口縁～胴部である。胴部には 1 条の刻目突帯が付される。刻目はヘラ状工具で付けられる。器面調整は内・外面ともにハケが施される。色調はにぶい黄橙色を呈す。**319** は大甕の口縁部である。口唇部をわずかにくぼませている。**320・321** は甕の底部である。**322・323** は壷の底部である。外面には縦位ミガキが残る。

**YSA20 出土土器（図 59）**

**324** は入来Ⅱ式甕の口縁～胴部である。YSA20 の古い段階の住居から検出されている。復元口径は約 26cm を測る。口縁部は貼付で、口唇はヨコナデによりくぼむ。胴部には 1 本沈線が巡っている。色調は灰黄褐色を呈し、胎土中にはキンウンモが多く混入している。

**325 ～ 338** は YSA20 の新しい段階の住居から検出されたものである。**327** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 15cm で小型である。口縁上面には孔が穿っている。器面調整は内・外面ともにハケである。山ノ口Ⅱ式と思われる。**325** は壷の口縁部である。復元口径は約 16cm を測る。全体的に器面が荒れており、調整は確認できない。胎土中には鉱物粒が多く混入している。**328** は中溝式甕の口縁～胴部である。復元口径は約 32.6cm を測る。口縁部は外反し、端部はヨコナデにより面取りされる。胴部には 1 条の刻目突帯が付され、刻目内には織物状の圧痕が確認できる。器面調整は外面にハケが施される。色調は橙色を呈し、明るめに発色している。

**329** は甕の口縁部である。復元口径は約 30cm である。口縁部は貼付で、口唇はヨコナデにより平坦面をつくる。胴部は膨らみながら広がるものと思われる。器面は外面に横位ミガキを施しており、光沢を持っている。**330 ～ 336** は甕の口縁～胴部である。**330 ～ 334** は貼付のもので、334 以外はキンウンモを多く含んでいる。**335・336** は無文甕で口縁部を外反させる。**337** は甕の底部である。中実脚台である。**338** は把手と考えられる。破片であり、天地不明であるが、推定により図化した。端部は平坦面を作っている。調整はナデによる。

YSA10

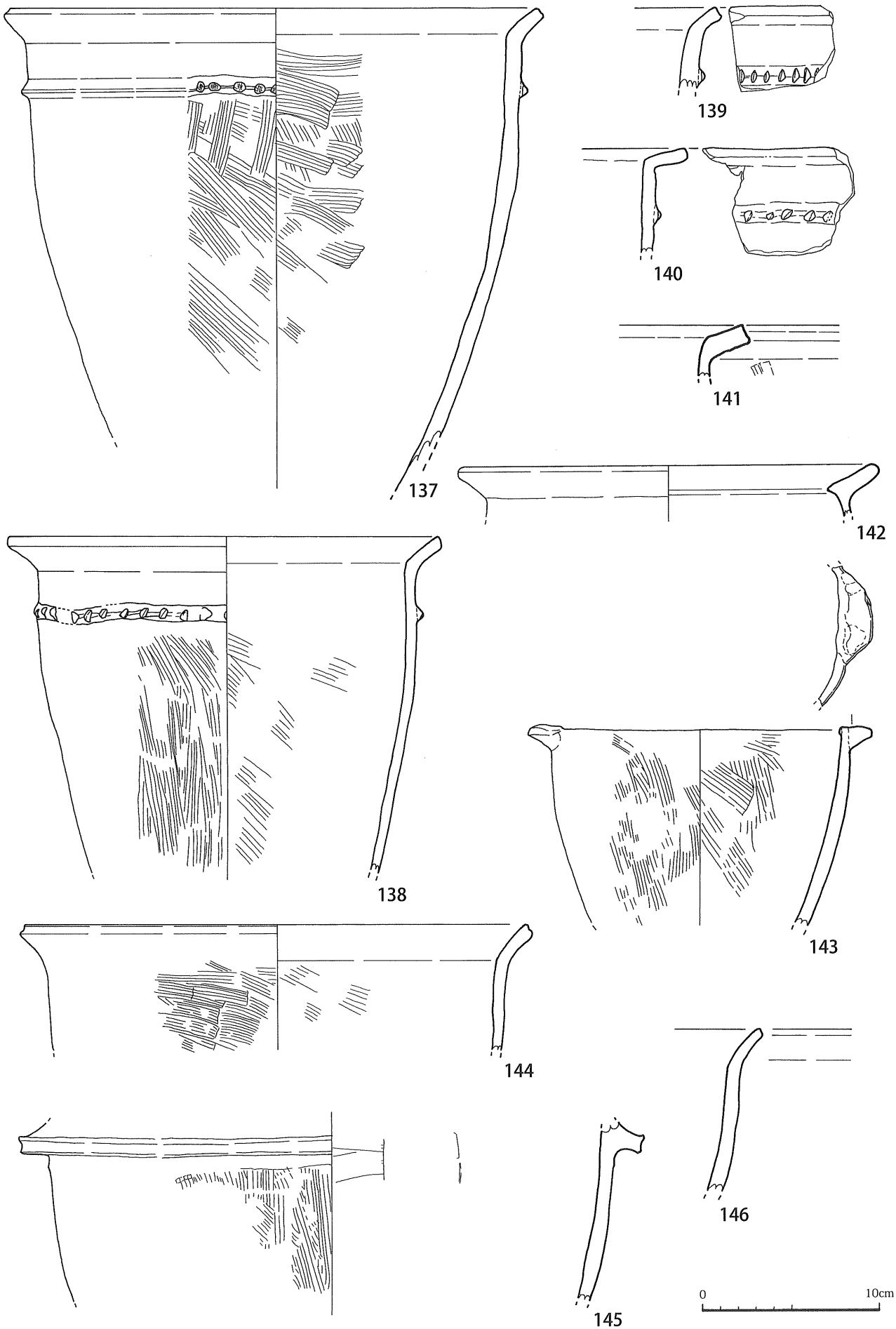



図46　竪穴住居跡出土土器

**YSA21 出土土器（図 60）**

**339** は山ノ口Ⅱ式甕の口縁～胴部である。復元口径は約 31cm ある。口縁部は貼付で、先端に向け細長く伸びる。口唇はヨコナデによりくぼむ。胴部には 3 条の突帯が巡っている。器面調整は内・外面ともにハケである。胎土中にキンウンモの混入が目立つ。

**YSA22 出土土器（図 60）**

**340** は甕の胴部である。3 条（＋α）の絡縄（ミミズバレ状）突帯を付している。焼成がやや甘く、胎土も粗製である。胎土中にはカクセン石が認められる。YSA16 から検出されている 257 と同様の個体と考えられる。

**YSA23 出土土器（図 61 ～ 64）**

**341** は山ノ口Ⅱ式壷の口縁～頸部である。口縁部は貼付で、下垂しながら端部へ向け細長く伸びる。頸部には 1 条（＋α）の突帯が付く。器面調整は外面がナデ、内面は磨滅しており不明である。**342** は壷で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 12cm、胴径は約 13cm、底径が約 6cm、器高が約 17cm と小型である。外形はラッパ状に開いた口縁が頸部で直線的に窄まる。胴部は緩やかに膨らむ。底部は平底である。器面調整は胴部外面にミガキを確認できる。内面はナデである。**343** は壷の胴部と考えられる。胴部には 1 条の突帯を巡らす。底部は平底だが、やや凸レンズ状となる。披熱のためか、器面の剥離が著しく、調整は不明である。

**344** 以降は甕である。**344 ～ 346** は入来Ⅱ式と考えられる。口縁部が貼付のもので、断面が逆「L」字形になる。**346** には胴部に沈線が入る。**348・349** は山ノ口Ⅱ式甕と考えられる。**348** は口縁～胴部である。復元口径は約 31cm。口縁部は貼付で斜めに立ち上がる。口唇はヨコナデによりわずかにくぼむ。胴部には 3 条の突帯が付される。胎土中にはキンウンモの混入が目立つ。**350** も甕の口縁～胴部である。復元口径は約 32cm ある。口縁部は逆「L」字状に貼付され、端部には丸みを持たせている。口唇は沈線状にくぼむ。胴部には 1 条（＋α）の突帯が付く。**351 ～ 356** は口縁部である。入来Ⅱ式に該当するもの（**352、353**）、山ノ口Ⅰ～Ⅱ式に該当するもの（**355、356**）がある。

**357 ～ 359** は中溝式甕である。**357** は口縁～胴部である。復元口径は約 29cm である。口縁部は短く折り曲げ、口唇は平坦に仕上げる。胴部には 1 条の刻目突帯を巡らす。器面調整は内・外面ともにハケで、ハケメが明瞭に残る。**358** は同じく口縁～胴部である。復元口径は約 26cm である。胴部に 1 条の刻目突帯が巡る。突帯上の外面には刻目をつけた時の工具痕が残る。器面調整は内・外面ともにハケである。**360** は口縁～底部まで揃う。復元口径は約 26.4cm。底径は約 6cm。器高は約 29cm を測る。口縁部は外反し、口唇は平坦に仕上げられる。胴部は張らずに底部へと向かう。底部は上げ底状のものがついている。胴部に 1 条の刻目突帯を巡らす。刻目は棒状工具による押圧刻みである。器面調整は内・外面ともに細かいハケによる。色調はにぶい黄橙色を呈す。

**361 ～ 364** は甕の底部である。上げ底ぎみのもの（**361、362**）、平底（**363、364**）のものがある。**365** は小型の鉢である。外面にはススが付着している。**366** は小型甕の口縁部である。復元口径は約 20cm。**368** も小型甕であるが、口縁部は粘土紐を貼付している。外面はナデ仕上げ、内面にはハケメが残る。胎土は軟質で粗製である。**369** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 32cm。胴部にはやや厚めの突帯が 1 条巡る。**371** は中溝式甕で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 30cm。底径は約 7cm。器高約 35cm である。口縁部は外反し、胴部はあまり張らない。底部は上げ底状の脚台を持ち、脚裾が開く。胴部には 1 条の刻目突帯が巡る。刻目はヘラ状工具によってつけられる。器面調整は外面がハケ、内面はハケ後丁寧にナデている。

**378** は甕の口縁部である。口縁部は外反し、上面に瀬戸内系のいわゆる「矢羽根透かし」をモチーフとした線刻が施されている。線刻は全部で 5 個確認でき、連続的に描かれている。線同士が切り合ったり、完全に結線されていない部分も見られる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には砂粒が目立つ。**379、380** は甕の底部で、中実脚台である。**379** にはキンウンモの混入が認められる。

**383 ～ 388** は無文甕である。**383** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 27cm を測る。口縁部は折り曲げで、口唇は平坦に仕上げる。胴部にはススが付着する。器面調整は外面に細かいハケが用いられ、内面はナデによって仕上げられる。**387** は口縁から底部まで揃う。復元口径は約 27cm、底

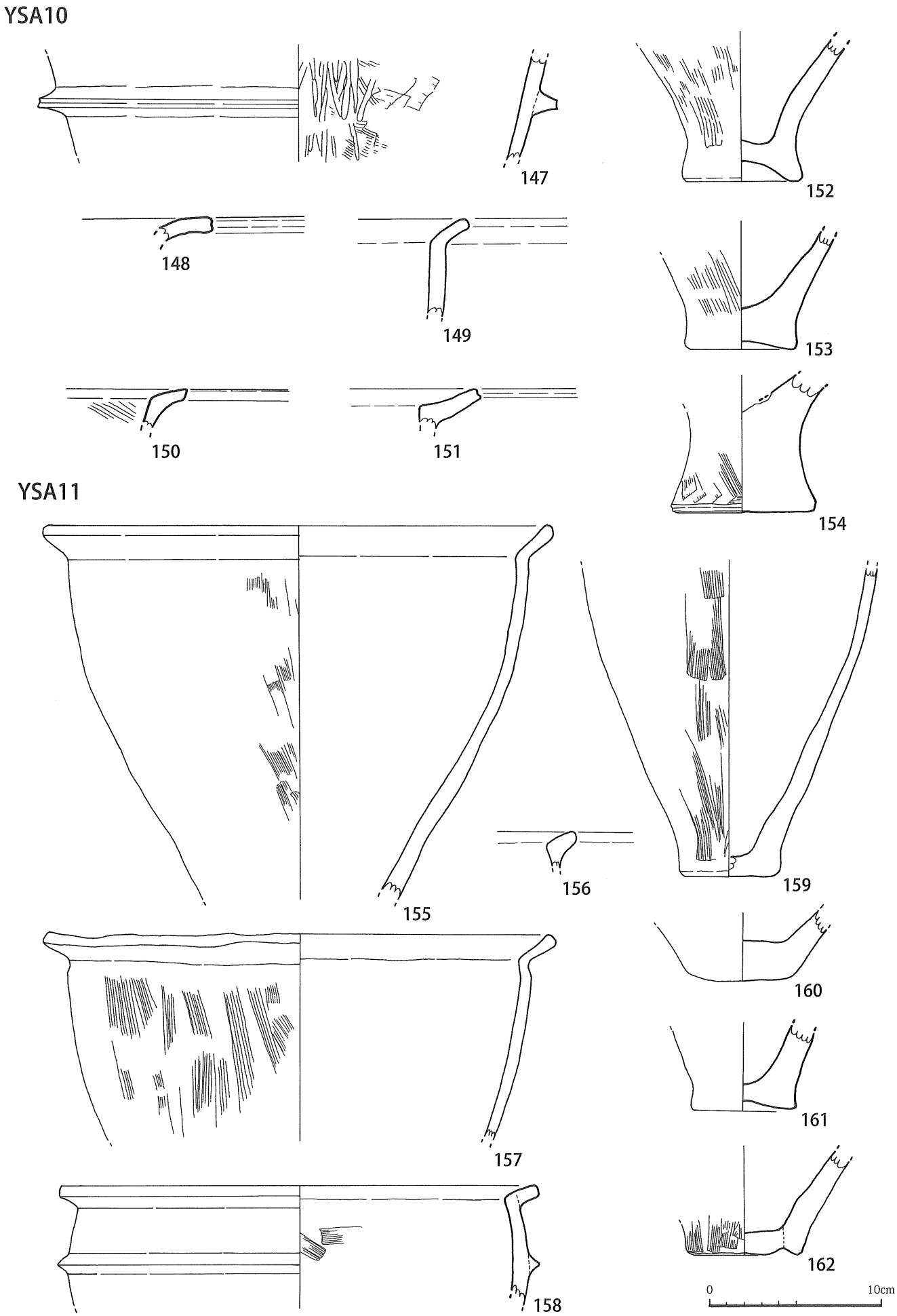



図47　竪穴住居跡出土土器

径は約 7cm、器高は約 32cm を測る。口縁部は外反し、口唇は丸くおさめられる。頸部内面では緩やかな稜をなし、胴部上位で最大径をもつ。そこから底部まではゆるやかなカーブを描く。底部は平底である。器面調整は外面が荒れているものの、細かいハケメが部分的に残る。内面はハケ後ナデのようである。

**388** は小型甕で口縁から底部まで揃う。復元口径は約 19cm、底径約 6cm、器高は約 21cm である。口縁部は薄く短く折り曲げられ、口唇部は丸く仕上げられる。底部は上げ底状の脚台がつく。外面にはススの付着が認められる。器面調整は外面にハケ、内面はハケ後ナデである。**389** は大甕の口縁～胴部である。復元口径は約 40cm である。口縁部は貼付、胴部にも 1 条の断面台形の突帯が付される。外面にはススの付着が確認できる。胎土中にはキンウンモが混入している。

**YSA26 出土土器（図 65）**

**390** は入来Ⅱ式甕の口縁部である。復元口径は約 29cm を測る。口縁部は貼付で断面が逆「L」字状をなす。調整はナデである。

**YSA27 出土土器（図 65）**

**391** は須玖式系広口壷の口縁部である。復元口径は約 36cm。口縁部はラッパ状に大きく開く。口唇部はヨコナデによりわずかにくぼむ。全体に丹塗され、色調は明るい橙色に発色している。外面は縦位ミガキにより、暗文を作出している。内面には横位ミガキが施される。胎土も精製で目立つ砂粒等は無く、白色の粒をわずかに含んでいる。**392、393** は入来Ⅱ式甕の口縁部でいずれも貼付によるものである。**395** は甕の胴部である。3 条の突帯が確認できる。突帯は指頭によってつままれ、指爪の痕が残る。

**YSA28 出土土器（図 65）**

**396** は壷の頸～胴部である。胴部最大径は約 20cm を測り、小型品と考えられる。外形はやや偏球ぎみに屈曲する。肩部に 7 条（＋α？）、胴部に 3 条の突帯を巡らす。肩部の突帯には部分的に細工具で刻みを入れている。器面調整は外面に横位ミガキ、内面には工具ナデが施される。なお、外面にはススが付着する。色調はにぶい褐色で暗めに発色し、胎土中にはキンウンモを含んでいる。**397** は甕の口縁部である。復元口径は約 26cm。貼付された口縁は斜めに立ち上がる。**398** は小型甕の口縁部で、復元口径は約 17cm である。**401** は中溝式甕の胴部である。1 条の刻目突帯が付される。外面にはハケメが明瞭に残る。**402** は甕の底部である。底径は約 11cm、中空脚台である。外面には細かいハケメが明瞭に残る。黒髪式系甕の底部と考えられる。

**403** は甕の底部で底径は約 8cm である。中実脚台である。外面には細かいハケメが明瞭に残る。内面にはススが付着する。胎土中にキンウンモを多く含む。**404** は壷底部と考えられる。剥離が著しく、器面調整は不明である。胎土中にはキンウンモを多く含んでいる。

**YSA29 出土土器（図 66）**

**405** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 32cm。口縁部は外反し、端部はまるくおさめる。YSA16 の（254）と接合している。形態から見ると後期甕にも該当しうる資料である。**406** は甕の口縁部。口縁部は短く斜めに立ち上がる。**407** は中溝式甕と山ノ口Ⅱ式甕の折衷資料と考えられる。口縁部は貼付で端部に向け細長く伸びる。胴部には刻目突帯を付す。刻目内には織物状の圧痕が観察できる。**408・409** は甕の口縁部である。**409** は黒髪式系甕の口縁部と思われ、口縁内面が張り出し、稜をつくる。

**YSA30 出土土器（図 66）**

**410** は入来Ⅱ式甕の口縁～胴部である。復元口径は約 28cm。口縁部は貼付で口唇部はヨコナデによりくぼませている。胴部には突帯を 3 条巡らしている。色調は灰黄褐色で、胎土中にはキンウンモが含まれる。**411** も入来Ⅱ式甕の口縁部である。復元口径は約 29cm を測る。**412** は壷の口縁部である。断面形は鋤先をなし、内面には稜をつくる。口縁上面には沈線が 5 本単位で引かれており、「V」字状に施文されている。また、外面には横位ミガキが施される。**413** は甕の胴部である。4 条（＋α）の突帯と半円形状の粘土紐が貼付されている。器壁が厚く、胎土中にはカクセン石を含む。**414・415** は甕の底部である。**414** は平底、**415** は中空脚台で外面にはハケメが明瞭に残る。黒髪式系甕の可能性があ

YSA12

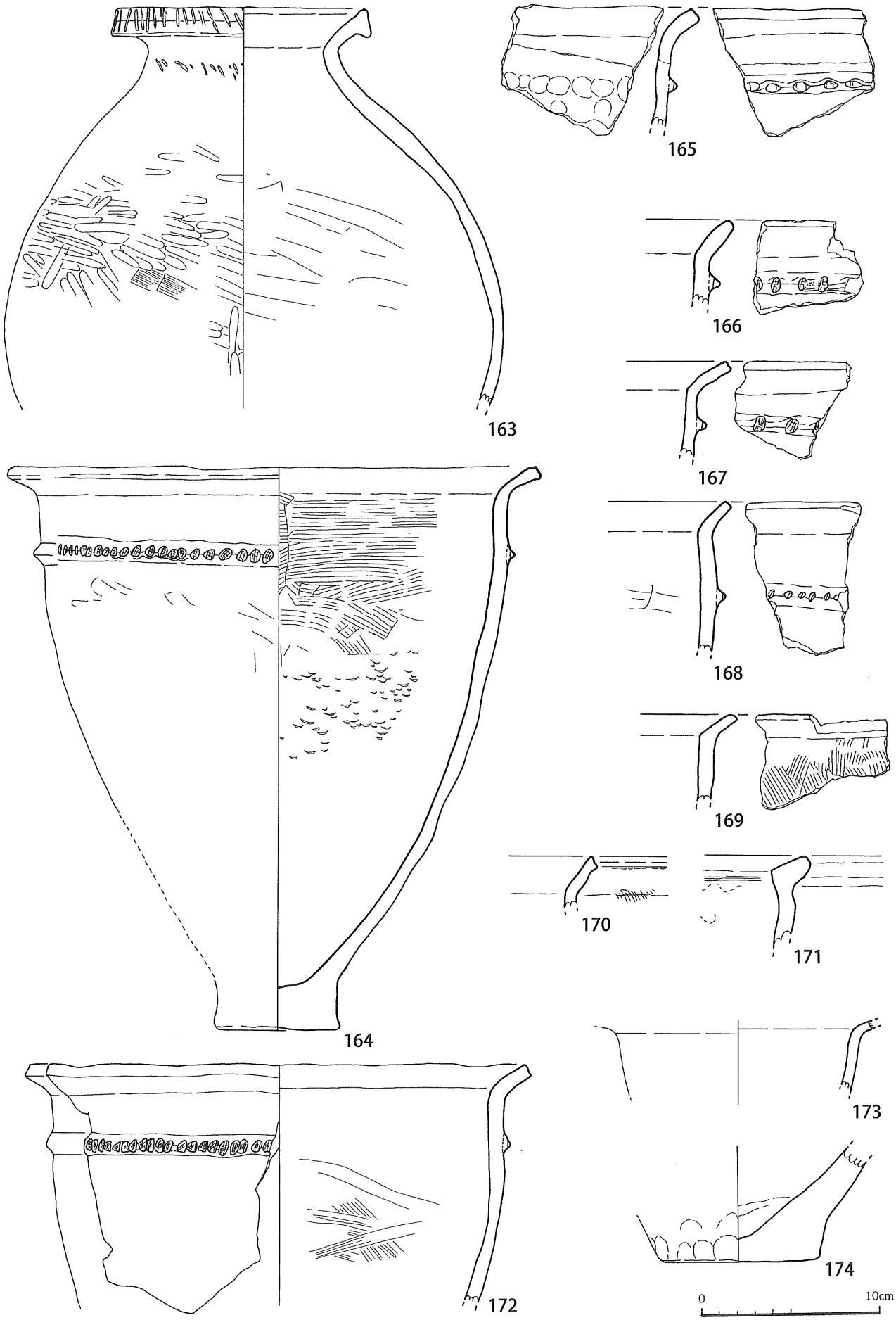



図48　竪穴住居跡出土土器

る。**416** は壷の底部と考えられる。底面は凹レンズ状にくぼむ。外面には縦位ミガキが確認できる。

**YSA33 出土土器（図 66）**

**417** は中溝式甕の口縁～胴部である。復元口径は約 26cm を測る。胴部にはススの付着が認められる。口縁部は短く折り曲げ、口唇はヨコナデにより平坦面をつくる。胴部には 1 条の刻目突帯を巡らす。器面調整は外面がハケ、内面もハケである。胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。**418** は甕の口縁部である。口縁部は貼付で、逆「L」字状に貼付される。口縁内面には貼付時の接合線が消されることなく残っている。**419** も甕の口縁部である。貼付された口縁部は斜めに立ち上がる。

**YSA34 出土土器（図 66）**

**420** は鉢（？）である。口唇は丸くおさめる。外面にヘラ状工具で直接刺突を施す。口縁部が外に開くので判然とはしないが、刻目突帯文期の資料の可能性がある。

**YSA35 出土土器（図 67）**

**421** は小型甕の口縁～胴部である。復元口径は約 20cm である。口縁部は貼付である・外面にススが付着する。

**YSA36 出土土器（図 67）**

**422** は入来Ⅱ式甕の口縁部である。口縁部は逆「L」字状に貼付され、口唇部はヨコナデによりくぼむ。胎土中にキンウンモを含む。**423** も入来Ⅱ式甕の口縁部である。422 と同様、口縁部を逆「L」字状に貼付する。**424** は甕の胴部である。3 条（＋α）の突帯が付される。突帯には指爪のような痕が残る。胎土は粗製で軟質である。

**YSA39 出土土器（図 67）**

**425** は須玖式系広口壷の頸部である。丹塗が施される。内・外面ともに横位ミガキが確認できる。**426** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 28cm を測る。口縁部は貼付で斜めに立ち上がる。山ノ口Ⅰ～Ⅱ式の範疇と捉えられる。

**YSA40 出土土器（図 67）**

**427** は甕の口縁～胴部である。口縁部は逆「L」字状に貼付される。胴部には 2 条（＋α）の突帯が付される。突帯は指頭によりつままれており、部分的に指爪の痕が残る。器面調整は内・外面ともにナデである。**428** は甕の口縁部である。

**YSA42 出土土器（図 67）**

**429** は小型甕の口縁～胴部である。復元口径は約 17cm を測る。口縁部は短く折り曲げ、口唇部は丸く仕上げる。**430** も小型甕の口縁～胴部である。口縁部は貼付であるが、あまり整形されておらず接合線も残したままとなっている。外面にはススの付着が目立つ。**431** は黒髪式系甕の口縁部である。復元口径は約 24cm を測る。口縁部内面は張り出しており、稜をつくる。胎土中にはカクセン石が混入している。**433** は甕の口縁～胴部である。口縁部は貼付で口唇はヨコナデによりくぼむ。胴部はやや張るものと思われる。口縁上面には 3 本の直線、胴部には波状文が描かれる。また、口縁部には穿孔も施されている。胎土は粗製で砂粒の混入が目立つ。

**434** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 28cm である。逆「L」字状に貼付された口縁部は先端が先細りとなる。器面調整は内・外面ともに細かいハケが認められる。外面にはススの付着が著しく、これをサンプルとして放射性炭素年代測定を実施した結果、2140 ± 40 年 BP（1 σ：BC200 ～ 115 年）という数値が得られた。**435** は甕の口縁部である。口縁部は外反し、口唇部は平坦に仕上げられる。

**YSA43 出土土器（図 68）**

**436** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 32cm である。外面にはススが付着する。口縁部は逆「L」字状に貼付される。口唇部はヨコナデによりくぼむ。器面調整は外面が工具によってナデており、部分的にミガキ状となる。内面にはハケを施す。無文であるが口縁部形態から入来Ⅱ式と考えられる。**437** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 28cm である。外面にススが付着する。口縁部は逆「L」字状に貼付される。胴部は張らない。器面調整は内・外面ともにハケである。内面にはオサエの痕も残る。入来Ⅱ式と考えられる。**438** は甕で復元口径は約 25cm。ススの付着が著しい。**439** は壷の胴～底部である。底部は平底で底径は約 10cm である。外面は斜～縦位ミガキを施し、内面は丁寧にナデる。

YSA12

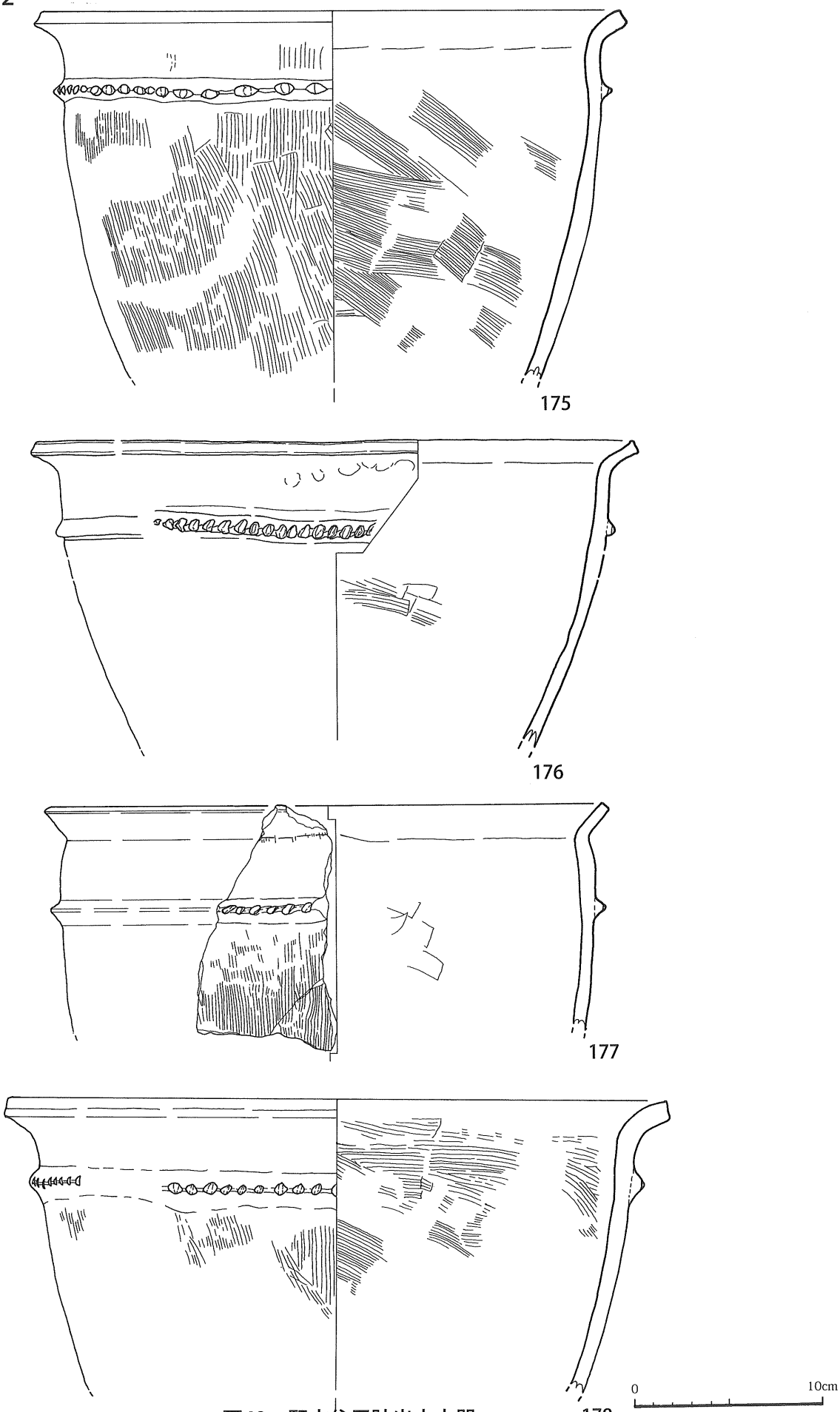



図49　竪穴住居跡出土土器

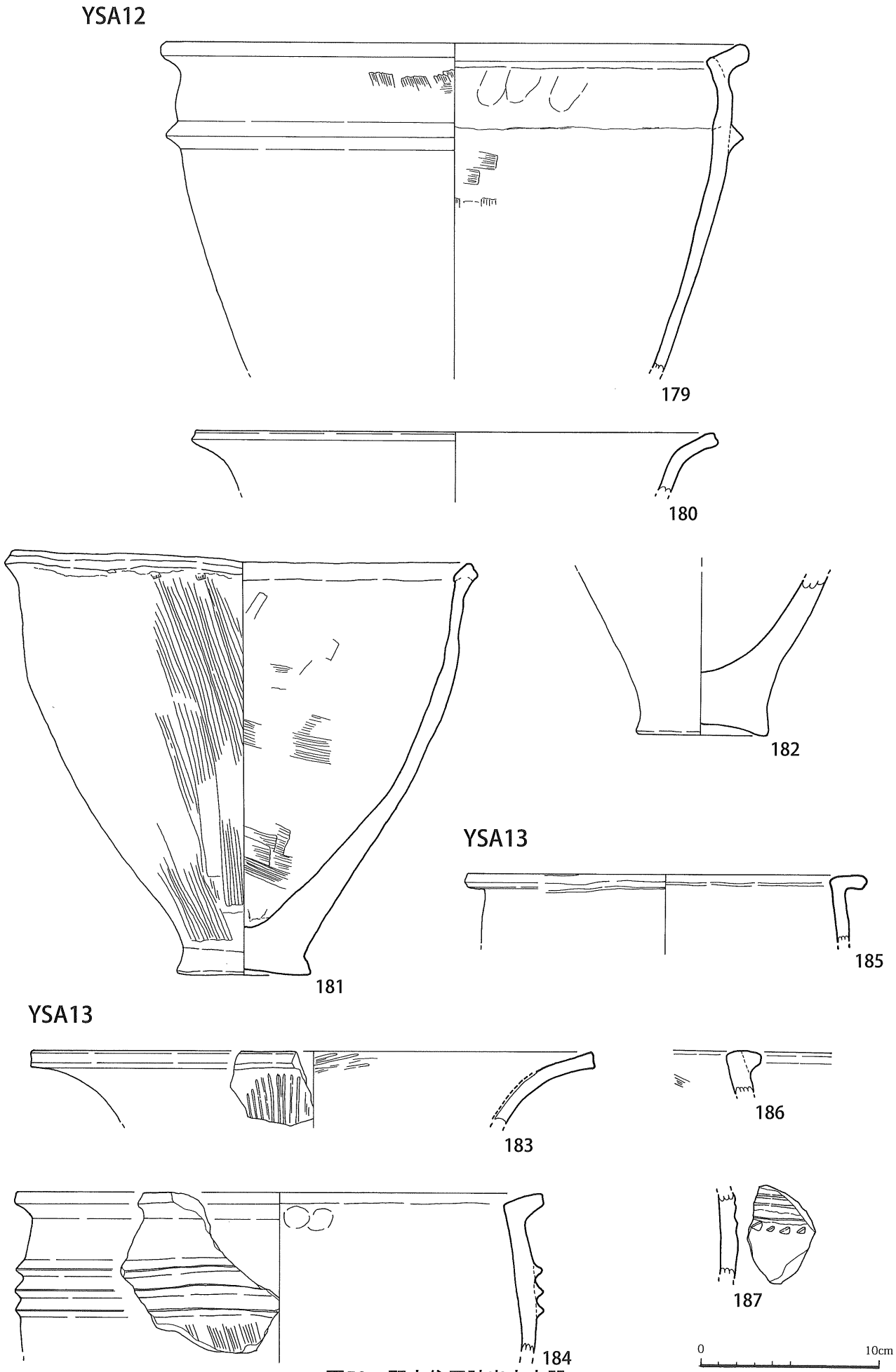



図50　竪穴住居跡出土土器

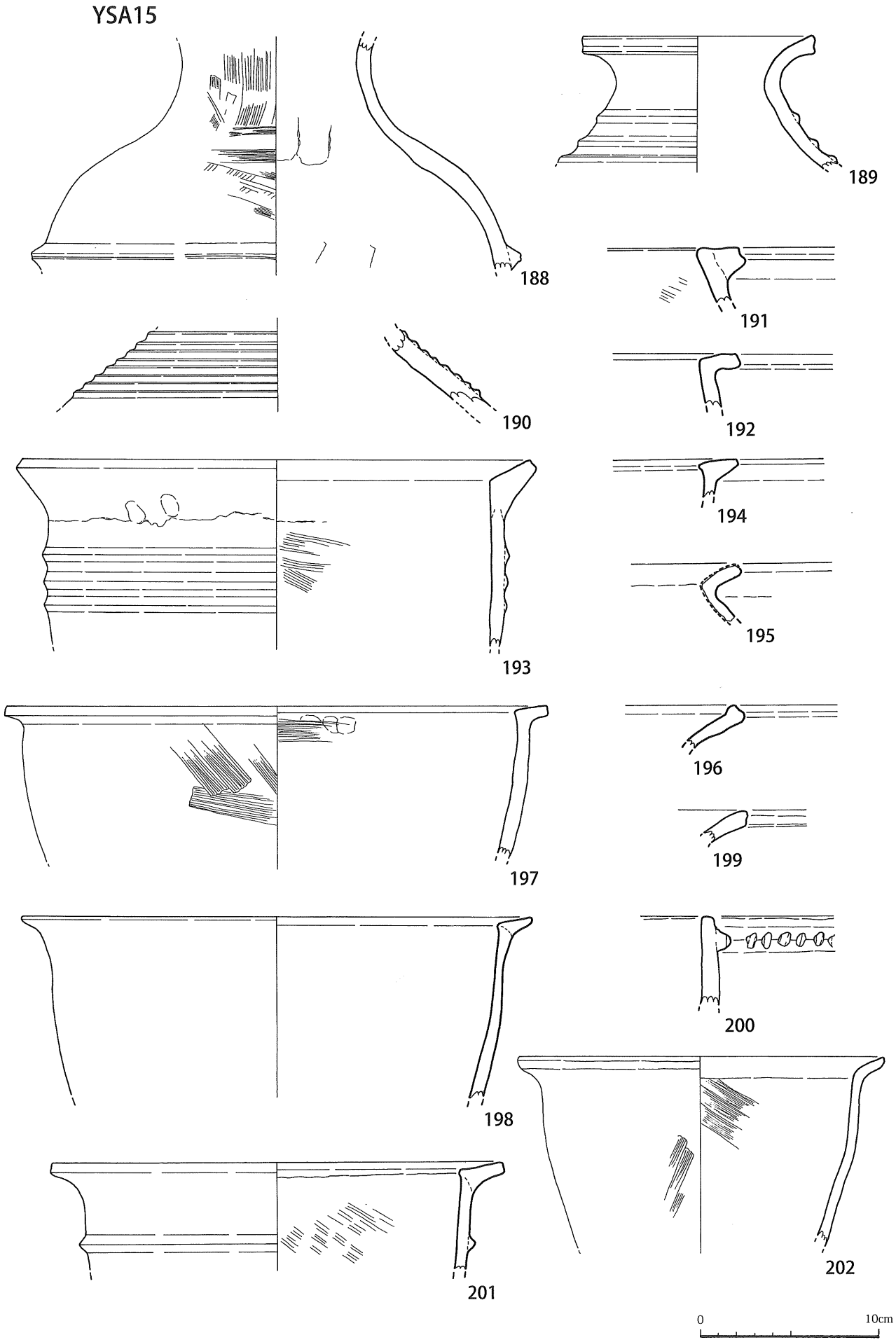



図51　竪穴住居跡出土土器

YSA15

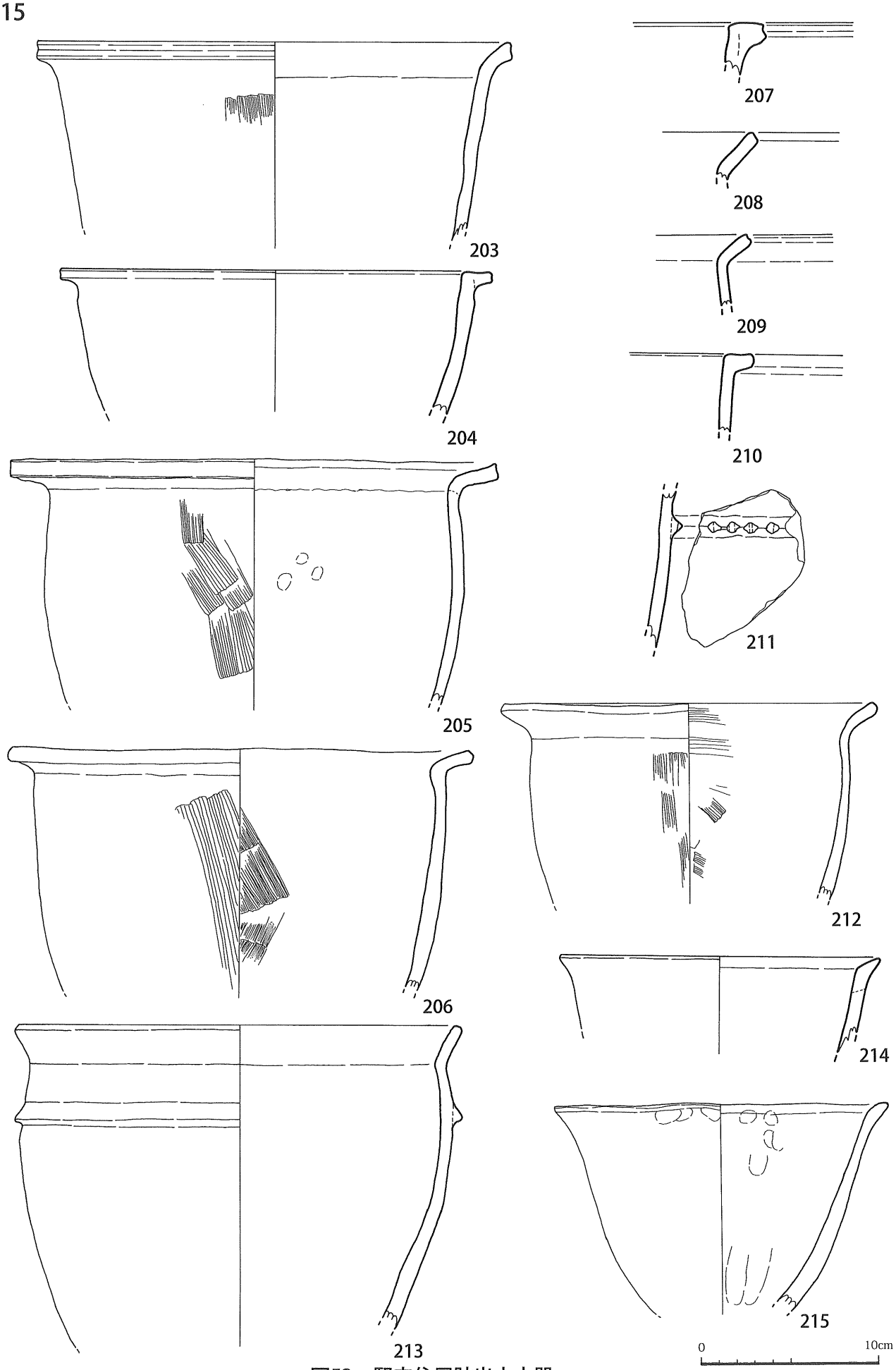



図52　竪穴住居跡出土土器

YSA15

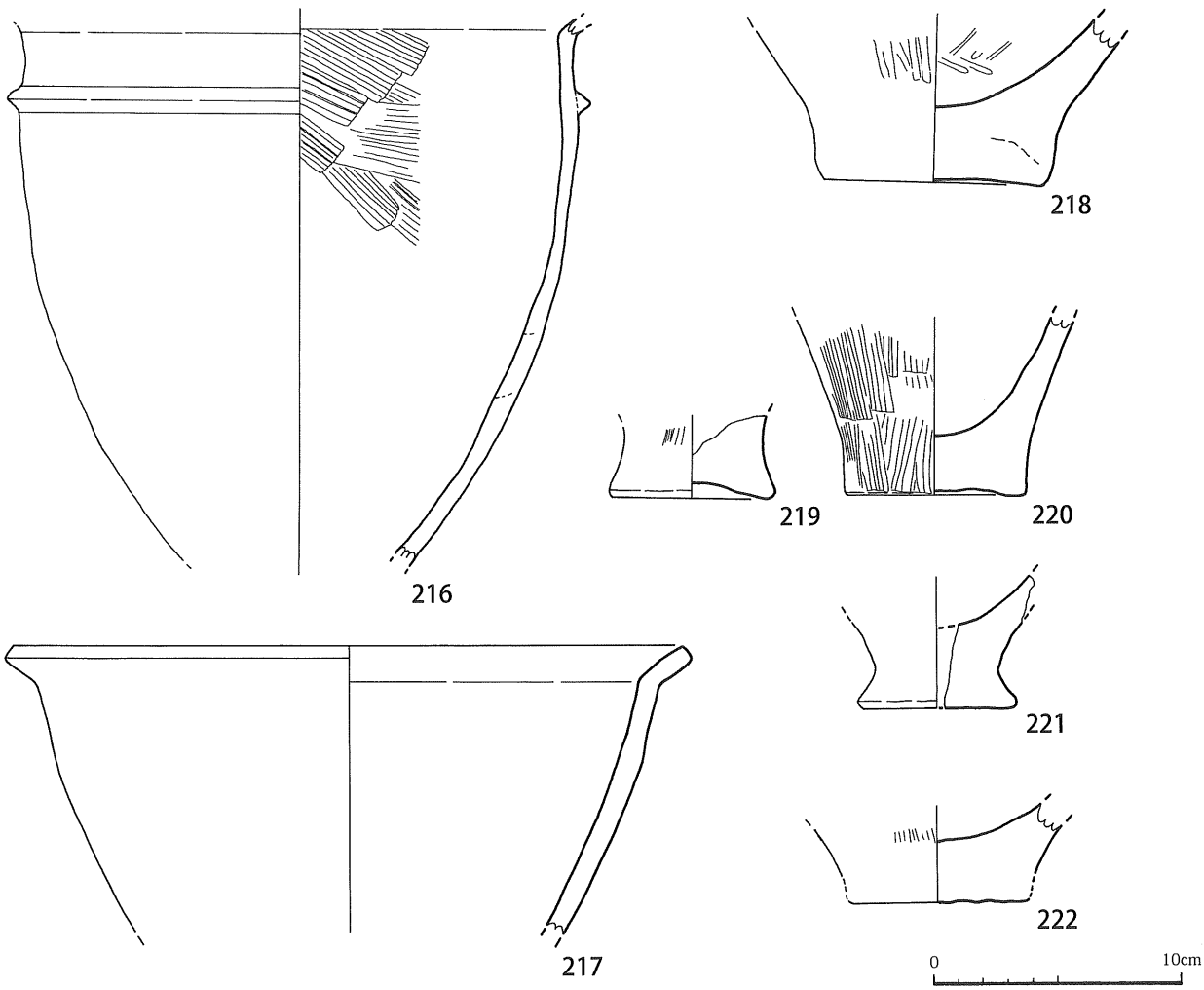



図53　竪穴住居跡出土土器

**YSA45 出土土器（図 68）**

**440** は小型甕の口縁～胴部である。胴部にはススの付着が著しい。復元口径は約 18cm である。口縁部は貼付で、口唇部は丸く仕上げる。器面調整は外面に工具ナデを施している。

（文責：加覧淳一）

表 5　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 110 | YSA1・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄褐 | ハケ | 工具ナデ | 透明・無色 | 三角突帯 |
| 111 | YSA3 | 壷 | 黒褐 | 黒褐～明黄褐（ススス付着） | ナデ | — | 褐色 | |
| 112 | YSA3・下層ピット | 甕 | 浅黄 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 113 | YSA5・上層 | 甕 | 橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色 | 刻目突帯 |
| 114 | YSA5・上層 | 甕 | 灰黄褐 | 黒褐 | ハケ→ナデ | ナデ | 白色 | |

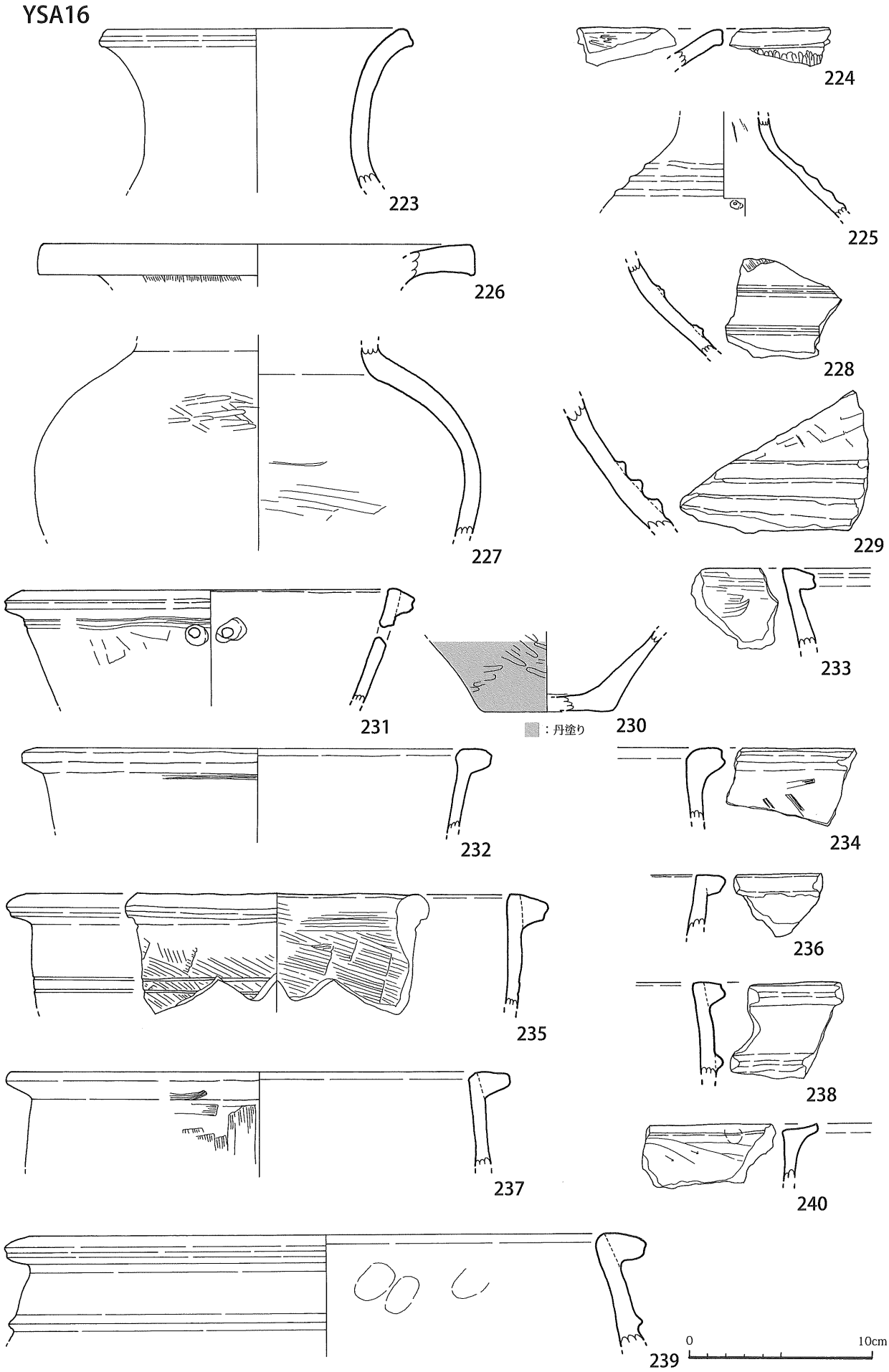



図54　竪穴住居跡出土土器

YSA16

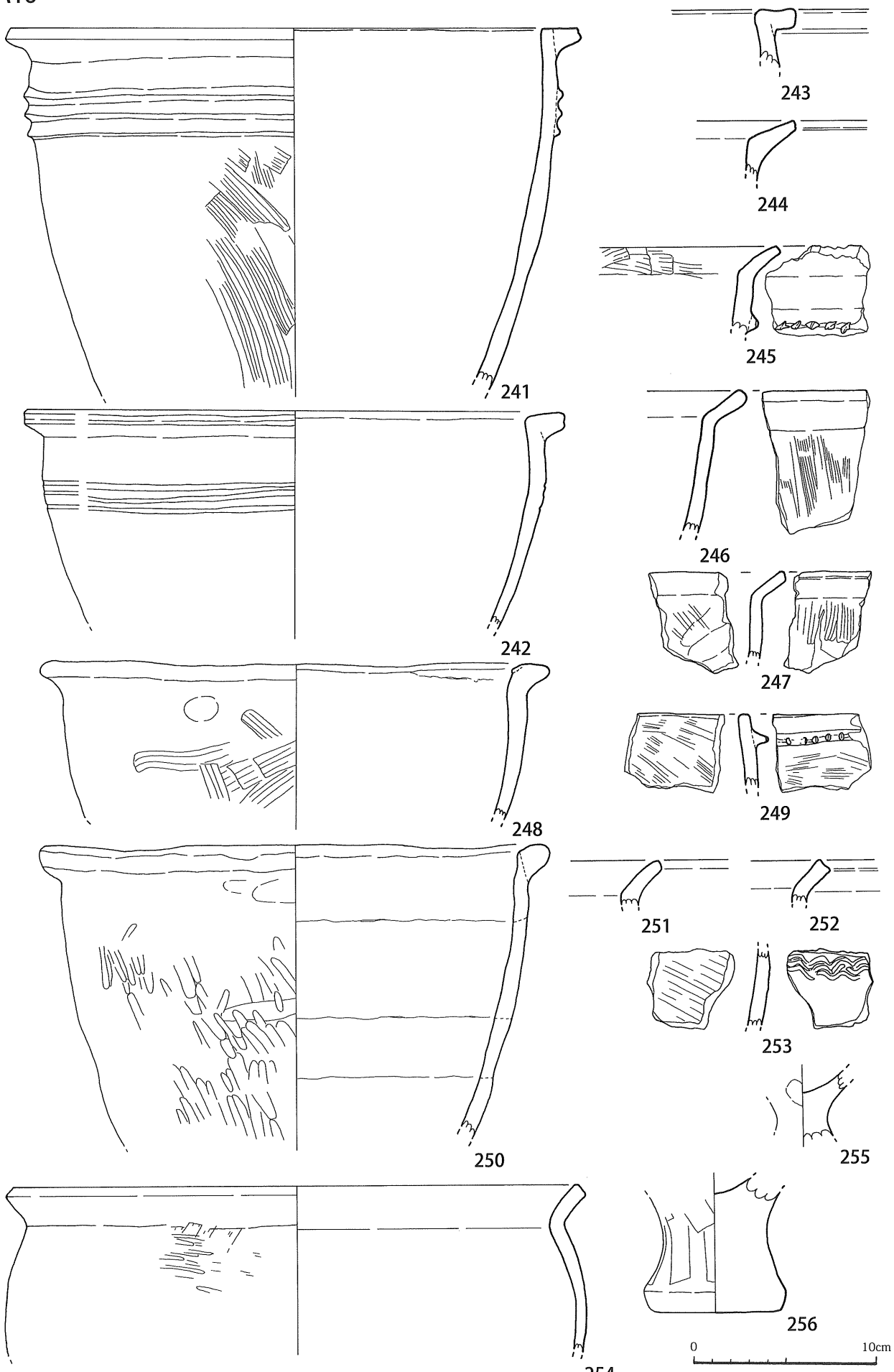



図55　竪穴住居跡出土土器

YSA16

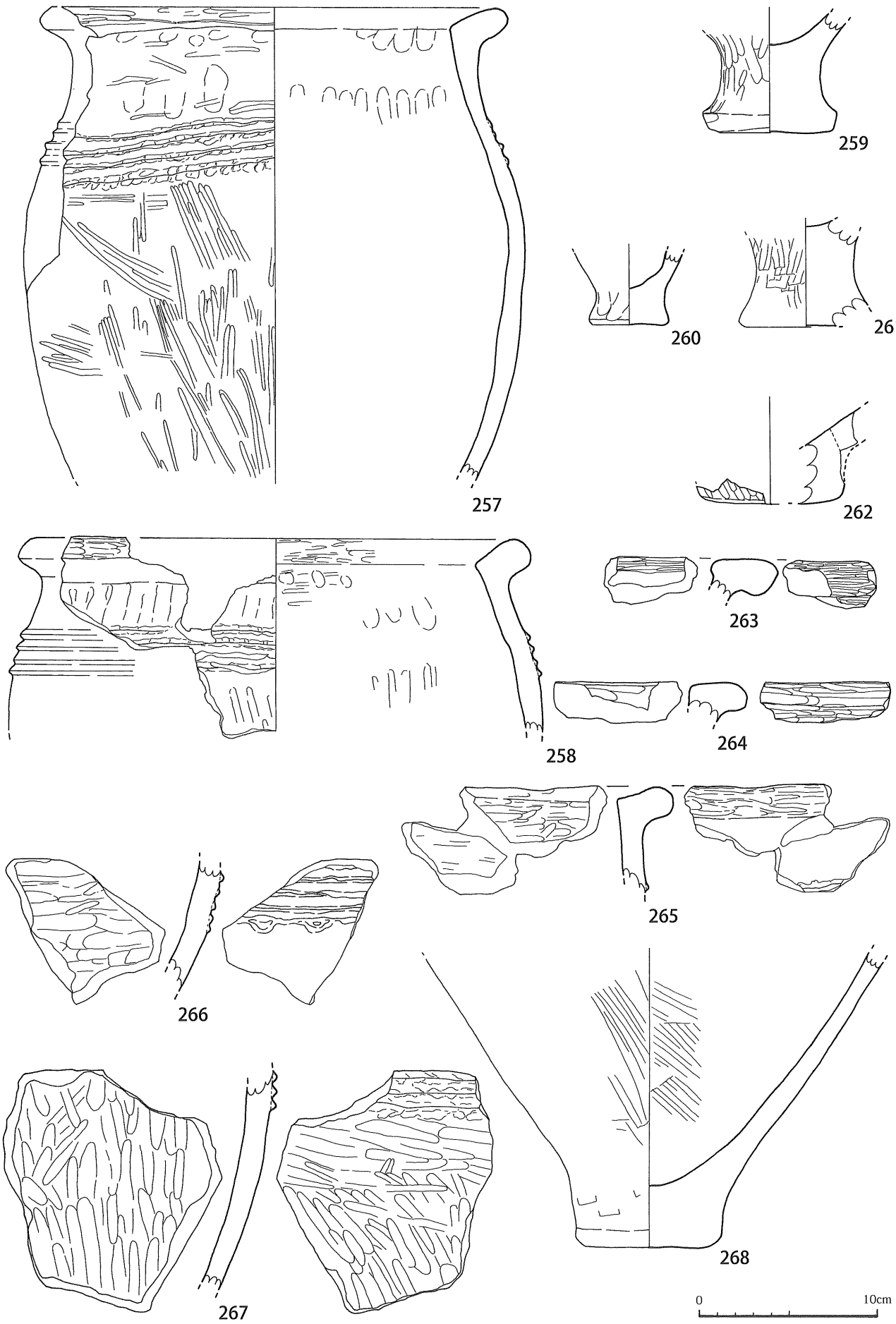



図56　竪穴住居跡出土土器

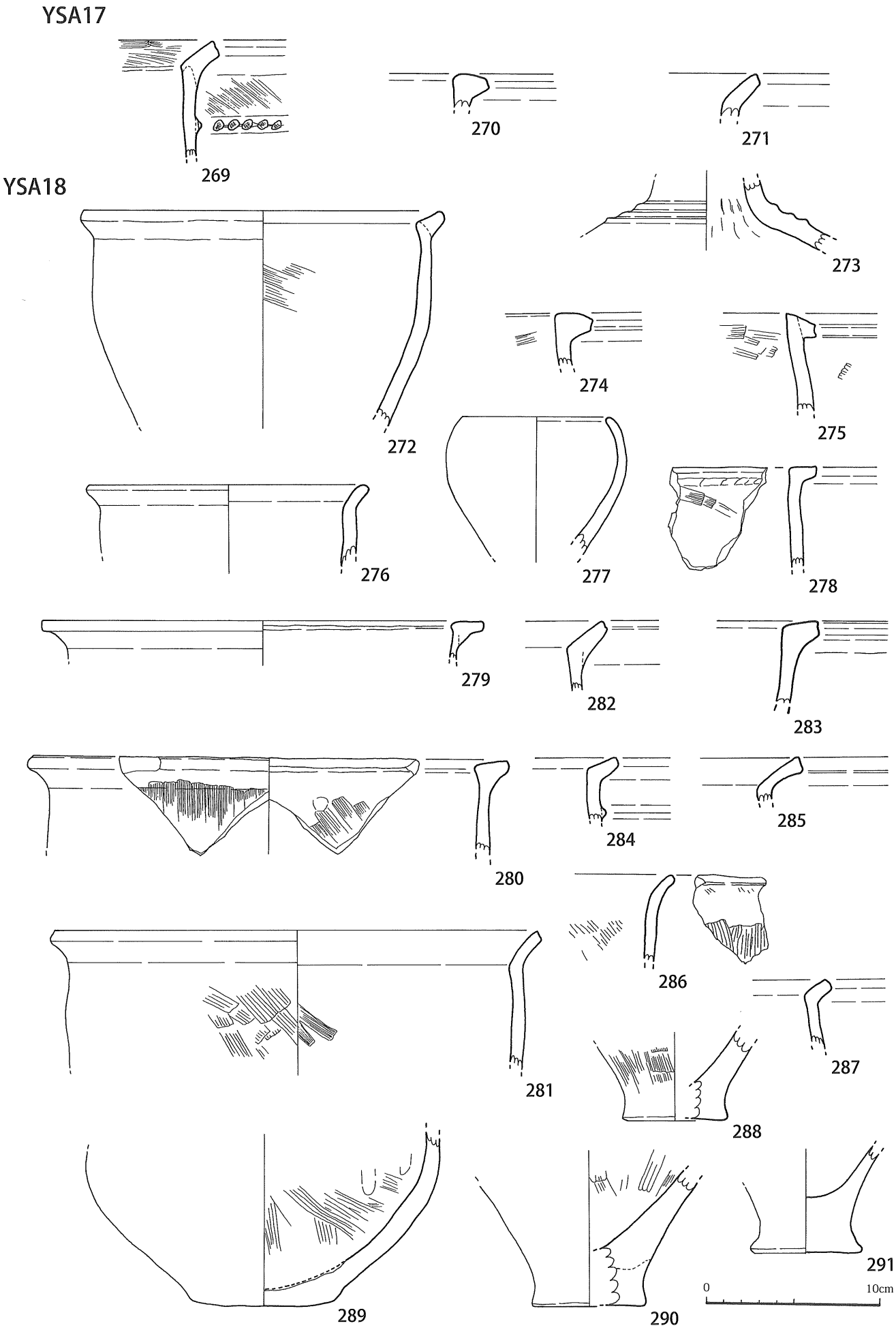



図57　竪穴住居跡出土土器

YSA19

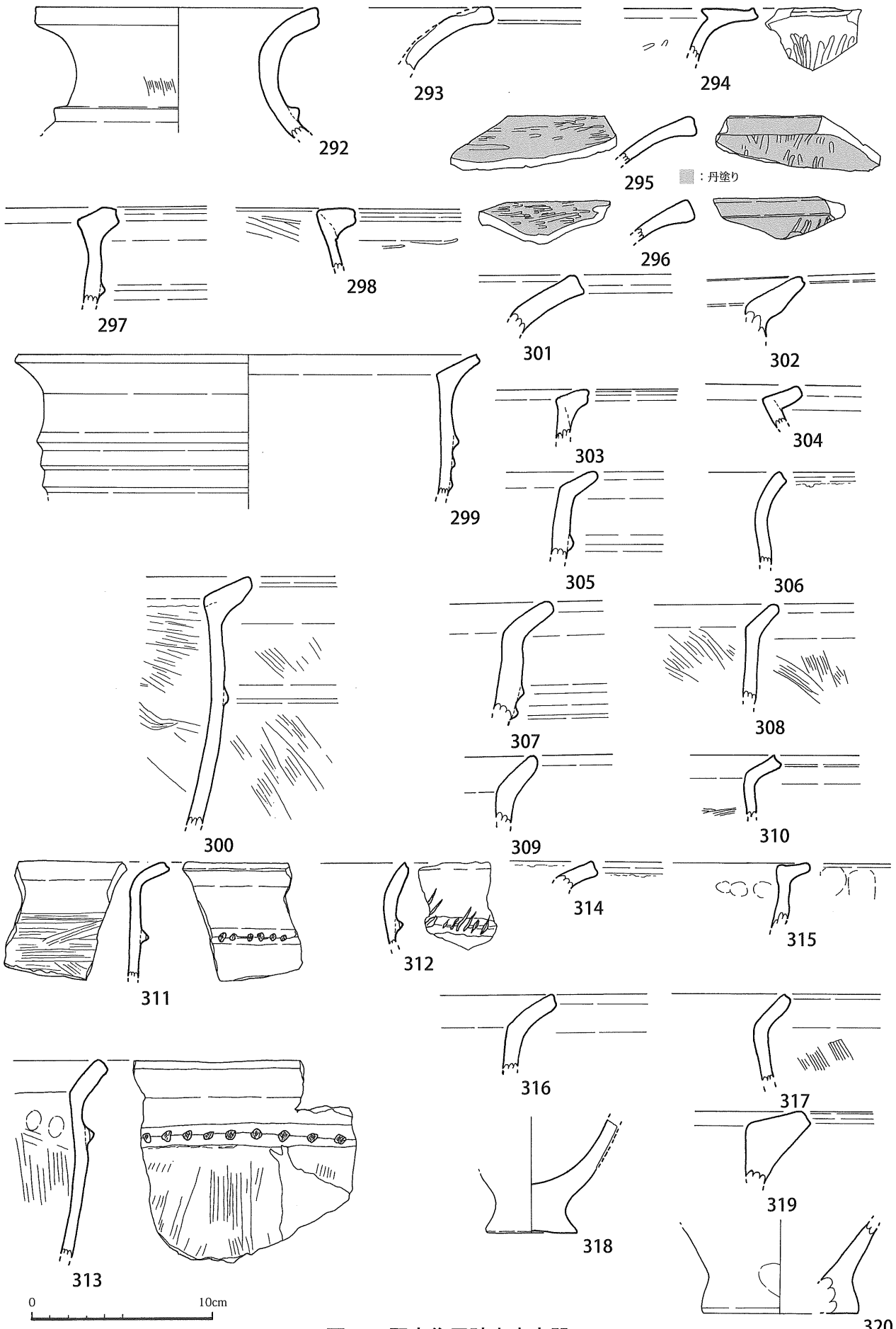



図58　竪穴住居跡出土土器

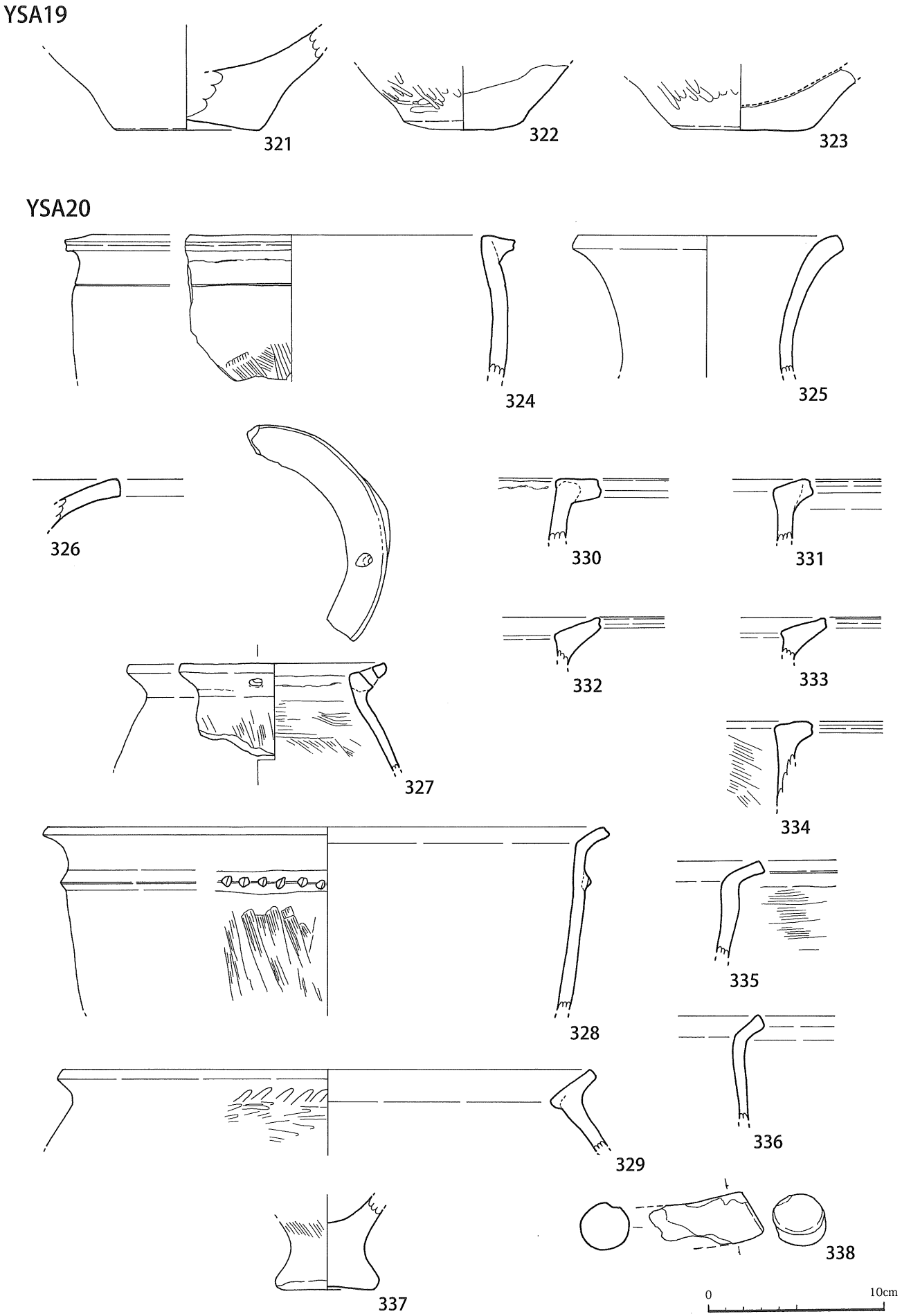



図59　竪穴住居跡出土土器

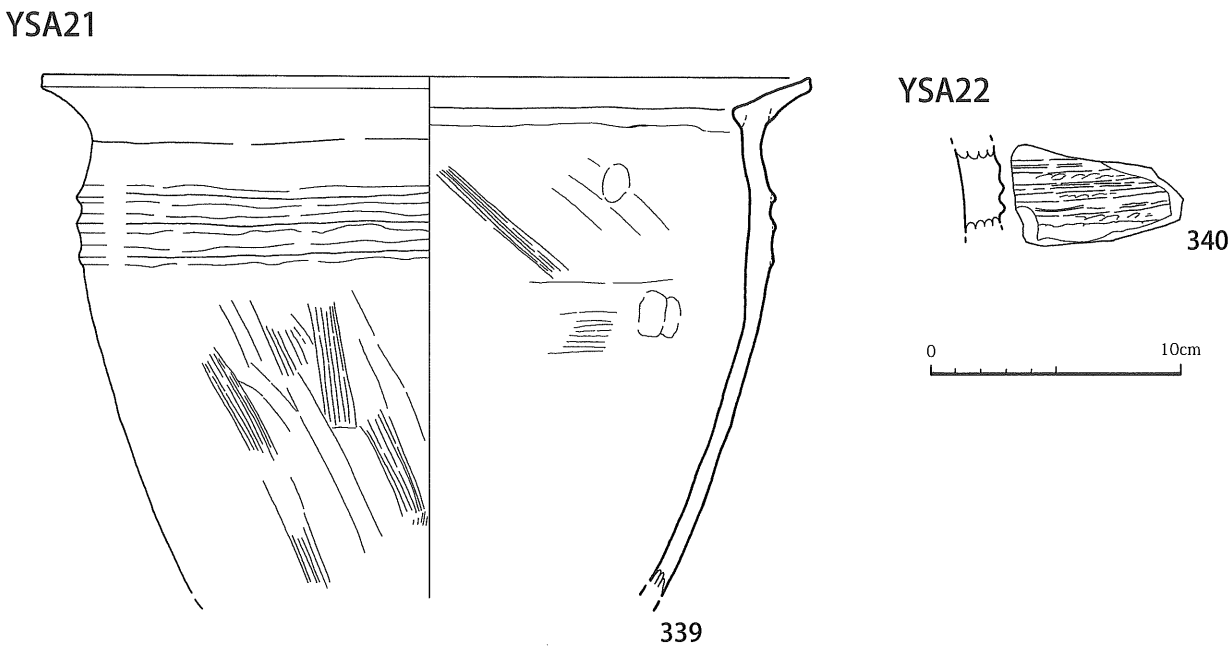



図60　竪穴住居跡出土土器

表６　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 115 | YSA5・上層 | 壷 | にぶい黄褐 | 灰黄 | ミガキ | — | 赤色 | |
| 116 | YSA6・下層 | 甕 | にぶい黄褐～褐灰 | にぶい黄褐 | ナデ | 工具ナデ | 白色 | 刻目突帯 |
| 117 | YSA6・下層 | 壷 | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | ミガキ | ミガキ | 白色 | |
| 118 | YSA7・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 黒色 | 刻目突帯 |
| 119 | YSA7・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | 工具ナデ | 褐色・赤褐色 | |
| 120 | YSA7 | 甕 | 浅黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 白色・黒褐色 | |
| 121 | YSA7・上層＋ピット | 甕 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 赤色 | |
| 122 | YSA7 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・黒色 | |
| 123 | YSA7・上層 | 甕 | 橙 | 橙 | — | ハケ | 透明・白色・赤色 | |
| 124 | YSA7・上層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい黄橙（スス付着） | ナデ | ナデ | 透明・半透明・白色・黒色 | |
| 125 | YSA7・上層 | 甕 | 暗灰黄 | 暗黄褐 | ハケ | ナデ | 透明・赤色・黒色 | |
| 126 | YSA7 | 甕 | にぶい黄橙 | 黒褐色 | ハケ→ナデ | ナデ | 透明・白色・黒褐色 | |
| 127 | YSA7 | 大甕 | 橙 | にぶい橙 | ハケ→ナデ | ナデ | 白色・赤色・褐色 | 三角突帯 |
| 128 | YSA7 | 大甕 | にぶい橙 | 橙 | ハケ | ナデ | 白色・赤色・褐色 | |
| 129 | YSA8・下層 | 甕 | 褐 | 明赤褐 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 130 | YSA9・上層 | 壷 | 橙 | 明黄褐 | | ナデ | 白色・赤褐色 | 櫛描直線文・櫛描波状文 |
| 131 | YSA9・上層 | 甕 | 褐灰 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 透明・白色・カクセン石 | |
| 132 | YSA9・下層 | 甕 | 黒褐（スス付着） | 黒褐～灰黄褐 | ナデ | ナデ | 透明・白色・カクセン石 | |
| 133 | YSA9・下層 | 甕 | 褐灰 | にぶい赤褐 | ナデ | ナデ | キンウンモ | |
| 134 | YSA9・下層 | 甕 | にぶい黄橙 | 黒褐 | ハケ | — | 白色 | |
| 135 | YSA9・上層 | 壷 | にぶい褐 | にぶい褐 | ハケ | ナデ | 白色・キンウンモ | |

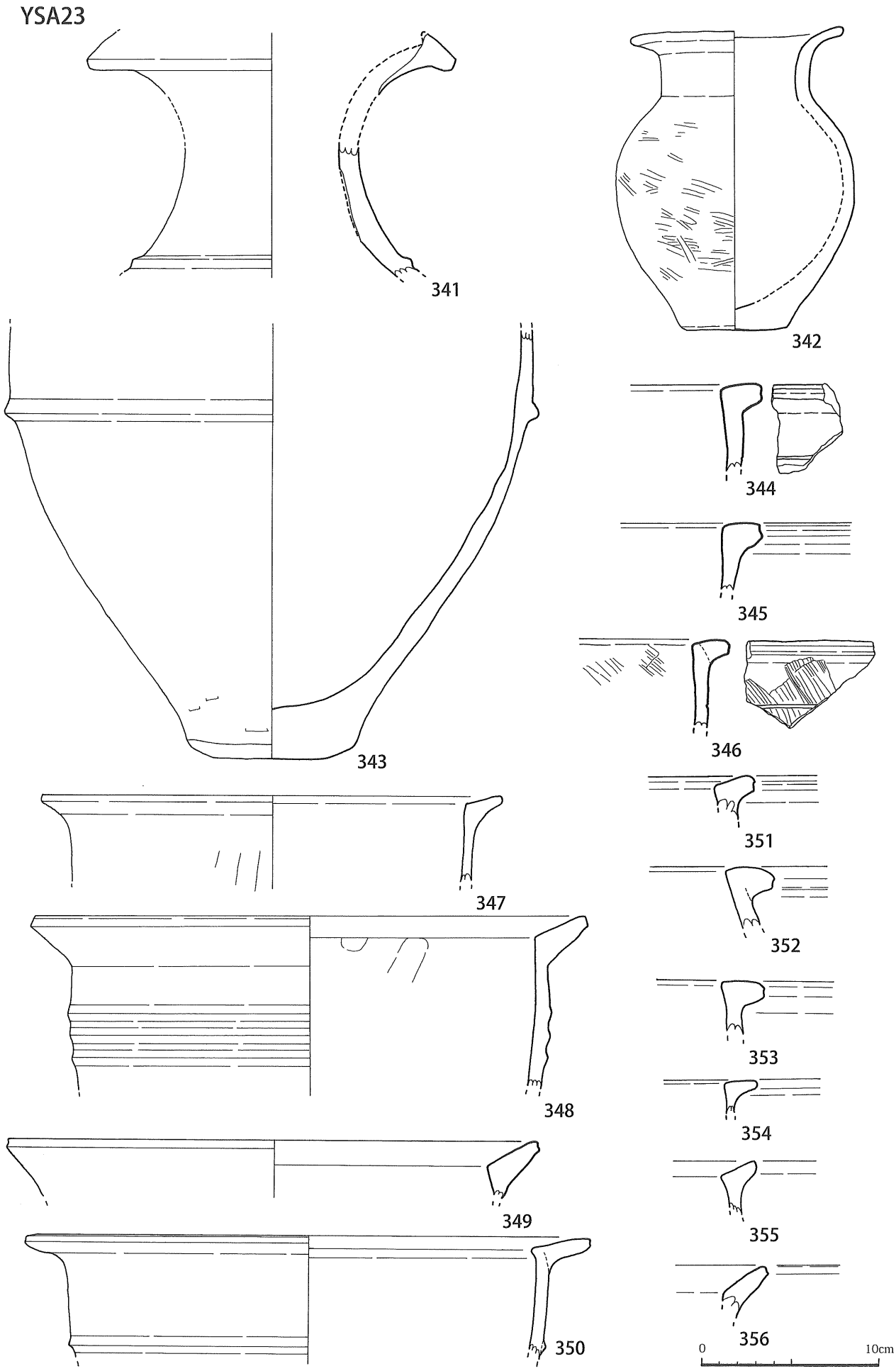



図61　竪穴住居跡出土土器

YSA23

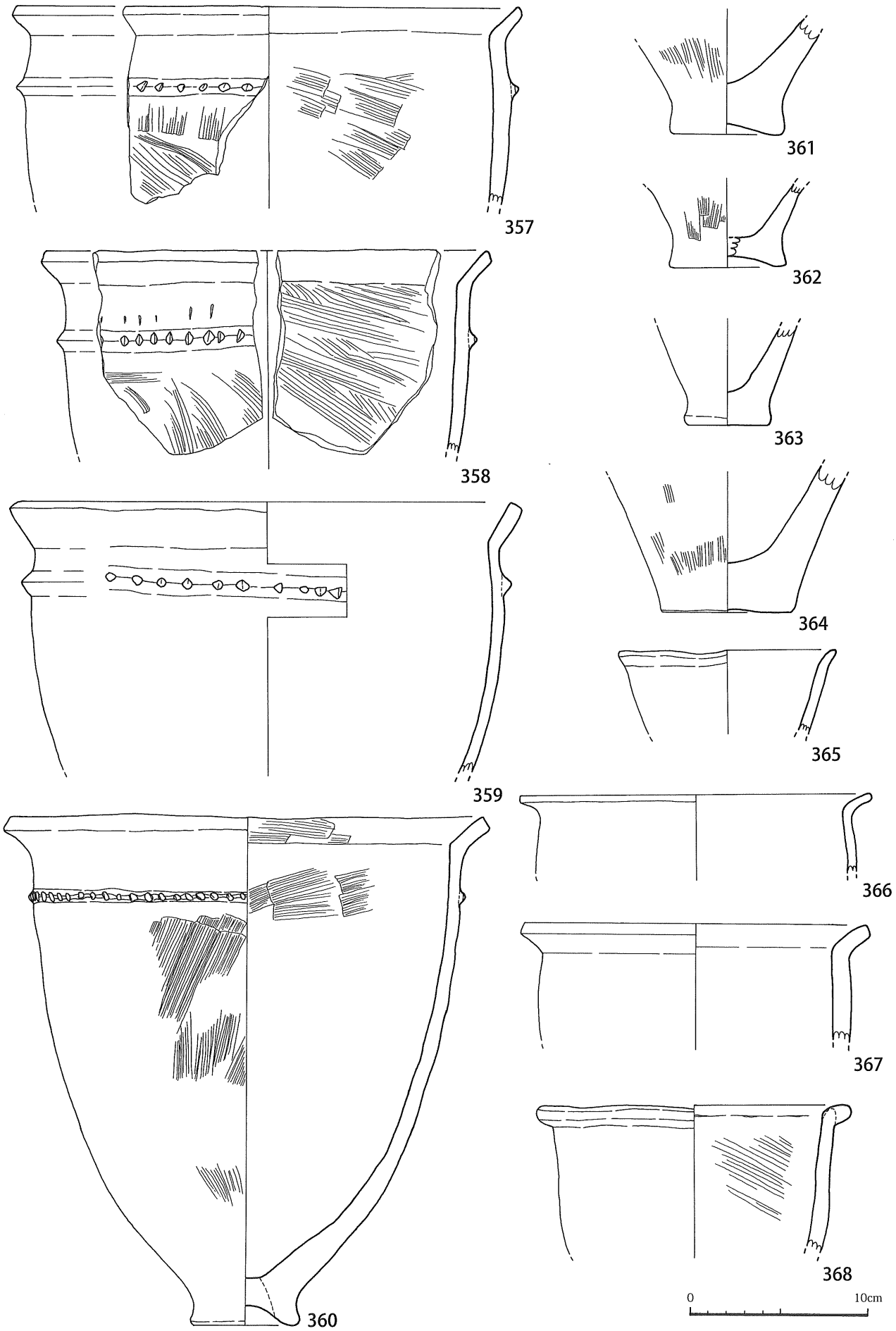
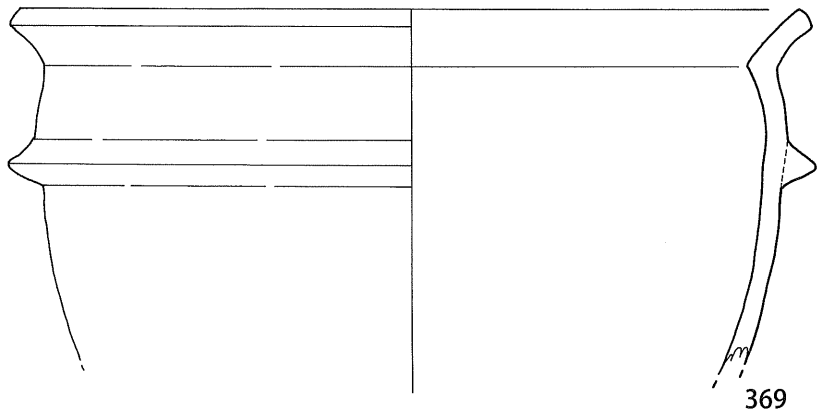
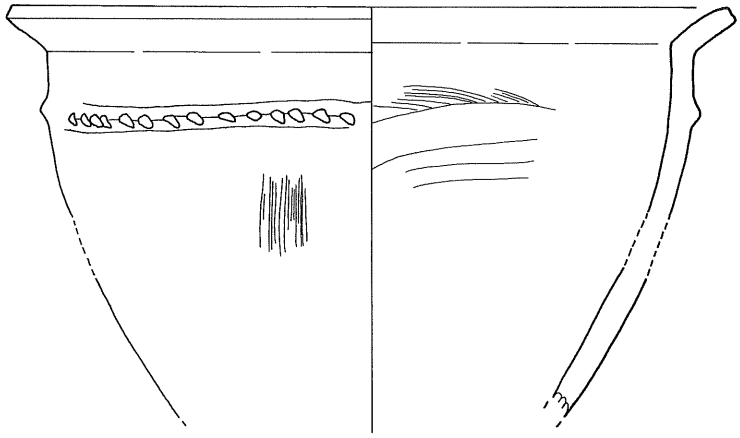
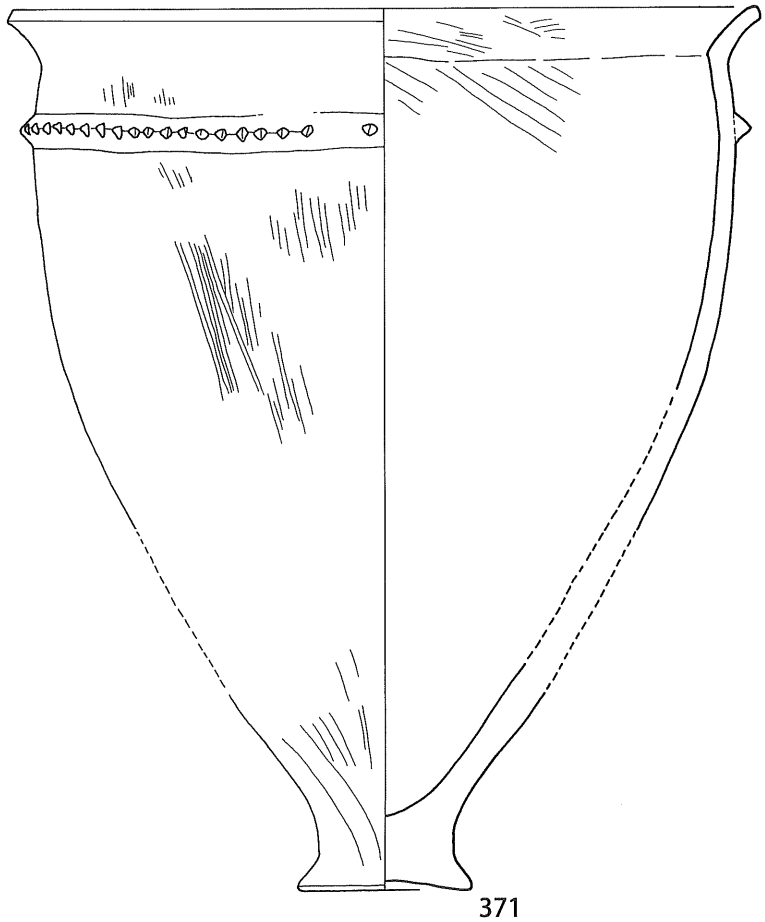


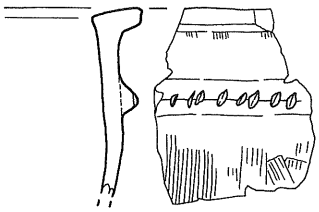

図62　竪穴住居跡出土土器

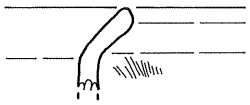
YSA23

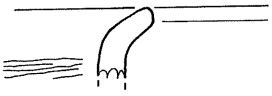


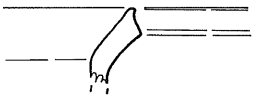



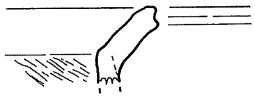



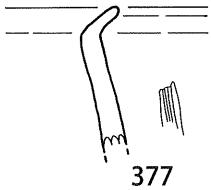



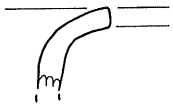



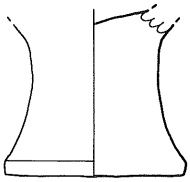



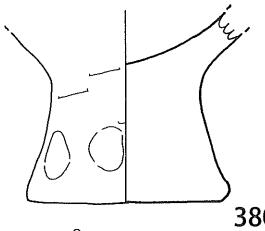






0 10cm

図63　竪穴住居跡出土土器

YSA23

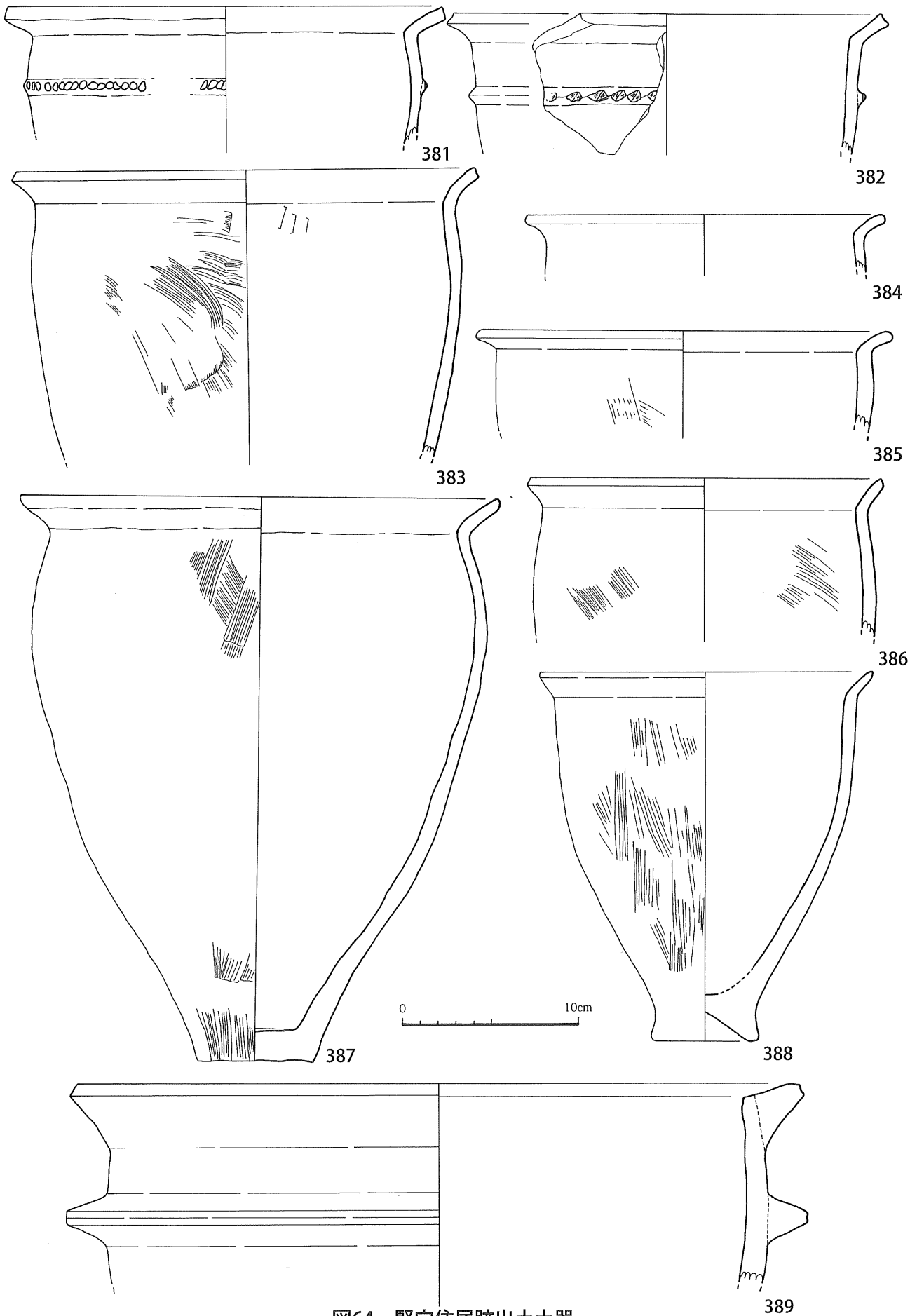



図64　竪穴住居跡出土土器

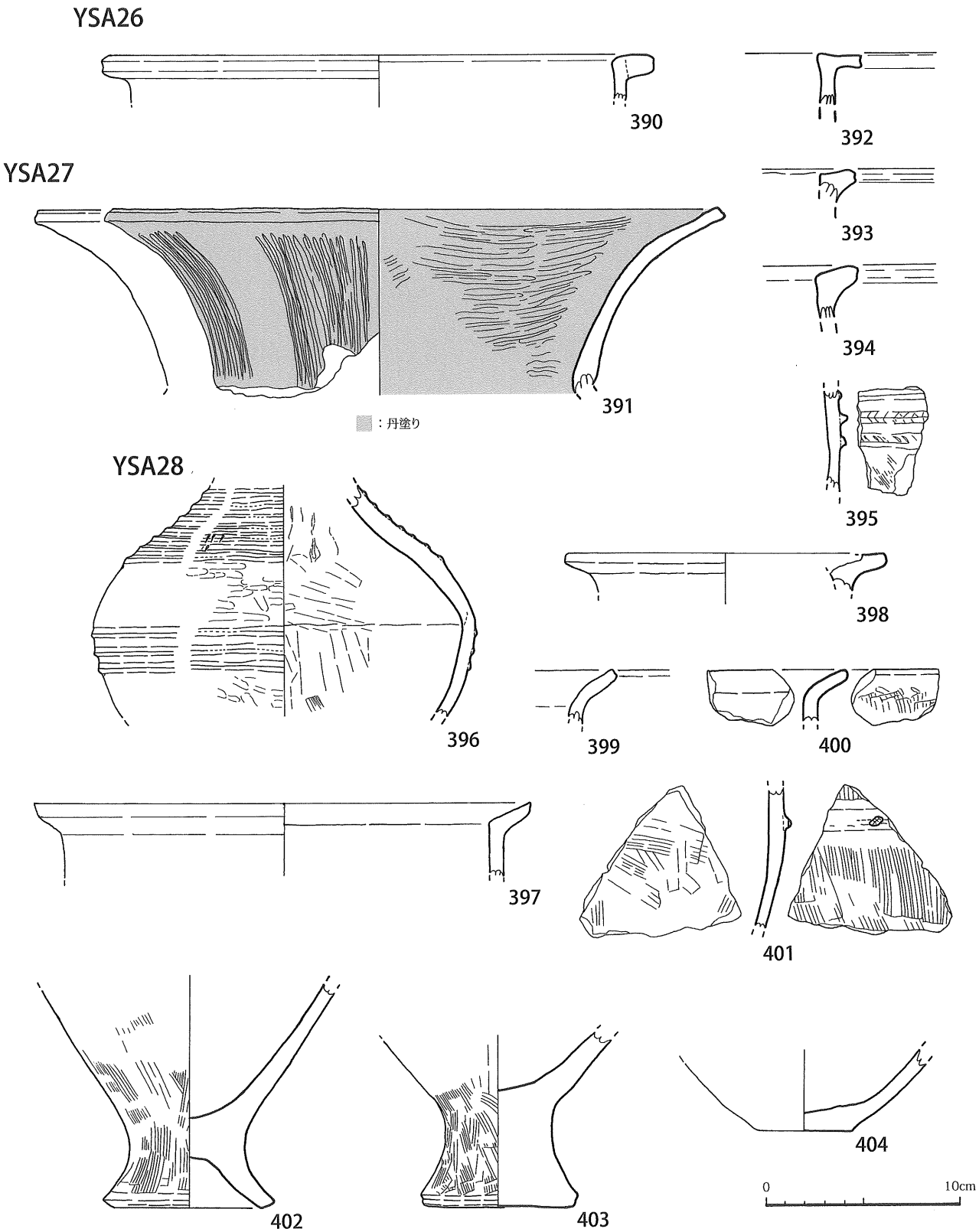



図65　竪穴住居跡出土土器

表７　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 136 | YSA9・下層 | 壷 | 橙 | 浅黄橙 | — | ナデ | 白色 | |
| 137 | YSA10・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 褐色・黒色 | 刻目突帯 |

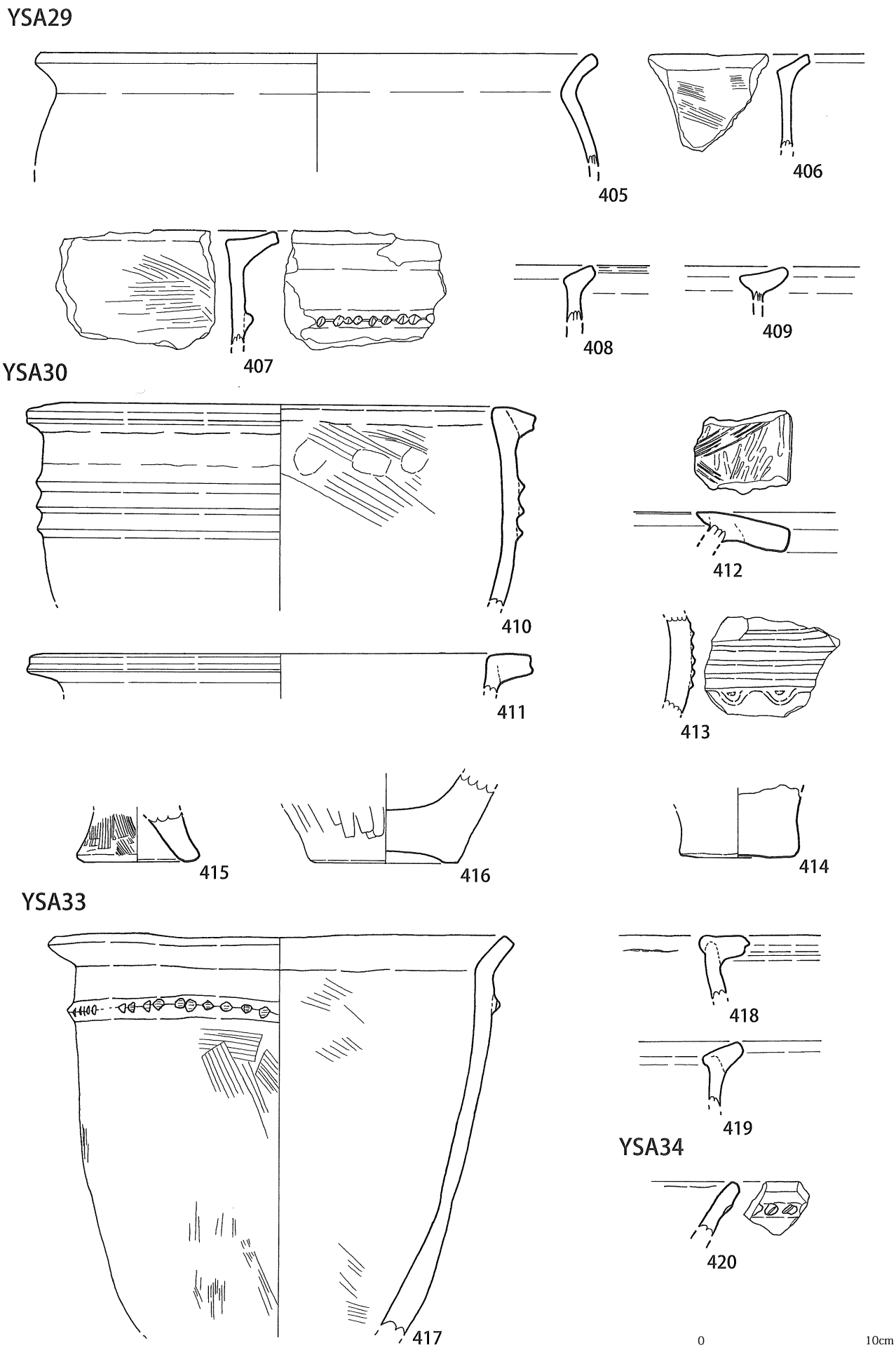



図66　竪穴住居跡出土土器

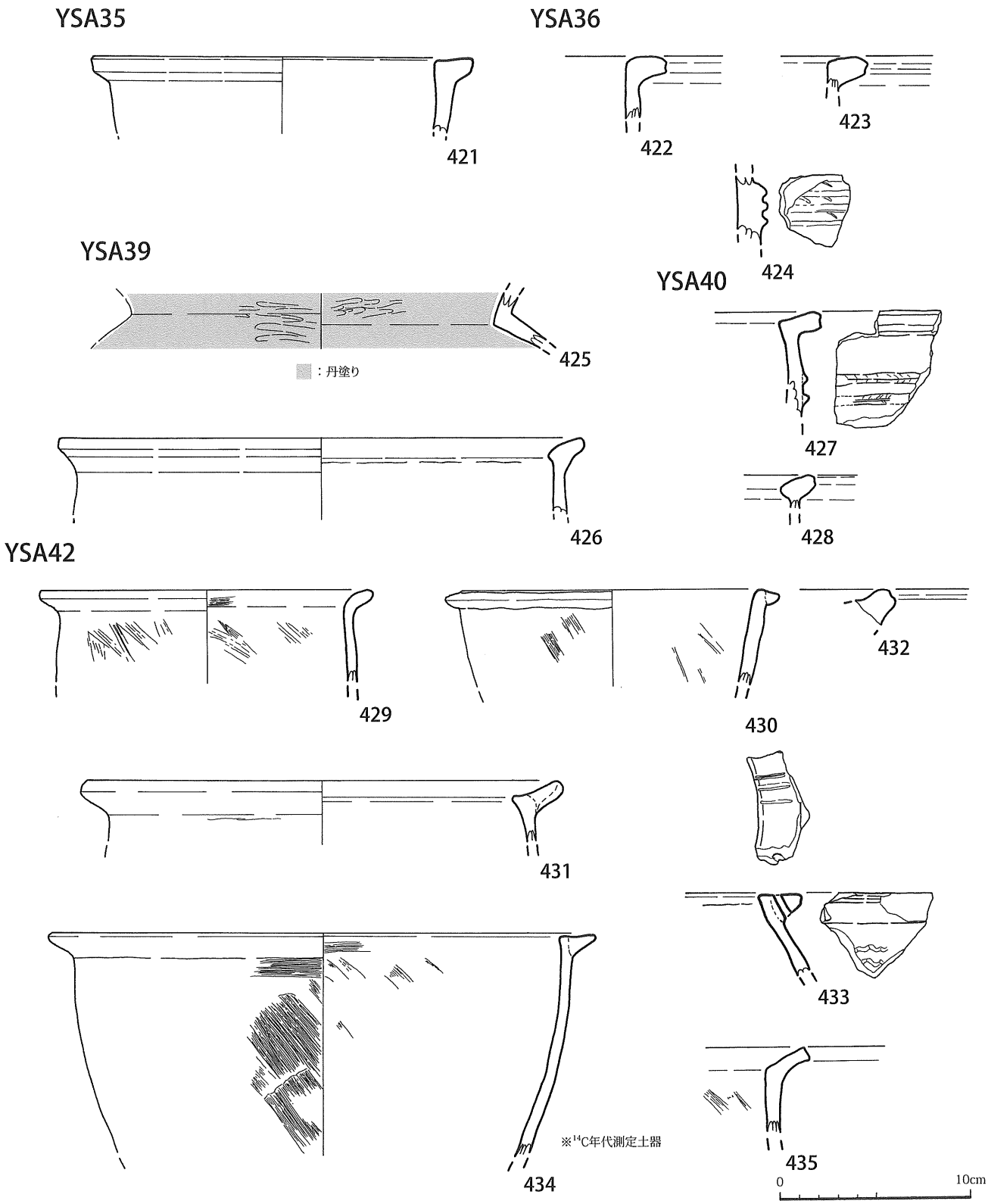



図67　竪穴住居跡出土土器

表８　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 138 | YSA10・上層 | 甕 | 橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 褐色・黒色 | 刻目突帯 |
| 139 | YSA10・上層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい橙 | — | ナデ | 赤褐色 | 刻目突帯 |

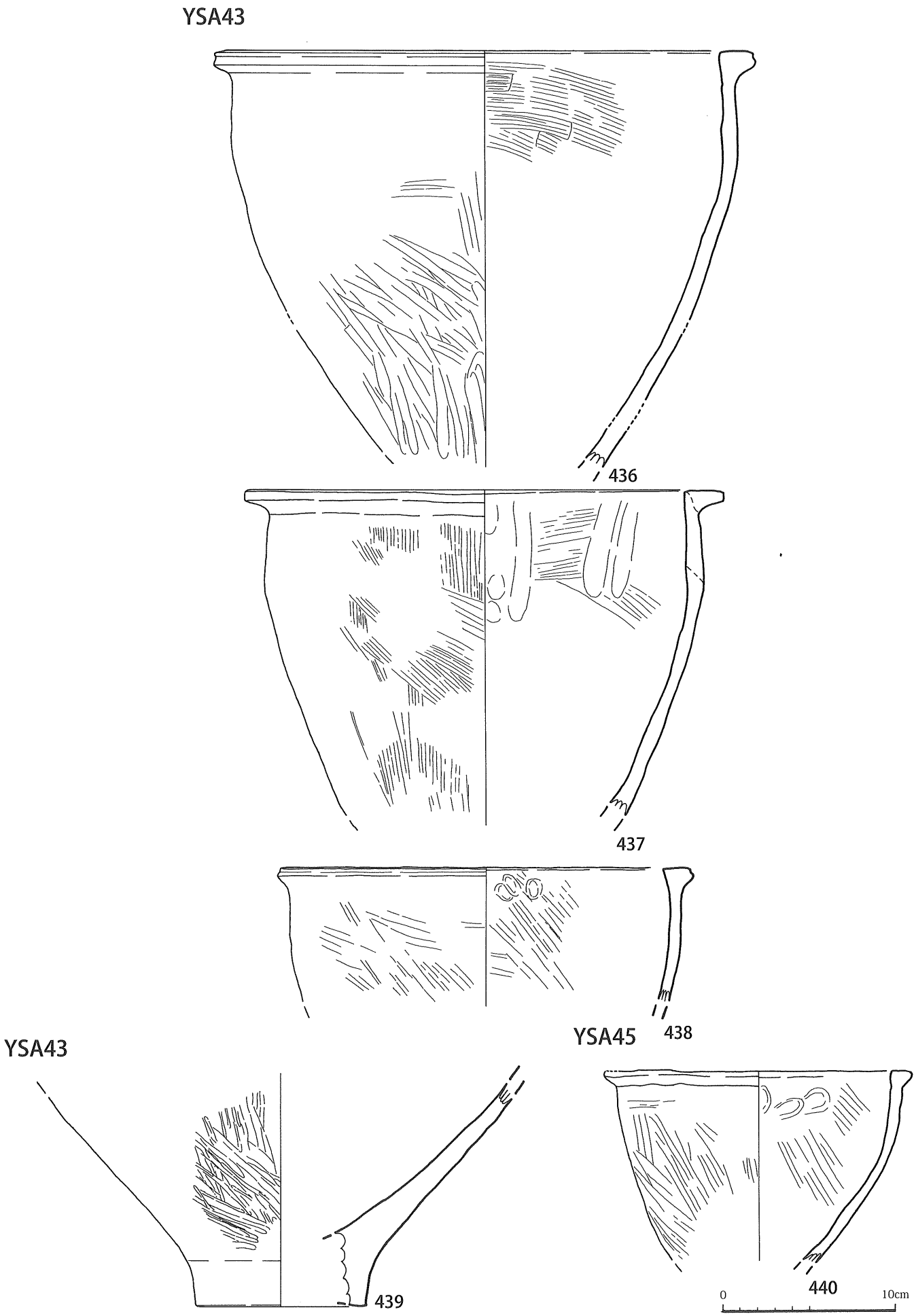



図68　竪穴住居跡出土土器

## 表９　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 140 | YSA10 | 甕 | 橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 透明・白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 141 | YSA10・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 透明・褐色・赤褐色 | |
| 142 | YSA10・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 黒色・カクセン石 | 黒髪式系 |
| 143 | YSA10 | 甕 | にぶい橙～褐灰（スス付着） | 橙 | ハケ | ハケ | 半透明・白色 | 把手付 |
| 144 | YSA10 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色・褐色 | |
| 145 | YSA10 | 甕 | にぶい褐（スス付着） | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 半透明・赤褐色 | タガ状突帯 |
| 146 | YSA10 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・黒色 | |
| 147 | YSA10 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ミガキ | 白色・赤褐色・キンウンモ | タガ状突帯 |
| 148 | YSA10・上層 | 壷 | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 褐色 | |
| 149 | YSA10 | 甕 | にぶい褐 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 褐色・赤褐色 | |
| 150 | YSA10 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 褐色 | |
| 151 | YSA10 | 甕 | 橙～黒褐 | 橙～黒褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 152 | YSA10・上層 | 甕 | にぶい橙 | 褐灰 | ハケ | ハケ→ナデ | 透明 | |
| 153 | YSA10・上層 | 甕 | にぶい褐 | 褐灰 | ハケ | ナデ | 白色・透明・褐色 | |
| 154 | YSA10・上層 | 甕 | 橙 | 褐灰 | ハケ | ナデ | 白色・褐色・キンウンモ | |
| 155 | YSA11 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | 灰褐黄～にぶい黄褐 | ハケ | ナデ | 白色 | |
| 156 | YSA11・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | — | 透明・白色 | |
| 157 | YSA11・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 白色 | |
| 158 | YSA11・上層 | 甕 | 浅黄橙（スス付着） | にぶい黄橙～にぶい橙 | ナデ | ハケ | 黒色・赤褐色 | 三角突帯 |
| 159 | YSA11・上層 | 甕 | 褐灰（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 赤褐色 | |
| 160 | YSA11・下層 | 壷 | 浅黄橙～黄灰 | 黄灰 | — | — | 白色・赤褐色 | |
| 161 | YSA11・下層 | 甕 | 黄灰 | 明赤褐 | ナデ | ナデ | 半透明・褐色 | |
| 162 | YSA11・下層 | 甕 | にぶい黄橙～暗灰黄 | 黄灰 | ハケ | ナデ | 白色 | |
| 163 | YSA12・東主柱穴 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ | ナデ | 白色 | 列点文・瀬戸内系・埋納 |
| 164 | YSA12・西主柱穴・上層 | 甕 | にぶい褐 | 灰黄褐～明黄褐 | ハケ→ナデ | ハケ | 褐色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 165 | YSA12・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | — | 刻目突帯 |
| 166 | YSA12 | 甕 | 灰黄褐 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 透明 | 刻目突帯 |
| 167 | YSA12・上層 | 甕 | にぶい褐 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 透明・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 168 | YSA12 | 甕 | 褐灰 | 灰黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 169 | YSA12・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 半透明・白色・赤褐色 | |
| 170 | YSA12・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 半透明・白色 | |
| 171 | YSA12 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 透明・白色・赤褐色 | |
| 172 | YSA12・上層 | 甕 | 灰黄褐～にぶい黄褐 | 灰黄褐～にぶい黄褐 | ハケ→ナデ | ハケ→ナデ | — | 刻目突帯 |
| 173 | YSA12・上層 | 甕 | 浅黄 | 淡黄 | — | 工具ナデ | 白色・赤褐色・黒褐色 | |
| 174 | YSA12・上層 | 壷 | にぶい黄褐色 | 黒褐色 | ナデ | ナデ・オサエ | 白色・赤褐色 | |
| 175 | YSA12 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 褐色・赤褐色 | 刻目突帯 |

## 表10　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 176 | YSA12・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | — | 刻目突帯 |
| 177 | YSA12 | 甕 | 褐灰 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 透明・白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 178 | YSA12・上層 | 甕 | 灰黄褐 | 灰黄褐 | ハケ | ハケ | 白色・黒色 | 刻目突帯 |
| 179 | YSA12・上層 | 甕 | にぶい黄橙～灰黄褐 | にぶい黄橙～灰黄褐 | ハケ→ナデ | ハケ→ナデ | 白色・褐色 | 三角突帯 |
| 180 | YSA12・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 181 | YSA12・上層 | 甕 | 橙 | 橙 | ハケ | ハケ | 白色・褐色 | |
| 182 | YSA12 | 甕 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 褐色・赤褐色 | |
| 183 | YSA13・下層 | 壷 | 明赤褐 | 明赤褐 | ミガキ | ミガキ | 半透明・白色 | 暗文 |
| 184 | YSA13・上層 | 甕 | 明赤褐 | 明赤褐 | ハケ | ナデ | 白色・キンウンモ | 三角突帯 |
| 185 | YSA13・下層 | 甕 | 黒褐（スス付着） | 黒褐 | ナデ | ナデ | 白色・褐色 | |
| 186 | YSA13・上層 | 甕 | 橙 | 橙 | — | ハケ | 褐色 | |
| 187 | YSA13・上層 | 甕 | 明赤褐 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・カクセン石 | 三角突帯 |
| 188 | YSA15 | 壷 | にぶい橙（スス付着） | にぶい橙 | ミガキ | ケズリ→ナデ | 透明・赤褐色・黒色 | 三角突帯 |
| 189 | YSA15・上層 | 壷 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙～浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・褐色・灰色 | 多条突帯 |
| 190 | YSA15・上層 | 壷 | 暗褐 | にぶい橙 | ミガキ | ナデ | 白色・赤褐色 | 多条突帯 |
| 191 | YSA15 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色 | |
| 192 | YSA15・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 193 | YSA15・下層 | 甕 | にぶい褐 | にぶい橙 | ナデ | ハケ | キンウンモ | 三角突帯 |
| 194 | YSA15・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 黒色 | |
| 195 | YSA15 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 196 | YSA15 | 甕 | 黒褐（スス付着） | 灰褐色 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 197 | YSA15・上層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ→ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 198 | YSA15・上層 | 甕 | 黒褐（スス付着） | 橙 | ナデ | ナデ | 褐色・赤褐色 | |
| 199 | YSA15・上層 | 甕 | 橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 褐色 | |
| 200 | YSA15・上層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯・下城式系 |
| 201 | YSA15・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄褐 | ナデ | ハケ | 白色・褐色 | 三角突帯 |
| 202 | YSA15・上層 | 甕 | 灰黄褐（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 褐色・黒色 | |
| 203 | YSA15・上層 | 鉢 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 褐色・赤褐色 | |
| 204 | YSA15・上層 | 甕 | 黒褐（スス付着） | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 205 | YSA15・上層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 褐色・赤褐色 | |
| 206 | YSA15・上層 | 甕 | 灰黄褐（スス付着） | にぶい黄褐 | ハケ | ハケ | 透明・白色・赤褐色 | |
| 207 | YSA15・上層 | 甕 | 灰褐 | 橙 | ナデ | ナデ | キンウンモ | |
| 208 | YSA15 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・褐色 | |
| 209 | YSA15・上層 | 甕 | 黒褐（スス付着） | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 透明・白色 | |
| 210 | YSA15 | 甕 | 灰褐 | 灰褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 211 | YSA15・上層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・黒色 | 刻目突帯 |

## 表11　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 212 | YSA15 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 半透明・白色・黒色 | |
| 213 | YSA15・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・褐色 | 三角突帯 |
| 214 | YSA15・上層 | 鉢 | にぶい橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 透明・黒色 | |
| 215 | YSA15・上層 | 鉢 | 浅黄橙～橙 | 灰黄褐 | ナデ | オサエ | 透明・白色・赤褐色 | |
| 216 | YSA15・上層＋下層 | 甕 | 浅黄 | 灰白～黄灰 | ハケ→ナデ | ハケ | 透明・白色 | 三角突帯 |
| 217 | YSA15・上層 | 甕 | 明赤褐 | 明赤褐 | ナデ | ナデ | 半透明・褐色・黒色 | |
| 218 | YSA15・上層 | 壷 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ミガキ | 白色・褐色 | |
| 219 | YSA15・上層 | 甕 | にぶい橙 | — | ハケ | — | 透明・半透明・赤褐色 | |
| 220 | YSA15・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 透明・白色・赤褐色 | YSA7 と接合 |
| 221 | YSA15・上層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 透明・白色・赤褐色 | |
| 222 | YSA15・上層 | 甕 | 浅黄橙 | 黒 | ハケ | ナデ | 透明・白色 | |
| 223 | YSA16・上層 | 壷 | 橙 | 橙 | — | — | 白色・褐色 | |
| 224 | YSA16・上層 | 壷 | にぶい橙 | にぶい橙 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色 | |
| 225 | YSA16 | 壷 | 橙 | 橙 | 工具ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 226 | YSA16 | 壷 | にぶい橙 | 橙 | ハケ　ナデ | ナデ | 褐色・赤褐色 | |
| 227 | YSA16・上層 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ | 工具ナデ | 白色・褐色・灰色・赤褐色 | |
| 228 | YSA16 | 壷 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | M字状突帯 |
| 229 | YSA16 | 壷 | 橙 | 橙 | 工具ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | 三角突帯 |
| 230 | YSA16 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ | ナデ | 赤褐色・黒色 | 丹塗 |
| 231 | YSA16 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | 沈線・円孔 |
| 232 | YSA16 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | キンウンモ | |
| 233 | YSA16 | 甕 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | ナデ | ハケ | 白色・キンウンモ | |
| 234 | YSA16・上層 | 甕 | 灰褐 | にぶい赤褐 | 工具ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 235 | YSA16 | 甕 | 明赤褐 | 明赤褐 | ハケ | ハケ | 白色・キンウンモ | 沈線 |
| 236 | YSA16 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 237 | YSA16 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 238 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | 三角突帯 |
| 239 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい褐 | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | 三角突帯 |
| 240 | YSA16 | 甕 | にぶい褐 | にぶい橙 | ナデ | 工具ナデ | 赤褐色 | |
| 241 | YSA16 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 赤褐色・黒色 | 三角突帯 |
| 242 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ→ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | 沈線 |
| 243 | YSA16・上層 | 甕 | 灰褐 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 244 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい赤褐～灰褐 | 灰褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 245 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・褐色・黒色 | 刻目突帯 |
| 246 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい褐 | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 247 | YSA16 | 甕 | 灰黄褐 | 灰黄褐～褐灰 | ミガキ | ハケ | 半透明・白色・褐色 | |

## 表12　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 248 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | ハケ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 249 | YSA16 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色 | 下城式系 |
| 250 | YSA16 | 甕 | 橙 | 橙 | ミガキ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 251 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・褐色 | |
| 252 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 253 | YSA16 | 甕 | 黒褐（スス付着） | 灰褐 | ナデ | ハケ | 赤褐色 | 櫛描波状文 |
| 254 | YSA16 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ナデ | 赤褐色・灰色・黒色 | |
| 255 | YSA16・上層 | 甕 | 褐灰～灰黄褐 | 灰黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 256 | YSA16・下層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色・黒色 | |
| 257 | YSA16 | 甕 | 明赤褐 | 橙 | ミガキ | ナデ | 半透明・白色・カクセン石 | 突帯 |
| 258 | YSA16 | 甕 | 褐 | にぶい褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 259 | YSA16・下層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ミガキ | ナデ | 透明・白色・キンウンモ | |
| 260 | YSA16 | 甕 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・赤褐色 | |
| 261 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい橙 | 黒褐 | 工具ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 262 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい褐 | ミガキ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 263 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色 | |
| 264 | YSA16・上層 | 甕 | 明褐 | にぶい赤褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色 | |
| 265 | YSA16 | 甕 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 266 | YSA16・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | — | ミガキ | 白色・カクセン石 | 突帯 |
| 267 | YSA16・上層 | 甕 | 明赤褐 | にぶい赤褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 268 | YSA16 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 白色・キンウンモ | |
| 269 | YSA17・上層＋下層 | 甕 | にぶい黄褐 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 赤褐色・黒色 | 刻目突帯 |
| 270 | YSA17・上層 | 甕 | 灰褐 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・黒色・キンウンモ | |
| 271 | YSA17・上層 | 甕 | にぶい褐（スス付着） | 橙 | ナデ | ナデ | 半透明・黒色 | |
| 272 | YSA18 | 甕 | 橙 | 橙 | — | ハケ | 白色・赤褐色・黒色 | |
| 273 | YSA18・上層 | 壷 | にぶい黄橙 | 黄灰 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・黒色 | |
| 274 | YSA18 | 甕 | にぶい褐 | 明赤褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 275 | YSA18・上層 | 甕 | 灰黄褐 | 黄灰～黄褐 | ハケ | ハケ | 白色・キンウンモ | |
| 276 | YSA18 | 甕 | にぶい黄橙 | 褐 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・赤褐色 | |
| 277 | YSA18・上層 | 鉢 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・赤褐色・黒色 | |
| 278 | YSA18 | 甕 | 灰褐（スス付着） | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色・黒色 | |
| 279 | YSA18 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・赤褐色 | |
| 280 | YSA18 | 甕 | にぶい褐 | 橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色・黒色 | |
| 281 | YSA18 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色 | |
| 282 | YSA18 | 甕 | 褐（スス付着） | 褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 283 | YSA18 | 甕 | 褐灰 | にぶい赤褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |

## 表13　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 284 | YSA18・上層 | 甕 | 浅黄 | にぶい黄橙～浅黄 | ナデ | ナデ | 灰色・黒色 | 三角突帯 |
| 285 | YSA18・下層 | 甕 | にぶい黄橙 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 白色・橙色 | |
| 286 | YSA18 | 甕 | 褐灰 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 白色・褐色 | |
| 287 | YSA18・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | 黄灰 | ナデ | ハケ→ナデ | 赤褐色・黒色 | |
| 288 | YSA18・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | オリーブ黒 | ハケ | ナデ | 白色・赤渇色・灰色 | |
| 289 | YSA18・上層 | 鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | — | ハケ | 半透明・白色・赤褐色 | |
| 290 | YSA18・上層 | 甕 | にぶい橙～にぶい黄橙 | 褐灰 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色・黒色 | |
| 291 | YSA18・上層 | 甕 | 黄橙 | 黒 | ナデ | ナデ | 白色・赤渇色・灰色 | |
| 292 | YSA19・上層 | 壷 | にぶい橙 | 橙 | ハケ→ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | 突帯 |
| 293 | YSA19・上層 | 壷 | 浅黄橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 半透明・赤褐色 | |
| 294 | YSA19・上層 | 壷 | にぶい橙 | にぶい橙 | ミガキ | ミガキ | 白色・黒色 | |
| 295 | YSA19 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ（暗文） | ミガキ | 白色・黒色 | 丹塗 |
| 296 | YSA19・上層 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ（暗文） | ミガキ | 白色・黒色 | 丹塗 |
| 297 | YSA19・上層 | 甕 | 灰褐 | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色 | 突帯 |
| 298 | YSA19・上層 | 甕 | 褐灰 | にぶい褐 | ナデ | ハケ | 白色・キンウンモ | |
| 299 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 300 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 半透明・白色・褐色・赤褐色 | 突帯 |
| 301 | YSA19・上層 | 壷 | にぶい橙 | 明赤褐 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 302 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・キンウンモ | |
| 303 | YSA19・上層 | 甕 | 黒褐 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 304 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 305 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 306 | YSA19 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色・黒色 | |
| 307 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 透明・赤褐色 | 突帯 |
| 308 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい黄褐（スス付着） | 灰黄褐 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 309 | YSA19 | 甕 | 褐灰 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・赤褐色・黒色 | |
| 310 | YSA19・上層 | 甕 | 灰褐 | 褐灰 | ナデ | ハケ | 白色 | |
| 311 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 褐灰 | ナデ | ハケ | 白色 | 刻目突帯 |
| 312 | YSA19・上層 | 甕 | 灰褐（スス付着） | 灰褐 | ナデ | ナデ | 半透明・黒色 | 刻目突帯 |
| 313 | YSA19 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色・褐色 | 刻目突帯 |
| 314 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・褐色 | |
| 315 | YSA19 | 甕 | にぶい褐 | 黒褐 | ナデ・オサエ | ナデ | 赤褐色・キンウンモ | |
| 316 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 317 | YSA19・上層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 灰色・黒色 | |
| 318 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 319 | YSA19・上層 | 大甕 | にぶい黄橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |

## 表14　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 320 | YSA19 | 甕 | にぶい黄橙 | 褐灰 | ナデ | ナデ | 白色・褐色 | |
| 321 | YSA19・上層 | 甕 | にぶい褐 | 褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 322 | YSA19・上層 | 壷 | にぶい黄橙 | 灰白 | ミガキ | — | 白色・赤褐色 | |
| 323 | YSA19・上層 | 壷 | 黒褐 | 褐灰 | ミガキ | — | 褐色・灰色・黒色 | |
| 324 | YSA20・下層 | 甕 | 灰黄褐 | 黄褐 | ハケ | ナデ | 白色・キンウンモ | 沈線文 |
| 325 | YSA20・上層 | 壷 | 橙 | 橙 | — | — | 褐色・赤褐色・灰色 | |
| 326 | YSA20・上層 | 壷 | にぶい黄橙～黄灰 | にぶい黄橙～黄灰 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 327 | YSA20・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色・灰色 | 口縁部に穿孔 |
| 328 | YSA20・上層 | 甕 | 橙 | 橙 | ハケ | 工具ナデ | 白色・褐色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 329 | YSA20・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ナデ | 白色 | |
| 330 | YSA20・上層 | 甕 | 明赤褐 | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 331 | YSA20・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 332 | YSA20・上層 | 甕 | 暗褐（スス付着） | 橙～にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 333 | YSA20・上層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 334 | YSA20・上層 | 甕 | 灰黄褐～にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 赤褐色・灰色 | |
| 335 | YSA20・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 336 | YSA20・上層 | 甕 | 暗灰黄（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 白色 | |
| 337 | YSA20・上層 | 甕 | 橙 | 黒褐 | ハケ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 338 | YSA20 | 把手 | | | | | | |
| 339 | YSA21・上層 | 甕 | 灰黄褐～橙 | 橙 | ハケ | ハケ | 白色・キンウンモ | 三角突帯 |
| 340 | YSA22・上層 | 甕 | 赤褐 | 灰褐 | ナデ | ナデ | 半透明・カクセン石 | 突帯 |
| 341 | YSA23・上層 | 壷 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | — | 半透明・灰色・赤褐色 | 突帯 |
| 342 | YSA23 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙～褐灰 | ミガキ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 343 | YSA23・上層 | 壷 | 橙～暗灰黄 | 黄灰 | — | — | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 344 | YSA23・上層 | 甕 | 灰黄褐 | にぶい赤褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | 沈線 |
| 345 | YSA23・上層 | 甕 | 褐灰 | にぶい赤褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 346 | YSA23 | 甕 | 褐灰 | にぶい赤褐 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色・キンウンモ | 沈線 |
| 347 | YSA23・下層 | 甕 | にぶい黄橙～褐灰（スス付着） | 橙 | 工具ナデ | ナデ | 透明・白色・赤褐色 | |
| 348 | YSA23・下層 | 甕 | 暗灰黄 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | 三角突帯 |
| 349 | YSA23・上層 | 甕 | 褐灰 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 350 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | 突帯 |
| 351 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 半透明・赤褐色 | |
| 352 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい赤褐 | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 353 | YSA23・上層 | 甕 | 褐灰 | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 354 | YSA23 | 甕 | 黄灰 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 355 | YSA23 | 甕 | にぶい黄 | 黒褐～灰黄 | ナデ | ナデ | 白色 | |

## 表15　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 356 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄 | 黒褐～灰黄 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 357 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 半透明・白色 | 刻目突帯 |
| 358 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙～橙 | 橙 | ハケ | ハケ | 透明・黒色 | 刻目突帯 |
| 359 | YSA23・上層 | 甕 | 褐灰 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 360 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 361 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 褐灰 | ハケ | ナデ | 白色・灰色 | |
| 362 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄 | 暗灰黄 | ハケ | ナデ | 白色・灰色 | |
| 363 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙～にぶい橙 | 褐灰 | ナデ | ナデ | 白色・灰色 | |
| 364 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 褐灰 | ハケ | ナデ | 半透明・白色・灰色 | |
| 365 | YSA23・上層 | 鉢 | にぶい黄橙（スス付着） | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 366 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙～にぶい黄 | ナデ | ナデ | 赤褐色・黒色 | |
| 367 | YSA23・下層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | 橙 | ナデ | ナデ | 半透明・赤褐色 | |
| 368 | YSA23・上層 | 甕 | 暗灰黄 | 暗灰黄 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 369 | YSA23・下層 | 甕 | にぶい赤褐～橙（スス付着） | にぶい黄褐～黄灰 | ナデ | ナデ | 透明・白色・赤褐色 | 突帯 |
| 370 | YSA23・下層 | 甕 | にぶい黄橙 | 浅黄橙～にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色 | 刻目突帯 |
| 371 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ・ナデ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 372 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 灰黄 | ハケ | ナデ | 白色 | 刻目突帯 |
| 373 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 半透明・赤褐色 | |
| 374 | YSA23・上層 | 甕 | 灰黄褐 | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 白色・黒色 | |
| 375 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 376 | YSA23・上層 | 甕 | 橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 半透明・赤褐色 | |
| 377 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙～黄灰 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 378 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 浅黄～にぶい橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | 沈線（矢羽根文様） |
| 379 | YSA23・下層 | 甕 | にぶい黄橙 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 380 | YSA23・下層 | 甕 | 橙～にぶい橙 | 褐灰 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 381 | YSA23・上層 | 甕 | 橙（スス付着） | 橙 | ナデ | ハケ | 赤褐色・灰色 | 刻目突帯 |
| 382 | YSA23・下層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・黒色 | 刻目突帯 |
| 383 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 浅黄 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 384 | YSA23・上層 | 甕 | 暗灰黄 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 385 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙～暗灰黄 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 386 | YSA23・上層 | 甕 | 浅黄橙～橙 | 暗灰黄（スス付着） | ハケ | ハケ | 白色・黒色 | |
| 387 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄褐 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 388 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 半透明・白色・赤褐色 | |
| 389 | YSA23 | 大甕 | 橙～褐灰（スス付着） | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | 突帯 |
| 390 | YSA26・上層 | 甕 | にぶい黄褐 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 透明・白色 | |
| 391 | YSA27・下層 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ（暗文） | ミガキ | 半透明・白色 | 丹塗 |

## 表16　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 392 | YSA27・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 393 | YSA27・上層 | 甕 | 灰黄褐（スス付着） | 暗灰黄 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 394 | YSA27・上層 | 甕 | にぶい黄褐 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 395 | YSA27・上層 | 甕 | 灰黄褐（スス付着） | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 灰色・赤褐色 | 突帯 |
| 396 | YSA28 | 壷 | にぶい褐～褐灰（スス付着） | にぶい褐～褐灰 | ミガキ | 工具ナデ | 白色・キンウンモ | 突帯 |
| 397 | YSA28・上層 | 甕 | 灰黄褐 | 灰黄褐 | ナデ | ナデ | 半透明・白色 | |
| 398 | YSA28・上層 | 甕 | にぶい橙～褐灰 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 399 | YSA28・上層 | 甕 | にぶい橙（スス付着） | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 400 | YSA28・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 401 | YSA28・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 透明・赤褐色・黒色 | 刻目突帯 |
| 402 | YSA28・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 半透明・赤褐色 | |
| 403 | YSA28・下層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙（スス付着） | ハケ | ハケ | 白色・キンウンモ | |
| 404 | YSA28・上層 | 壷？ | にぶい橙 | にぶい橙～褐灰 | — | — | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 405 | YSA29・上層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | — | — | 灰色・赤褐色 | YSA16（254）と接合 |
| 406 | YSA29・上層 | 甕 | 灰黄褐 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色 | |
| 407 | YSA29・下層・中央土坑内 | 甕 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 白色 | 刻目突帯 |
| 408 | YSA29 | 甕 | 明赤褐 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 409 | YSA29・上層 | 甕 | 灰黄 | 浅黄 | ナデ | ナデ | 透明・カクセン石 | |
| 410 | YSA30・上層 | 甕 | 灰黄褐（スス付着） | にぶい褐 | ナデ | ハケ | 白色・透明・キンウンモ | 三角突帯 |
| 411 | YSA30 | 甕 | にぶい褐 | 黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 412 | YSA30・上層 | 壷 | 灰黄褐 | にぶい黄橙 | ミガキ | ナデ | 灰色・赤褐色 | 沈線 |
| 413 | YSA30 | 甕 | 褐灰 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・黒色 | 突帯 |
| 414 | YSA30 | 甕 | にぶい黄橙 | — | ナデ | — | 白色・褐色 | |
| 415 | YSA30 | 甕 | にぶい黄橙 | 暗灰黄 | ハケ | ナデ | 白色 | |
| 416 | YSA30・上層 | 壷 | にぶい赤褐～橙 | 橙 | ミガキ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 417 | YSA33・上層＋下層 | 甕 | 浅黄橙～にぶい橙（スス付着） | 浅黄橙～にぶい黄褐 | ハケ | ハケ | 灰色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 418 | YSA33 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 419 | YSA33・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 420 | YSA34 | 鉢？ | 浅黄 | 浅黄 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | 刻目突帯文期？ |
| 421 | YSA35・上層 | 甕 | にぶい黄褐（スス付着） | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 422 | YSA36・上層 | 甕 | 明赤褐 | にぶい黄橙～黄灰 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 423 | YSA36・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい黄橙～黄灰 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 424 | YSA36・上層 | 甕 | 黒褐 | 暗灰黄 | ナデ | ナデ | 透明・白色 | 突帯 |
| 425 | YSA39 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ | ミガキ | 白色 | 丹塗 |
| 426 | YSA39 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 黒色 | |
| 427 | YSA40・上層＋下層 | 甕 | 灰黄褐 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 白色 | 突帯 |

## 表17　弥生時代中期遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 428 | YSA40・上層 | 甕 | 灰黄褐 | 黒褐 | ナデ | ナデ | キンウンモ | |
| 429 | YSA42・主柱穴 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 430 | YSA42・中央土坑 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | 浅黄橙 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 431 | YSA42・中央土坑 | 甕 | 橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・カクセン石 | 黒髪式系 |
| 432 | YSA42 | 甕 | 灰褐 | — | ナデ | ナデ | 赤褐色・キンウンモ | |
| 433 | YSA42・床面 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | 沈線・穿孔 |
| 434 | YSA42 | 甕 | 橙（スス付着） | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 白色・褐色 | 年代測定サンプル（2140±40年BP） |
| 435 | YSA42 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 436 | YSA43・主柱穴 | 甕 | にぶい橙（スス付着） | にぶい橙 | 工具ナデ | ハケ | 赤褐色 | 埋納 |
| 437 | YSA43 | 甕 | 灰黄褐（スス付着） | 浅黄 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 438 | YSA43 | 甕 | 褐灰 | にぶい黄橙～灰黄褐 | 工具ナデ | 工具ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 439 | YSA43 | 壷 | にぶい褐 | 黒褐 | ミガキ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 440 | YSA45 | 甕 | 浅黄 | 浅黄 | 工具ナデ | ナデ | 灰色 | |
| | | | | | | | | |
| 547 | YSC5 | 壷 | にぶい黄橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | 突帯 |
| 548 | YSC6・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 白色・灰色 | 突帯 |
| 549 | YSC6・上層 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ミガキ | 灰色・赤褐色 | |
| 550 | YSC6・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | — | ナデ | 白色・灰色 | |
| 551 | YSC6・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ナデ | 白色 | |
| 552 | YSC6・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 553 | YSC12・上層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 透明・白色 | |
| 554 | YSC12 | 壷 | にぶい橙 | にぶい橙 | ミガキ | ナデ | 白色・灰色 | 櫛描直線文 |
| 555 | YSD1・上層 | 甕 | にぶい橙（スス付着） | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 556 | YSD2・上層 | 甕 | にぶい橙 | — | ナデ | — | 白色 | |
| 559 | YSS1 | 甕 | にぶい黄橙 | 灰黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・褐色・黒色 | |
| 560 | YSS1 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・キンウンモ | |
| 561 | YSS1 | 壷 | にぶい橙 | 褐灰 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・キンウンモ | |
| 562 | YSS1 | 小皿 | 灰白 | 灰白 | ナデ | ナデ | 黒色・赤褐色 | 中世土師器 |

### 竪穴住居跡出土石器

#### YSA1 出土石器（図 69）

両端が欠損した丸みのある角柱状の砥石が出土している。**441** は 3 面に使用痕と思われる研磨痕が見られる。また、平坦面の一部には敲殴痕も見られ、敲石としても使用している。残存長 5.0cm、幅 7.3cm、厚さ 4.4cm、重さ 320g、細粒砂岩。

#### YSA5 出土石器（図 69）

磨石・敲石が 1 点出土している。**442** は楕円形の扁平な礫を利用しており、扁平部は両面ともに研磨されている。側面全体の約 4 分の 3 の部位に敲打痕が残り、側面を敲石として使用している。長さ 7.9cm、幅 7.1cm、厚さ 3.0cm、重さ 240g、細粒砂岩。

**YSA7 出土石器（図 69）**

磨製石鏃 3 点とその素材と思われる剥片が 1 点出土している。**443** は平面形が三角形で基部に抉りのないタイプの磨製石鏃で、一部に剥離が見られる。長さ 1.7cm、幅 1.7cm、厚さ 0.1cm、重さ 0.4g、凝灰質頁岩。**444** は下層から出土した。基部は欠損しており、両面ともに研磨されている。残存長 1.8cm、幅 1.5cm、厚さ 0.1cm、重さ 0.4g、凝灰質頁岩。**445** も基部の欠損した磨製石鏃片である。残存長 1.3cm、幅 1.0cm、厚さ 0.1cm、重さ 0.2g、凝灰質頁岩。**446** は下層から出土した剥片で、石材・形状等から磨製石鏃の素材と思われ、一部に調整加工が見られる。長さ 2.1cm、幅 2.2cm、厚さ 0.1cm、重さ 1.0g、凝灰質頁岩。

**YSA8 出土石器（図 69）**

床面直上から磨製石鏃片が 1 点出土している。**447** は先端部と基部の片側を欠損している。両面ともに研磨されており、抉りのないタイプである。残存長 2.0cm、幅 1.8cm、厚さ 0.2cm、重さ 1.4g、黒色頁岩。

**YSA10 出土石器（図 69）**

剥片 2 点と石皿 1 点、軽石加工品が 2 点出土している。**448** は縁辺部に整形のための調整加工が加えられており、石材・形状から石鏃の素材と思われる。長さ 2.5cm、幅 2.3cm、厚さ 0.4cm、重さ 3.3g、凝灰質頁岩。**449** も調整加工痕のある剥片で、石鏃の素材と思われる。長さ 3.5cm、幅 2.0cm、厚さ 0.6cm、重さ 6.1g、凝灰質頁岩。**450** は上層から出土した石皿で、表面は使用により平滑でやや窪んでおり、裏面の一部にも整形のための研磨痕が見られる。また、側面の一部には敲打痕が見られ、敲石としても使用している。長さ 11.9cm、幅 17.5cm、厚さ 4.6cm、重さ 1,420g、細粒砂岩。**451** は上層から出土した軽石加工品で、表面中央部に長さ 14cm、幅 5cm の縦長の凹部を有し、その中央にほぼ直線状に並んでサイズの異なる先端の平らな工具で浅い穴を抉っている。工具痕が明瞭な穴は 3 箇所で、中央の穴は深さ 0.9cm である。全体が凹部も含め縦長方向へ研磨されている。長さ 20.5cm、幅 9.4cm、厚さ 5.8cm、重さ 290g。**452** も小型の軽石加工品で、扁平な楕円状の製品である。長さ 3.4cm、幅 2.6cm、厚さ 1.4cm、重さ 4g。

**YSA11 出土石器（図 69）**

磨製石鏃片 2 点、粗製剥片石器 1 点が出土している。**453** は床面直上で出土したもので、先端部が一部欠損している磨製石鏃である。長さ 2.3cm、幅 1.6cm、厚さ 0.1cm、重さ 1.2g、凝灰質頁岩。**454** は平面形が舟形を呈し、両面を研磨している。明瞭な刃部の研ぎ出し及び基部の調整研磨がなく整形途中の磨製石鏃と思われる。長さ 3.5cm、幅 1.7cm、厚さ 0.2cm、重さ 2.0g、凝灰質頁岩。**455** は下層で出土した粗製剥片石器で、一部には被熱のためスス状のものが付着している。平面形は三角形状で 1 辺の一部に片面から調整加工を加え、厚手の刃部を作っている。スクレイパーの用途が考えられる。長さ 11.4cm、幅 11.3cm、厚さ 1.3cm、重さ 220.0g、両輝石安山岩 a。

**YSA12 出土石器（図 70）**

打製石鏃 1 点、磨製石鏃片 1 点、磨石・敲石 1 点、砥石 1 点が出土している。**456** は横長の剥片を利用し、基部には緩やかな弧状の抉りを有する打製石鏃で上層から出土した。縄文後、晩期のものか。長さ 2.4cm、幅は 2.0cm、厚さ 0.4cm、重さ 0.9g、無斑晶質安山岩。**457** は床面直上で出土した磨製石鏃片で、先端部及び基部の片側端部を欠損している。表裏とも 3 面に分けて研磨し刃部を研ぎ出しており、中央の面は両面ともやや窪んでいる。抉りを持つタイプである。残存長 1.9cm、幅 2.0cm、厚さ 0.2cm、重さ 1.1g、黒色頁岩。**458** は小型の棒状の磨石・敲石で、側面のやや平坦な部分を磨石として使用している。また、両端部には敲打痕がみられ、敲石としても使用している。長さ 8.2cm、幅 2.7cm、厚さ 2.4cm、重さ 86g、細粒砂岩。**459** は大型の砥石で、上層から出土した。表面の緩やかな局面と側面を砥面として利用している。また、裏面も平滑で整形調整用に研磨したものと思われる。長さ 41.8cm、幅 16.1cm、厚さ 10.4cm、重さ 7,600g、細粒砂岩。

**YSA13 出土石器（図 71）**

調整加工のある剥片 1 点が出土している。**460** は裏面の一部に自然面を残した粗製剥片石器で、片面から調整加工を加え、厚手と薄手の刃部を作っている。打製石斧の破片の可能性も残るが、スクレイパーの機能を持つ剥片石器とした。長さ 4.8cm、幅 8.3cm、厚さ 0.6cm、重さ 25.2g、頁岩源ホルンフェルス。

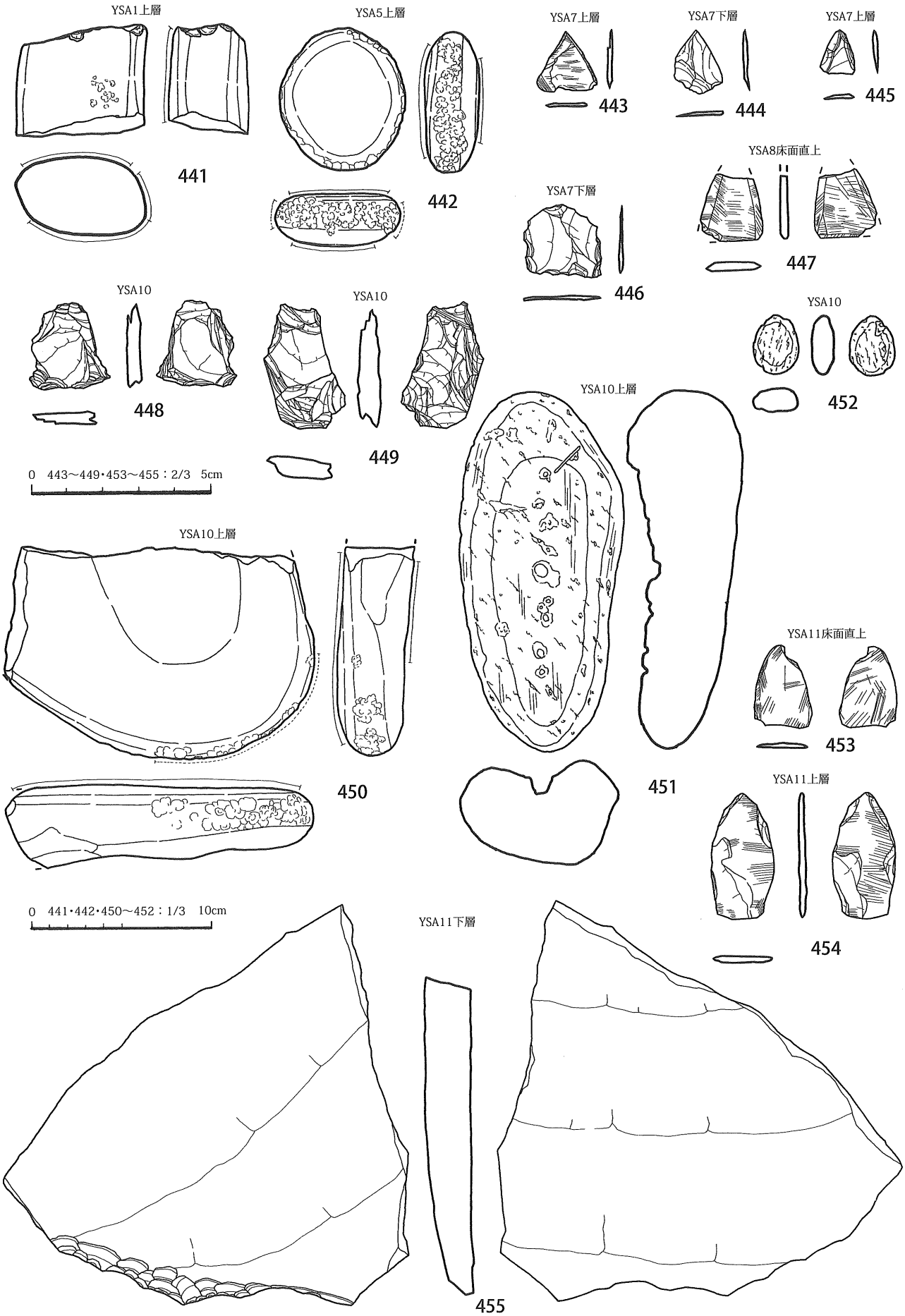



図69　竪穴住居跡出土石器

**YSA14 出土石器（図 71）**

打製石鏃 1 点が上層から出土した。**461** は表裏面ともに細かな調整加工で整形しており、U 字状の抉りを有する。縄文後、晩期のものか。長さ 2.0cm、幅 1.6cm、厚さ 0.3cm、重さ 0.7g、チャート。

**YSA15 出土石器（図 71･72）**

剥片石器 1 点と剥片 1 点、軽石加工品 1 点が上層で出土している。**462** は断面が大まかな調整によって菱形状を呈する粗製剥片石器である。側縁の一部に両面より細かな調整加工を加えているが、実測図下部の縁辺全体及び上部縁辺の調整加工のない部位の両面に光沢のあるコーングロスが明瞭に確認され、主たる刃部と考えられることから、側縁部位のものは刃潰し用の調整加工痕と考えられる。長さ 8.9cm、幅 12.2cm、厚さ 2.1cm、重さ 197.9g、両輝石安山岩 a。**463** は両面から大まかな調整加工を加え形を整えている。長さ 3.1cm、幅 2.5cm、厚さ 0.4cm、重さ 3.5g、黒色頁岩。**464** は軽石加工品で、全体が研磨されている。長さ 8.4cm、幅 4.8cm、厚さ 2.4cm、重さ 20g。

**YSA16 出土石器（図 72･73）**

打製石斧 1 点、磨製石鏃 4 点、剥片 6 点、砥石 1 点、磨石・敲石 2 点が出土している。**466** は磨製石鏃で、表 3 面、裏 4 面を研ぎ出し、基部に弧状の抉りを有する。両側の刃縁全体に刃こぼれが見られる。長さ 3.8cm、幅 2.3cm、厚さ 0.3cm、重さ 2.4g、黒色頁岩。**467** は基部が一部欠損した磨製石鏃片である。残存長 1.8cm、幅 1.5cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.6g、黒色頁岩。**468** は小型の磨製石鏃で、先端は鈍角で抉りのないタイプである。長さ 1.7cm、幅 1.2cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.6g、黒色頁岩。**469** は基部が欠損した磨製石鏃片である。残存長 2.1cm、幅 1.5cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.8g、黒色頁岩。**465、470 ～ 473** は石材と形状・調整加工痕等から磨製石鏃の素材となる剥片と思われる。**465** は折り取った剥片に両面から調整加工を加え、三角形状に形を整えている。長さ 2.9cm、幅 2.5cm、厚さは 0.4cm、重さ 3.5g、緑色凝灰質頁岩。**470** は長さ 3.4cm、幅 2.6cm、厚さ 0.4cm、重さ 2.8g、凝灰質頁岩。**471** は長さ 4.2cm、幅 2.0cm、厚さ 0.5cm、重さ 5.2g、黒色頁岩。**472** は長さ 3.6cm、幅 3.1cm、厚さ 0.5cm、重さ 5.5g、黒色頁岩製。**473** は長さ 5.8cm、幅 4.3cm、厚さ 0.5cm、重さ 15.0g、凝灰質頁岩。**474** は横長剥片で、SA18 の床面直上で出土した打製石鏃と接合する。長さ 3.6cm、幅 2.3cm、厚さ 0.5cm、重さ 3.5g、流紋岩。**475** は自然面の残る打製石斧である。表裏面から細かな調整加工により整形しており、側縁に 2 箇所の抉りのあるやや特殊な形状で、使用痕もないことから祭器としての用途も考えられる。長さ 13.5cm、幅は 6.0cm、厚さ 2.1cm、重さ 185g、中粒砂岩。**476** は丸みを帯びた角柱状の礫を利用した砥石である。上下が欠損しており、長さを調整したものか。4 面ともに研面と思われる。残存長は 6.9cm、幅は 6.1cm、重さは 290g、細粒砂岩。**477** は手のひら大の扁平な自然礫を利用した磨石・敲石であるが、半裁している。表面の中央部に幅 5.5cm の範囲で敲打痕が顕著であるが、側面の一部にも確認される。ほぼ全面が研磨されている。敲石としての使用の結果半裁したものか。残存長 7.2cm、幅 11.1cm、厚さ 4.6cm、重 370g、両輝石安山岩 b（霧島新期熔岩類）。**478** は平面・断面ともに楕円形状の小型の磨石・敲石である。表裏面・側面ともに研磨されているが、側面の一部に敲打痕が見られる。また、裏面の中央部に径 3cm 程度の範囲でススの付着が見られるほか、熱によりやや赤化した部位も見られる。長さ 11.3cm、幅 4.1cm、厚さ 2.5cm、重さ 69g、細粒砂岩。

**YSA18 出土石器（図 73）**

打製石鏃 1 点、磨製石鏃 1 点、剥片 1 点、軽石加工品 1 点が出土している。**479** は横長の剥片を利用した槍先とも思われる長い形状の打製石鏃で、床面直上から出土した。刃縁部全体に表裏面から調整加工しており、基部にも抉りを入れる加工を加えている。SA16 の 474 の剥片が接合する。長さ 7.2cm、幅 2.3cm、厚さ 0.5cm、重さ 11.3g、流紋岩。**480** は両側縁に鋸歯状の刃部を有し、平面形がほぼ正三角形を呈する磨製石鏃で、床面直上で出土した。長さ 2.1cm、幅 2.1cm、厚さ 0.2cm 重さ 1.1g、黒色頁岩。**481** は下部に穿孔の残存部と思われる抉りを有しており、石包丁の破片を磨製石鏃の素材として再利用する剥片か。長さ 3.5cm、幅 2.7cm、厚さ 0.4cm、重さ 4.4g、頁岩源ホルンフェルス。**482** は軽石加工品で、全体が研磨されている。長さ 4.6cm、幅 3.2cm、厚さ 1.4cm、重さ 9g。

**YSA19 出土石器（図 73 ～ 76）**

磨製石鏃 4 点、剥片 15 点、磨石・敲石 2 点、石皿片 1、砥石 3 点が出土している。**483** はほぼ正三

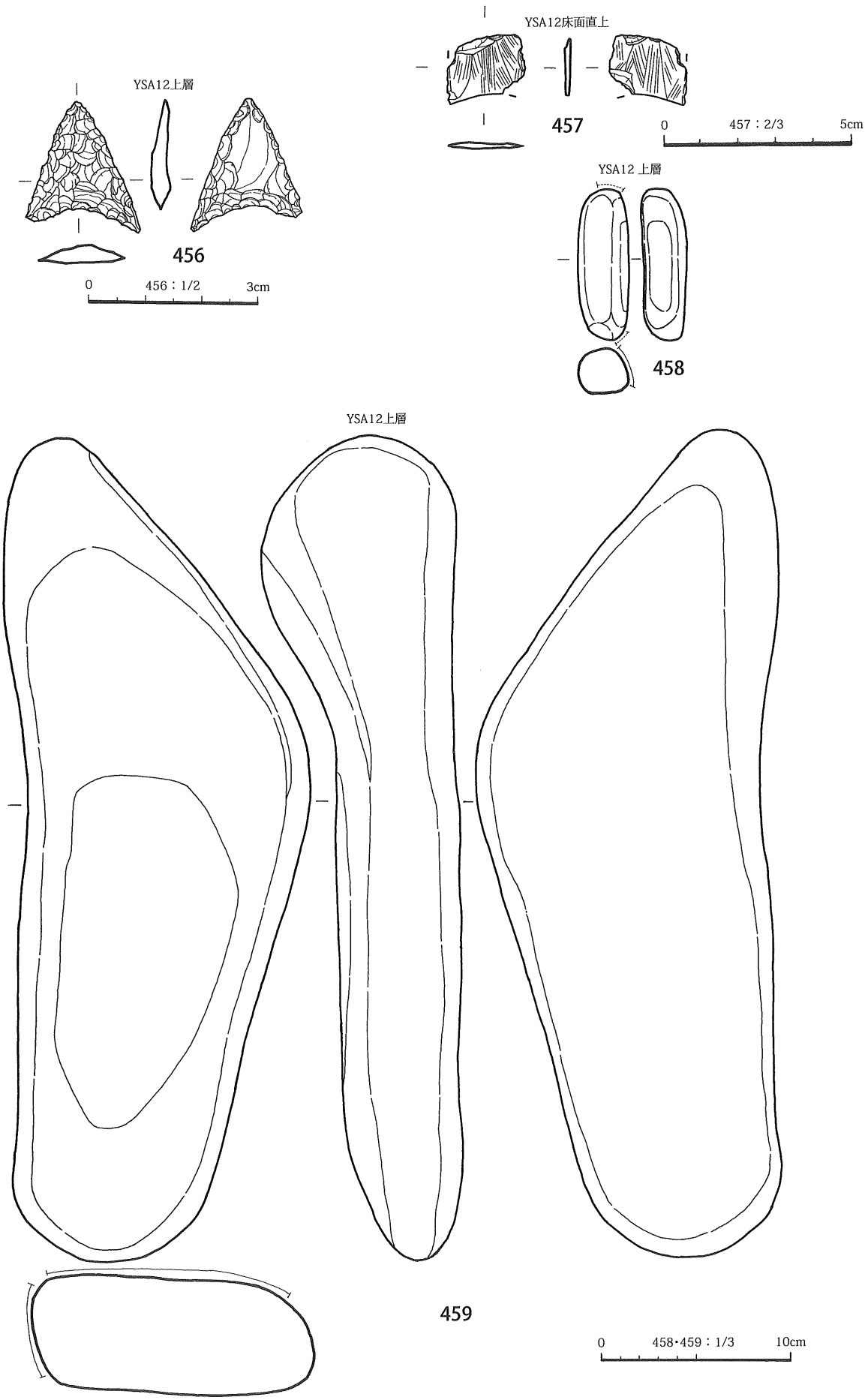



図70　竪穴住居跡出土石器

角形の形状で、両端の刃縁はやや外湾曲し、抉りを有する。基部の片側下端部を欠損している。長さ2.3cm、幅2.1cm、厚さ0.2cm、重さ1.1g、凝灰質頁岩。**484**も同様の形状でやや小型である。長さ1.8cm、幅1.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.7g、凝灰質頁岩。**485**は縦長の形状で裏面には剥離面が残る。刃縁の一部に刃こぼれが見られる。長さ3.1cm、幅1.7cm、厚さ0.1cm、重さ0.9g、凝灰質頁岩。**486**は小型の磨製石鏃で、床面直上から出土した。両面ともに研磨しているが、明瞭な刃部の研ぎ出しがなく、未製品と思われる。長さ1.7cm、幅1.1cm、厚さ0.1cm、重さ0.3g、凝灰質頁岩。**487**は表面に細かな調整加工が行われ整形しており、石鏃の素材と思われる。裏面には剥離面を残す。長さ2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ2.1g、黒色頁岩。**488**は長さ3.5cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.5g、凝灰質頁岩。**489**は長さ4.2cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重さ4.8g、凝灰質頁岩。**490**は長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重さ3.0g、凝灰質頁岩。**491**は長さ4.8cm、幅2.6cm、厚さ0.3cm、重さ4.6g、凝灰質頁岩。**492**は長さ3.4cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ2.1g、凝灰質頁岩。**493**は長さ3.7cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重さ4.1g、凝灰質頁岩。**494**は長さ3.4cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ3.3g、凝灰質頁岩。**495**は長さ3.2cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ3.7g、凝灰質頁岩。**496**は長さ4.1cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ3.3g、凝灰質頁岩。**497**は大き目の剥片であるが、ある程度の整形を施した後上半部をカットしてさらに整形して製品とするものか。長さ6.8cm、幅2.8cm、厚さ0.5cm、重さ10.5g、凝灰質頁岩。**498**は長さ4.2cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm、重さ5.4g、凝灰質頁岩。**499**は長さ3.3cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm、重さ2.4g、凝灰質頁岩。**500**は長さ3.1cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ2.4g、凝灰質頁岩。**501**は長さ4.7cm、幅2.5cm、厚さ0.5cm、重さ7.0、凝灰質頁岩。**52～61**は床面直上で出土している。**502**は半裁した磨石を敲石として利用しているもので、先端部に敲打痕が見られる。長さ8.2cm、幅11.5cm、厚さ4.6cm、重さ555g、細粒砂岩。**503**は断面が円形で棒状の磨石・敲石で上層から出土した。小型のもので、ほぼ全体が研磨されており、両端ともに敲打痕が見られる。長さ6.5cm、幅2.9cm、厚さ1.8cm、重さ52g、細粒砂岩。**504**は扁平な自然礫を利用した大型の砥石で、下層で出土した。表の平坦部の一部と裏面の湾曲部を縦長に砥面として使用している。長さ52.4cm、幅22.1cm。厚さ9.4cm、重さ14,400g、細粒砂岩。**505**は砥石で、一部欠損している。砥面は6面であり、底面及び側面も使用している。残存長12.2cm、幅9.9cm、厚さ4.3cm、重さ810g、細粒砂岩。**506**は石皿の一部と思われる石器で、表の面は、端部から緩やかに内傾し平滑である。また、裏面及び側面も研磨して整形調整加工している。残存長15.8cm、幅13.6cm、厚さ8.8cm、重さ2,650g、細粒砂岩。**507**も砥石で下層から出土した。断面は丸みのある四角形で砥面は4面で、側面にも使用痕が明瞭に残る。また、片方の先端部に敲打痕が明瞭に見られ、敲石としても使用している。ススの付着が見られる。長さ24.3cm、幅9.2cm。厚さ7.8cm、重さ2,810g、細粒砂岩。

**YSA20 出土石器（図76）**

石皿が1点、砥石1点、軽石加工品2点が上層で出土している。**508**は小型の石皿と思われる石器で、表面全体はやや窪んでおり、平滑で磨耗している。裏面は大まかな調整加工を加えているが、置いて使用するにはやや不安定な形状である。長さ13.2cm、幅8.3cm、厚さ2.9cm、重さ420g、両輝石安山岩a。**509**は扁平な礫を利用した砥石で、ほぼ半裁したものか。表裏面ともに中央に向かって窪んでおり、平滑で両面ともに使用している。残存長20.7cm、幅14.2cm、厚さ5.0cm、重さ2,310g、細粒砂岩。**510**はほぼ円盤状の軽石加工品で、約半分を欠損している。表裏面ともに研磨されており、表面の中央に断面U字の溝状に加工した痕跡が見られる。砥石としての使用によるものか。残存長5.1cm、幅4.4cm、厚さ2.1cm、重さ102g。**511**も全体が研磨され、整形されている。長さ3.8cm、幅4.5cm、厚さ2.9cm、重さ105g。

**YSA23 出土石器（図77･78）**

粗製剥片石器2点、石核1点、磨製石鏃1点とその未製品と思われる剥片2点、砥石3点、磨石・敲石1点、軽石加工品3点が出土している。**512**は上層で出土した剥片石器で、縦長の剥片に4方向から大まかな調整加工を加えて整形し、その後刃潰し等の細かな調整加工を行っている。また、裏面も上部に調整加工を加えている。長さ6.6cm、幅9.6cm、厚さ0.6cm、重さ62g、黒色頁岩。**513**は風化と磨耗が目立つ剥片で、上層で出土した。表裏面ともに側面から調整加工されているが、下部に

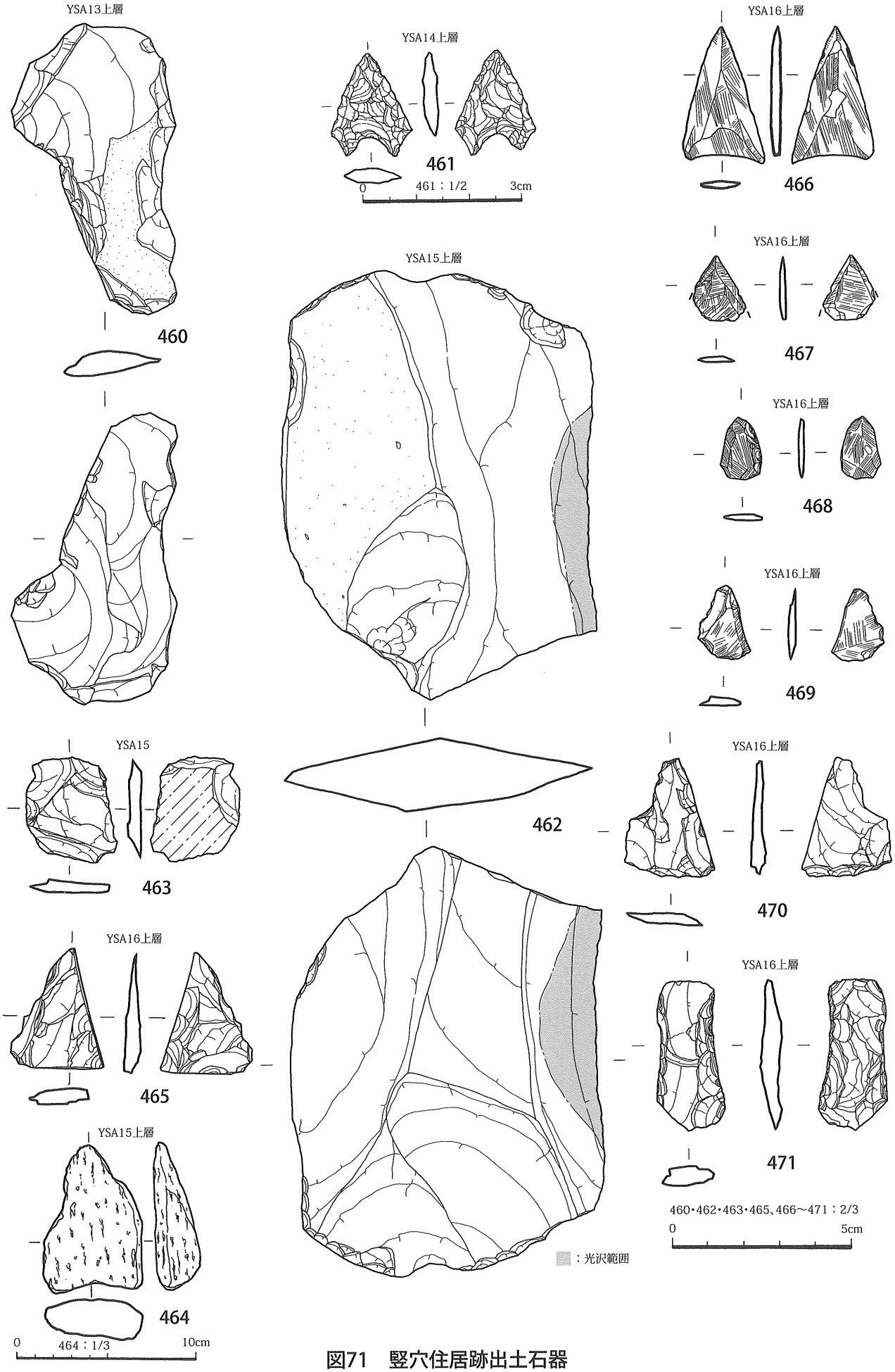
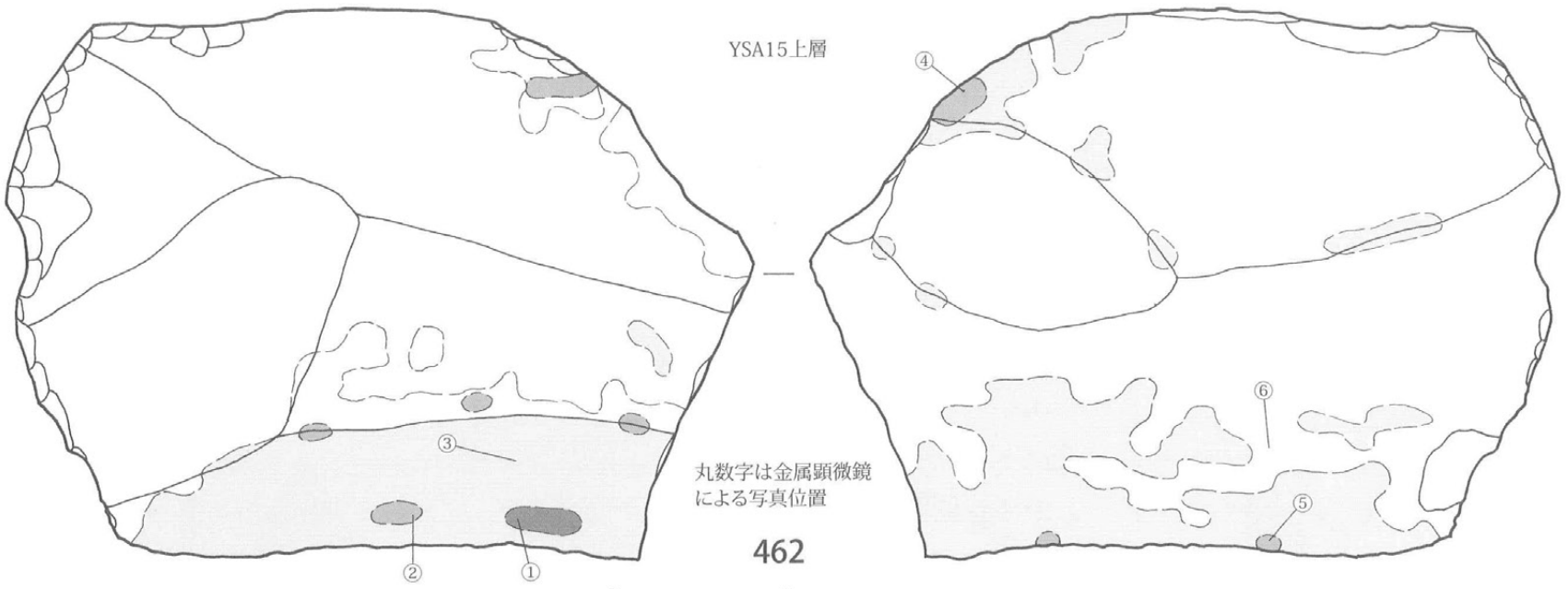
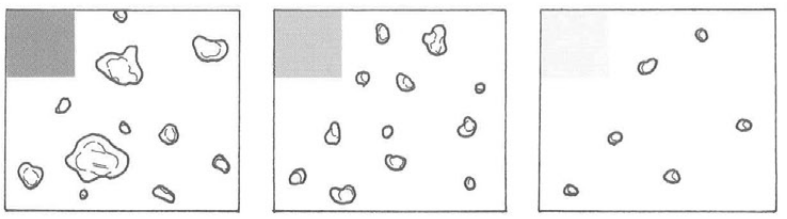



図71　竪穴住居跡出土石器

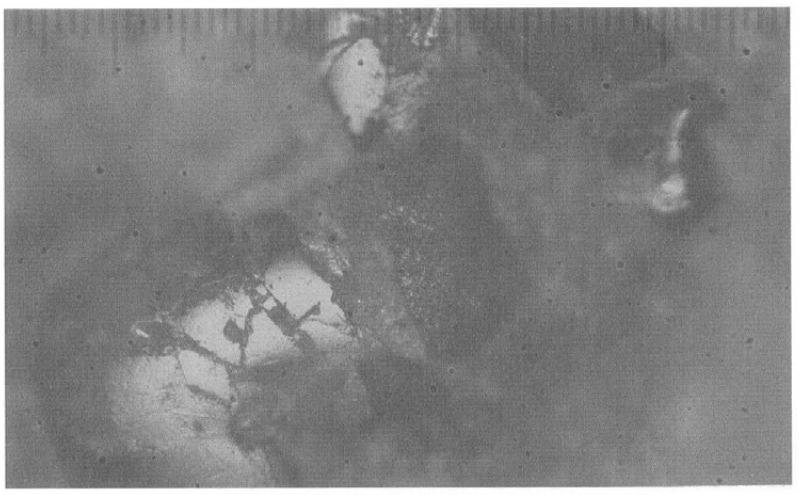


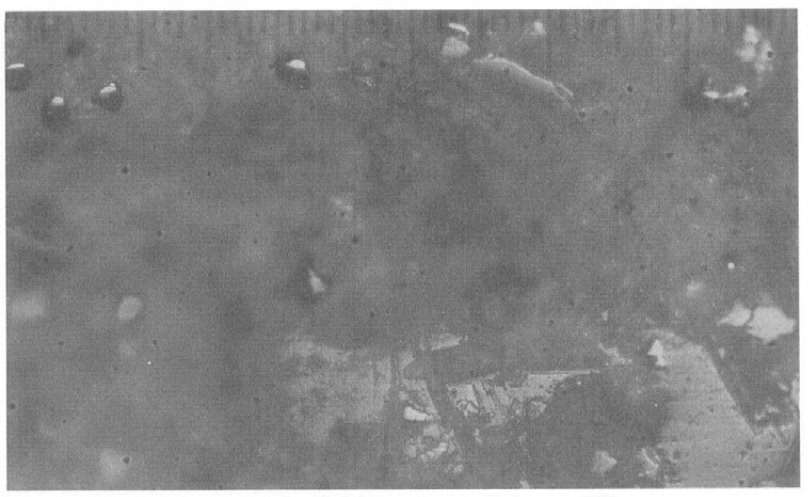

**光沢面の発達度分布**

※ニコン製高倍率落射照射型金属顕微鏡を用いて100倍の視野で全体を約2.5㎜メッシュで観察し、必要部分について200倍で詳細観察を行った。

100ミクロン　観察者：山村信榮・桒畑光博・栗山葉子

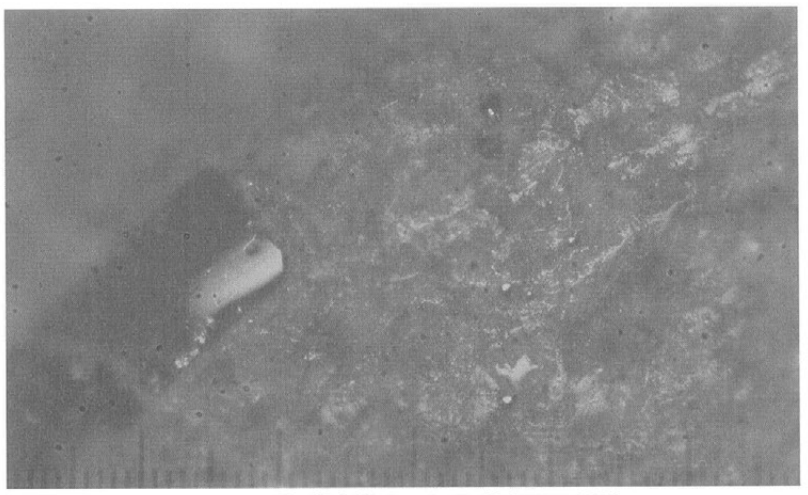


462の①(植物による光沢面中程度)



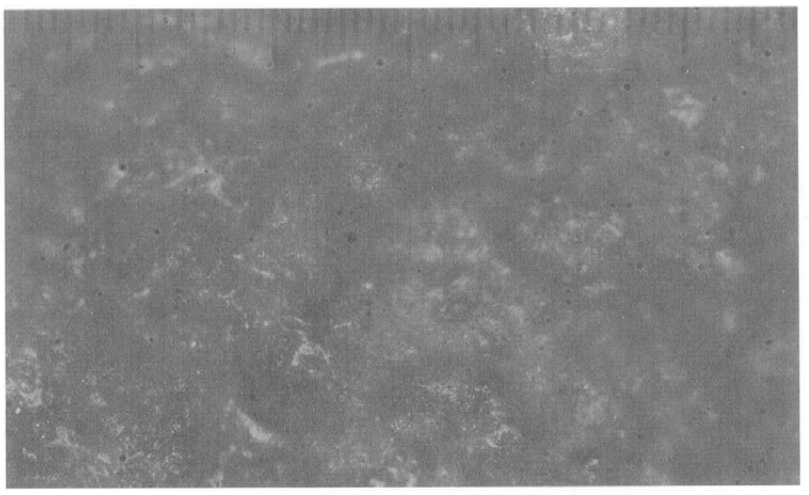
462の②(植物による光沢面弱)

462の③(植物による光沢面微弱)



462の④(植物による光沢面弱)

462の⑤(植物による光沢面弱)



462の⑥(植物による光沢面なし)

図72　剥片石器（462）の使用痕分析

破損の痕跡もあり、打製石斧の基部とも考えられる剥片石器である。残存長 7.3cm、幅 4.4cm、厚さ 1.2cm、重さ 51g、ホルンフェルス。**514** は大型の板状の石核で上層で出土した。平面形はほぼ四角形で、石材・形状等から打製石斧の素材かと思われる。長さ 27.2cm、幅 15.5cm、厚さ 4.8cm、重さ 3,320g、両輝石安山岩 a。**515** は上層で出土した磨製石鏃である。長さ 2.6cm、幅 2.1cm、厚さ 0.2cm、重さ 1.1g、凝灰質頁岩。**516** は磨製石鏃の未製品と思われる剥片で、床面直上で出土した。平面形をほぼ三角形、断面を凸レンズ状に調整加工し、下部の抉りの部分についても調整加工している。長さ 2.8cm、幅 2.2cm、厚さ 0.3cm、重さ 1.9g、黒色頁岩。**517** も石鏃に整形するための調整加工を加えた剥片である。長さ 4.1cm、幅 2.6cm、厚さ 0.3cm、重さ 4.0g、黒色頁岩。**518** は砥石として使用した石片と思われる。不定形なものであるが、上部の緩やかな局面と側面の一部を砥面として使用している。長さ 17.2cm、幅 16.5cm、厚さ 13.4cm、重さ 3,390g、細粒砂岩。**519** は断面が蒲鉾状を呈する柱状の砥石で、平坦部・局面部ともに砥面として使用している。一部欠損しているが、残存部の中央に敲打痕が見られ敲石としても使用している。残存長 8.3cm、幅 4.6cm、厚さ 2.8cm、重さ 191g、細粒砂岩。**520** も砥石で上層で出土した。平面形が楕円形で扁平な形状で一部欠損しており、平坦な両面を砥面として使用している。また、先端部に敲打痕がみられ、敲石としても使用している。残存長 7.8cm、幅 8.6cm、厚さ 4.6cm、重さ 505g、花崗岩。**521** は平面が楕円形の扁平な磨石・敲石で、全体が研磨されているが、両面の平坦面が特に平滑で使用したものと思われる。また、長軸の両方の先端部に敲打痕があり、敲石として使用している。長さ 9.5cm、幅 7.4cm、厚さ 4.2cm、重さ 395g、細粒砂岩。**522 ～ 524** は軽石加工品である。**522** は長さ 12.4cm、幅 8.8cm、厚さ 5.3cm、重さ 114g。**523** は長さ 7.0cm、幅 5.2cm、厚さ 2.2cm、重さ 17g。**524** は長さ 10.9cm、幅 5.8cm、厚さ 3.1cm、重さ 34g。

**YSA27 出土石器（図 78）**

砥石 1 点が下層で出土した。**525** は丸みのある角柱状の砥石で、4 面ともに砥面として使用している。片端部は欠損しており、他方の先端部には敲打痕が顕著であり、敲石としても使用している。長さ 9.0cm、幅 3.8cm、重さ 210g、細粒砂岩。

**YSA28 出土石器（図 78）**

砥石 2 点が下層で出土した。**526** は断面が四角形で、四面のうち主に 2 面を砥面として使用し、他の 2 面については一部を使用している。長さ 28.4cm、幅 10.0cm、厚さ 7.6cm、重さ 3,860g、細粒砂岩。**527** は不定形な礫を利用した砥石片で、下層から出土した。砥面は 2 面である。下部の一端に敲打痕が見られることから、破片となった後敲石としても利用したものと思われる。残存長 11.9cm、幅 8.9cm、重さ 520g、細粒砂岩。

**YSA29 出土石器（図 78）**

石器は剥片 1 点が床面直上で出土した。**528** は石材・形状等から磨製石鏃の素材と思われる。長さ 1.9cm、幅 1.1cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.4g、黒色頁岩。

**YSA30 出土石器（図 78）**

石器は磨石・敲石 3 点が出土した。**529** は棒状に近い楕円形の形状で、平坦な面の一部が特に研磨されている。また両端部に敲打痕があり、敲石として使用している。長さ 9.1cm、幅 4.4cm、厚さ 2.9cm、重さ 165g、細粒砂岩。**530** は多孔質の石材で、平面形は楕円形、断面は丸みのある四角形状を呈する。側面全面に敲打痕が見られる。長さ 10.0cm、幅 8.2cm、厚さ 6.3cm、重さ 600g、両輝石安山岩 b（霧島新期熔岩類）。**531** は球状に近い形状で、全体が研磨されている。また、一部には敲打痕があり、敲石としても使用している。長さ 9.4cm、幅 7.7cm、厚さ 6.8cm、重さ 690g、両輝石安山岩 a。

**YSA34 出土石器（図 79）**

石器は磨製石鏃片 1 点、軽石加工品 1 点が上層で出土した。**532** は先端部の欠損した磨製石鏃で、残存長 1.8cm、幅 2.0cm、厚さ 0.2cm、重さ 1.0g、黒色頁岩。**533** は軽石加工品で、長さ 18.8cm、幅 18.2cm、厚さ 8.6cm、重さ 1,150g。

**YSA42 出土石器（図 79）**

石器は磨製石鏃 1 点、剥片 3 点、砥石 1 点、磨石・敲石 1 点、軽石加工品 1 点が出土している。**534** は上層で出土した磨製石鏃で、表裏面より研磨しており、一部には剥離が見られる。長さ 3.0cm、

幅 1.6cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.9g、凝灰質頁岩。**535 ～ 537** は、いずれも埋土の 2 層から出土した。石材・形状等から磨製石鏃の未製品と思われる。**535** は長さ 3.2cm、幅 2.2cm、幅 0.5cm、重さ 3.3g、凝灰質頁岩。**536** は周囲を調整加工した後表裏面ともに研磨している。長さ 3.4cm、幅 3.0cm。厚さ 0.4cm、重さ 5.0g、凝灰質頁岩。**537** は長さ 5.8cm、幅 4.6cm、厚さ 0.9cm、重さ 21.7g、凝灰質頁岩。**538** は平面形が円形で扁平な磨石・敲石で、半裁している。表裏面はともに平滑に研磨され、側面先端の凸部に敲打痕があることから敲石としても使用している。残存長 6.8cm、幅 9.4cm、厚さ 2.1cm、重さ 198g、細粒砂岩。**539** は角柱状の砥石で埋土の 3 層から出土した。一部欠損しており、砥面は 2 面である。先端部には敲打痕が見られ、敲石としても使用している。残存長 13.4cm、幅 4.3cm、厚さ 3.0cm、重さ 230g、細粒砂岩。**540** は軽石加工品で埋土の 2 層から出土した。長さ 18.2cm、幅 9.2cm、厚さ 5.4cm、重さ 205g。

**YSA43 出土石器（図 79・80）**

石器は砥石 1 点、軽石加工品 3 点が埋土の 3 層から出土した。**541** はやや扁平な棒状の砥石である。扁平な部分の 2 面を砥面として使用している。また、両端の先端部には敲打痕があり、敲石としても使用している。長さ 13.6cm、幅 4.3cm、厚さ 2.1cm、重さ 230g、細粒砂岩。**542** はほぼ四角形に形を整え、表面を砥面として使用している。長さ 22.2cm、幅 15.8cm、厚さ 6.0cm、重さ 710g。**543** は平面形をほぼ楕円形に整えており、表面の 4 箇所、裏面の 3 箇所に断面 U 字状の砥面として使用した部位が見られる。最大のもので、幅・深さともに 2.5cm 程度で、先端部の丸い工具等を砥いだものか。長さ 22.2cm、幅 17.2cm、厚さ 8.8cm、重さ 680g。**544** は下部を一部打ち欠いている。長さ 18.2cm、幅 10.0cm、厚さ 5.4cm、重さ 280g。

**YSA45 出土石器（図 80）**

石器は磨製石鏃 1 点と砥石 1 点が出土した。**545** は埋土 2 層の土坑中から出土したもので、基部の欠損したものを再加工して使用するために調整加工中のものと思われ、基部の欠損した部位を再度研磨している。長さ 2.3cm、幅 1.8cm、厚さ 0.15cm、重さ 0.6g、黒色頁岩。**546** は小型の棒状の砥石で、埋土の 3 層から出土した。砥面は 4 面で、先端部に敲打痕がみられることから敲石としても使用している。長さ 11.1cm、幅 2.5cm、厚さ 3.2cm、重さ 127g、細粒砂岩。　（文責：寺師雄二）

## （2）掘立柱建物跡

**YSB1（図 81）**

**YSB1** はN－8 区で検出された。桁行 2 間（3.7m）、梁間 1 間（2.55m）で、柱間寸法は桁行が 1.85m である。柱穴の掘り形は円形で、四隅のピットは上部が大きく広がって掘られている（ピット下部の径は 25 ～ 35cm、深さは 60 ～ 70cm）のに対して、束柱のピットはやや小さめ（径 20 ～ 25cm、深さ 15 ～ 45）である。ピットの土層断面を観察すると、軟質でルーズな黒色土と、粗粒軽石を含む黒色系のシルト土が確認された。これは柱が腐った痕跡と、柱を埋め立てた際につきしめられた柱周囲の埋め土と考えられる。出土遺物がないが、埋土の状態から弥生時代中期と考えられる。

また、この **YSB1** の周辺で弥生時代のピットがいくつか検出されたが、掘立柱建物と確認されたのは **YSB1** の 1 軒のみであった。　（文責：外山亜紀子）

## （3）土坑・溝状遺構

**土坑・溝状遺構**

遺構の記号については、土坑は YSC で、溝状遺構は YSD としたが、後者は形態が溝というよりも細長い土坑状であり、性格も不明であるので、一緒に取り扱う。

遺構は全部で 28 基（YSC24 基・YSD3 基）が確認されたが、竪穴住居跡と比べると出土遺物がないものも多く、時期の判断材料に乏しい。そのため、比較的大きな中期の土器が出土し、明らかに中期と判断できる土坑の埋土と、明確な後期以降（弥生時代後期～古墳時代初頭）の土器が出土した土坑の埋土とを参考にして、おおよその時期を判断した。

中期の土坑と考えられるのは 8 基（**YSC2・4・5・6・11・12、YSD1・2**）である。土坑の埋土は

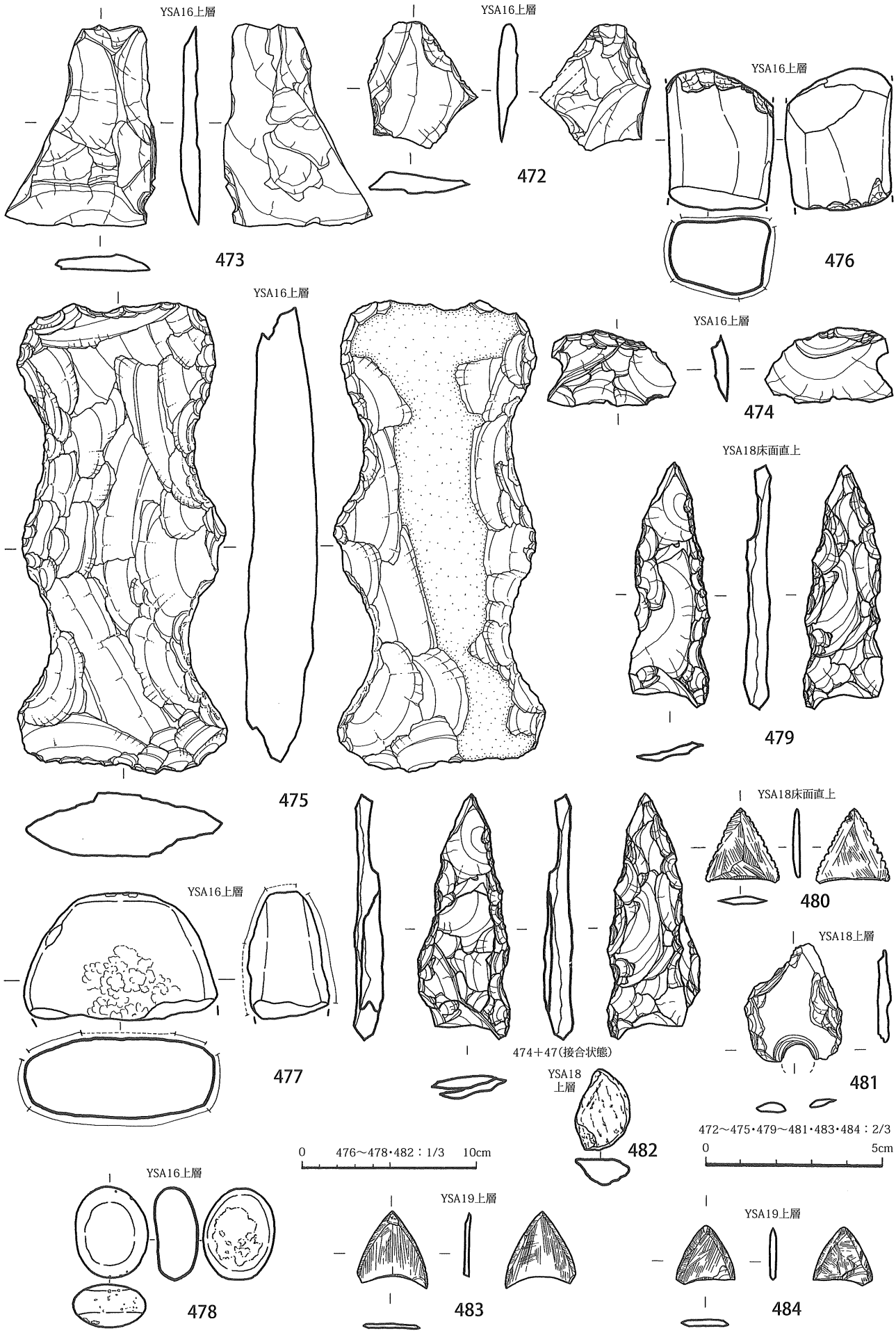



図73　竪穴住居跡出土石器

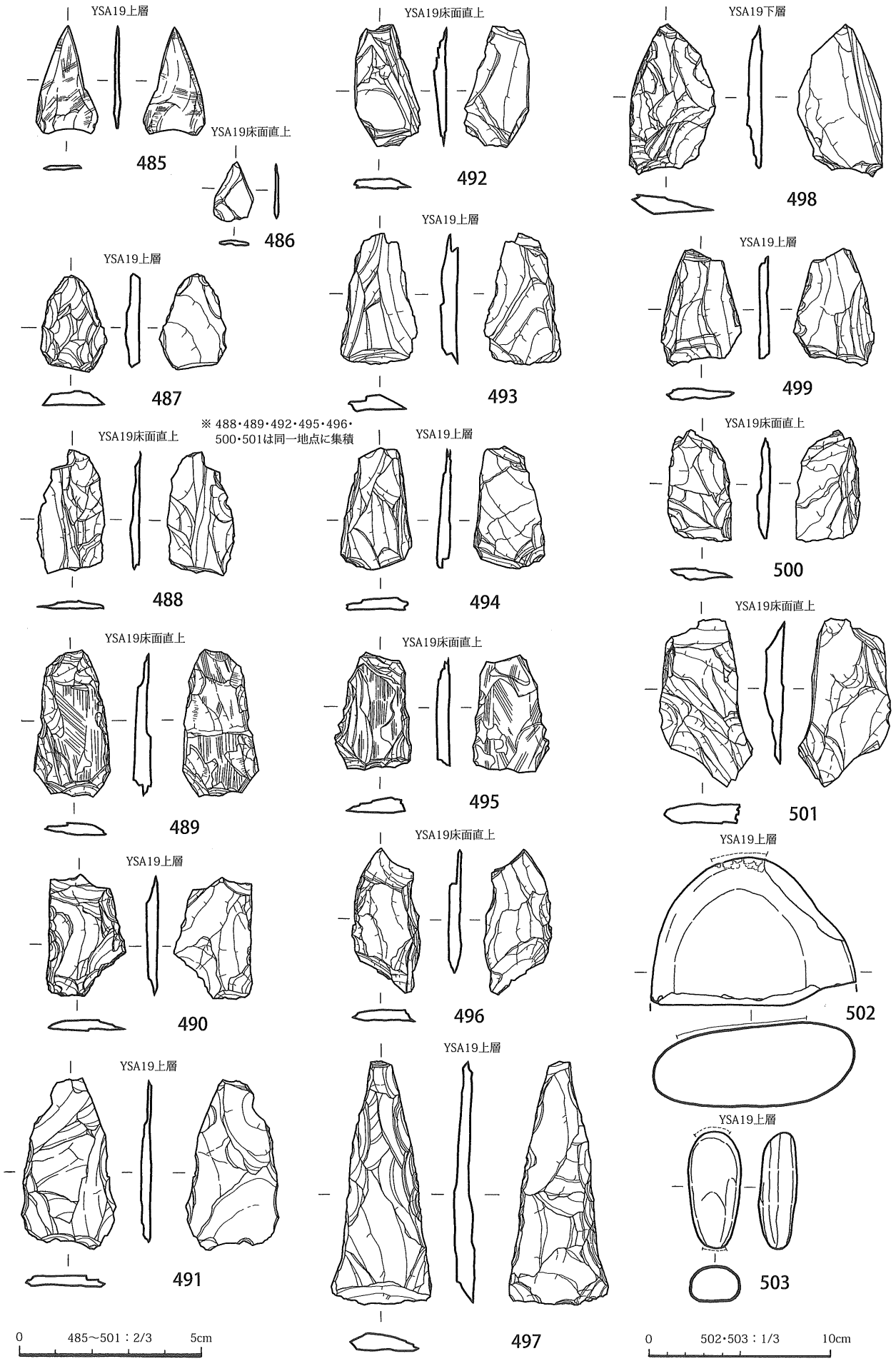



図74　竪穴住居跡出土石器

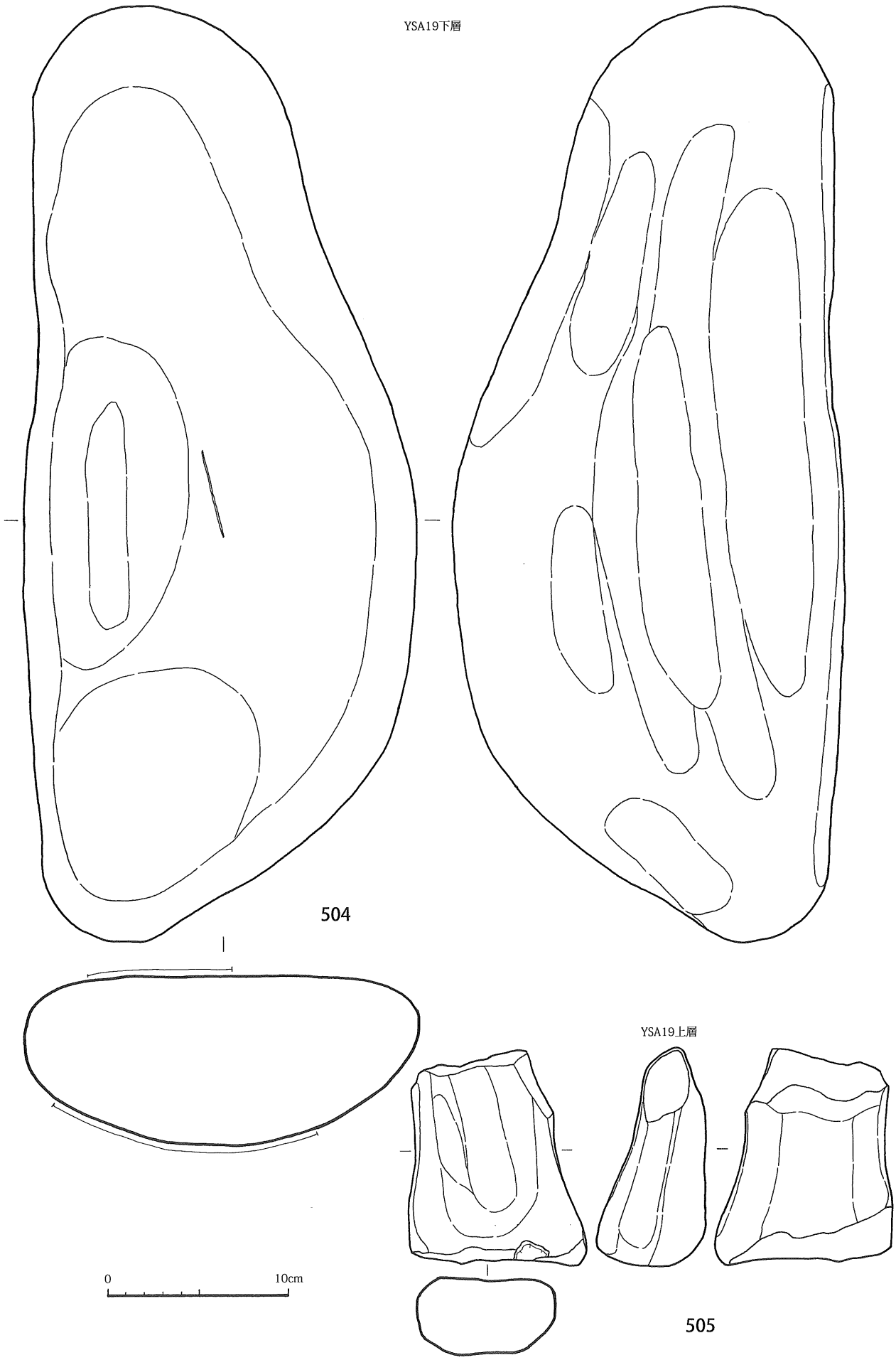



図75　竪穴住居跡出土石器

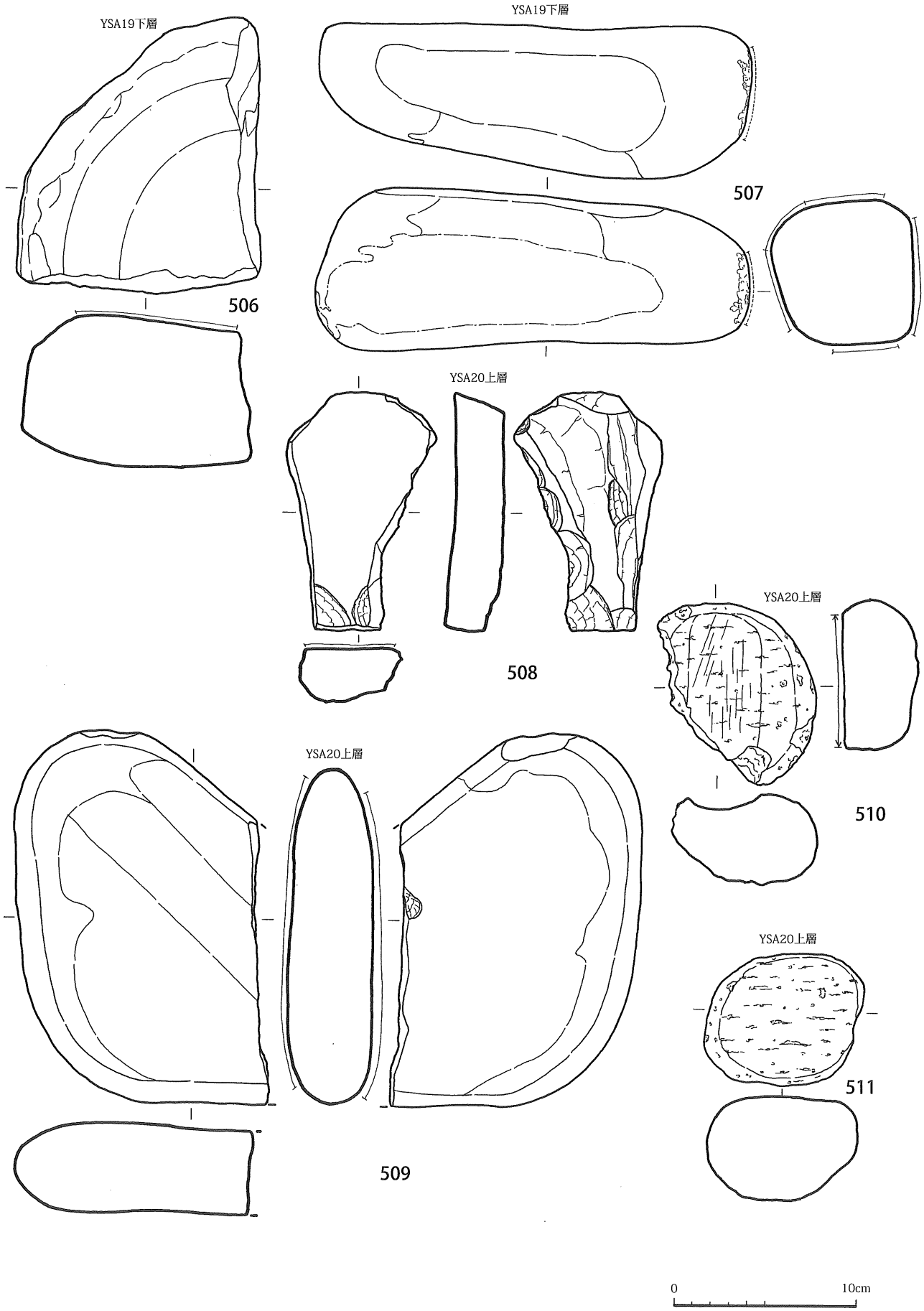



図76　竪穴住居跡出土石器

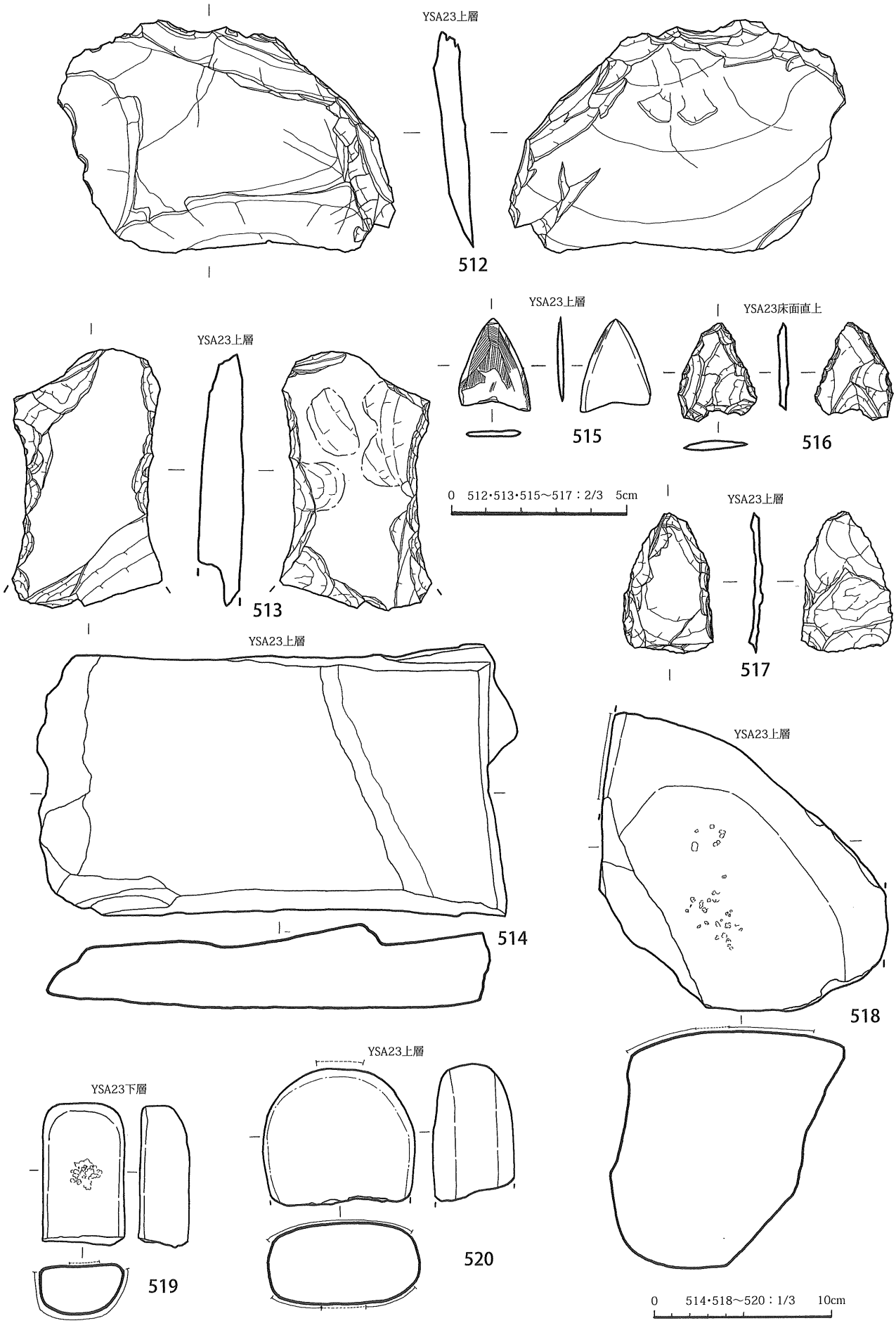



図77　竪穴住居跡出土石器

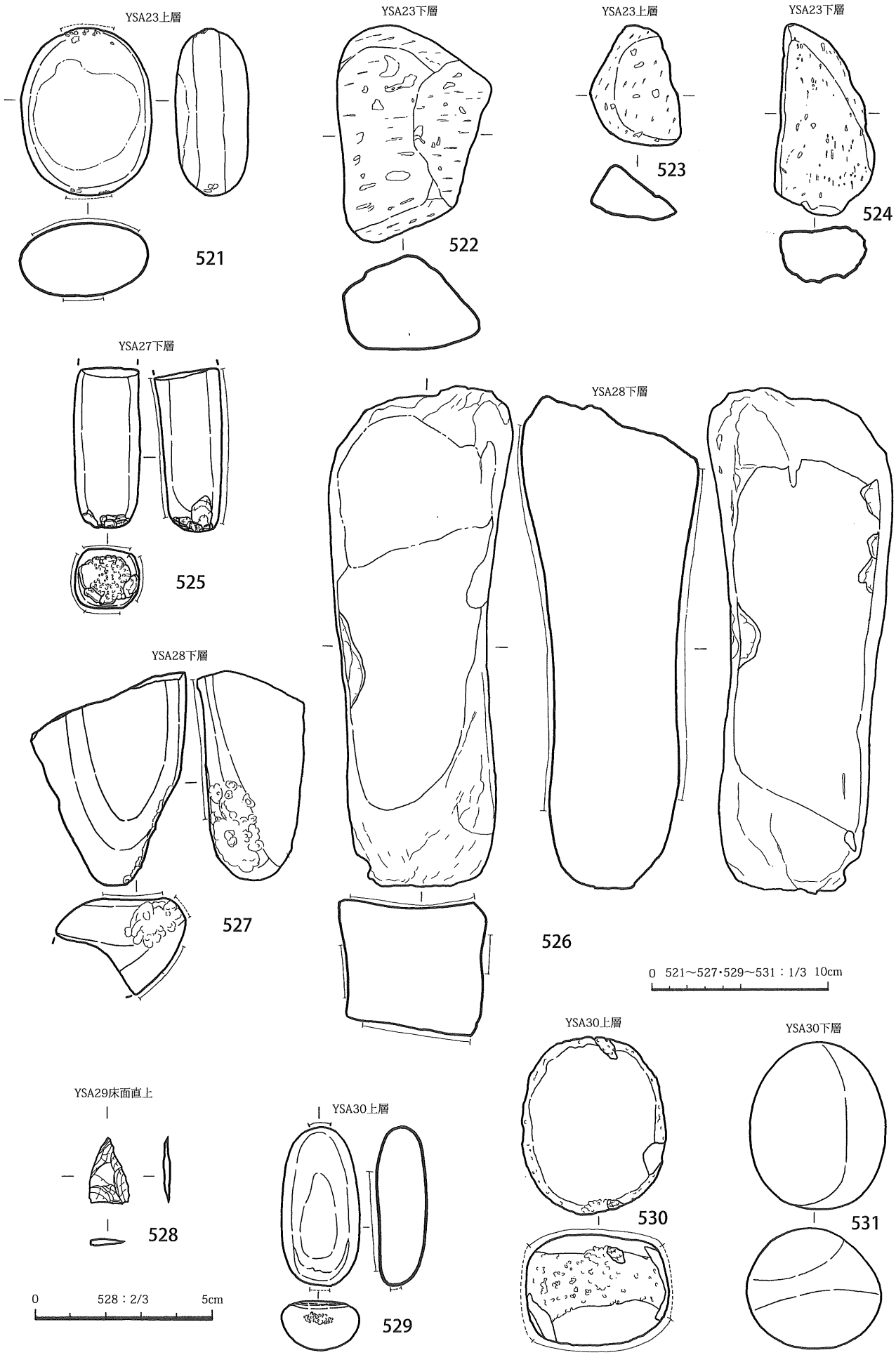



図78　竪穴住居跡出土石器

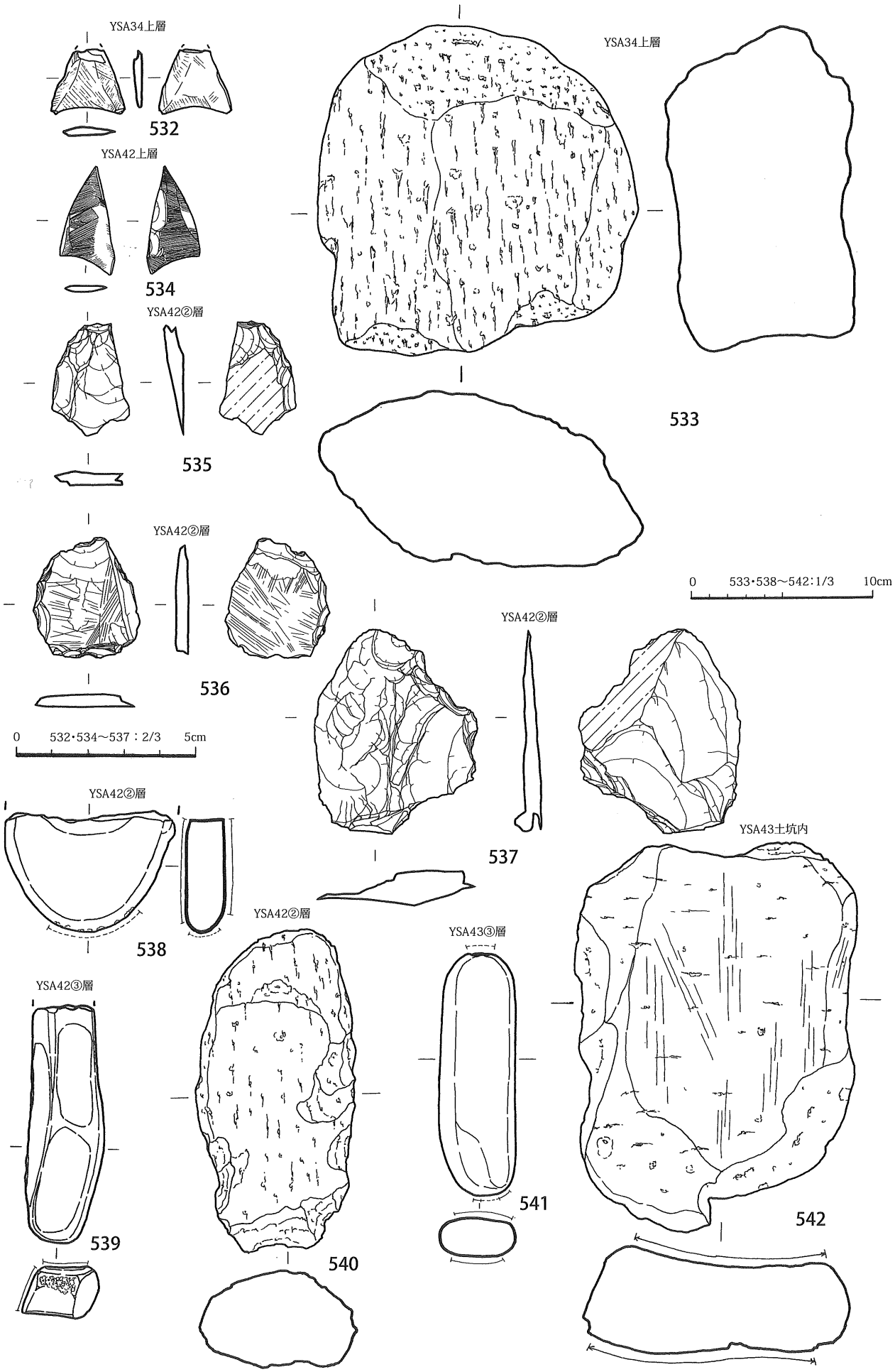



図79　竪穴住居跡出土石器

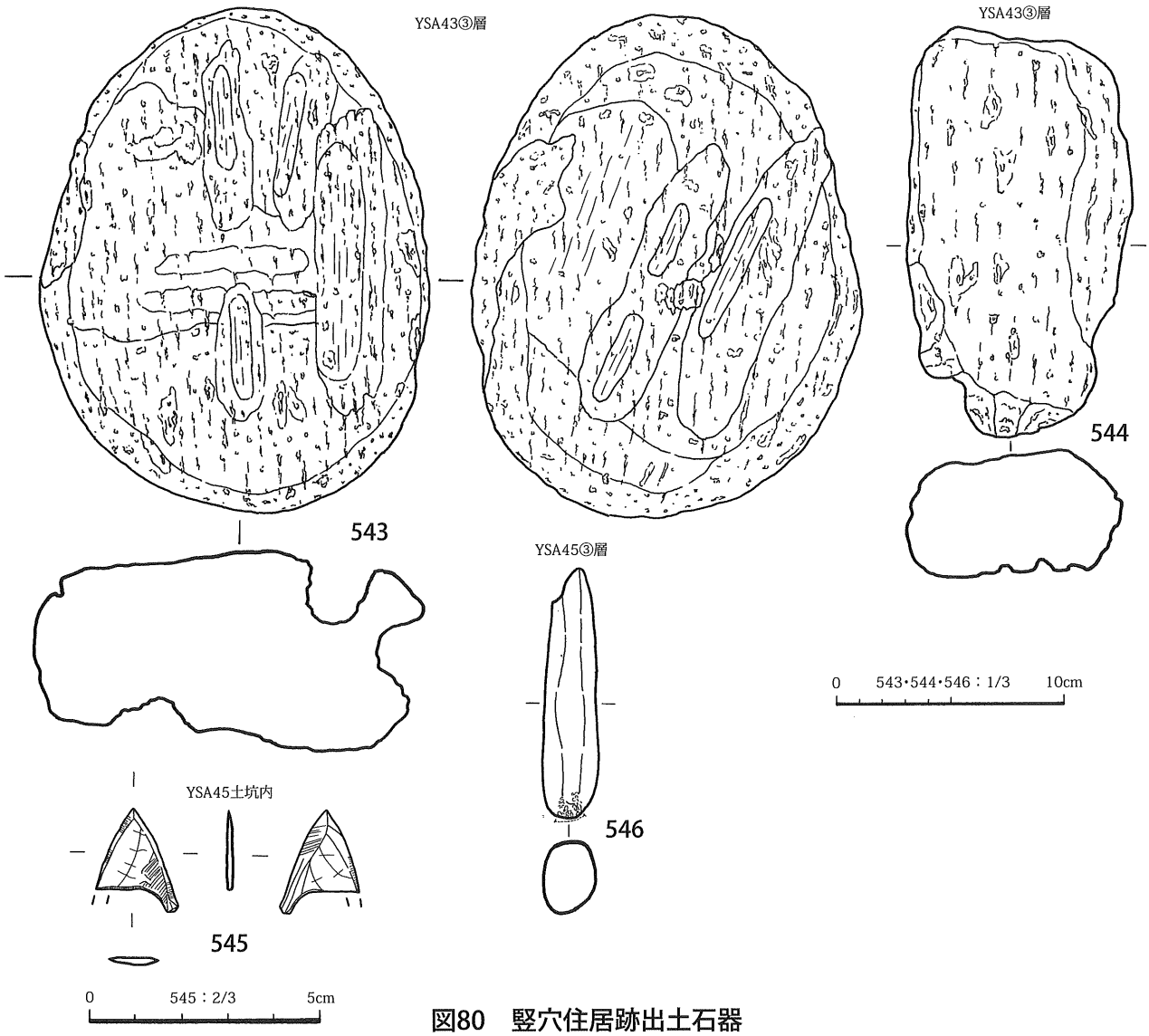



**図80　竪穴住居跡出土石器**

黒褐色の砂質シルト土（黄色軽石粒含む）、あるいは黒色微粘質シルト土（黄色軽石含む）で、いずれも硬くしまる傾向がある。

**YSC2（図 82）**

**YSC2** はＫ－７区で検出された。長軸 0.9m、短軸 0.5m、検出面からの深さは 15cm で、楕円形である。埋土は下層が黒褐色微砂質シルト土で硬くしまっている。上層は黒色粘質シルト土である。出土遺物が少ないため、埋土から中期と判断した。

**YSC4（図 82）**

**YSC4** はＬ－４区で検出された。南側を山ノ口式土器が出土した竪穴住居跡（**YSA8**）に切られているが、現状での長軸は 1.7m、深さは約 10cm である。北部に深さ約 40cm のピットがある。埋土は黒褐色微砂質シルト土である。埋土から中期と判断した。

**YSC5（図 82）**

**YSC5** はＩ－３区で検出された。西側を近世の撹乱によって削平されており、現状での長軸は 2.3m、短軸は 1.2m、深さは 10 ～ 20cm である。東側の底面は西側より 10cm ほど高くなっている。土坑内にはピットが６基あり、深さは 20 ～ 40cm である。埋土から突帯を持つ壷（**547**）が出土した。埋土は下層が黒褐色砂質土で硬くしまっており、上層は黒色シルト土である。

**YSC6（図 82）**

**YSC6** はＮ－８区で検出された。土坑の一部は中世のピット（５層）に切られているが、長軸 2.4m、短軸 1.5m、深さ約 50cm で、壁の立ち上がりが袋状に膨らんでオーバーハングになっている（特に

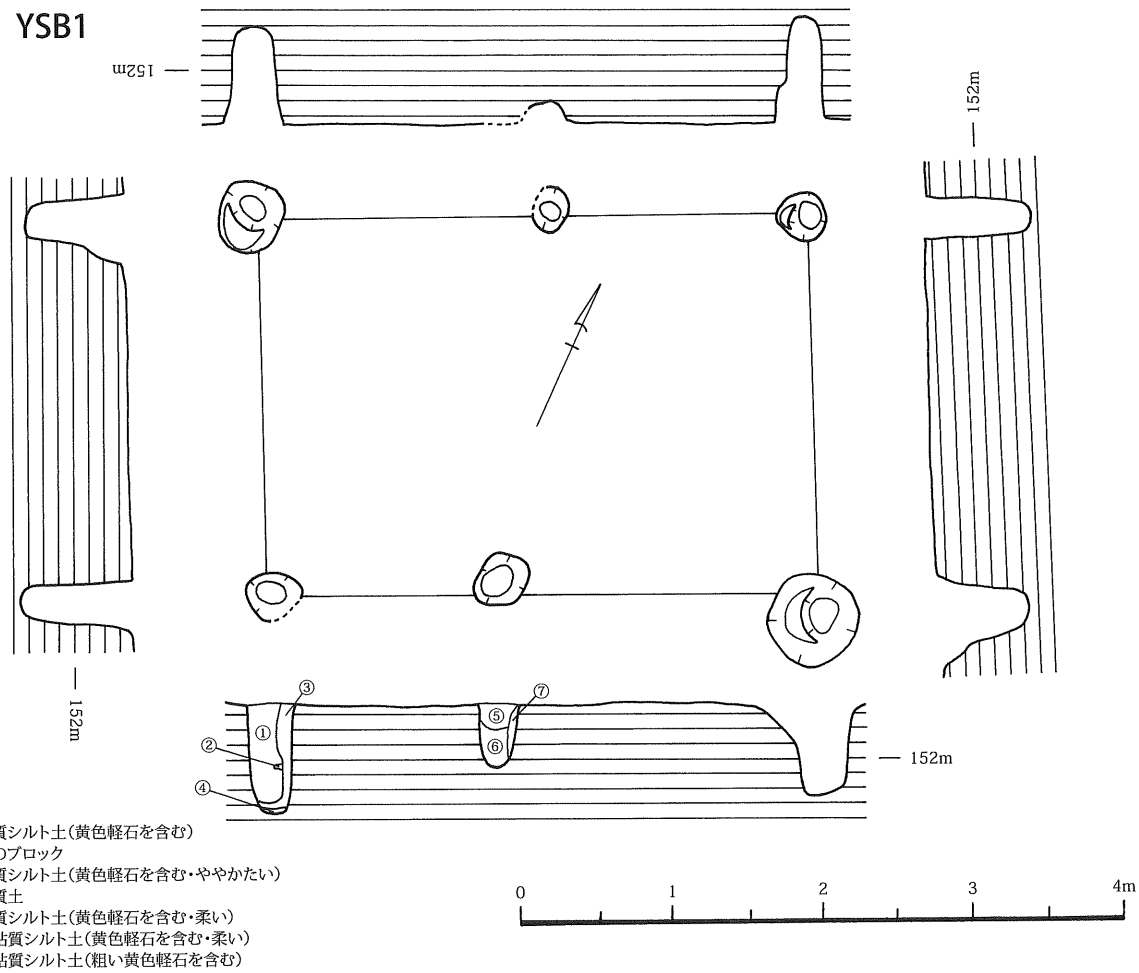



**図81　掘立柱建物跡 YSB1 実測図**

東壁)。埋土は黒色微粘質シルト土で下層の④層が硬くしまる。遺物はおもに土坑の南側から出土し、そのうち壷（**549**）・甕（**548**）は④層から出土した。

**YSC11（図 83）**

**YSC11** はＴ－６区で検出された。1.8m × 1.7m の隅丸方形状を呈し、深さは約 8cm である。埋土は黒色シルト土でややしまっている。埋土から中期と判断した。

**YSC12（図 83）**

**YSC12** はＭ－４～Ｎ－４区で検出された。入来Ⅱ式土器が出土した **YSA16** を切っている。長軸 1.7m、短軸 1.5m、深さ約 50cm で、南東部に検出面より 20cm の深さで段を持つ。埋土は黒色微粘質シルト土で、底面と壁の立ち上がりの一部に黄色軽石層が堆積している。遺物は③層から沈線を持つ壷（**554**）の破片が出土している。

**YSD1（図 83）**

**YSD1** はＮ－８区で検出された溝状に伸びる遺構である。一部を（**YSC14** 後期以降）と中世のピット（５層）に切られている。全長 3.4m、幅 0.4 ～ 0.5m、深さは 30 ～ 40cm である。埋土は下層が黒褐色微砂質シルト土で、上層が黒色微粘質シルト土であり、両層とも硬くしまっていた。甕の口縁である **555** が上層より出土した。

**YSD2（図 83）**

**YSD2** はＮ－５～Ｎ－６区で検出された。**YSA30** と **YSA39** を切っている。全長 7.7m、幅 0.8 ～ 1.3m、深さは 20 ～ 40cm で、平面プランはやや蛇行した形である。遺構内にピットが数基確認されたが、**YSA30** に伴うピットの可能性もある。埋土は最下層が黒色微砂質シルト土で、硬くしまり、硬化面となっている。上層は黒色微粘質シルト土である。埋土からは甕の口縁(**556**)が出土している。

（文責：外山亜紀子）

**土坑・溝状遺構出土土器**

**YSC5 出土土器（図 84）**

**547** は壷の頸部である。外形は頸部から一度立ち上がったものがくびれた後、再び立ち上がる。口縁部が欠失しているが、外反するものがつくと思われる。肩部には 1 条の突帯を巡らす。黒髪式に該当する可能性がある。

**YSC6 出土土器（図 84）**

**548** は入来Ⅱ式甕の口縁～胴部である。復元口径は約 28cm である。胴部外面にススが付着する。口縁部は貼付され、やや下垂する。胴部には 2 条の突帯が巡る。器面調整は内・外面ともにハケで、細かいハケメがよく残っている。**549** は壷の口縁部である。口縁部は貼付で下垂する。口唇をヨコナデによりくぼませている。内面には横位ミガキが残る。**550** は甕の口縁部である。**551・552** は甕の底部で、**551** は中空脚台で外面には細かいハケメがよく残っている。黒髪式系と思われる。**552** は平底である。外面にはミガキが施される。

**YSC12 出土土器（図 84）**

**553** は甕の口縁～胴部で口縁部を短く折り曲げる。口唇は丸い。外面にはハケメが残る。**554** は壷の胴部である。外面に櫛描直線文が施文される。また、外面には横位ミガキが部分的に残る。

**YSD1 出土土器（図 84）**

**555** は甕の口縁部である。口唇は丸い。

**YSD2 出土土器（図 84）**

**556** は甕の口縁部である。（文責：加覧淳一）

## （4）剥片集積遺構

**YSS1（図 85）**

**YSS1** はＮ－４区で検出された。被熱のため赤色化したり、炭化物が付着したりした状態の両輝石安山岩 a の剥片が散乱していた。うち、両輝石安山岩 a の剥片 2 点は重なり合って検出され、間には焼灰が挟まっていた。黒色弱粘質シルト土中（6 層）で検出されており、周囲から弥生時代中期の土器の破片も出土しているが、5 層土の落ち込みに切られていることと、1 点だけではあるが、底部が糸切り離しの土師器の破片が混じっている状況などを考慮すると、後世の撹乱を受けて、原位置を保っていない可能性もある。（文責：外山亜紀子）

**剥片集積遺構の両輝石安山岩接合資料（図 86）**

**557** は遺構より出土した 3 点と遺構内一括資料 14 点の計 17 点が接合している。557- A・B は原石面から節理面までの資料で、B には節理面を接点として小片が接合している。C は節理面より内側の部分にあたる。C が接合する中央の剥片は大きく剥片をとられた面である。割れ後の剥離が上方に認められる。

この資料は原石面を取り除き石器として使用できる剥片を得るまでの段階の資料と考えられる。原石面は基本的に赤化し、場所によってはススが付着していることから、原石に熱を加え、それによって非常に硬質な石材を割りやすくし、石器の素材として適さない原石面を取り除いたものである。原石面には所々パンチ痕が認められ、そこから剥離されているので、熱によって割れやすい状態になったところで打撃を加え剥離していると考えられる。これによって剥離された剥片は節理面できれいに剥がれ落ちていることから、石の目を意識していることもうかがえる。また、原石面および石器に適さない石質部分はたまねぎの皮のように薄く何層かに分かれて剥離している。受熱によると思われる細かい弾けを除けば、原石面の平坦部分にパンチ痕が残っており、そこから剥離されていることから、この面がメインの打面となっている。原石面から約 5cm 内側が石器として使用できる石質となっている。この部分は外側から大き目の剥片を剥離しているが、剥片の規格はばらばらである。また、剥離方向も多方向で、剥離の度に打面を変えていると思われる。資料の大きさは長さ 28.7cm、幅 18cm、厚さ 8.8cm、重さ 2.8kg である。

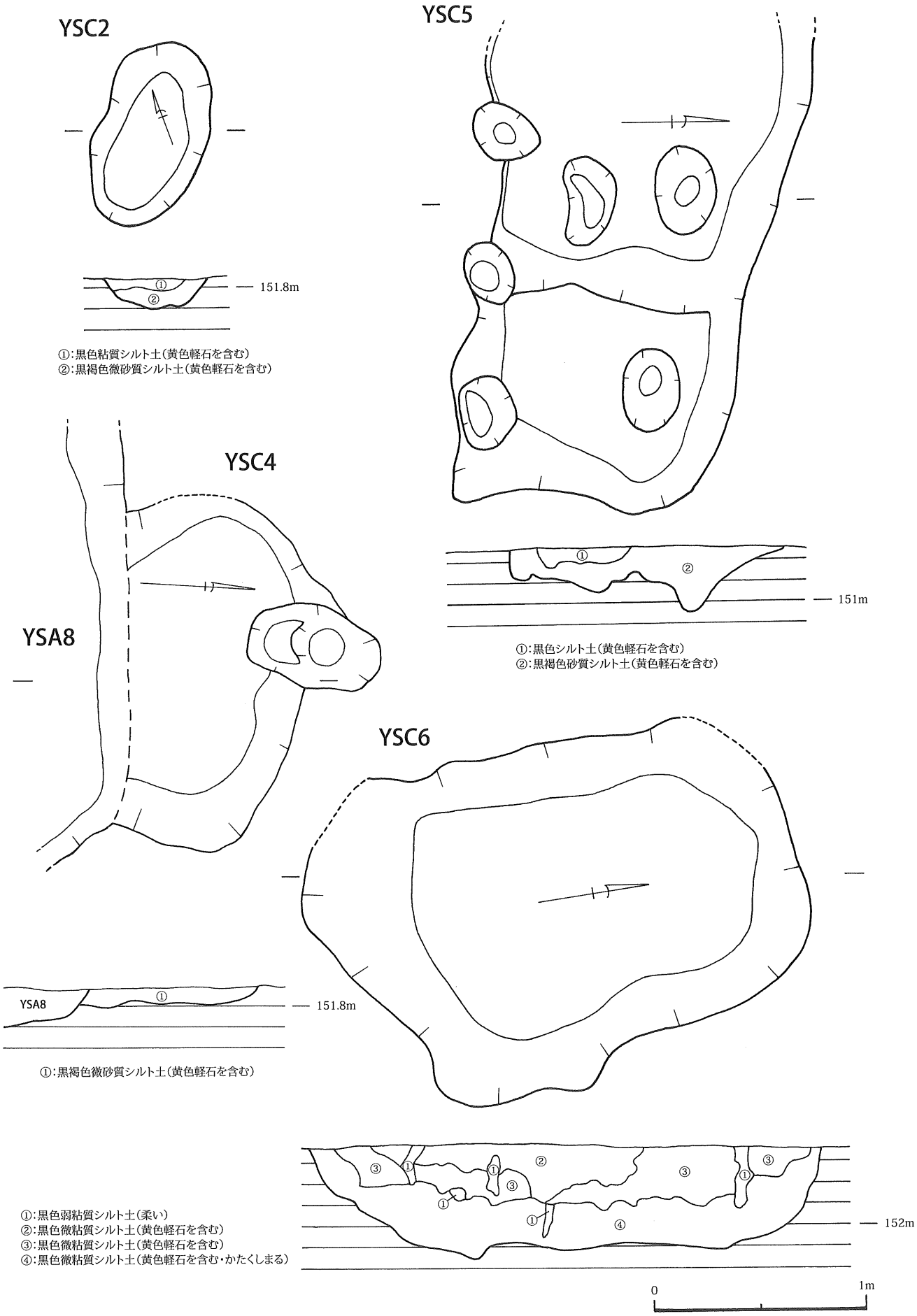



図82　土坑 YSC2・4・5・6 実測図

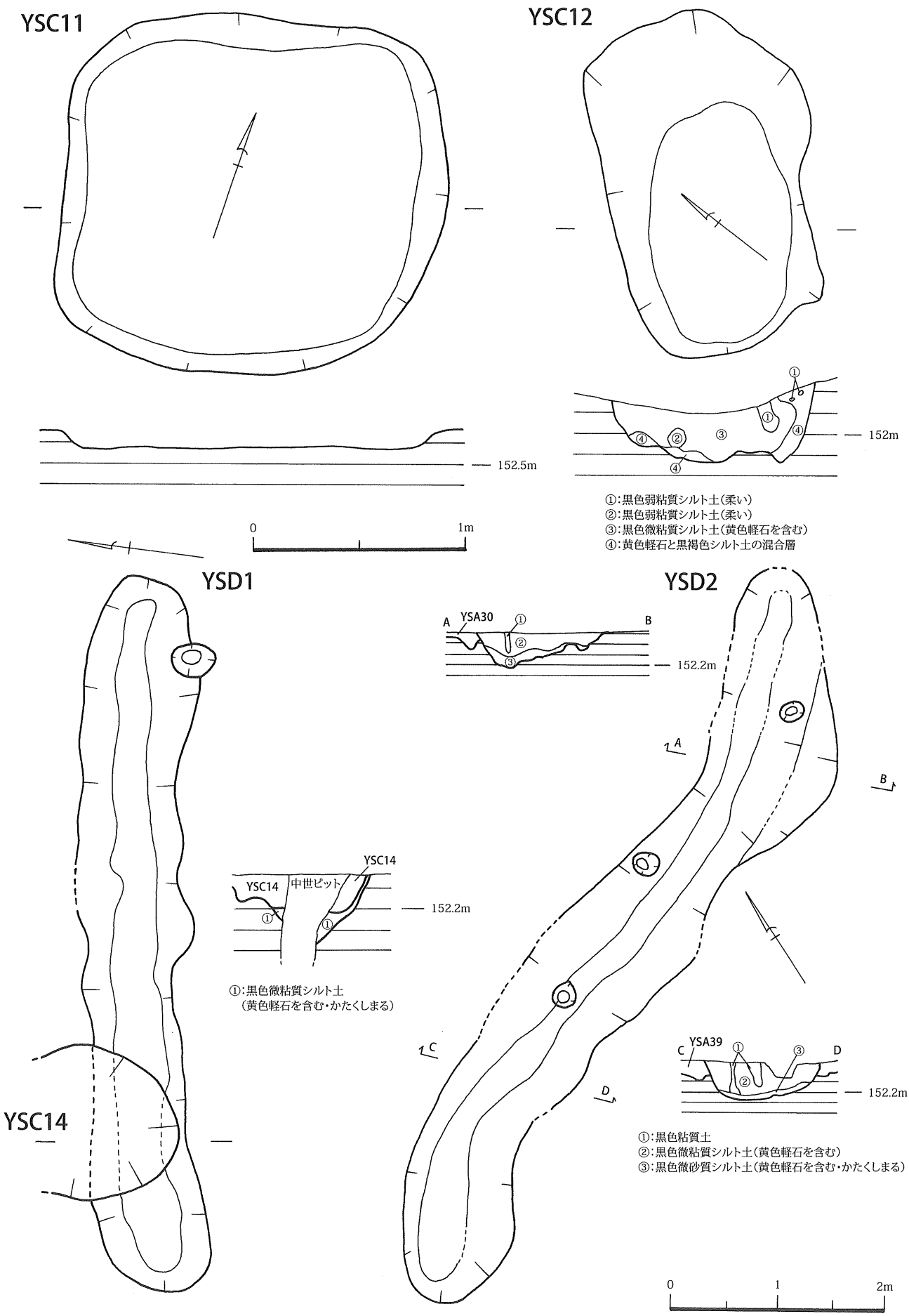



図83　土坑 YSC11・12　溝状遺構 YSD1・2 実測図

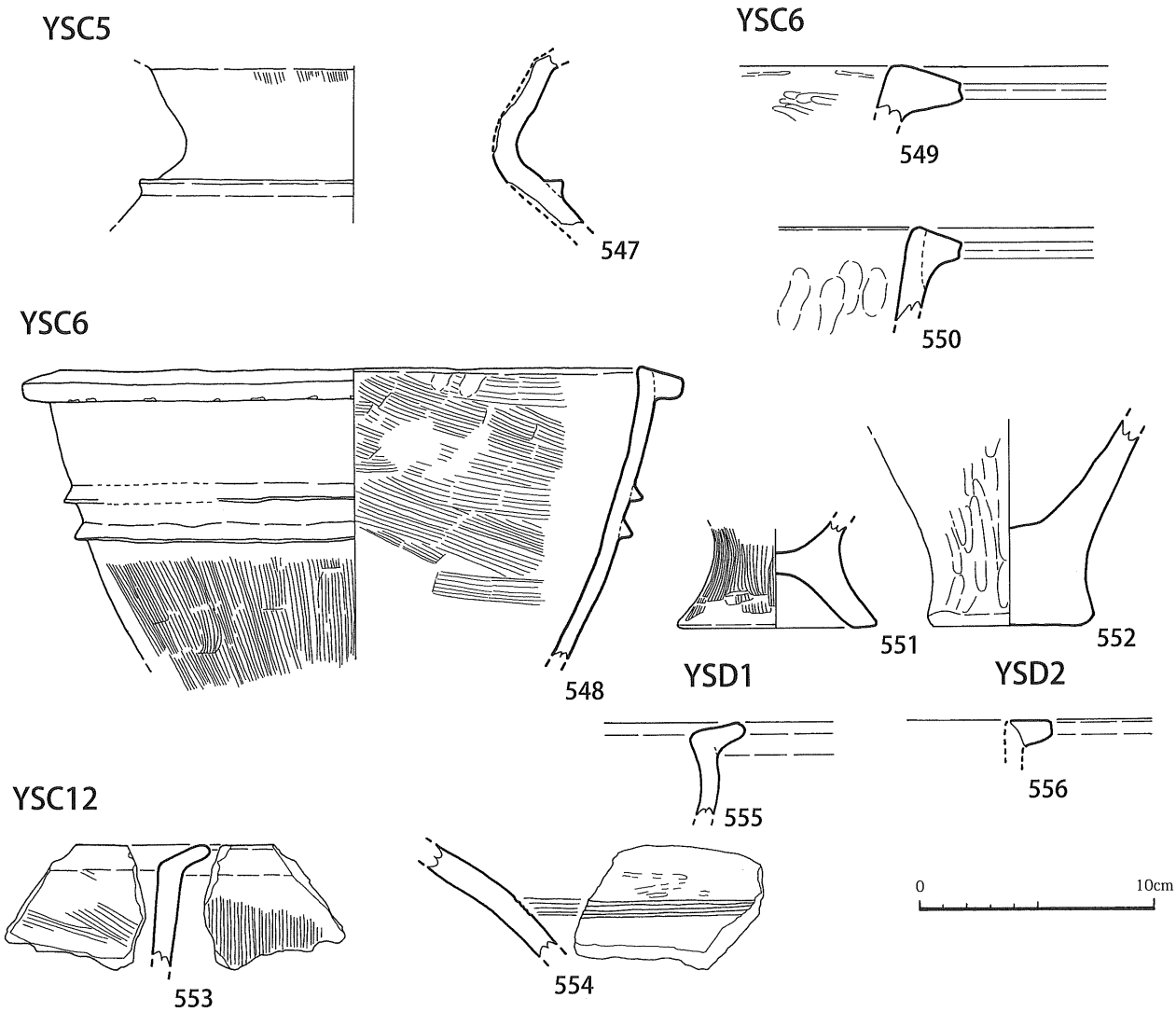



**図84　土坑・溝状遺構出土土器**

**558** は灰を挟むような状態で出土している２点と、遺構内一括資料３点の計５点が接合している。Ａは原石面から節理面までの資料で、両部分に剥離が認められ、小片１点が接合している。Ｂは原石面から節理面までを残す資料で、外側の稜部に小片が接合している。これらの資料より、原石面と節理面の間の部分についても質として石材利用は可能であるが、大型の剥片は採取できないものと思われる。また、Ｂは残核である。右下の面が最大に剥ぎ取られ、大きさは 10cm を超える。また、剥片の剥離方向は上下２方向からの剥離となっている。石核の大きさから考えて、両極打法の可能性も考えられる。資料の大きさは長さ 13.3cm、幅 26cm、厚さ 9.8cm、重さ 1.34kg である。

**557** と **558** の接合は認められないものの、同一母岩の可能性が高い。また、遺構内から出土した同一母岩と思われる剥片等の総重量は 780g であった。遺構内一括資料には、大型剥片（幅 10cm 以上）も２枚含まれ、これらの剥片には二次加工と思われる剥離が施されている。この他原石面を残す小片２点が接合している。しかしながら、当遺跡および周辺遺跡の同時代に認められるような両輝石安山岩ａを使用した粗製剥片石器や、打製石斧（石製土掘り具）といった製品は含まれていない。また、当遺跡出土の両輝石安山岩ａの製品は、この遺構一括資料とは接合せず、また、石質等から考えても同一母岩である可能性は低いと思われる。

当遺構が中世の削平を受けていることを考慮に入れても、出土資料が母岩の半分にも満たないと考えられるため、残りの部分や石器利用可能な剥片については当遺跡より持ち出した可能性が考えられる。

両輝石安山岩ａは横市川を挟んで北側に位置する母智丘神社や丸山付近にて採取が可能で、横市川にも転石が認められる。在地の両輝石安山岩ａについては、粗製剥片石器や石斧等に使用されていること

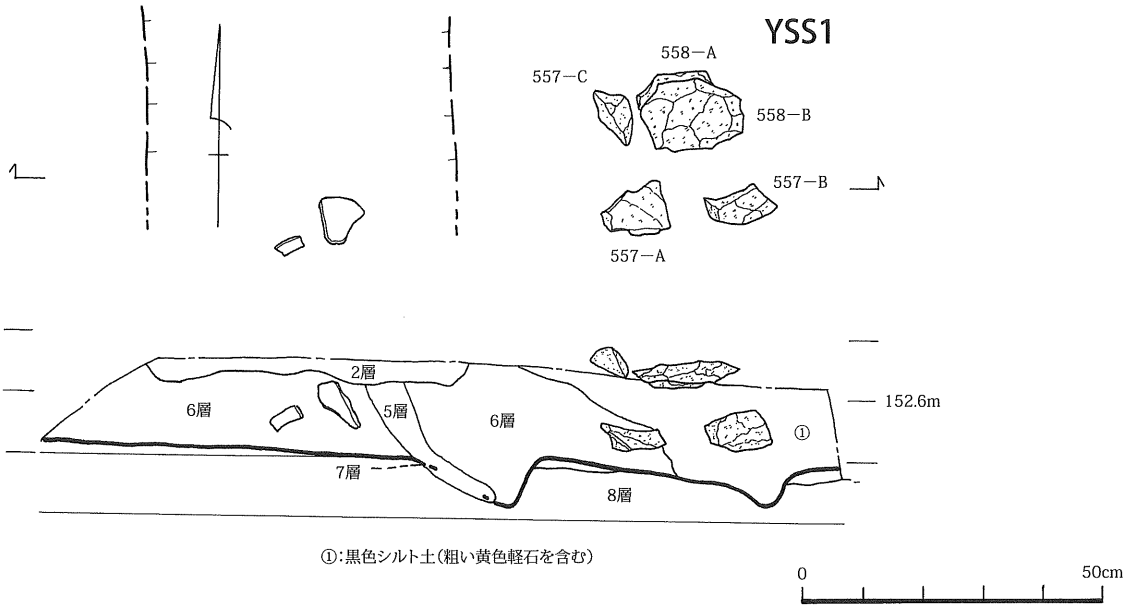



図85　剥片集積遺構（YSS1）実測図

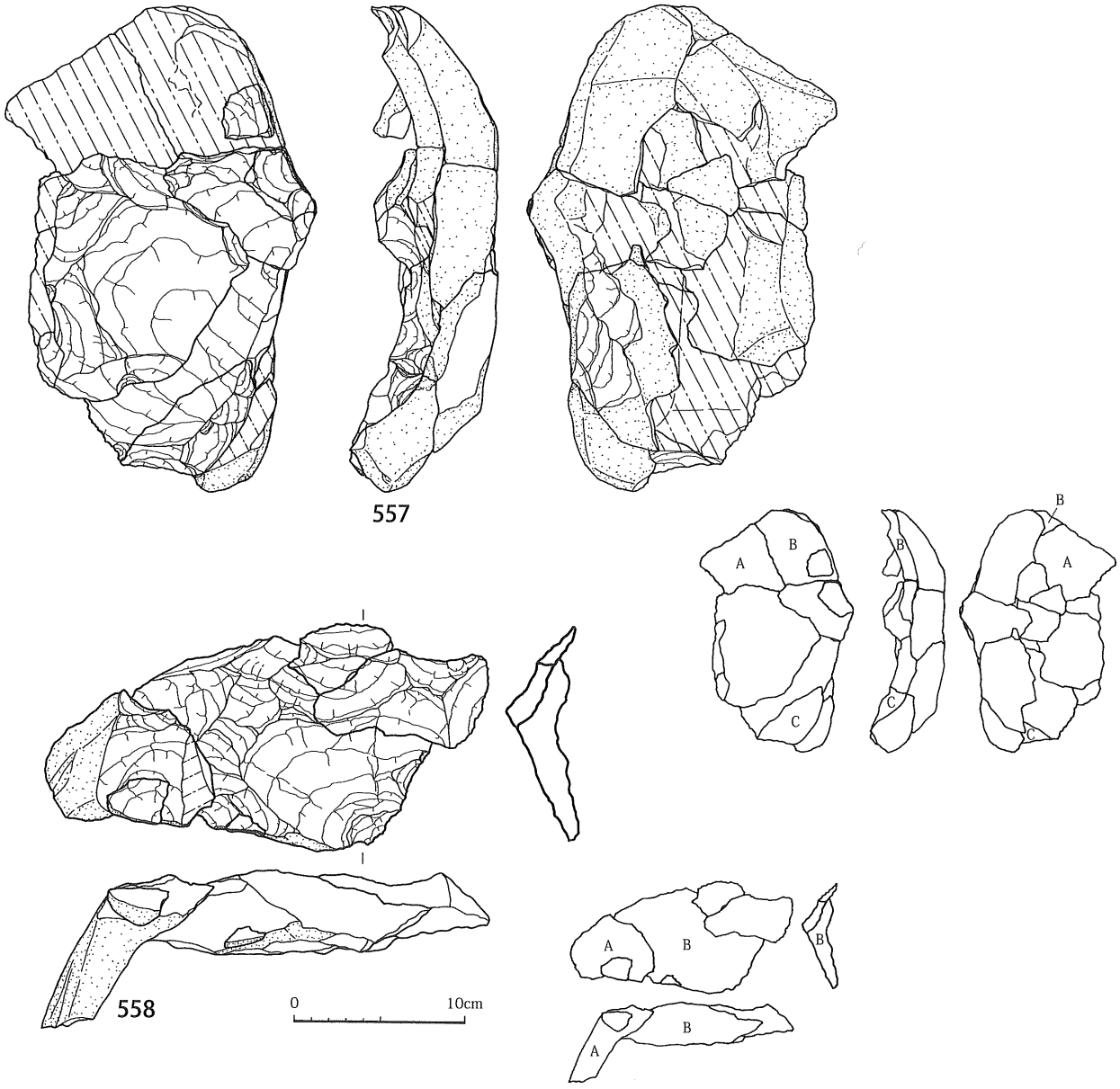



図86　剥片集積遺構（YSS1）出土剥片

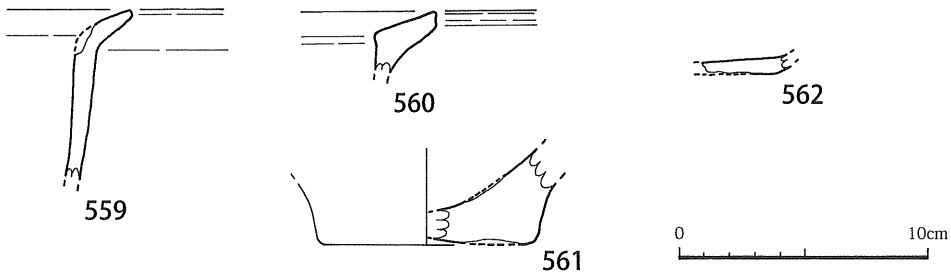



図87　剥片集積遺構（YSS1）付近出土土器

は知られているが、剥片剥離技術については不明瞭な点が多く、また、あまり触れられてこなかった。同時代の資料としては加治屋B遺跡の東側に位置する星原遺跡より石皿転用の石核と思われるものや、少し時代が下るものでは縄文時代中期のやはり火を受け剥がれた原石面の接合資料が出土している。

横市川流域の遺跡では、両輝石安山岩aは粗製剥片石器や打製石斧（石製土掘り具）など生産用具に多く用いられる石材であり、今回当遺跡にて弥生時代の石材利用の一端について伺うことができる良好な資料が出土したことは今後の都城盆地における在地石材利用について考える上でも重要である。

（文責：栗山葉子）

**剥片集積遺構出土土器**

**YSS1 出土土器（図 87）**

**559** は甕の口縁～胴部である。小型のものと思われる。口縁部は外反し、口唇部は丸く仕上げられる。**560** は山ノ口Ⅱ式甕の口縁部である。貼付された口縁は先細りしながら外反する。**561** は壷の底部。胎土中にはキンウンモが混入する。**562** は中世土師器の小皿である。破片の為、径は不明である。底部は磨耗しているが、糸切りの痕を確認できる。　（文責：加覧淳一）

## 5. 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構

### （1）竪穴住居跡

**竪穴住居跡**

弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡が7軒（**YSA2・24・25・32・38・41・41・44**）検出された。

この時期の竪穴住居跡は散在しており、中期の竪穴住居群の中に混ざって検出されたもの（**YSA2・24・25・32**）と中期の住居群とは離れて点在しているもの（**YSA38・41**）がある。

**YSA2（図 88）**

**YSA2** は **YSA1** の西側約 1.5m の地点に位置している。検出の段階で住居の南側に霧島御池軽石の分布が見られ、土層断面の観察から、住居がある程度埋没した後、地層の横転が起き霧島御池軽石（8層）が持ち上がったと思われる。この地層横転により住居の南東部は破壊されているため住居の全容は不明であるが、現状での平面プランは半径約 2.9m の円形プランで、検出面からの深さは約 25cm である。

住居内施設としては中央にピットが1基のみで、これが主柱穴と思われる。ピットの直径は 25cm、深さは 45cm で、住居埋土と同じ層（③層）が入っていた。

住居内堆積土は撹乱層の①層と、黒色シルト土の③・⑤層、硬くしまる貼床層の④層、霧島御池軽石のブロックである⑥層に分けられる。このうち貼床である④層の硬度は表面 28.1mm（30kg/cm²）、断面 24.2mm（10kg/cm²）、厚さは約 4cm である。⑤層はごく一部の床面に堆積する層である。

遺物は住居上層からの出土である。調査段階においては中期の土器も含まれていたため中期と考えていたが、遺物の整理作業時に、より新しい段階の土器片が含まれることが判明したため、弥生後期以降と判断した。石器は剥片（**620**）が下層より出土している。

**YSA24（図 88）**

**YSA24** は現代の撹乱によって中央と北部を削平されているため全容は不明であるが、隅丸方形プランの可能性がある。現状での長軸は 4.4m 以上、検出面からの深さは約 30cm である。住居西部に

長軸 0.7m、短軸 0.4m、深さ約 10cm の不整形な土坑が 1 基確認された。ピットは全部で 9 基確認され、そのうちの 2 基が主柱穴である。両ピットともピット下部の直径が 20cm、深さが 30cm であり、ピットの掘り形を観察すると、上半部に段が認められた。西の主柱穴の土層断面では片方のみ黒色シルト土で、片方には霧島御池軽石を主体とする硬くしまった層が堆積していた。これは柱の腐った跡と、柱を埋める際につきしめられた周囲の埋め土と思われる。

住居内堆積土は現代の撹乱である①層、植物などの撹乱である③層、黒色シルト土の②・④層、霧島御池軽石を主体とする⑤層に分けることができる。貼床は⑤層だと思われるが、硬くしまってはおらず、硬度も 19.5mm（5kg/cm²）と低めである。

遺物は撹乱のため少ないが、刻目突帯を持つ **564** は床面から出土した。また上層から出土した線刻の施こされた壷（**565**）は **YSA25** の土器片と接合している。石器は磨石・敲石 1 点が上層より出土した。

**YSA25（図 89）**

**YSA25** は長軸 7.0m、短軸 5.7m の円形を基調とした花弁状住居で、検出面からの深さは約 50cm である。住居の東部の一部は調査区のトレンチにより破壊されている。突出壁は南部に 2 ヶ所確認された。また床面から住居壁の立ち上がりにかけてが硬くしまっていないことや、壁面の上半部が周囲の黒色土と重なるために、住居の輪郭がやや不明瞭であった。

住居内施設としては 6 基の土坑が確認された。中央には不整形の浅い土坑（長軸約 1.6m、短軸 0.75m、深さ約 15cm）があり、土坑内からは石皿（**626**）と土器（**570**）が出土した。中央土坑の北西にはやはり不整形な浅い土坑（長軸 1.4m、短軸 0.95m、深さ約 20cm）が 1 基ある。その他に住居北の壁際に 1 基、東の壁際に 3 基の円形の土坑が確認された。北壁際の土坑は直径 0.75m、深さ 45cm で、東壁際の 3 基の土坑は直径 0.6 ～ 0.7m、深さ 23 ～ 30cm でほぼ同じくらいの大きさである。北壁際土坑内には **586** のミニチュア土器が 1 点、東壁際土坑内の 1 基には **574** の甕が内面を上に向けて出土した。ピットは全部で 25 基確認され、主柱穴はそのうちの 4 基と思われる。北部の 2 基は突出壁の延長上に位置する。4 基の直径は約 30 ～ 40cm、深さは 50 ～ 60cm とほぼ同じ大きさで、ピットの埋土は黒色系のシルト土や霧島御池軽石のブロックが含まれていた。また南東のピットはピットの底から約 35cm の高さに段を持つ。

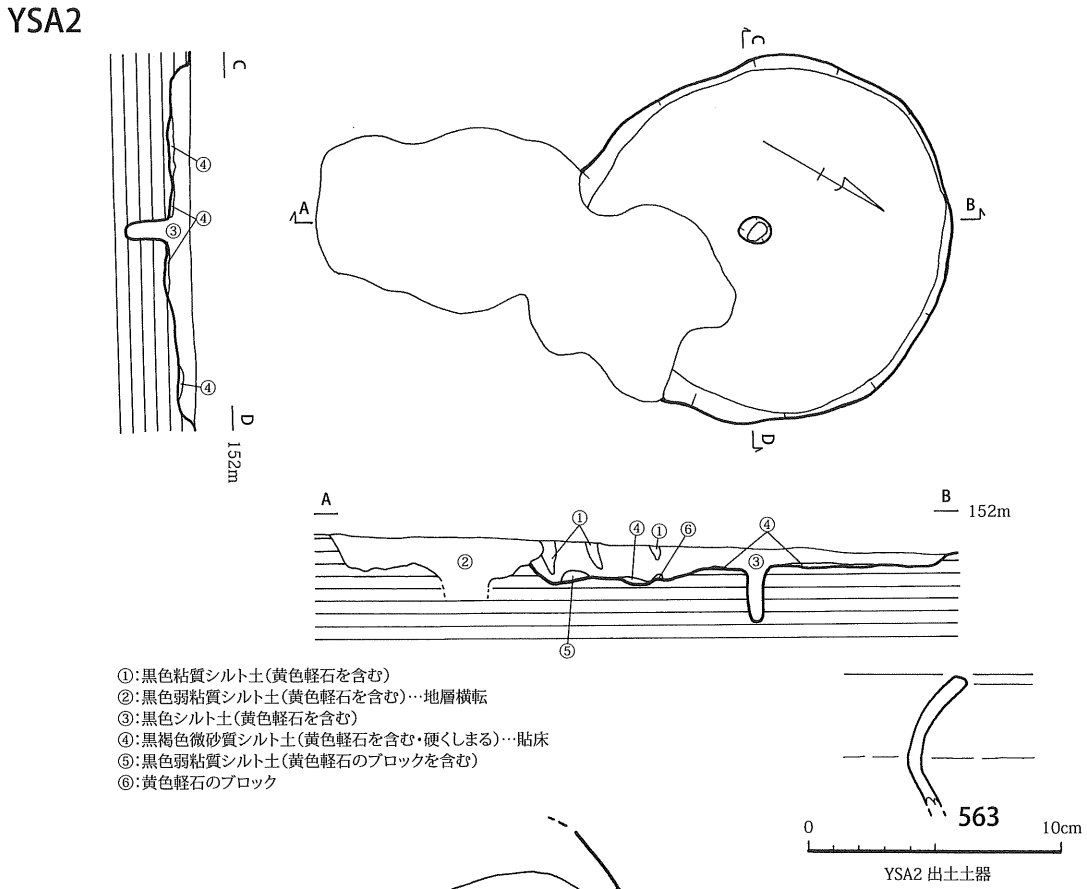
住居内堆積土は黒色シルト土の①・②・③・④・⑤層、貼床である⑥層、ピット内に堆積する⑦層に分けられる。このうち①・②・③・④・⑤層は黒色シルトの明るさと質感、御池軽石の含み具合から細分した。⑥層は黄褐色の砂質シルトであるが、これは粒子の細かい霧島御池軽石を貼床材として選んでいたと思われる。⑥層の硬度は表面が 22mm（8kg/cm²）、厚さは約 10cm で、堆積は一定ではなく、平面的にも硬くしまっているところは部分的にしか確認されなかった。

遺物は上層からも散見されたが、床面や土坑、ピット内からも出土している。東壁際土坑近くのピットからはミニチュア土器と礫が出土し、突出壁の基部にあるピットの上部からは甕（**577**）が内面を上向きにして出土した。**577** と土坑内から出土した甕（**574**）も半分を打ち欠いてから破片を埋納したような状態で出土した。また線刻の施された壷の破片は床面および中央土坑からの出土であるが、**YSA24** 出土土器と接合した（**565**）。その他に小型高坏や手づくね土器も出土している。また石器では砥石 3 点、石皿 2 点、軽石加工品 6 点、自然礫 5 点が出土している。そのうちの自然礫の 4 点は、2 基の突出壁に挟まれた空間の床面で 2 個ずつ接して出土している。

**YSA32（図 90）**

**YSA32** は西側を近世の撹乱により削平されているため全容は不明であるが、検出面からの深さは約 26cm、長軸は 4m で、南側のコーナーは隅丸を呈している。住居内施設としては東壁際に不整形な浅い土坑（長軸 0.7m、短軸 0.5m、深さ約 10cm）が確認できた。またピットは全部で 7 基確認され、そのうちの南北端に位置する 2 基を主柱穴とした。北側の主柱穴は直径が約 40cm、深さが約 90cm で、この主柱穴のすぐ西には同じ大きさのピットが隣接していることから、ピットを掘りなおした可能性がある。南の主柱穴は直径が約 40cm あるが、深さが約 20cm しかなく、北の主柱穴と深さに大きな違いが見られることから、削平部分に別に主柱穴があった可能性もある。

住居内堆積土は後代（3・5 層）の撹乱である①・②層、黒色シルト土の③・④層、霧島御池軽石のブロッ



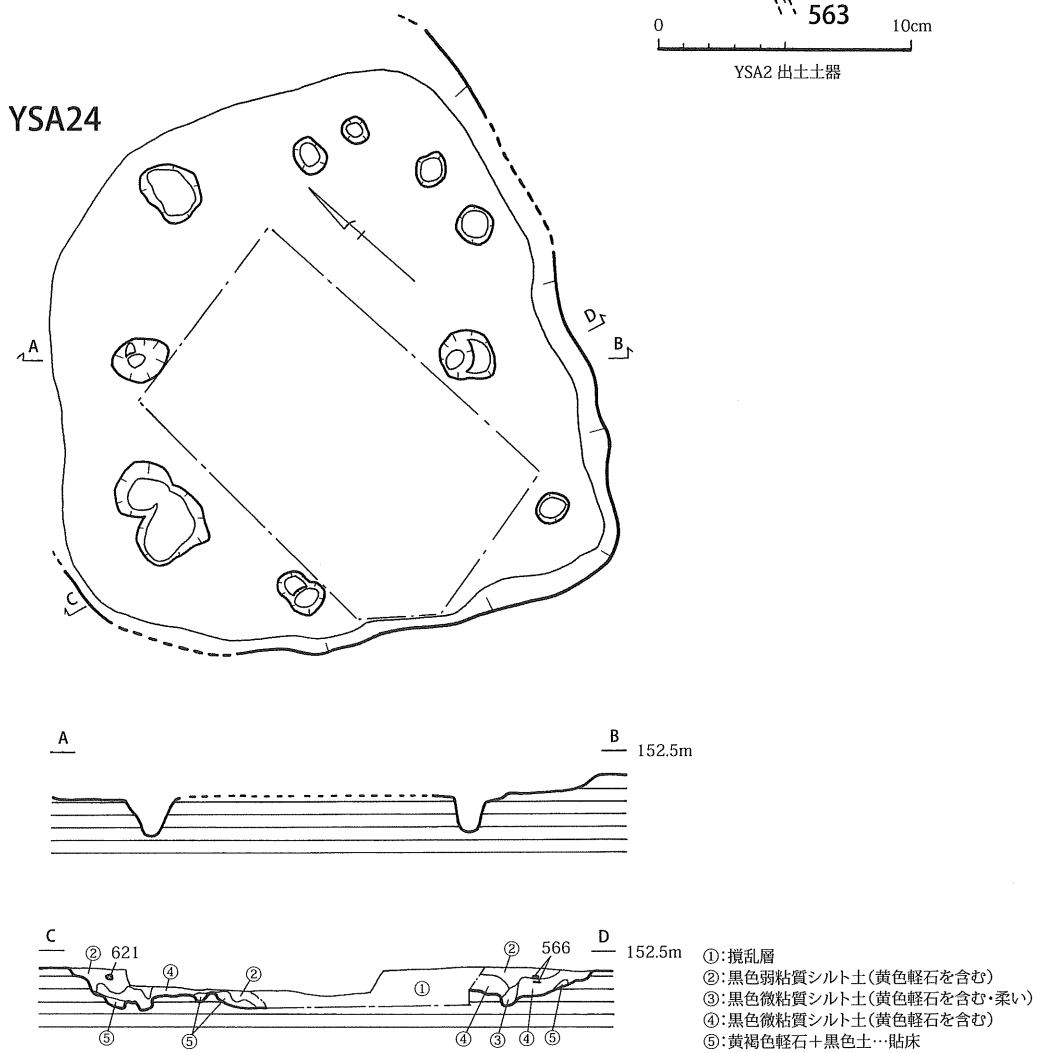




図88　竪穴住居跡 YSA2・24 実測図

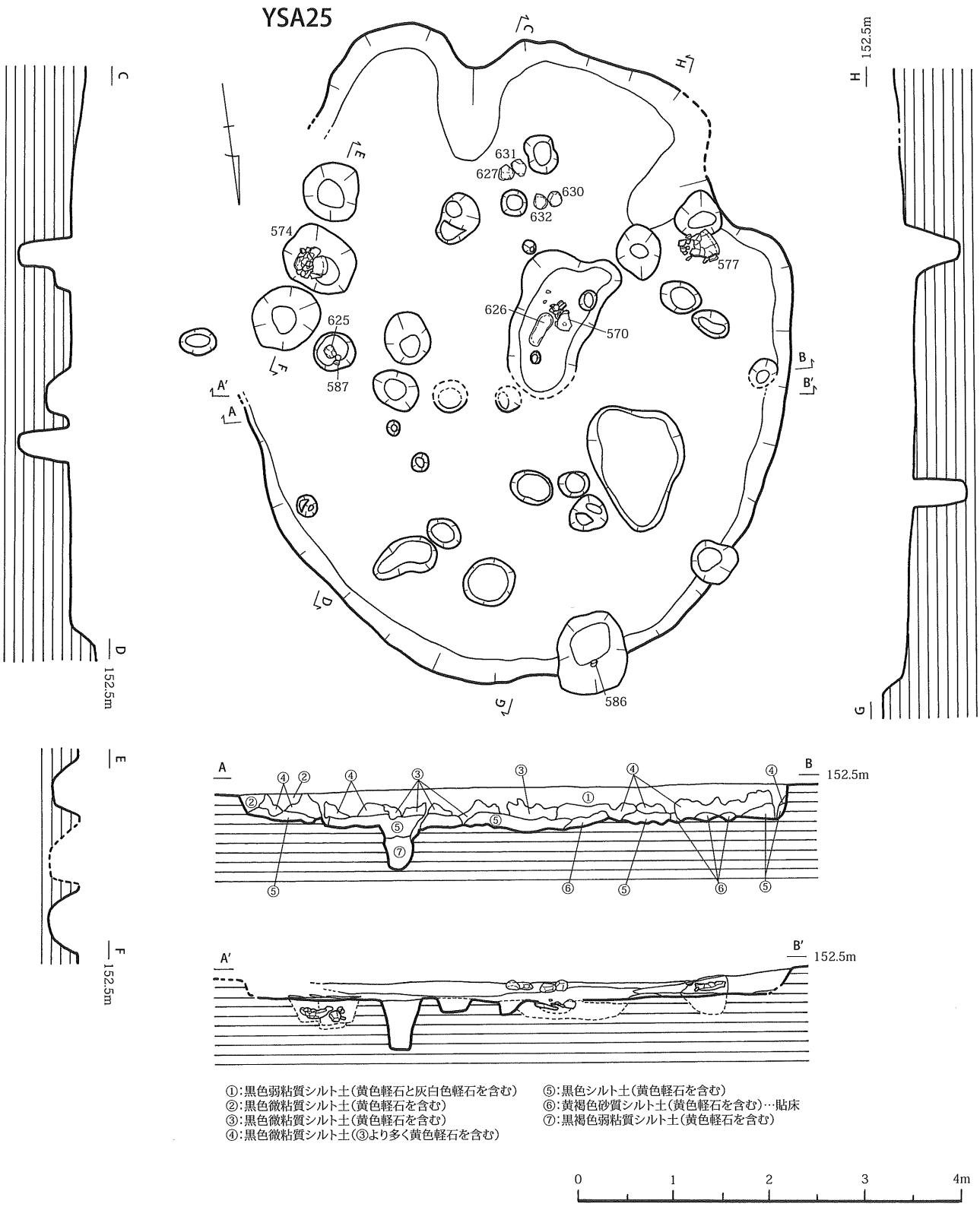



**図89　竪穴住居跡 YSA25 実測図**

クである⑤層、ピット内に堆積する⑥層、貼床の⑦層、貼床の下に堆積する⑧層に分けられる。このうち⑤層は住居中央の一部分にのみ堆積し、霧島御池軽石を主体とする⑥層はルーズな堆積であった。貼床である⑦層の硬度は表面が 24mm（10kg/cm²）で、厚さが 3cm である。

遺物は線刻入りの壷（**588**）と、壷（**589**）が上層から出土している。

**YSA38（図 90）**

**YSA38** は西半分を 1 次調査で、東半分を 2 次調査で発掘をおこなった。住居中央は 1 次調査のト

レンチのため壁の立ち上がりが破壊されているが、長軸 5.3m、短軸 5.1m の円形プランの住居で、検出面からの深さは約 40cm である。住居の外周に沿って幅 0.7 ～ 1.4m で、住居中央より高さ約 10cm のベッド状遺構を馬蹄形に形成している。

住居内施設としては中央に不整形な土坑（長軸 1.6m、短軸 0.55m、深さ約 10cm）が 1 基と、中央土坑の北側に隣接する 1 基と、北壁際・南壁際に 1 基ずつの合計 4 基が確認された。中央土坑以外の土坑は円形で、大きさも直径約 0.6m、深さ約 30 ～ 40cm と、ほぼ同じサイズである。中央土坑に接する土坑のみ上半部に段を持っている。中央土坑の上部からは、長さ約 1 mの炭化材が床面より約 20cm 高いレベルで土坑の落ち込みに沿うように出土している。炭化材直下の埋土中の軽石は被熱のためか赤橙色化しているものもある。炭化材の樹種同定の結果は散孔材のサクラ属に同定され、放射性炭素年代測定した結果、1820 ± 60 年 BP（1 σ：AD120 ～ 250 年）という年代値が得られた。ピットは 25 基確認され、このうち中央土坑内にある 1 基と、中央土坑を挟んで南東に位置するピットがこの住居の主柱穴と思われる。ピットの深さは両者とも約 30cm であるが、西主柱穴の直径が約 30cm であるのに対して、東主柱穴の直径は約 20cm とやや小さめである。主柱穴内には黒色系のシルト土が堆積していた。

住居内堆積土は①層から⑦層に分けられるが、すべて黒色系シルト土を基調とした層で、明るさや質感、霧島御池軽石の含み具合から分けることができた。②層は植物などによる撹乱と思われる。④層を観察すると、中央土坑や壁際の土坑が埋没した後に、炭化材を含む④層が堆積したと思われる。⑥層は西壁の立ち上がり部分にのみ確認された層で、⑦層は壁際土坑に堆積し、霧島御池軽石を多量に含んだ層である。この住居の明確な貼床層は確認されず、掘削面の 8 層を直接床として使用したと思われる。8 層表面の硬度は 27mm（20kg/cm²）である。

出土遺物は上層からは甕や鉢、櫛描波状文を持つ高杯（**590**）が出土し、床面の中央土坑付近からは甕の底部（**597・598**）が出土した。石器は大型の砥石（**633**）が下層から出土している。また北壁際土坑内からは粘土質の赤色顔料塊 2 点（**600** のみ図化）が、底に近いレベルから出土した。

**YSA41（図 91）**

**YSA41** は 4.9m × 4.9m の隅丸方形プランの住居で、検出面からの深さは約 45cm である。住居内施設としては土坑が 6 基確認された。中央の土坑は不整形で長軸 1.7m、短軸が 1.1m、深さが約 15cm である。土坑内からは底面より約 10cm 浮いた状態で甕の破片が多く出土したが、実測不能である。またその他にも北壁・東壁・西壁に沿って 5 基の土坑が確認された。北側の土坑は楕円形の浅い土坑（長軸 0.8m、深さ 8cm）で、あとの 4 基の土坑は円形で直径が約 45 ～ 80cm、深さは 20 ～ 35cm と、ほぼ同サイズである。ピットは 11 基確認されたが、主柱穴は中央土坑を挟んで東西に位置する 2 基と思われる。東の主柱穴は直径が 30cm、深さが 65cm で、西の主柱穴は直径 30cm、深さが約 45cm である。また住居西壁の立ち上がりは階段状を呈し、床面より約 5cm 高くなっている。これは出入り口遺構と考えられるが、突出壁の基部だった可能性もある。

住居内堆積土は植物などの撹乱である①層、黒色系シルト土の②・③・④層、貼床である⑤層、霧島御池軽石のブロックである⑥層に分けられる。②・③・④層は黒色シルトの質感や明るさ、霧島御池軽石の含み具合から分けられた。このうち④層は西壁から土坑内に堆積した層で御池軽石を多く含んでいる。貼床の⑤層は土層断面上では住居の床一面に堆積し、微細粒の黄色軽石を多量に含んでいるため質感がザラザラしていた。硬度は表面が 23mm（10kg/cm²）、厚さが約 10cm である。

出土遺物は②層からもみられたが、主に③層からの出土である。床面から約 10cm 浮いたレベルで **605** の甕や **606** の鉢が出土した。また **601** や **602** は床面からの出土である。石器は石包丁が出土している。また西の壁際土坑近くの床面からは直径 5mm 程度の赤色顔料塊が出土している。

**YSA44（図 91）**

**YSA44** は北側を中世の溝（**SD2**）に切られるため全容は不明であるが、長軸 6.6m 以上の花弁状住居で、検出面からの深さは約 30cm である。現状では 3 ヶ所の突出壁が確認され、4 つの空間を作り出している。他の後期住居と同様、床面は硬くしまってはおらず、壁の立ち上がりもやや不明瞭である。

住居内施設としては楕円形の土坑（長軸 1.35m、短軸 0.8m、深さ 10cm）が 1 基確認された。ピットは全体で 5 基確認され、そのうち東端に位置するピットが直径 25cm、深さ 60cm としっかりして

いることから、主柱穴の１つである可能性が高い。このピットの掘り形は住居中心方向に段を持ち、霧島御池軽石を多く含む黒色系土が硬くしまって堆積していた。

住居内堆積土は植物などの撹乱である①層、黒色系シルト土の②・③層、霧島御池軽石のブロックである④層、貼床である⑤層、ピット内に堆積する⑥層に分けられる。このうち③層は住居東壁際のみに確認された。この層は霧島御池軽石がブロック状の塊で含まれていることや、軽石粒の混ざり具合も均一でないことから住居廃絶の埋め戻しの際に壁際から流し込まれた土ではないかと考えられる。なお、その供給源としては、竪穴掘り込みの周囲にその存在が想定される周堤の土などと思われる。貼床の⑤層は霧島御池軽石の粒子を多く含んでいないことから、硬くしまってはおらず、住居西部での堆積はみられなかった。硬度は 24mm（10kg/cm²）で、厚さは約 8cm である。

遺物は②層から出土した。東主柱穴と突出壁の間では自然礫５点が固まって出土し、その周囲には土器の破片が散乱していた。また西端に位置するピット内からは壷（**611**）が口縁を住居中央方向に向けて横に倒した状態でつぶれて出土し、その **611** を取り上げた下からはミニチュア土器（**616**）が伏せられた状態で出土した。このピットは浅い（深さ約 13cm）掘り込みで、南側は（**SD2**）に切られている。また土坑内からは壷の底部（**619**）が底を土坑床面につけるような状態で出土した。

（文責：外山亜紀子）

**竪穴住居跡出土土器**

**YSA2 出土土器（図 88）**

**563** は甕の口縁部である。頸部からゆるやかに外反する。口唇は面取りにより平坦に仕上げられる。胎土は浅橙色系の色調を呈し、赤褐色の砂が目立つ。

**YSA24 出土土器（図 92）**

**564** は壷の胴部である。胴径約 20cm で小型である。外形は偏球形をなす。最大径付近に１条の刻目突帯を巡らす。**565** は壷の頸～胴部である。頸部内面には稜をもつ。胴部は球状に膨らむ。胴部外面には細工具によると思われる線刻をもつ。文様・モチーフは不明である。器面調整は内・外面ともに細かいハケメが明瞭に残る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。**YSA25** から出土した破片と接合している。**566** は壷の胴部である。球形状に膨らむ。３条の刻目突帯が付される。刻目は細工具によってつけられる。器面が荒れており、調整は不明である。胎土中には赤褐色砂粒が含まれる。**567** は高坏の坏部である。復元口径は約 31cm。口縁部は外反しながら開き、端部は丸く仕上げる。接合部は緩やかな稜を形成している。内・外面ともに縦位ミガキを施す。焼成も良好で堅致である。

**568** は甕である。口縁～底部まで揃う。復元口縁径は約 24cm、底径が 6cm、器高は約 31cm を測る。外面にはススが付着する。口縁部は上方へ立ち上がり、口唇は平坦に仕上げる。胴部は緩やかに湾曲する。底部は平底である。

**YSA25 出土土器（図 93・94）**

**569** は壷の頸～胴部である。口縁部は外反するものがつくと思われる。胴部はややいびつに膨らむ。器面調整は内・外面ともにハケメをよく残している。**570** は壷の胴部である。底部は尖底ぎみとなる。底部付近の外面にはケズリが認められ、その後工具によりナデられている。**571** は小型高坏である。復元口径が約 13cm、脚底径が約 12cm である。器高は約 10cm である。坏部は碗状。脚部は外へ開きながら、脚裾付近で大きく広がる。外面にはハケメが明瞭に残る。内面はナデである。**572** は高坏の坏部である。脚部との接合部分で剥落している。外反する口縁部は大きく外へ開く。口縁部と受部接合部には緩やかな稜が形成される。器面が荒れているものの、内・外面ともにミガキが部分的に残る。胎土には黒色砂粒の混入が目立つ。

**573** は甕の胴部である。外面には左上がりのタタキが施される。内面にはハケメが残る。**574** は甕で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 27cm、底径は約 7cm、器高は約 33cm を測る。胴部中位にはススの付着が著しい。口縁部は短くわずかに外反する。胴部はわずかに膨らみ底部へ至る。底部は上げ底状となっている。器面調整は内・外面ともにハケである。口縁部付近はヨコナデを施される。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。**575・576** は小型甕の口縁～胴部である。

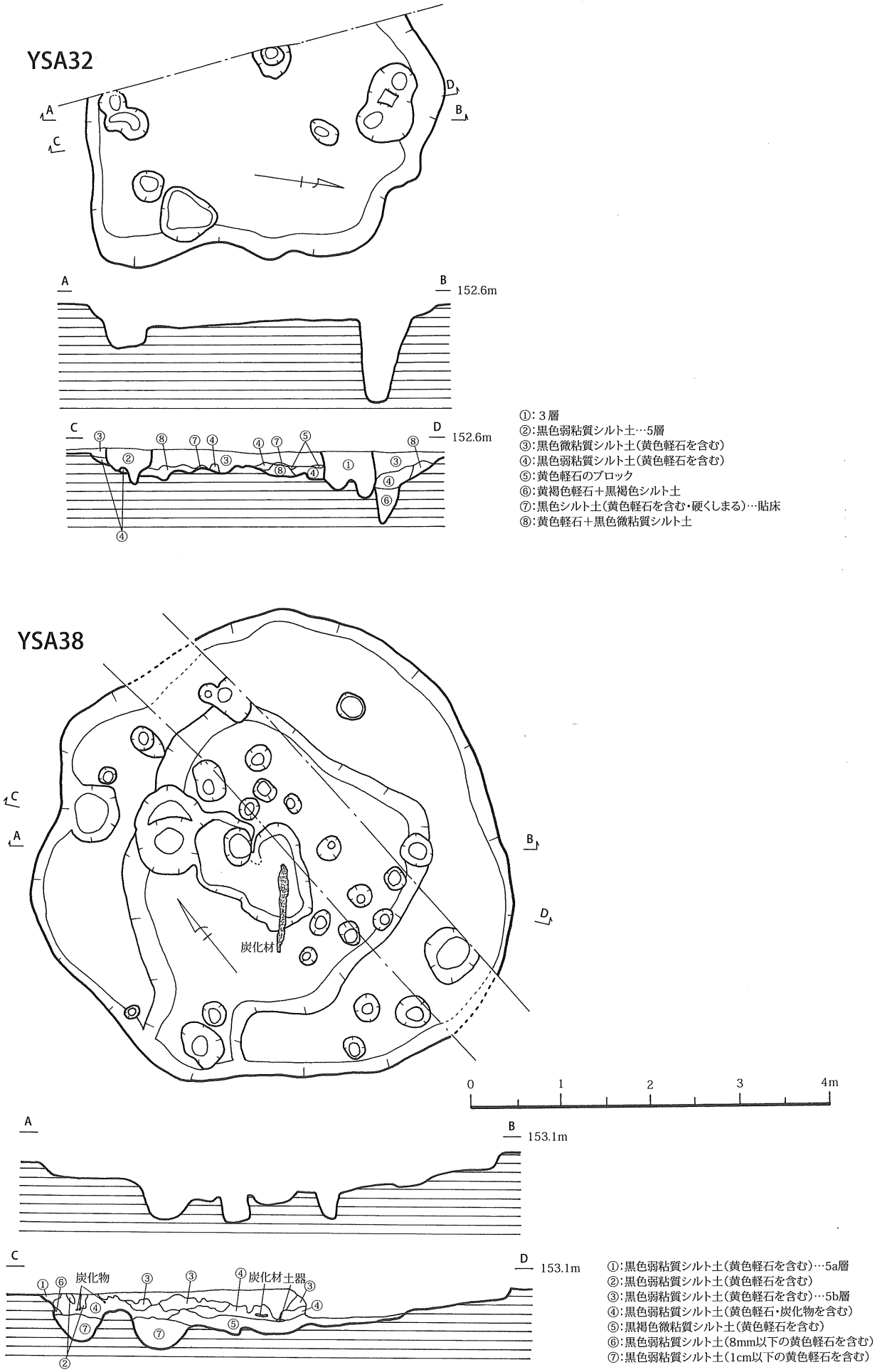



図90　竪穴住居跡 YSA32・38 実測図

いずれも口縁部は短くわずかに外反する。

**577** は甕で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 33cm、底径は約 6cm、器高は約 30cm である。口縁部は外反し、口唇部は平坦に仕上げている。頸部内面でわずかに稜をなし、胴部は張らない。底部には脚台がつくが、剥落しており、中空か中実かは不明である。器面調整は外面がハケの後ナデで底部にはハケメを残す。内面はハケである。胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。**578 ～ 580** は甕の底部である。いずれも上げ底状になっている。**581 ～ 587** は手づくね土器である。

**YSA32 出土土器（図 94）**

**588** は壷の頸～胴部である。胴部最大径は約 14cm であり、小型品と考えられる。外面には 3 本の線刻が認められる。「U」字を描くようにカーブしている。外面には細かいミガキが施される。内面は工具でナデており、工具の痕も残る。胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。**589** は壷の頸～胴部である。

**YSA38 出土土器（図 95）**

**590** は小型高坏である。復元口径は約 17cm ある。坏部は碗状で器壁を薄く仕上げている。口唇は丸い。脚部は外反しながら開くが端部は欠失しており、形状不明である。口縁部には内・外面ともに櫛描波状文が施文されている。器面調整は内・外面ともにハケで終わっており、ハケメが残る。**591** は甕で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 27cm、底径が約 5cm、器高は約 25cm を測る。口縁部は外反し、口唇部はヨコナデにより平坦に仕上げる。胴部はあまり張らず、最大径は上位にある。底部は上げ底状となる。器面調整は外面が工具によってナデられており、器面にその痕が残る。内面はハケ後ナデである。

**592** は小型甕で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 12cm、底径は約 2cm、器高は約 12cm を測る。口縁部はわずかに外反し、先端に向け先細りとなる。口唇部はナデて平坦に仕上げる。頸部から口縁にかけては強くカキアゲており、その工具痕が明瞭に残る。**593** は鉢である。復元口径は約 10cm、器高は約 20cm である。口縁部がやや内湾する。全体的に器面が荒れており、細かな調整は不明である。**594** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 25cm である。胴部にススが付着する。口縁部はわずかに外反し、口唇部はヨコナデにより平坦に仕上げる。胴部上半の外面には左上がりのタタキ痕が残る。内面には当て具痕は無く、ハケメが残るのみである。胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。

**595** は鉢で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 17cm、器高は約 8cm である。外面は工具によって不定方向にナデられ、一部ミガキ状になっている。**597・598** は甕の底部である。**597** の外面には沈線状の工具痕が残る。**599** は壷の底部である。内・外面ともに工具によってナデられる。胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。

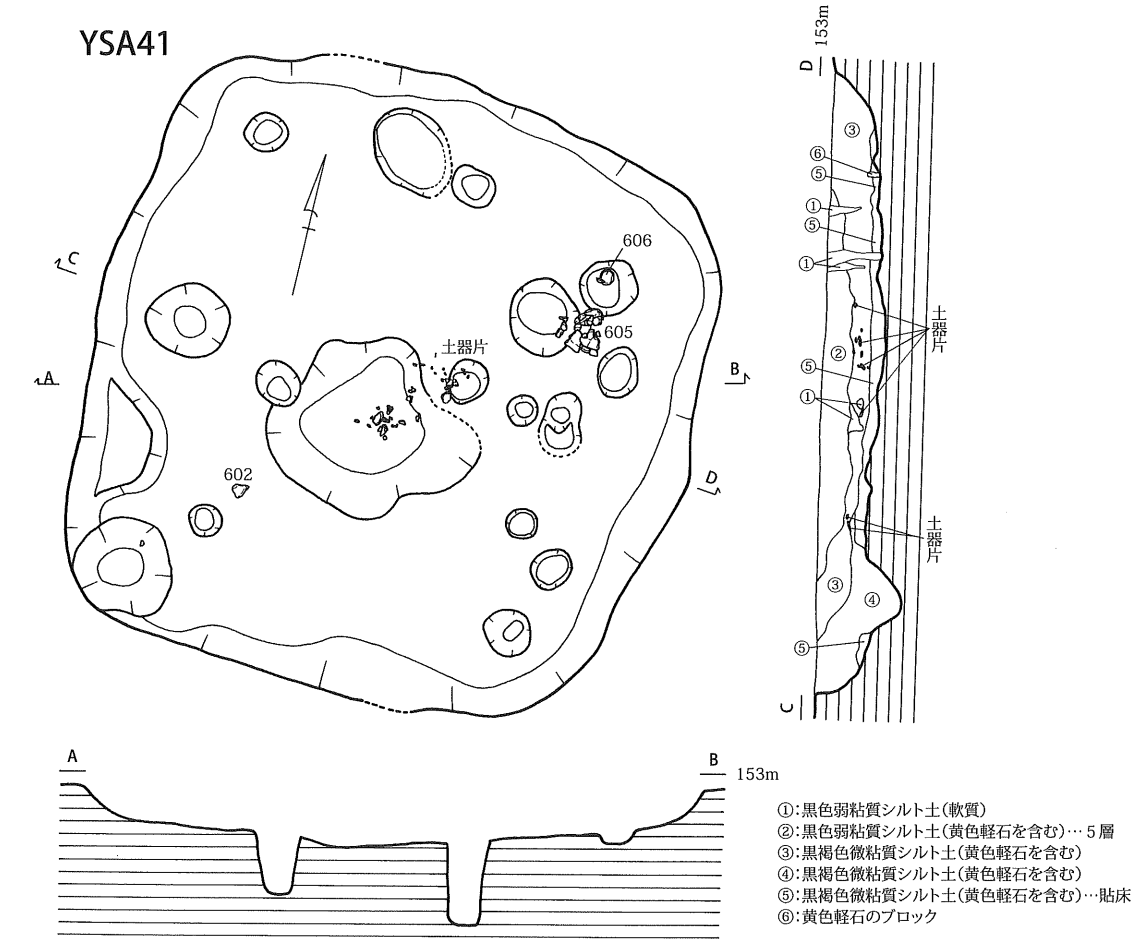
**YSA41 出土土器（図 96）**

**601** は二重口縁壷の口縁部である。口唇は平坦に仕上げられる。外面にはハケ状工具により櫛描波状文が施される。**602** は壷の口縁である。復元口径は約 16cm、口縁は単純に開く。頸部の内・外面にはハケが施される。**603** は鉢の口縁部としたが、高坏の可能性もある。**605** は甕で口縁～胴部まで揃う。復元口径は約 30cm、底径は約 6cm、器高は約 32cm を測る。胴部上半にはススが付着する。口縁部は外反し、口唇部は丸く仕上げる。胴部はあまり張らず、底部は平底である。器面調整は胴部上半の外面には左上がりのタタキが残る。下半はタタキがナデ消されている。内面は全体がナデであり、頸部付近にオサエが残る。

**606 ～ 609** は鉢である。**606** は内面にハケメをよく残す。**607** の底部は脚台状となっている。**608** は底部から口縁部までほぼストレートに立ち上がる。**610** は手づくね土器である。オサエの痕が残る。

**YSA44 出土土器（図 97）**

**611** は壷の口縁～胴部である。復元口径は約 12cm、胴部最大径は約 20cm であり、小型品である。口縁部は単純に外反し、先細りぎみとなる。胴部は丸く膨らむ。器面調整は内・外面ともにハケである。**612** は壷の胴部である。胴部最大径は約 28cm を測る。底部は丸底と思われる。器面調整は内・外面ともにハケである。**613** は鉢の口縁部である。器面調整は内面が工具ナデであり、ナデの痕が残る。**614** は鉢である。底部は平底である。**615** も鉢である。底部は尖底ぎみとなる。内・外面ともにナデである。**616** は手づくね土器である。オサエにより整形する。**617 ～ 619** は底部である。**617** は鉢



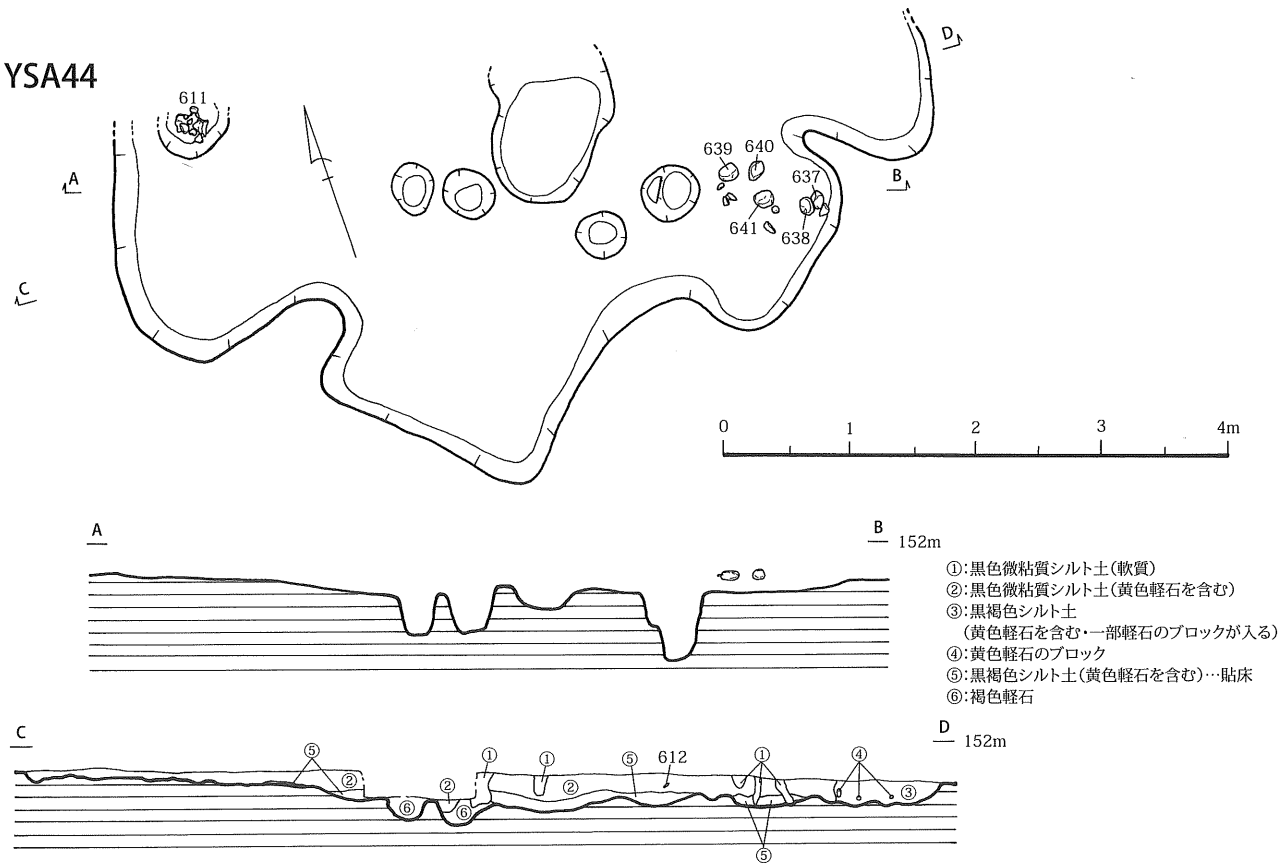




**図91　竪穴住居跡 YSA41・44 実測図**

の底部。**618** は甕の底部。**619** は鉢の底部と考えられる。底部は指頭により整形する。外面はハケ後ナデである。外面には「×」印の線刻が２ヶ所施される。（文責：加覧淳一）

**竪穴住居跡出土石器・その他**

**YSA2（図 98）**

剥片が下層で１点出土している。**620** は石材・形状等から磨製石鏃の素材と思われる。長さ 2.2cm、幅 1.7cm、厚さ 0.1cm、重さ 0.6g、凝灰質頁岩。

**YSA24（図 98）**

磨石・敲石１点が上層で出土している。**621** は平面形が楕円形でほぼ全面が研磨されており、敲打痕はない。長さ 9.6cm、幅 6.8cm、厚さ 4.0cm、重さ 380g、細粒砂岩。

**YSA25（図 98・99）**

砥石３点、石皿２点、軽石加工品６点、自然礫５点が出土した。**622** は断面が丸みのある棒状の砥石で上層から出土した。主に表面の平坦な部位全面を砥面として使用しているが、裏面にも一部使用痕が見られる。また、片方の先端部には敲打痕がみられ、敲石としても使用している。長さ 12.6cm、幅 4.0cm、厚さ 2.3cm、重さ 200g、細粒砂岩。**623** は小型の砥石で、上層で出土している。平面形は台形で、砥面は３面、使用痕が顕著である。表裏面に断面Ｖ字の深さ 0.4cm の直行する彫溝が１箇所ずつ見られ、磨製石鏃等の刃縁調整に使用したものか。長さ 5.8cm、幅 6.6cm、厚さ 2.3cm、重さ 107g、シルト岩。**624** も小型の砥石で、上層で出土している。角柱形で、４面ともに砥面として使用している。長さ 8.2cm、幅 2.4cm、厚さ 1.9cm、重さ 77g、オリーブ色を呈する頁岩。**625** は大型の石皿の破片と思われる石器で、下層の土坑中から出土した。３面が欠損した破片で、大型の石皿の破片と思われる。粒子の粗い石材であるが内面は平滑である。長さ 10.9cm、幅 12.4cm、厚さ 11.4cm、重さ 1,900g、両輝石安山岩ｂ（霧島新期溶岩類）。**626** は盤状の石皿で、自然礫を僅かに調整加工しており平面形が靴型を呈する。遺構中央の土坑中から出土した。表面の中央部を長さ 25cm、幅 9cm の範囲で広く使用している。長さ 36.8cm、幅 14.4cm 厚さ 3.0cm、重さ 2780g、細粒砂岩。**627 ～ 632** は軽石加工品で、下層から出土している。**627** は長さ 15.6cm、幅 13.4cm、厚さ 7.1cm、重さ 445g。**628** は長さ 15.6cm、幅 12.5cm、厚さ 7.8cm、重さ 290g。**629** は先端の丸い道具を回転させて円形に抉った痕跡のあるもので、抉りは直径 3.0cm、深さは 1.0 センチである。また、側面の平坦部位も平滑に研磨している。長さ 12.8cm、幅 13.4cm、厚さ 6.2cm、重さ 198g。**630** は長さ 14.4cm、幅 15.2cm、厚さ 9.4cm、重さ 470g。**631** は長さ 15.7cm、幅 12.4cm、厚さ 7.2cm、重さ 330g。**632** は長さ 14.6cm、幅 12.5cm、厚さ 8.3cm、重さ 320g。その他丸みを帯びた自然礫が５点出土しており、全て石材は両輝石安山岩ａである。重さは 2,430g、2,750g、2,870g、3,170g、3,380g。

**YSA38（図 99・100）**

石器は大型の敲石が１点、軽石加工品２点が出土している。**633** は大型の角柱状の砥石で下層から出土した。片方の先端部は欠損している。断面は丸みのある長方形で、２つの長辺の部位を砥面として使用している。残存長は 22.1cm、幅 7.9cm、厚さ 6.1cm、重さ 1,965g、細粒砂岩。**634** は軽石加工品で、長さ 17.0cm、幅 13.1cm、厚さ 10.2cm、重さ 535g。**635** も軽石加工品で、幅 0.2cm 程度の薄い板状の工具で磨り切った痕が３箇所確認された。長さ 13.2cm、幅 15.6cm、厚さ 8.6cm、重さ 340g。

**YSA41（図 100）**

石器は石包丁１点が出土している。**636** は平面形が台形状で、表裏面ともに研磨され側面に調整加工痕のある石包丁である。小型のもので中央に穿孔はない。片側の側縁に半円形の抉りがあり他方の側縁も調整加工痕の凹部があることから、そこが通常の穿孔部の用途をなすものか。外湾する刃部は約 0.5cm 幅で両面から砥ぎ出されており、磨耗している。長さ 3.8cm、幅 7.2cm、厚さ 0.7cm、重さ 25.9g、灰色頁岩。

**YSA44（図 100）**

石器は自然礫５点が埋土の２層から出土した。全て丸みを帯び、大きさも同じような自然礫で、特に調整加工の痕跡もなく、石材も同じである。石器製作用の母岩か。**637** は長さ 13.2cm、幅 9.1cm、

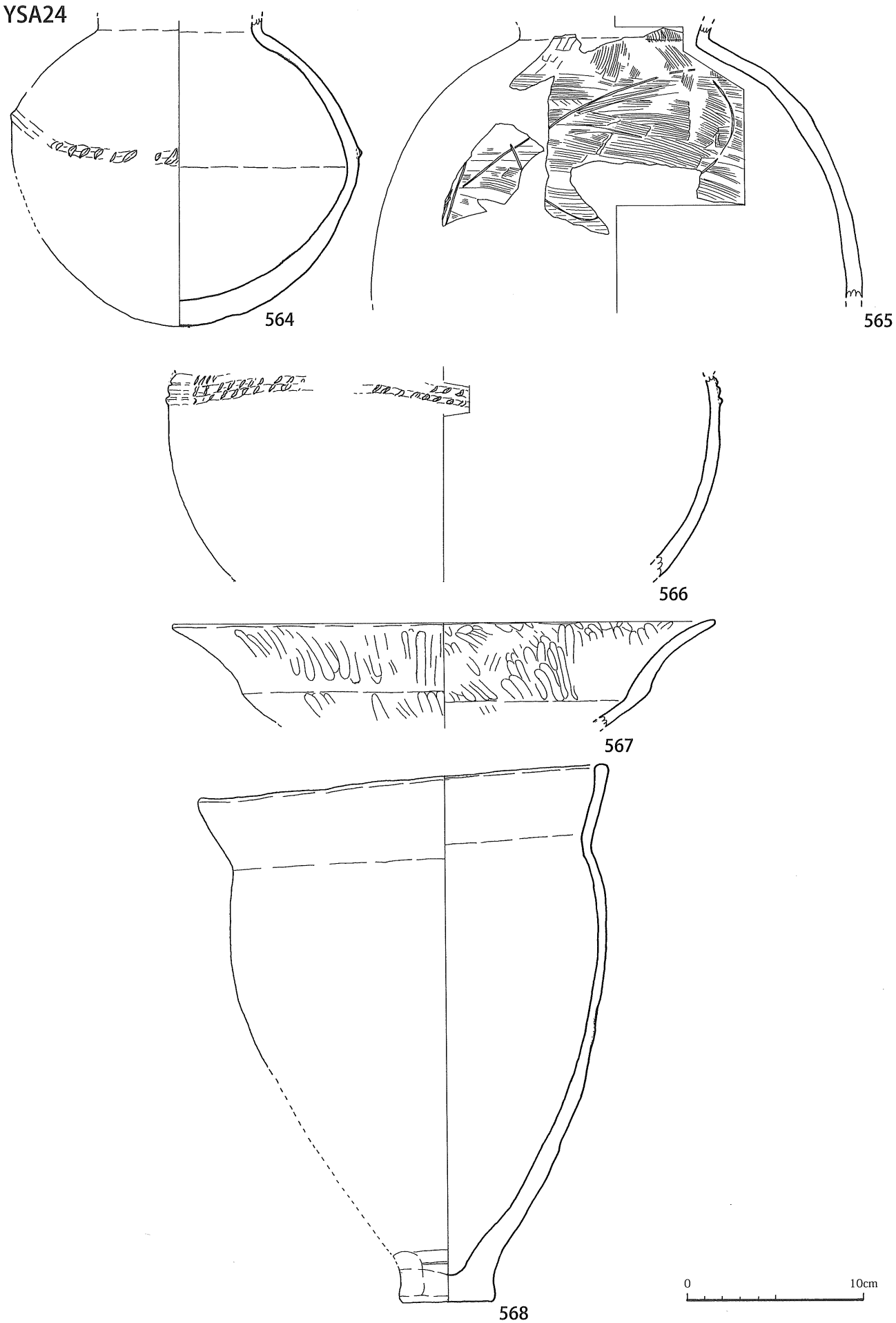



図92　竪穴住居跡出土土器

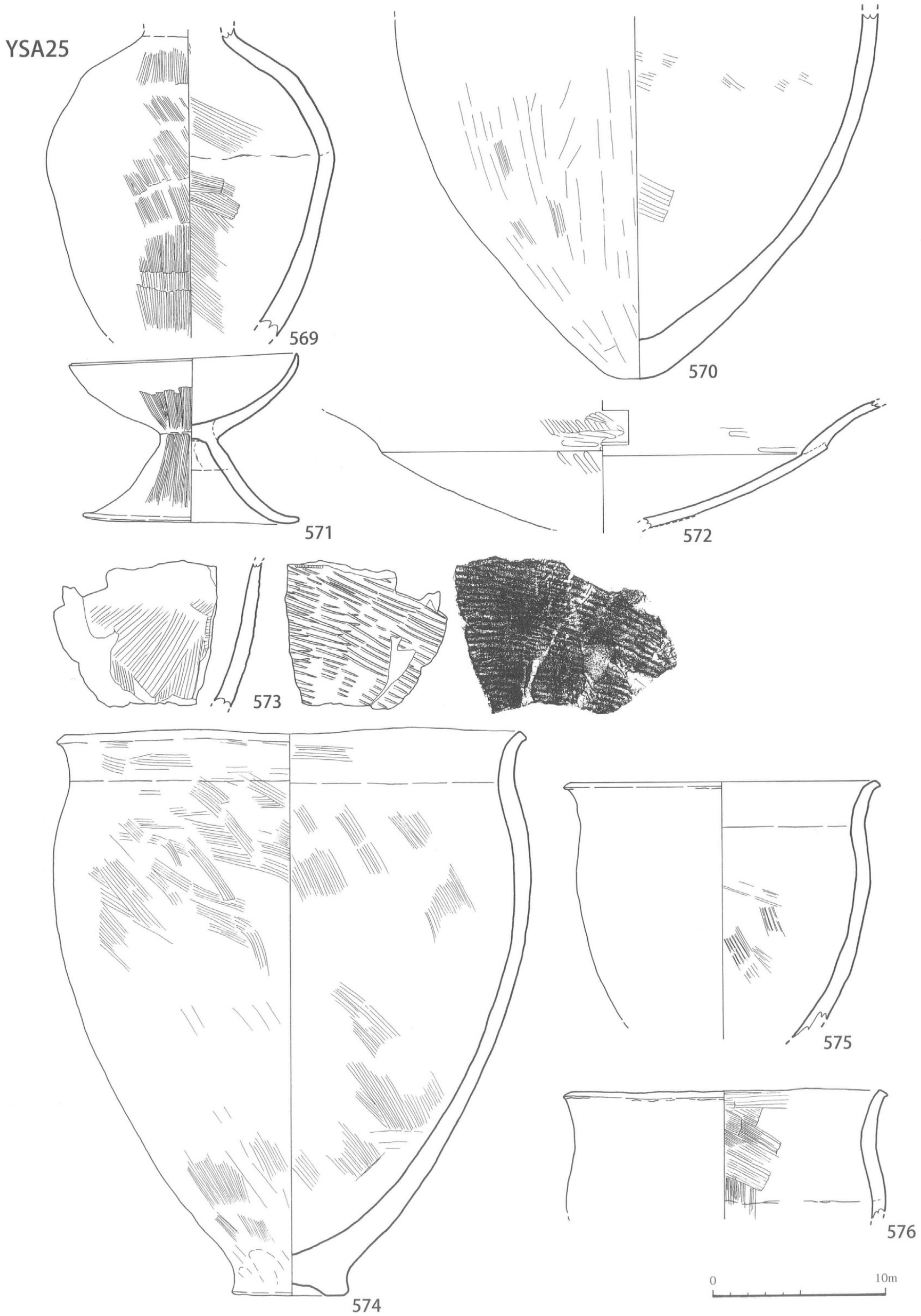
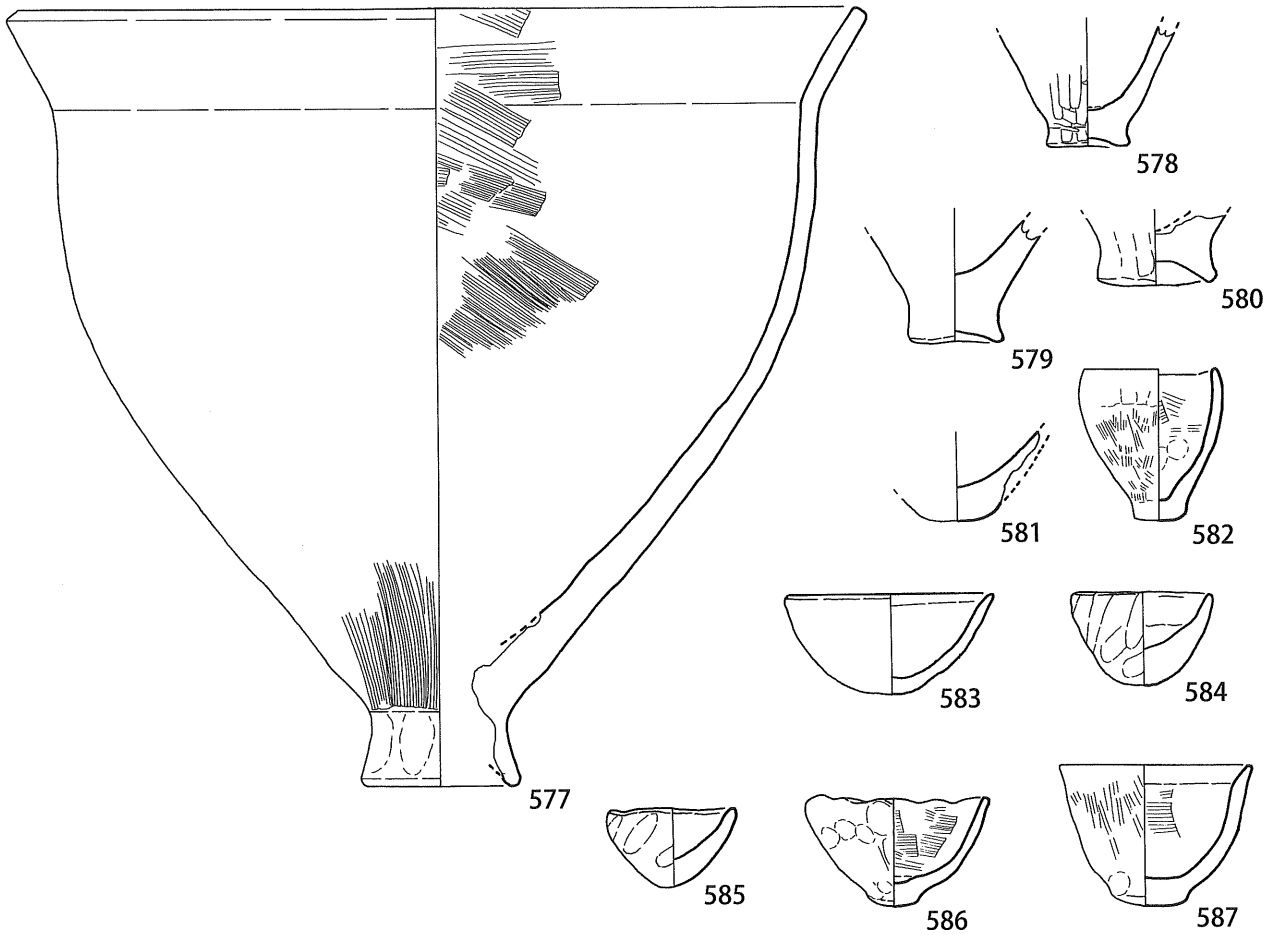



図93　竪穴住居跡出土土器

YSA25




YSA32

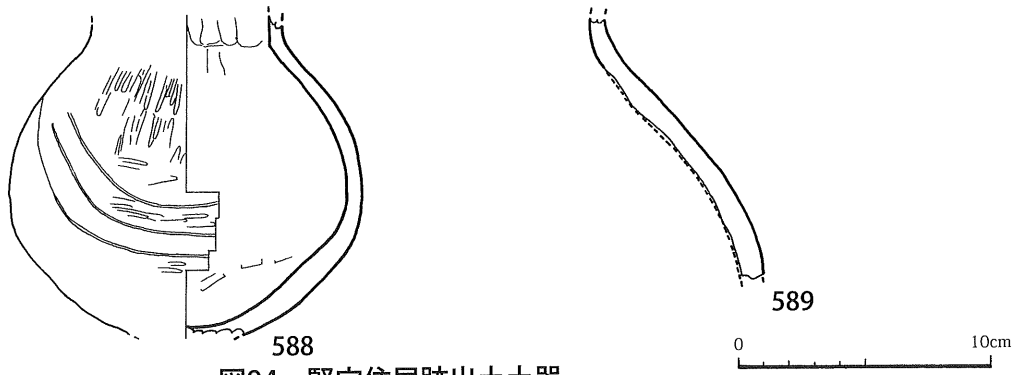



図94　竪穴住居跡出土土器

表18　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 563 | YSA 2・上層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ハケ | 黒色・赤褐色 | |
| 564 | YSA24・下層 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | 刻目突帯 |
| 565 | YSA24 | 壷 | にぶい橙 | 浅黄橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色 | 線刻 |
| 566 | YSA24 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 567 | YSA24 | 高坏 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ミガキ | 灰色・赤褐色 | |
| 568 | YSA24・上層 | 甕 | 浅黄橙～にぶい橙（スス付着） | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |

YSA38

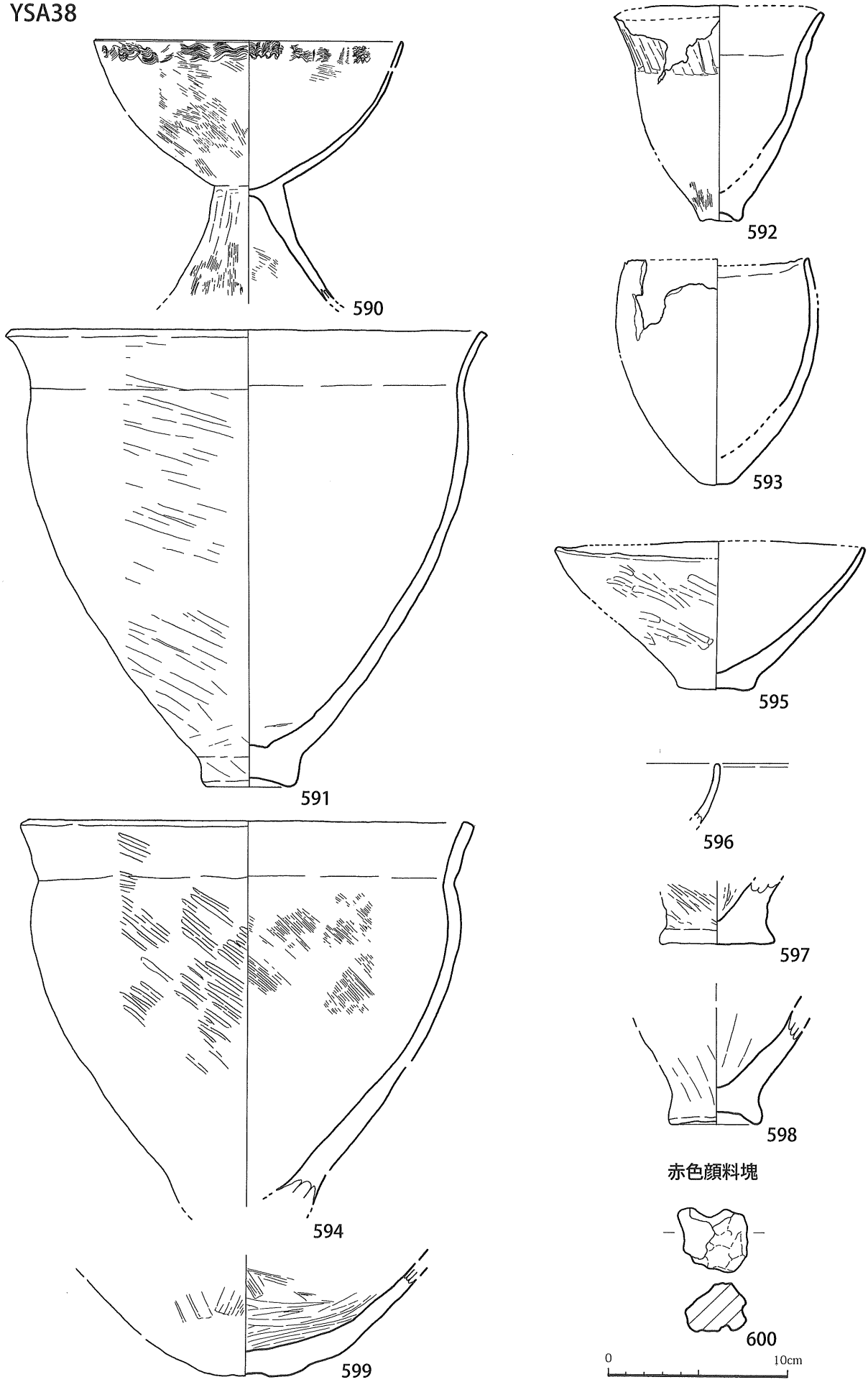



図95　竪穴住居跡出土土器他

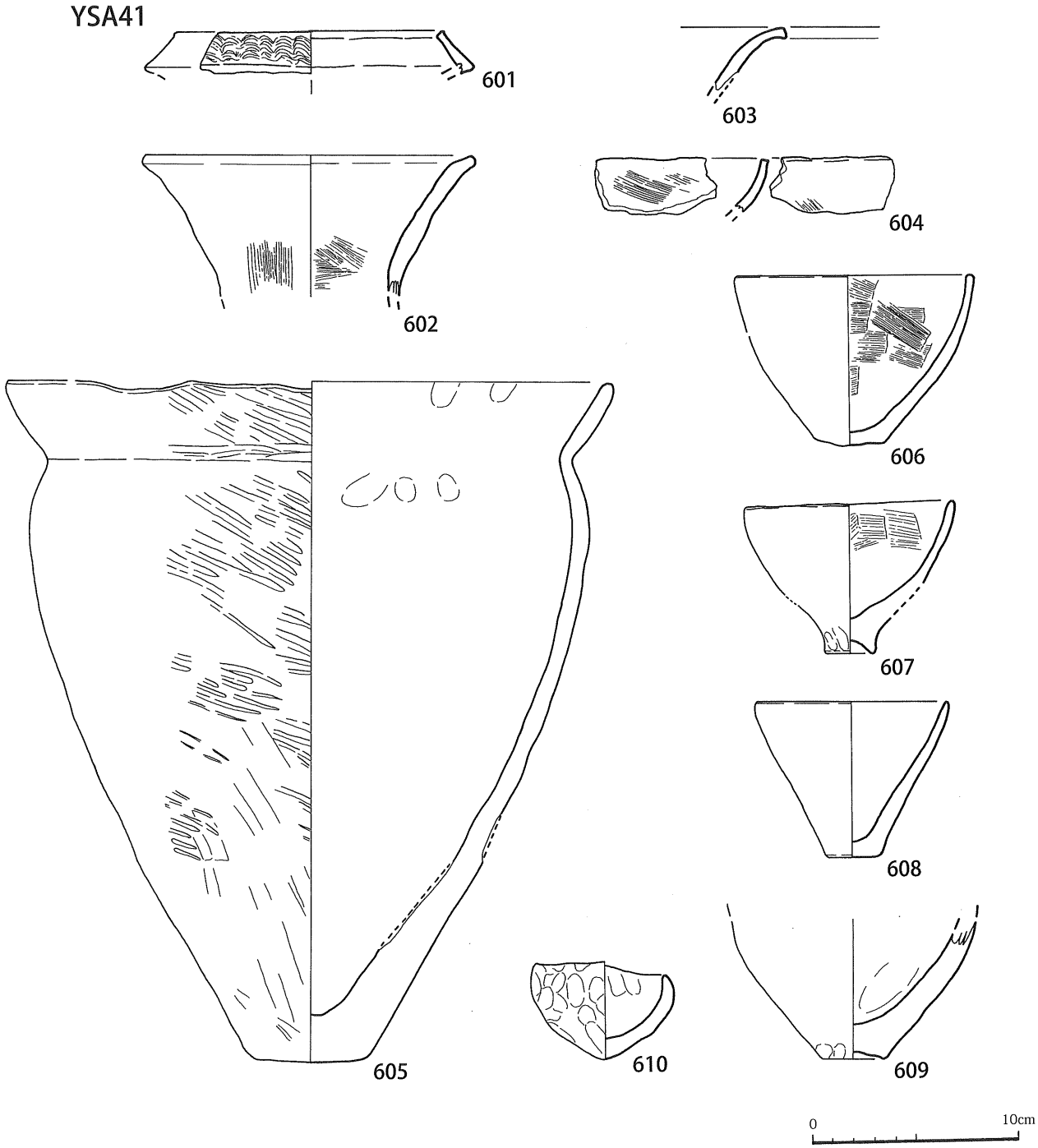



図96　竪穴住居跡出土土器

表19　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 569 | YSA25 | 壷 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色 | |
| 570 | YSA25・下層 | 壷 | 橙 | 橙 | ケズリ・工具ナデ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 571 | YSA25・上層 | 高坏 | 橙～浅黄橙 | 明黄褐 | ハケ | ナデ | 赤褐色・黒色 | |
| 572 | YSA25・上層 | 高坏 | 浅黄 | 浅黄 | ミガキ | ミガキ | 赤褐色・灰色 | |
| 573 | YSA25 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | タタキ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 574 | YSA25・下層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色 | |
| 575 | YSA25・上層 | 甕 | にぶい橙 | 明黄褐 | ナデ | ハケ→ナデ | 灰色・赤褐色 | |

YSA44

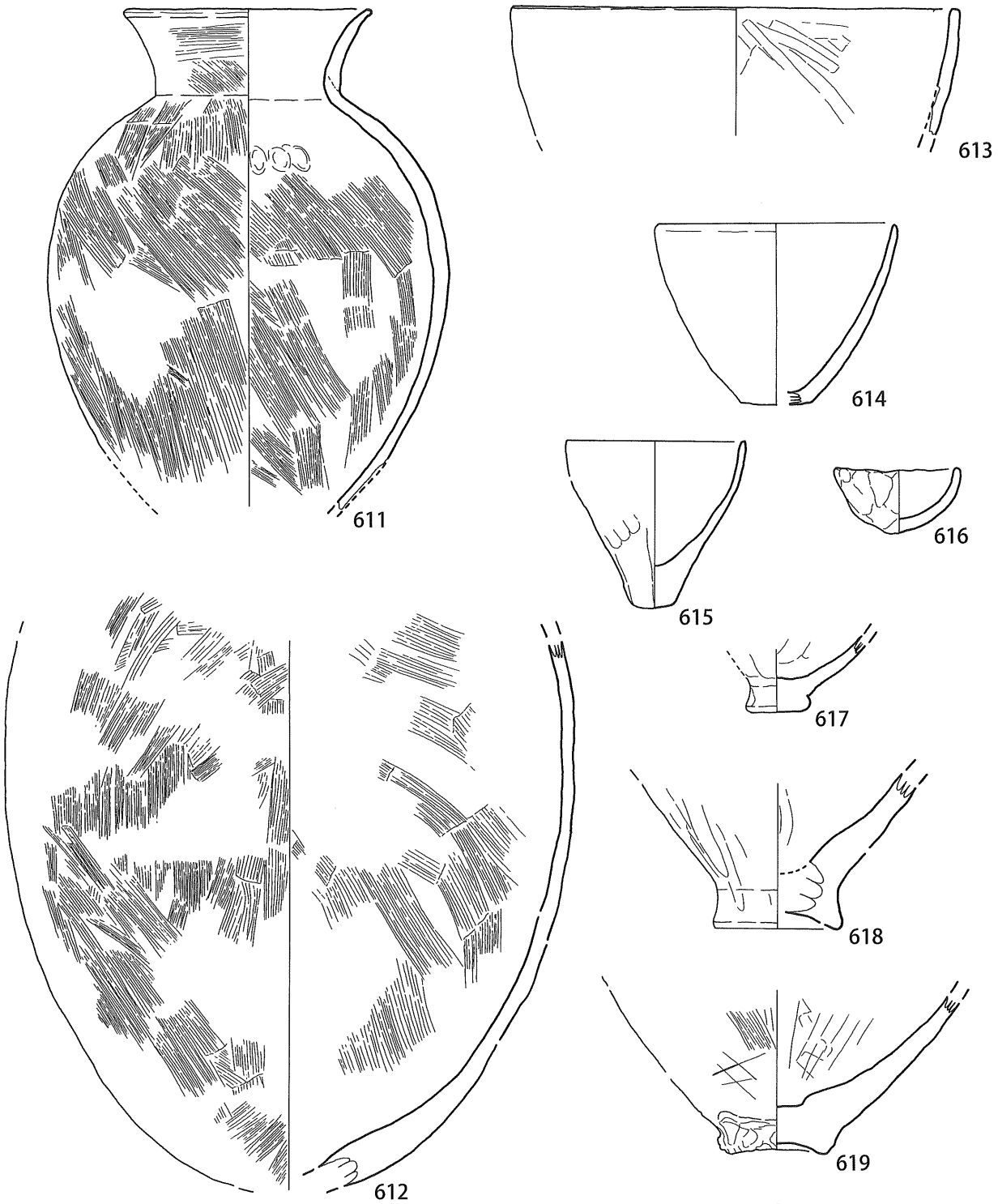



図97　竪穴住居跡出土土器

表20　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 576 | YSA25・下層 | 甕 | 浅黄橙<br>(スス付着) | 橙 | ナデ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 577 | YSA25・上層 | 甕 | 黄橙 | 浅黄当 | ハケ→ナデ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 578 | YSA25・上層 | 甕 | にぶい黄橙 | 灰黄 | 工具ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 579 | YSA25・下層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙～黄灰 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |

## 表21　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 580 | YSA25・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 581 | YSA25・上層 | 甕（壷） | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・灰色・赤褐色 | |
| 582 | YSA25・上層 | ミニチュア | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色・黒色 | |
| 583 | YSA25・上層 | ミニチュア | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 585 | YSA25・上層 | 手づくね | にぶい黄橙 | 明黄褐 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 584 | YSA25・下層 | 手づくね | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 586 | YSA25 | ミニチュア | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ハケ | 赤褐色 | |
| 587 | YSA25・下層 | ミニチュア | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 588 | YSA32・上層 | 壷 | 橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | 工具ナデ | 白色・赤褐色 | 線刻 |
| 589 | YSA32・上層 | 壷 | にぶい黄橙 | 浅黄 | ハケ | — | 白色 | |
| 590 | YSA38・上層 | 高坏 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 黒色・赤褐色 | 櫛描波状文 |
| 591 | YSA38・上層 | 甕 | 浅黄橙<br>（スス付着） | 浅黄橙 | 工具ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 592 | YSA38・上層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ・ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 593 | YSA38・上層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 594 | YSA38・上層 | 甕 | にぶい橙<br>（スス付着） | にぶい橙 | タタキ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 595 | YSA38・上層 | 鉢 | にぶい橙<br>（スス付着） | 橙～<br>にぶい黄橙 | 工具ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 596 | YSA38・上層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・赤褐色 | |
| 597 | YSA38・下層 | 甕 | にぶい橙 | 浅黄橙 | 工具ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 598 | YSA38・下層 | 甕 | 浅黄橙 | 灰黄 | 工具ナデ | 工具ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 599 | YSA38・上層 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 工具ナデ | 工具ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 600 | YSA38 | 赤色顔料<br>塊？ | 明赤褐色 | — | — | — | — | 粘土状 |
| 601 | YSA41 | 壷 | にぶい橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | 櫛描波状文 |
| 602 | YSA41 | 壷 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ→ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 603 | YSA41 | 鉢（高坏） | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 604 | YSA41 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 605 | YSA41 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | タタキ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 606 | YSA41 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 607 | YSA41 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 608 | YSA41 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 褐色 | |
| 609 | YSA41 | 鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 610 | YSA41 | 手づくね | 橙 | 橙 | オサエ | オサエ | 灰色・赤褐色 | |
| 611 | YSA44 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 612 | YSA44 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 613 | YSA44 | 鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | 工具ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 614 | YSA44 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 615 | YSA44 | 鉢 | 褐灰～灰白 | 褐灰 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 616 | YSA44 | 手づくね | にぶい黄橙 | にぶい橙 | オサエ | オサエ | 灰色・赤褐色 | |

表22　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 617 | YSA44 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 618 | YSA44 | 甕 | にぶい橙 | 浅黄橙 | ハケ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 619 | YSA44 | 鉢？ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ→ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |

厚さ 10.1cm、重さ 1,980g、両輝石安山岩 a。**639** は長さ 12.7cm、幅 10.8cm、厚さ 10.0cm、重さ 2,120g、両輝石安山岩 a。**639** は長さ 14.3cm、幅 14.2cm、厚さ 8.2cm、重さ 2,290g、両輝石安山岩 a。**640** は長さ 15.3cm、幅 12.2cm、厚さ 8.5cm、重さ 2,180g、両輝石安山岩 a。641 は長さ 13.2cm、幅 13.0cm、厚さ 7.5cm、重さ 1,920g、両輝石安山岩 a。　（文責：寺師雄二）

## （2）土坑・溝状遺構

### 土坑・溝状遺構

弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑と考えられるのは 20 基（**YSC1・3・7・8・9・10・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・YSD3**）である。土坑の埋土は比較的軟らかい黒色微粘質シルト土（黄色軽石を含む）である。後期以降の竪穴住居跡と同じく、土坑も壁の立ち上がりが不明瞭であった。**YSC7・13・22・23・24・25** 以外は出土土器がないため埋土で時期を判断した。

**YSC1（図 101）**

**YSC1** はＫ－７区で検出された。長軸 1.3 m、短軸 0.75 m、深さ約 5cm で、平面プランは長方形を呈する。埋土は黒色粘質シルト土である。

**YSC3（図 101）**

**YSC3** はＪ－６区で検出され、中溝式土器の出土した **YSA11** を切っている。長軸 1.4 m、短軸 1 mで、深さは約 40cm である。埋土は黒色弱粘質シルト土である。

**YSC7（図 101）**

**YSC7** はＭ－２～Ｎ－２区で検出された。長軸 2.6 m、短軸 2.2 m、深さは約 10cm で、底面は平坦ではなく、北部はさらに 25cm ほど落ち込んでいる。埋土は下層が黒色微粘質シルト土で、上層が黒色粘質シルト土である。埋土からは炭化材や磨製石鏃片や剥片が出土しており、土器に関しては中期の土器と後期の土器が混在して出土している。一応後期以降の土坑とした。

**YSC8（図 101）**

**YSC8** はＰ－２区で検出され、西側は近世の撹乱や中世のピット（5 層）により削平されている。現状での長軸は 2.2 m、深さは約 15cm である。南東部の壁際には深さ 60cm のピットがある。埋土は黒色微粘質シルト土である。

**YSC9（図 102）**

**YSC9** はＱ－６～Ｑ－７区で検出された。長軸 2.1 m、短軸 1.4 m、深さ約 15cm である。底面は平坦ではなく、南部はさらに 30cm ほど落ち込んでいる。埋土は下層が黒褐色微粘質シルト土、上層が黒色微粘質シルト土である。

**YSC10（図 102）**

**YSC10** はＲ－５区で検出された。径 1.1 mのほぼ円形で、深さは約 25 ～ 35cm である。底面は凸凹が激しく、平坦ではない。埋土は黒色微粘質シルトである。

**YSC13（図 102）**

**YSC13** はＭ－８～Ｎ－８区で検出された。径 1.1 mのほぼ円形で、深さは約 15cm である。深さ約 10cm の小ピットが数基ある。埋土は下層が黒褐色微粘質シルト土で、上層が黒色微粘質シルト土である。埋土からは器面調整に叩きが施された甕（**644**）と、手づくねの小形壷の完形品（**645**）が床面に近いレベルで出土した。

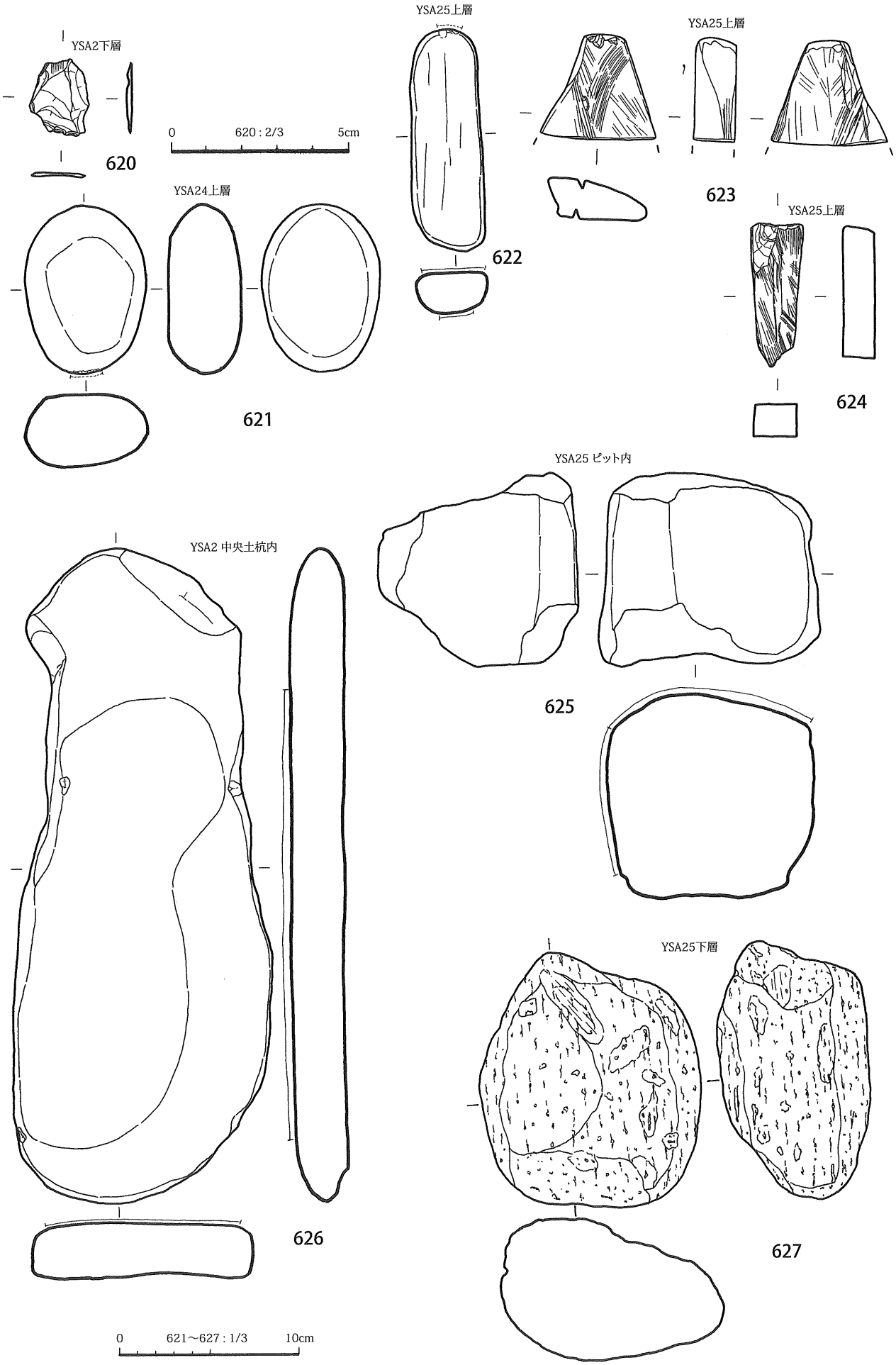



図98　竪穴住居跡出土石器・軽石加工品

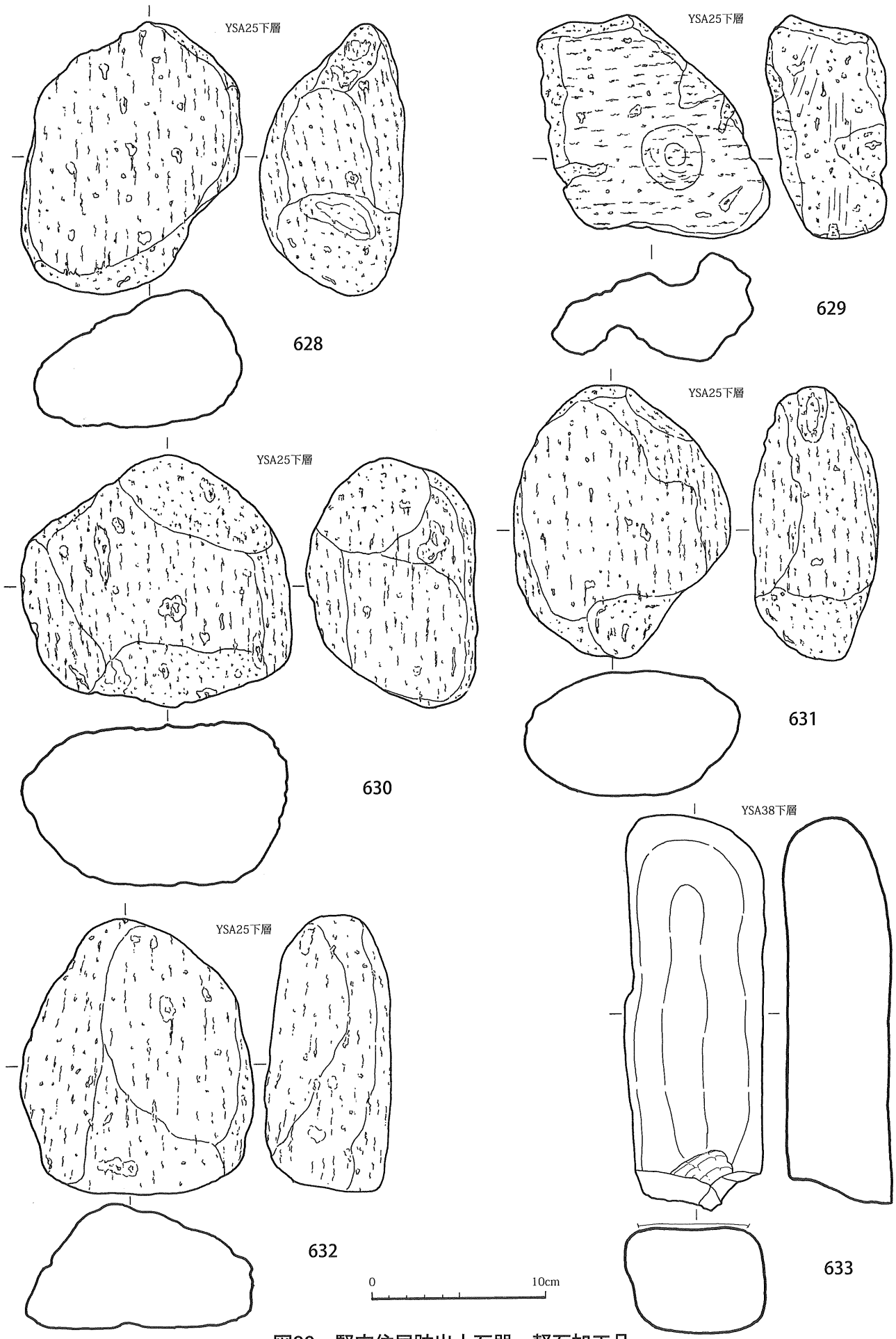



図99　竪穴住居跡出土石器・軽石加工品

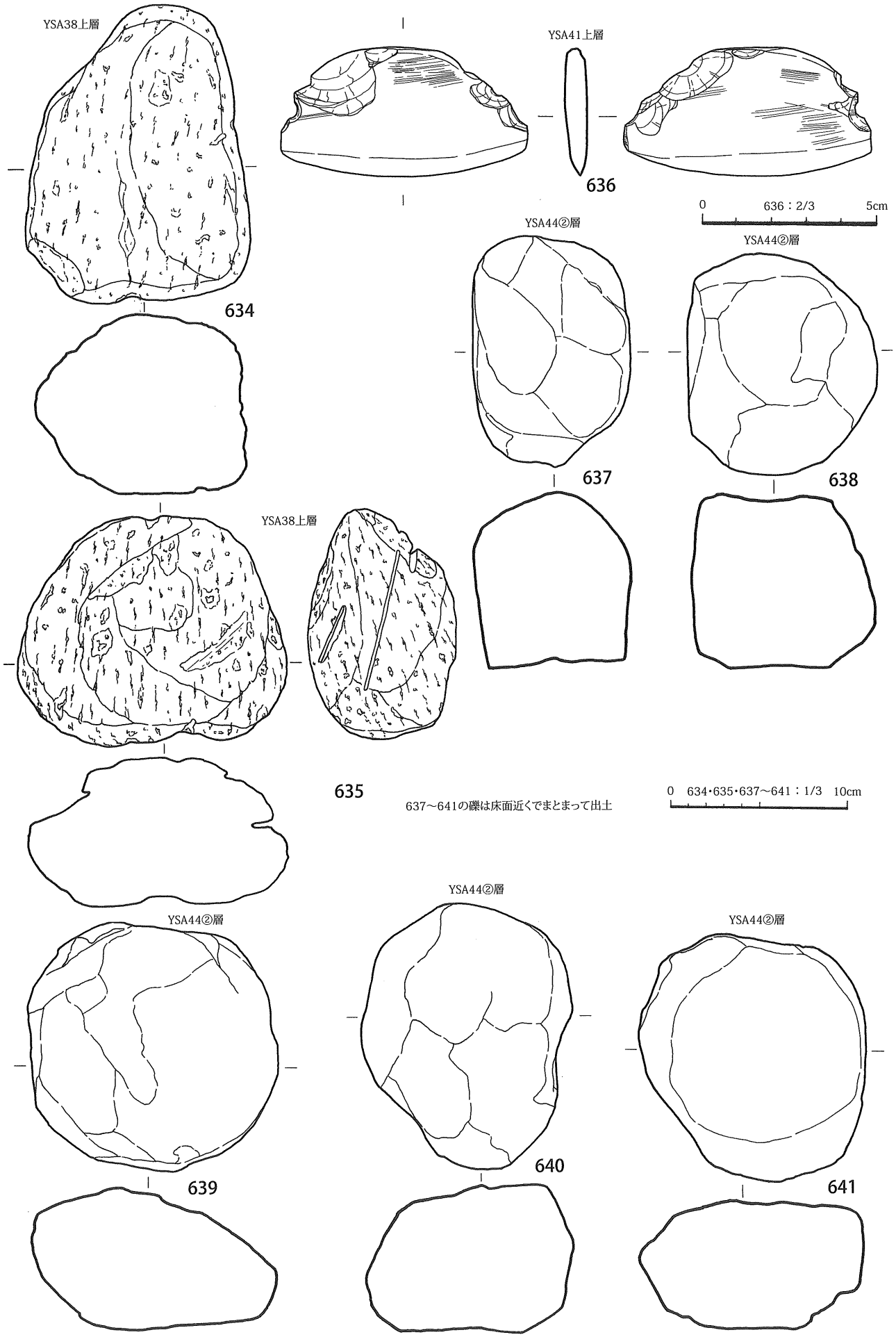



図100　竪穴住居跡出土石器・軽石加工品・自然礫

**YSC14（図 102）**

**YSC14** はＮ－８区、**YSC13** の約１m南で検出された。径 0.8 mのほぼ円形で、深さは約 20cm である。中期に位置づけた **YSD1** を切っており、土坑の中央は中世のピット（5 層）に切られている。埋土は黒色弱粘質シルト土である。

**YSC15（図 102）**

**YSC15** はＵ－ 14 区で検出された。長軸 0.9 m、短軸 0.6 m、深さは約 10cm で、やや中央に深さ約 10cm のピットを持つ。埋土は黒色微粘質シルト土である。

**YSC16（図 102）**

**YSC16** はＱ－ 14 ～Ｑ－ 15 区で検出された。径約 0.6 mのほぼ円形で、深さは約 17cm である。北部に深さ約 8cm の浅いピットがある。埋土は黒色微粘質シルト土である。

**YSC17（図 102）**

**YSC17** はＯ－ 15 区で検出された。長軸 0.75 m、短軸 0.65 mの楕円形で、深さは約 20cm である。土坑の一部を古代～中世のピット（5 層）に切られる。埋土は黒色微粘質シルト土である。

**YSC18（図 103）**

**YSC18** はＯ－ 15 区から検出された。長軸 0.65 m、短軸 0.5 mの楕円形で、深さは約 18cm である。埋土は黒色シルト土で、質感がややパサパサしている。

**YSC19（図 103）**

**YSC19** はＯ－ 14 区から検出された。長軸 0.8 m、短軸 0.55 mの楕円形で、深さは約 10cm である。埋土は黒色微粘質シルト土で、最上部には黒色弱粘質シルト土（5 層相当）が薄く堆積している。

**YSC20（図 103）**

**YSC20** はＯ－ 14 区で検出された。北側を近世の撹乱に削平されている。現状での長軸は約 1.7 mで、深さは約 15cm である。埋土は黒色微粘質シルト土である。

**YSC21（図 103）**

**YSC21** はＯ－ 13 区で検出された。径が約 0.6 mのほぼ円形で、深さは約 16cm である。北部には約 10cm のピットがある。埋土は黒色微粘質シルト土で、甕形土器の破片と炭化物が出土した。

**YSC22（図 103）**

**YSC22** はＰ－ 15 区で検出された。径が約 0.4 mのほぼ円形で、深さは約 25cm である。埋土は黒色微粘質シルト土である。上部からは甕形土器（**646**）の破片がまとまって出土し、その他に土製品３点（**647・648・649** のみ図化）が出土した。甕形土器（**646**）は **YSC23** 出土土器と同一個体の可能性がある。

**YSC23（図 103）**

**YSC23** はＰ－ 15 区で検出され、**YSC22** の約 1.2 m南東に位置する。長軸 1.1 m、短軸 0.5 mの不整形なプランで、深さ約 15cm である。埋土は黒色微粘質シルト土である。上部からは甕形土器の破片（**YSC22** 出土土器と同一個体の可能性あり）がまとまって出土した。また土坑中心の底面からやや浮いたレベルで炭化物が出土した。

**YSC24（図 103）**

**YSC24** はＱ－ 15 区で検出された。径が約 0.5 mのほぼ円形で、深さは約 15cm である。埋土は黒褐色微粘質シルト土で質感がサラサラしている。上部からほぼ完形の鉢（**653**）が出土した。

**YSC25（図 103）**

**YSC25** はＫ－７区で検出された。長軸 1.4 m、短軸 1.15 mの楕円形で、深さ約 15cm である。検出の段階では（**YSA42**：入来式土器出土）と重なっていたため切り合い関係があるように見えたが、土層断面を観察した結果、重なり合わないことが判明した。埋土は黒色粘質シルト土である。土坑の上部から甕形土器の破片や線刻の施された壷の底部が出土した。

**YSD3（図 103）**

**YSD3** は全長 1.35 m、幅約 0.5 m、深さ約 5cm と浅い溝状の遺構である。埋土は黒色微粘質シルト土である。

（文責：外山亜紀子）